

オーバーロード 絶死絶命 ～199年前の墜とし仔～

空想病

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

### ※注意

この物語は、拙作『魔導王陛下、御嫡子誕生物語』と『術師』の復活』、『オーバード 天使の澱』と100年後の魔導国』、『フォーサイト、魔導国の冒険者になる』を読まない、いろいろと混乱する話です。

なので閲覧する方は上記三作を見ている方、推奨です。

三作品を通じて語られた「スレイン法国案件」

謎に満ちた「アルベドの“元”守護者統括という表記」

そして、

「書籍で追加されたキャラ・アルベドの、『モモンガを愛している。』伏線」

『オーバード4巻に関する作者雑感』（絶死絶命の記述）からの考察」

などを大いに含みます。

すべての謎が明らかになる、かもしれない、  
“半森妖精の神人”の話…

2022/03/21、完結

【私信】「チラシの裏」にしましたが、あるいは「パスワード付き」になるかも

# 目次

## 序章

数年越しの約束

1

## 第一章

侵攻

侵攻準備

7

国境地帯

12

魔導国軍

19

周辺諸国

27

ンファイレアの死

34

状況確認

43

アルベドVS番外席次

52

反逆者

65

エルフ王VS漆黒聖典

1

76

エルフ王VS漆黒聖典

2

85

エルフ王VS漆黒聖典

3

97

交渉と出撃

108

## 第二章

番外席次

魔導王の潜入

117

エルフ王VS番外席次

127

闇よりの神託

136

降伏調印／アインズVS番外席次

144

怒りの炎

155

“饕餮（とうてつ）”

163

撤退と逃避

175

支配者ごっこ

185

占星千里	196
ルーフアウス	209
守護者（シモベ）たちの覚悟	219
昔語り	226
敵襲	236
第三章	
—— 鼎（かなえ）	
1999年前の墜とし仔	248
1999年前の墜とし仔	259
1999年前の墜とし仔	271
シャルティアVSアルベド	279
アインズVS番外席次、再び	283
“絶死絶命”	289
サラ・ルーフアウス・	297
リグリット・ベルスー・カウラウ	309
罪と罰／世界の盟約	314
人類最期の地 リ・エステイーゼ	321
我儘と約束／暗黒邪道師ーエメトー	329
終章	
そして、いま。	337

## 序章

### 数年越しの約束

／Appointment for several New  
Year's Eve

ここは——大陸を完全統一した超大国。

アインズ・ウール・ゴウン魔導国。

第一魔法都市・カツツエ。

かつてはアンデッドなどのモンスターが跋扈した荒野など過去のもの。

わずか数年の都市計画によって王の城の一つが建造され、その周囲を守るかのようにガラスの建造物——尖塔群が連なっている。

魔導王アインズが進めた施策のひとつ・魔法使い教育政策によって、この都市には魔法学園に類するものが多く建立されて久しい。

そのうちのひとつ。

魔法生徒に解放されている巨大な図書館——ナザリック第九階層に存在する大図書館・アッシュールバニパルを参考に建造された大講堂の中を、数名の護衛を付けた超<sup>オーバー</sup>越者……魔導王アインズ・ウール・ゴウンそのひとが、歩いている。魔法の光によって適度な読書光の柔らかな光と共に、彼は迷いない調子で図書館内部を闊<sup>かっ</sup>歩する。

そして、彼は目当ての人物をすぐさま見つけた。

長卓の中心に持ち寄った本の城に囲まれながら、その男装の少女——大地の色の茶髪に、空と海の色を思わせる碧眼で、分厚い歴史書を紐解いている。

実に真剣な横顔で思わず魅入りそうになる自分をおさえつつ、アイ

ンズは彼女の名を、呼ぶ。

「セリーシア」

しかし、応答はない。

よほど集中しているのだろう。

勉強に勤しむ姿は素直に賞賛されてしかるべきだが、これが一般人の反応であれば不敬罪でアインズの護衛たちに詰問を受けていたことだろう。

護衛の一人を務める王妃の一人「最王妃」にして、魔導国「大宰相」の地位をいただく黒髪の女悪魔——アルベドも、微笑を浮かべつつ首を振った。

彼女の悪癖にも困ったものであるといわんばかりで、慈母のごとく彼女の主人への不敬を赦す。

アインズは数歩近づいてまた彼女を呼ぶ。

「セリーシア」

やはり反応はない。

ページをめくる視線の輝きは、魔導国以前の歴史の世界を羽ばたいている真つ最中である。それほどまでに彼女の魔法への探求心は奥深く、今はある殿方との婚姻によって、彼に並びたてるものであるという向上心も働いていることは明らかであった。都度、無理はせぬよう注意はしているのだが、やはり彼女は研究に余念がないのである。

アインズは彼女のニメートル近くで声をかける。

「セリー」

彼女の「姉」からの愛称も試しに読んでみたが、やはり応答はない。

ならばと思い、耳慣れた彼女の偽名の方を、アインズは口にする。

「——「ニニヤ」」

紙片をたぐる指が、ピタリと止まった。

マジックキャスター

魔法詠唱者の少女は即座に顔を上げた。

魔王妃・ニニヤ、もとい「セリーシア・ベイロン」は、〴〵の間にか〴〵そこに現れたアインズたちの姿に当惑する。

「ア、アア、アインズさま?! い、い、いつから、そちらに?!」

今では転移魔法の気配さえも微細に感知しうるレベルのニニヤであるから、本気でアインズたち一行が現れた事実が驚愕に値したようだ。

アインズは呆れたように腰に手をやる。

「何度も呼びかけてやったのだがな。——なあ、アルベド?」

「ええ。アインズ様の御声おこえを無視して赦ゆるされるなんて、大陸広しと言えども貴女あなたくらいかしら?」

「ごご、ごめんなさい、アルベド様!」

ニニヤは頭をかいて反省する。

そんな純な態度だけでも、彼女は実に好意的だ。

「でも、とても貴重な文献を見つけたんです!」

いまや、大陸統一……世界征服を成し遂げた魔導王アインズに対して、ニニヤは微笑みを深め語りだした。

「覚えてらっしゃいますか? 数年前、はじめて私たちが交わした、あの約束のこと」

「約束——ああ!」

アインズは思い出して骨の顔を破顔させる。

——数年前のこと。

いまだ、魔導国の建国の目途はおろか、アインズが外の異世界について探索するべく急遽きゅうきょ行つた、冒険者モモンとしての偽装身分アンダーカバー。

ンファイレア・バレアレの依頼として、〴〵漆黒の剣〴〵の四人を伴い、カルネ村とともに訪れる護衛任務——その最中さなか。

アインズはニニヤの会話の一部を聞いた。

『エ・ランテル近郊ドラゴンに竜ドラゴンがいたとされたのは、かなり大昔に天変地異を自在に操る竜ドラゴンがいたという眉唾な伝承があるばかりで』

竜という存在に関心を寄せられたアインズは、仲直りの糸口を探る



ような口調でたずねたものだ。

『あー、その天変地異を自在に操る龍の名前とかはご存じないですか？』

街に帰ったら調べましようかと興奮して訊ねかえす彼女に、アイズは応えた。

『時間が許したら、で結構ですから調べていたただけですか？』

その時のニニヤの嬉しそうな笑顔と返答。

だが、その“約束”は果たされなかった。

当時、クレマンティヌ——ズーラーノーン幹部として蠢動しつつ、スレイン法国から逃亡するための目的に「ありとあらゆるマジックアイテムを使用可能」という希少な生まれもつての異能持ちのインフイーレアを悪用しようと襲撃し、冒険者チーム“漆黒の剣”は全滅を余儀なくされた。ニニヤは凄惨な死を強要され、アイズは明言こそしなかったが、その復讐を実現させた。

その後、なんやかんやあってクレマンティヌがアイズズのシモベの一人となって再会を果たしたり、召喚Ⅱ増産可能な上位動死体として魔導国内で大量にかつ精力的に働いていることは。まだニニヤには知らせてない。

エ・ランテルの墓場から運び出し、ナザリツクの宝物殿で嚴重に管理されている“漆黒の剣”の蘇生実験の試みもまだであった。

とにかく今は、約束のことを思い出した——覚えていてくれたアイズズに対し、ニニヤは嬉しそうに歴史書の一節を指さす。

「今から200年近く前の、十三英雄時代の話なんですが、エ・ランテル近郊で驚異的な竜との死闘があったとの記録を見つけて……でも、

本家の『十三英雄譚』では一言もそのことに触れられていなくて、なんでだろう、おかしいなああって——」

ニニヤが詳細を知らないのも無理はなかった。

その歴史を語るのには、十三英雄の一人として旅をした仲間の一人である、アーグランドの竜王——ツアーのみが、ごく断片的に自国の歴史の中に語るにとどめた情報であったから。

——実際の十三英雄は、そのほとんどが全滅を余儀なくされ、悲劇的な最期を遂げた。戦いに参じた、エルフの女王も、ドワーフの工王も、ほとんど皆、死に絶えた。

なかでも『リーダーと彼女』の末路を思えば、真実を語る者がいなくなるのも……隠すのもやむなしというべきだろう。

アインズはアルベドたちを少し下がらせ、ニニヤの隣の席に座って、あらためて訊きいた。

——きくことができた。

「それで、わかったのかな？ 例の天変地異を操る『神竜』——いや竜の名前は？」  
ドラゴン

「ええ。約束通り調べ……あれ？ いま、『神竜』って」

「ん？ ——あ！」

アインズは咄嗟に気づいた。

ニニヤもまた違和感を確信へと変えた。

「……も、もしかして、アインズ様。とつくの昔に知ってたんじゃない？」  
「い、……いやー。なにせ大陸統一して、数年は経ってしまったし？」

頬骨を指の骨で搔くアインズの率直な意見に、ニニヤは卓の上に突っ伏してしまいそうになる。

「もう、なんですかー、自分で調べてたんなら、最初から教えといてくださいよー、こっちは調べ損じやないですかー！」

「はは。そんなことはないさ。アレの名前を自分で調べるなんて、さすがは、私の妃の一人だ」

「んぐ……あんまり実感ありませんよ。私たちが、いまはそういう関係だなんて」

「はははは。私は我儘なんだ——君だって、それを知ったうえで、告白

にこたえてくれたんだろう？」

頬を桜色から薔薇色に染めるニニヤは、口元を片手で押さえつつ、ひとつ頷く。

「でも、やっぱり、ちゃんと約束を果たしたかったというのが本音と言えは本音です」

「はは。十分果たしてくれているさ。」

それに。私——いや、俺——の場合は調べたというよりは、知らねばならなかった——と言った方が正しいだろうからな」

「——知らねばならなかった？」

ニニヤは歴史書を卓において魔導王を見上げる。

「そう。」

あれは数年前——」

アイズは存在しない脳裏にこびりついてはなれない記憶を想起する。

今は亡き神の国——スレイン法国での顛末を。  
そして。

魔導国大宰相アルベドが、ナザリツク地下大墳墓守護者統括の地位を「追われる」に至った、経緯を。

あの国で出会った絶対的脅威………  
《■■■■の墜とし仔》を

# 第一章 侵攻準備

／ Invasion Preparations

「魔導国からの、使いがっ?!」

神都で知らせを受けた神官長たちは、まさに戦々恐々といったありさまであった。

漆黒聖典・第五席次「一人師団」クアイエッセ・ハゼイア・クインティアなどは、その報告が偽装や欺瞞の類であることを神に祈ったが、使者は間違いなく魔導国から法国へのものであった。

「どうする、クアちゃん。ていうか、どうなると思う?」

異様に大きなトンガリ帽子をかぶった同胞たる女性——下着姿だが、これも「神」からの贈り物たる装備品を着込んだ第十一席次が不安げにたずねる。

「千里ちゃんは相変わらず引きこもってるし、そんなヤベーの魔導国って?」

「……正直、わかりませんが。」

「神官長たちの対立、意見の分裂は避けられないでしょうね」

クアイエッセは漆黒聖典メンバーの休憩室（隣は鍛錬室）で思案にふける。

使者の詳細は明らかではないが、アンデッドの起こした隣国からの使いなど、門前払いしたいというのが正直なところだ。

しかし、彼我の実力差を考えれば、受け入れぬというのは愚策ではない。使者は必ず、神都にいる神官長ら法国の枢軸と面会を果たす

だろう。

アインズ・ウール・ゴウン魔導国。

バハルス帝国の平和的属国化を皮切りに、悪魔率いる亜人連合に屈しかけたローブル聖王国に人道支援を送り、先のリ・エステイーズ王国内乱——というよりも、ブローラーノーンが引き起こした混乱“死の大螺旋未遂事件”によって壊滅した都市への援助などを惜しまぬ様子は、まさに賢智と慈愛の国家と目して然るべきだろう——魔導国の国主が、アンデッドのモンスターでなければ！

結局、様々な裏工作や情報戦を重ねはしたものの、スレイン法国に切れるカードは少ない。

叡者の額冠を装備する土の巫女姫を使った覗き見へ次元の目も不発のうえ、爆死。奴と謁見を果たしたという帝国皇帝との情報交換を目的とした闘技場での密談は、魔導王に完全に露見<sup>バ</sup>していた。一部の情報だが、魔導王は最上級の天使を護衛につけていたという報告まで届いている始末である。

魔導王が、法国の奉じる神の再臨か否か——これは、第一の使者である“あの方”の反応を見るに、まずありえない。

あのお方に仕える番外席次は退屈そうに、五柱の神の遺物が眠る倉庫番の役を果たしている。

懸念事項はまだある。

竜王国がビーストマンの国の侵攻に対抗しきれず、援軍を寄こしてほしい、とのこと。

毎年のことながら、真にして偽りの竜王——あの女王の苦勞がしのばれるものの、今回は元漆黒聖典の隊員たち・先達たちの投入で、事態の鎮静化を図る算段である。多少、国の守りは手薄になるが、同じ人間の国である以上、助力を送らないわけにはいかないのだ。

喫緊の問題としては、南に隣接するエイヴァーシャーの森——エルフ王との戦い・三日月湖近辺の王都陥落は間近というところ。

投入された火滅聖典の働きは素晴らしく、森妖精の雑兵など相手に

もならない。捕虜にした森妖精の女たちとへの待遇という問題はあ  
るが、法国では奴隷制が生きているため、よいことにはならないだろ  
うと、クアイエツセは胸を痛める。

「……あいつが消えたのも、魔導王に何か関係があるのか」

独語するクアイエツセであるが、対話する位置にいる第十一席次は  
応じない。

元第九席次たる妹は今いずこにいるのか、兄たる彼は何も知らな  
い。

神官長たちの緊急会議は紛糾という言葉では言い表せない、ほとん  
ど怒号と暴言の交換場ではしかなかった。

「あの時にああしておけば」

「あれがそもそも間違いであった」

「はじめから、あの魔導王に恭順しておけば」

「今からでも属国化の申し出を」

「正気か貴様は！」

「神の国たるをなんと心得る！」

「狂ってるのはそちらの方ではないか！」

「このままでは間違いなく、我が国は滅亡するのだぞ！」

ベレニス・ナグア・サンティニもジネディヌ・デラン・グエルフィ  
も、ドミニク・イーレ・パルトウーシュもレイモン・ザーク・ローラ  
ンサンも、イヴォン・ジャスナ・ドラクロワもマクシミリアン・オレ  
イオ・ラギエも、これまでの交友など感じさせぬほどに混沌としてい  
た。土の神官長レイモンは元漆黒聖典である上に、六色聖典をまとめ  
るトップを張る四十代の男であるが、彼ですらも冷静とは無縁であっ  
た。

そんな彼の様子を、エンヘラ・リード・ガヒー補佐官は忸怩たる思いで見つめていた。いざというときはフルーダ・パラダインの魔法ですら防衛しうる実力を買われたエンヘラであるが、それも魔導王を相手にしてはどこまでもつか。

ついに、あの魔導国が、本格的に法国に目を付けた。

なにより、直接的な使いを出し、その先ぶれはアンデッド——法国に対する配慮も何もあつたものではない。

死の騎兵の葬列に囲われ、見たこともなく巨大で夥しい瘴気をくゆらせる謎のモンスターが引く馬車——ソウルイーターよりも数段上のアンデッドモンスターに運ばれてやってきたのは、魔導国の宰相位にあつて、守護者者統括という地位にあるときく超絶の美女——アルベドそのひとであつた。彼女のそばには、黄色い軍服に純白の仮面をつけた副官と思しきものがおり——よく見れば、そいつの長い指は四本しかない。

土の神殿——巫女姫爆死の一件から再建を果たしたそこでおこなわれた会談は、どう考えても常軌を逸していた。

一同代表するレイモンが、蒼白な表情でたずねる。

「いま、なんとおっしゃられたのか？」

会談に用意された飲み物には一切口をつけることなく、黄色い軍服の副官やアンデッドの兵卒二十を背後に控えたアルベドは傲然と、あるいは嫣然と微笑んで告げる。

「そちらの国にあるワールドアイテム『傾城傾国』を渡しなさい。これが、アインズ様のご提示した第一の条件」

第二の条件をアルベドは二本目の指でつきつける。

「スレイン法国の枢軸はすべて、我が魔導国の管理下に置くこと——貴様らが有しているズーラーノーンおよび漆黒聖典などの武装組織は、すべて解体いたします」

「そ、そんなバカな話があるものか！」

卓を叩くレイモンの激昂ぶりに、アルベドはほくそ笑んだ。

「まあ。これは『友好使節』というよりも『降伏勧告』というところでしょうね」女悪魔は超然と嗤う。「ただ、五日以内に以上二つの要求

が実行されない場合、アインズ・ウール・ゴウン魔導国は、いつでもスレイン法国に侵攻・戦争状態に移行するものであることを、ご理解ください」



## 国境地帯

／Border region

魔導国宰相アルベド率いる魔導国の使節団は、事実上の「降伏勧告」を告げた後、早々に法国の神官長らを置き去りにして立ち去ってしまった。

なんとしてでも交渉の席をもうけようとしたが、一切が拒絶された。

「たかが人間ごときが、この私に意見しようなどと——」

黄金の瞳に宿っていた膨大な殺意と蔑如。

アルベドは言った。「要求が受け入れられない場合は、五日後に戦争状態に突入する」と。

だが、法国からしてみれば面食らう内容であったことも事実である。神の遺物たる最秘宝のひとつを譲渡し、法国の枢軸部と武装解除要求——いくらなんでも横暴を通り越していた。

しかし、要求をのまない・受諾しない場合はどうなるか。考えるだけに恐ろしい。

あれほどの兵团——死の騎兵や上位アンデッドの群れだけでも、法国の各都市は崩壊し、殲滅を余儀なくされるだろう。

示威行為としては十分すぎるほどの効果を発揮した。何も知らされてなかった法国の国民たちは家々に閉じこもり、通りを行脚するモンスターあんぎゃの群れに、石を投げようとも思えなかった。誰もが六大神が一人たるスルシャーナ——闇の神の守護を祈った、あるいは光の神たるアーラ・アルフに対しても。

しかし、噂はあつた。

法国の隣——エ・ランテルやカツツエ平野を統治するアンデッドの

王——アインズ・ウール・ゴウン魔導王。

バハルス帝国の平和的属国化にはじまり、ヤルダバオト撃退によるローブル聖王国の救済、内部崩壊の憂き目にあっているリ・エステイーゼ王国への援助など、君主が生命を嫌い疎むアンデッドとはおもえないほどの賢智を重ねていた。

そして、あの荒廃したカツツエ平野をいかなる目的でか整備・造営していた気配——疲労しないアンデッドを利用した開墾と開拓、地ならしが日夜間断なく行われていた。大規模な範囲を開拓可能な巨人や、資材を広域・高速で飛翔・運搬できる竜を支配下ドラゴンにおいていることも強みの一つだ。アンデッド退治目的の冒険者やワーカーたむろが屯していた平野北部の自由都市ヴァデイスなどは規模が比較にならない。霧を纏う幽霊船や、平野奥深くにある要塞まで魔導国の管理下に属し、ひとつの事業を展開していた——それは“都市化”だ。一年後には完成予定の魔法都市、その基礎部分の構築は十二分に行われていた。

着々と自国領土を拡充拡張していく魔導国が、スレイン法国を放置しておく理由は薄いと、誰もが思った。

スレイン法国は人口1500万人。神都を有し、住民基本台帳などを有するなど、諸国にはありえないような制度が点在していた。

なかでも、六大神信仰——他の諸外国が四大神信仰を主とするというのにもかかわらず、この国では光と闇という、上位神が存在を許されている宗教国家だ。その歴史は600年という長きにわたり、諸外国が分裂や崩壊、内乱や征服、あるいは消滅や生誕を繰り返す中で、スレイン法国は歴史の中に燦燦と存在を確立させてきていた。

しかし、いまはどうだろう。

アルベドたち魔導国の使節団——否、「死の先触れ」に触れた神官長たちや政府長官らは混乱の極みに達した。

とにかく再度の交渉を試みようとするもの。最秘宝の譲渡を許すもの許さないもの。神の奇跡に縋ろうと、半ば諦めるものまでいる始末だ。

せめて一月ほどの猶予があれば、魔導国の陣容調査を本格させ、徹

底抗戦に挑めたかもしれない。法国と戦争状態にあるエルフ王と講和し、戦線が二つに分裂する愚を回避することもできただろう。

だが、アンデッドの王が示した期限は「五日」。

人同士の争いに即したそれではなく、ある意味において明らかにアンデッドモンスターらしい即応性であり、法国という存在が生存することを許さないという酷烈な感情の暴露とも言えた。

「これまで見逃してやっただけ感謝してほしいくらいだ」などという魔導王の声まで聞こえてきそうである。

だが、疑問は残った。

なぜ、このタイミングで、アインズ・ウール・ゴウン魔導王は、スレイン法国に対し宣戦布告するのか。

まず、法国首脳部にとつては周知の事実だが、彼らが秘密裏に協同関係にあつた秘密結社——ズーラーノーンを壊滅させられた一件が大きい。

アンデッドモンスターを使役し、諸国に害をなすことで有名であつた組織が、実のところ自分たち法国と地下茎で結ばれていた事実を知るものは圧倒的に少ない。無論、法国の民でさえ知りえなかつた情報であつたが、魔導国の王はそれを知つた。

ズーラーノーンの十二高弟——闇の神殿の奥のパイプオルガン席で座り続ける、漆黒の「御方」——ズーラーノーンの盟主の座にある強力なアンデッドである彼女と闇の魔法で結ばれていた最高幹部たちを失い、大陸東部に隠された拠点——無間の闇に包まれた「死の城」まで破壊・奪略された。幸いだったことは、あの城には直接法国首脳部に繋がる物的証拠は何もなかつたこと。だが、それだけだ。十二高弟が押さえられた上は、あの、元・闇の巫女姫たる「吸血姫」シモーヌも、ただではすまないだろう。自ら進んで情報を吐き出すとも思えなかつたが、法国には大きな失点はまだあつた。

クレマンティーヌとカジットが魔導王の支配下に置かれていたこと——その事実を知りえなかつたことは、法国にとつて最大の失策であつた。彼らをズーラーノーンに起用した理由としては、人格面の問題から漆黒聖典第九席次「疾風走破」の席を追われた女戦士と、母親

の蘇生のために信仰を捨てた魔法詠唱者は、むしろ秘密結社の幹部として働かせた方が、何かと有用に扱えるという当然の判断であった。だが、クレマンティーヌは本気で逃亡を図った。〈叡者の額冠〉を巫女姫から盗みだすという最大の禁忌を犯し、風花聖典が追う事態にまで発展した。

そして、そんな法国の判断・企図は、見事に瓦解を果たした。

とある銅級冒険者カッパとの戦いで死亡し、盟主の魔法によってアンデッドとして転生を果たした二人であったが、その支配権を魔導王アイズ・ウール・ゴウンは握るに至った。

そして、彼女たちの口から法国とズーラーノンの癒着を知悉ちしつしつつ、魔導国はとくにアクシオンを起こさなかった。ひとつは、クレマンティーヌたちの支配状況が完全であるかテストする目的と、ズーラーノンの他の最高幹部らから同等同質の情報を吸い出せるまで判断を留保したのである、深慮遠謀をいく(とされている)魔導王は、ついに法国を壊滅させる挙に討って出たのである。

クレマンティーヌやカジット、シモーヌやトオムらからの証言によって、「法国には強力無比な精神支配のアイテム『傾城傾国』が存在する」という確証を得た。

アイズは永久に忘れない。

第一・第二・第三階層守護者、シャルティア・ブラッドフォールンを殺さざるを得なかった、あの事件を。

あの忌々しい事態——失態については、今でもアイズの、アンデッドの平静となるはずの精神状況を、怒りの埋め火で炙り続けている。

これで、ようやくアイズ・ウール・ゴウンは、あの一件に片をつけることができる。

法国が喜んで条件をのむのであれば、それも良し。

さもなくば、どうなるか——法国の民の運命は——

エイヴァーシャアの森、火滅聖典が拠点化した森<sup>エルフ</sup>妖精の樹木の都――その住居のひとつで、その知らせは届いた。

「魔導国が攻めて来るやも、だどー!」

彼は即座にマジックアイテムの制服を着込んだ。私室として使っている旧都市長の寝室で、知らせを受けた火滅聖典隊長は、慌てた様子でズボンに足を通す。寝台で鎖に繋がれ、すすり泣くエルフの娘――この樹木の都を拝領していた女弓兵への興味を失い、届けられた本国からの報に信じられないという形相で応じた。

作戦室で隊長補佐は疑問を呈する。

「大丈夫でしょうか、本国は?」

「大丈夫ですむ話であるものか!」

隊長はすぐさま地図を広げ、補佐らを叱咤するような口調で言い放つ。

「せつかくここまで奴等エルフを追いつめることができたというのに――ここで戦線が二つになることがあっては、いかに本国と言えど、もつものか!」

彼は宣伝しつつ、広げられた軍略地図を眺める。魔導国と法国の国境地帯に数個ほどの駒がおかれた。

「北から魔導国の軍勢が来るとなれば、南で戦線を築く我らと挟み撃ちということになる、いや。魔導国と縁<sup>えにし</sup>をもつ王国や聖王国の方面からも魔導国の軍が攻めてくるとなれば」

軍略どころの話ではない。

戦線は三つ四つに構築され、国の守護は成り立たなくなる。

――法国が滅ぶ。

そんな不吉な予感を打ち払うように、火滅聖典の隊長は頭を振って喚いた。

「王都近郊にはすでに陣地が作成されていたな?」

「はい。橋頭保<sup>きやうとうほ</sup>は確保済みです」

「ここから、エルフ王の都までの距離は!」

「半日ほどですが、……隊長」

まさかという思いの補佐役に、隊長たる男は断言する。

「今夜中にもエルフ王の都を陥落させる」

いかに暗殺、ゲリラ戦、カウンターテロを得意とする火滅聖典でも、強行軍の感は否めない。森である以上、モンスターの襲来や、敵の奇襲や罠を警戒する必要もある。

だが、ほかに処方がなかった。

火滅聖典は法国守護の要である。

このままこの森に拘泥しては、魔導国からの攻撃に耐えられない道理がない。ニグン・グリッド・ルーイン率いる陽光聖典は一年前に全滅している。他の聖典で護国の人柱たれるのは、最精鋭であるところの漆黑聖典ぐらいだろう。

とにかく速度が命だ。

「動ける各部隊に伝令！ 他の領域や捕虜は置き捨て、三日月湖のエルフ王都を急襲する！ 今夜中にも決着をつけるぞ！ なお、王討伐後は即座に転身し」

「いやいや。その必要はないぞ」

「え？」

「何？」

「おまえたちが滅ぼそうとしている都は、私が、既に、この手で殺戮してきた。ゆえに安心するがいいぞ」

開いていた丸窓に腰掛ける優雅で美しい男の風情は、あまりにも奇妙であった。

純白の弓と矢籠を背負った男。突き出した細長い耳に様子からして、エルフであることは疑いない。とくに左右で色の違う瞳というのが印象的だ。……伝え聞く身体的特徴の一致に、少しばかり隊長は「影武者か何か」やもと自制した。

「貴様、何者だ」

詰問すると共に、マジックアイテムのグローブフレイヤーネットへ炎上綱を射出するボウガンを補佐役らと共に構える。

「この国の王だが？」

エルフ王——誰かがそう確認したように眩くよりも早くボウガンがエルフ王へ向けて一斉に射出され、

「……………え？」

その場にいた火滅聖典全員の「首」が、弓矢の一撃ではじけ飛んでいた。

「さて、では、いくとしようか」

我が子を取り返すという大義名分のもと、エルフ王は逆撃を開始する。

## 魔導国軍

／ Magic Kingdom Regular forces

スレイン法国上層部が震撼の上に激震を重ねていた頃。

「ふあああ……………」

かの国に事実上の宣戦布告を行ったアインズ・ウール・ゴウン魔導王その人は、スパリゾート・ナザリックで、その骨身に蓄積した疲労を癒していた。

至高の四十一人が一人・ベルリバーがブルー・プラネットと協力して製作したアマゾン風呂一帯。

そこにお湯のかわりに満ちる蒼玉サファイア・スライムの粘体は、いまではすっかり慣れたようにアンデッドの肉体の洗浄任務に貢献してくれていた。

「…………ああ、いつもご苦労だ、三吉くん」

一時は彼の仕事・業務内容を嫉妬し、ソリュシャンと問題を起こしたこともあったが、それも過去のこと。

そう、過去。

「……………」

過去のことを水に流し、シャルティアを洗脳したアイテムを有していた国——スレイン法国の連中を赦すゆるべきか。

慈悲深いアインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下であれば、それも一考の余地はあっただろう。

しかし、今回の件に関しては、アインズの個人的な感情や心象も、無視できない要素がある。

この世界に転移した直後。

外の世界を調査していた折に発見したカルネ村——虐殺されたエインリとネムの両親や、村人たちの光景。



正義の宗教国家ヅラをかましておいて、やっていることは同族である人間の選別作業——ムカっ腹のひとつも立つのが人情というものだろう。

おまけに、連中はズーラーノーンと地下で繋がり、「盟主」と呼ばれるアンデッドのもと、諸国に害をなしていた事実まで浮かび上がった。帝国の邪神教団や闇金機構などの運営にもたずさわっていた。いまは王国の「八本指」のごとく、その幹部や構成員らはすべてナザリックへの忠誠を誓わせたが、まだ、首領たる盟主を掌握できていない。

奴の扱うオリジナルの死霊系魔法の類は、今後のアインズ・ウール・ゴウンにとって有用となることは、まず間違いない。学べるものならば学んでおきたいし、それが無理ならば盟主を恭順、あるいは拿捕だほすることで、クレマンティーヌたちのようなアンデッドへの転生魔法の有効活用術が発揮できる。

それを考えれば、スレイン法国は一両日中にも征服し、この手に実権を握りたいところでは、ある。

(だが、不安要素もある、か)

元漆黒聖典たるクレマンティーヌからの情報によれば、法国の中でも最精鋭部隊が存在しているとのこと。

とくに、隊長の「第一席次」は「神人」と呼ばれる希少な人類であり、その強さの次元はクレマンティーヌを凌駕して、あまりある。

さらに、「その上」——「番外席次」と呼ばれるアンチクシヨーム(クレマンティーヌ談)については、その強さの次元は測り知れない。少なくともクレマンティーヌ以上の第一席次を、一方的に敗北させるほどの次元の強さだときけば、その戦闘強者ぶりは相当なものだろう。

(法国が「傾城傾国」なる世界級アイテムを使用し、アルベドを襲い洗脳する可能性もあろうが、アルベドには「真なる無」がある。最悪の事態などはありませんだろうか……)

やはり自分が直接乗り込むべきだったかという後悔と未練の念が、アインズの存在しない脳内でわだかまる。

(「いいや。アルベドの我儘、もとい提案で作った『最強チーム』も送り込んだんだ。副官として、パンドラス・アクターのやつまで付いている。そう不安がる必要もあるまい)」

現在、使節団は魔導国と法国の中間に位置する都市に留まり、神官長らの応答を(一応)待っている。

アイنزは湯舟からあがり、三吉くんの丁寧かつ的確なバスタオル捌きで骨身に滴る水分を拭いおとす。

いつもの装備に身を包み、スパリゾート・ナザリックを後にしたアイنزが向かった先は、自分の執務室ではない。

リング・オブ・アイنز・ウール・ゴウン  
ギルドの指輪をナザリックに留まるセバスに預け、伴ともを務める一般メイドと共に転移した先は、エ・ランテルから南西方面に広がっていたカツツエ平野——その中央部。

「おお。これは、アイنز様！」

建物の中で指揮指導に当たっていたデミウルゴスや魔将たちに跪かれ歓迎を受ける。

アイنزがわざわざ転移でここへ来た、主たる理由——

『造営』の方はどこまで進んだ？」

応じるデミウルゴスは喜色満面に頷いて凶面を広げてみせた。

『都市計画』の基盤は順調そのものにございます。かの沈黙都市を参考にされたアイنز様のご慧眼に間違いはなかったかと」

中心に建造中の王城から放射状にのびる国道。〈コンティニコアル・ライト永続光〉の街

灯。市街の主要地に点在する巨大市場予定地。人々や亜人が暮らすのに適した様々な規格の集合住宅。建設予定の冒険者育成用ダンジョンの地下迷宮。ピラミッド。さらに、外縁部となる隔壁にも、魔法都市としての防備は万全整えられている。

アイنز・ウール・ゴウン魔導王が支配下におく下級兵——アンデッドの骸骨スケルトンだけで万単位が、この都市造営に従事させられていた。アンデッドが跋扈ばっこする呪われた地——などという俗称も過去のもの。

今やカツツエ平野全域は魔導国の管轄下にあり、そこで生産される現地産のアンデッド(アイنزが生み出すそれよりは遥かに劣る)も

取り入れている。戦闘メイトの一人・ルプスレギナを派遣した際の沈黙都市の平定事業が功を奏した上、クレマンティーヌやカジットのような特殊な中位個体についても、問題なく支配できている。さらには幽霊船の船長なども、魔導国のシモベと化して早幾月。アインズの「アンデッド支配」と「強化」の特殊技術は現地のアンデッドを完全に掌握することが可能であったことで、これほど精強な軍を仕立てることができた。

さらに、国境警備にも死の騎士を隊長とし、エルダーリッチを補佐・連絡役とする警備兵部隊が随所におかれるようになり、スレイン法国からの逆侵攻への備えも万全ときている。

「問題は……なさそうだな」

「無論かと」

微笑むデミウルゴスだが、アインズはまだ何か見落としがないか熟考を続ける。

アインズはズーラーノンの「ゴーレム使い」あらため「ゴーレム工房責任者」に命じ、彼が得意とする小動物類に化けるゴーレムを大量生産させることで、警備体制の強化にもつなげていた。ゆくゆくは「箱型」や「板状」のゴーレムを設計——要するに携帯端末や生活必需品として国民一人一人が保有し、簡単な連絡手段や防衛機能——時と場合によっては犯罪者の監視や探知装置としての機能を付随させることを将来の計画としている。

（まあ、それも今は計画段階。

完成するには『最低でも二十年はいるでしょうな』とトオムにいわれるし……とりあえず当面の間は、私のアンデッド警邏兵だけでも充分、いや、充分以上)

何も問題はない。

無論、敵性国家と化して久しいスレイン法国も、その事実をよく理解していた。

自分たちが対峙している相手が、どれほど強大な「軍」へと変貌・変革を遂げているのかを肌身で感じては、いない。

首脳部は確実に気づいているだろう（気づいていなかったらさすが

に無能に過ぎる)が、法国の民はそこまで魔導国の現状を知りえない。なにしろアンデッドが導く魔王の国だ。その実態を知ろうだなんて度胸のあるものは多くないし、なにより、法国と往来している希少な商人の類は、すべて出入国時に厳重なチェックが入っている。そして、入国時の用件が「魔導国の調査と見聞」であるものは、魔法によって一発でバレル。

(ま、バレた人間も生かして帰してやってるし、思う存分あわてふためいてもらえば好都合)

場合によりけりだが、法国は魔導国に与するもの(くみ)とそうでないものとで内部分裂を生じ、内乱は必至である。

しかしアインズの狙いはあくまで、シャルティアを洗脳したアイテムであり、現スレイン法国の首脳陣、そしてズーラーノーンの盟主だ。

法国の民すべてを皆殺しにしようという話では、断じてない。(だが、必ず報いは受けさせる)

建造途中の王城の内部で、アインズは静かに決意をかためていた。

「それで、『侵攻軍』の方は？」

デミウルゴスは委細承知とばかりに魔将の一人へと命じ、ミラー・オブ・リモートレユイニング「遠隔視の鏡」をもってこさせた。

アインズは鏡の画面を窺い見る。

「ふむ、上々だな」

そこに映るのは、不死の軍勢。

スケルトン・ウォリアー、スケルトン・ライダー、スケルトン・アーチャー、スケルトン・ソルジャー、骸骨戦士、骸骨騎兵、骸骨弓兵、骸骨兵士は勿論のこと、

スケリトル・ドラゴン、ソウルイーター、デスナイト、骨の竜、魂喰らい、死の騎士など、この地では伝説や御伽噺の中に

住まう凶悪なアンデッドで編成された数万からなる軍勢が、魔導国の旗を掲げ、整然と南下していた。

目的はただ一つ。

たった一つの国を亡ぼすために。

「こちらにいましたか」

「……あら、なんの用？」

神官長会議からの退室を許された第一席次は、いつもの場所——五柱の神の装備が眠る絶対聖域の守護役を務める番外席次と対面する、

「今日、ルビクキューは？」

「さすがに飽きたからね」

二面そろえることすら難しい番外席次は、十字槍にも似た戦ウォーサイクス鎌を壁にではなく己の肩に立てかけ、気のない瞳で漆黒聖典のまとめ役たる男を見やる。

まだ十代にも見える幼い外見。左右で違う髪色と同様の、色違いの瞳に射すくめられかけ、第一席次は呼吸を整える。

番外席次は三日月のような笑みで嗤わらう。

「それに、外は今ずいぶん騒がしいみたいだし？」

「——魔導国が宣戦布告してきましたからね。さらに……」

「さらに？」

「エイヴァーシャアの森に派兵していた火滅聖典が、……全滅したとの報せが」

「へえ」

彼女の反応は空気を観察するよりも空虚すぎた。

「んじゃあ、エルフとの戦争はどうなったの？」

第一席次は、彼女が己の髪の下に隠した耳を意識しかけて、なんとか自制した。

「詳細は解りません。ですが、エルフの王都は陥落寸前であったはずですので」

「対局としてはうちの勝ちになるわけ？ エルフ王とかいうのの生死は？」

「不明、とのこと」

「一番肝心なところじゃん、なにしてんのウチの諜報員はさ？」

まあ、エルフの王のことなどどうでもいいと、番外席次は話を戻す。

「んでさ。うちに宣戦布告した、魔統王」

「魔導王です」

「どーでもいーわよ、名前なんて。そっちの方はどうするか、神官長たちは腹を決めたの？」

しかも期限は五日しかないときている。

当然、要求は不当なものであり、会議は「受け入れることはできない」という意見が大勢を維持していた。かろうじて、であったが。

いかに魔導国の王が強大であり賢智に富む人格者であろうと、絶対に、神の秘物たるアイテムを差し出すことはできない――

相変わらず報告書に目を通さない彼女でも、今回の件は随分と愉快そうに微笑みを深めていた。鈴のように美しい声色を転がしてならない。

「あははははあ、まあそうなるわよね。うちの最暗部だったズーラーノーンを『ブチ壊した』上に、最秘宝の『『傾城傾国』を寄せ』とくりゃあ、神官長たちはおかんむりでしょうよ」

笑い事ではないと述べそうになって、彼女の様子が常になく昂揚していることに男は疑問を懐いた。

そして、一瞬で解答に至る。

「――まさか、とは思いますが……戦われるおつもりですか？」

「当然でしょ？ 相手は、えーと、アインズなんか魔刀王？」

「アインズ・ウール・ゴウン魔導王、です」

「そう。そいつ。」

ピーターのやつを――サラの育てた黒竜を殺した相手なら、だいぶ期待できそうじゃん？」

ピーターとは、ズーラーノーンの「副盟主」として、自我を保つことが難しい上位アンデッドとなった盟主に代わって組織を運営管理エルダー・コフィン・ドラゴンロードしていた、500年を生きた黒竜である。親である朽棺エルダー・コフィン・ドラゴンロードの竜王に「見込みがない」と巢より放擲ほうてきされ死に瀕していた際に、500年前の盟主に救われている。

あの吸血鬼騒動……『巨盾万壁』きよじゆんばんへきセドランと『神領縛鎖』しんりょうばくさボーマルシエ、そしてカイレを喪った強大到過ぎる吸血鬼の出現時には、

ブーラーノーンの職域を超える事態であり、なにより、彼らを動員しても被害が拡大することは確定的であったため、放置一択とされたのである。彼らはいくまで「人類の敵」を演じつつ、人類の外敵たる亜人や異形を狩る集団だ。

もしも騒ぎが最悪な方向へ傾くならば投入もやむなしであったろうが、結局、この件は英雄モモンの出現によって落着を見ている。

しかし、第一席次は彼女の言に半ば恐慌しかけた。

「バカな。いくらあなたでも、そんな！」

「なに？ 私じゃ負けるって思ってる？」

膨大な殺気にあてられる男。

竜や巨人とも比較にならない、圧倒的超越者の、圧。

いかに慣れているとはいえ、それを受け止めきるのは至難の業であった。

呼吸すら止まりかける漆黒聖典の同僚を、彼女は冷笑して憚らな

い。「随分とナメくさってくれてるじゃない？ 私にボコボコにされたの、もう忘れた？」

「——いいえ」

忘れるはずがない。

神人として、神のごとき威勢と力量に目覚めた自分こそが人類最強だと錯誤していた。増長していた。

だが、彼女と出会い、たった数秒で「格の違い」を思い知らされた。彼女に命じられるまま馬の小便で顔を洗い、「自分はゴミだ」と思い知った。

「ま。とりあえず、私は下準備があるから。レエモンたちお偉方<sup>えらがた</sup>には適当に言つといて」

「下準備——準備つて、まさか？」

第一席次は彼女の異能<sup>タレント</sup>を思い出す。

聖域の警護はどうするのかと詰問しても無意味であった。

戦鎌を担いだ番外席次は、己の欲求を満たすべく動き始める。

## 周辺諸国

／ Neighboring countries

魔導国と法国が、一触即発の戦争状態に移行しようとしているこの時、諸国は無論『魔導国の味方』であることを表明した。

属国である帝国は言うに及ばず、公式非公式問わず魔導国に救われたローブル聖王国とリ・エステイーゼ王国も、魔導国への協力を惜しまぬ——と。

鮮血帝ジルクニフも。聖王国の国王ドツペルも。魔導国と密約を交わした第二王子ザナックと、第三王女ラナーも。全員が魔導国に協力する駒でしかなかった。大義名分の是非はともかく、周辺三国に選択肢など存在しえなかった。

必然的に。

スレイン法国の頼みの綱となりうるのは竜王国だけとなった。

だが、ブラックスケイル・ドラゴンロード「肝心のドラウディロン・オーリウクルス女王——」  
黒鱗の竜王は、『隣接するビーストマンの国に襲われている』状況にあり、援軍など望みようがない。むしろ、元漆黒聖典の隊員を派兵するなどして援護していた側なのである。無論、法国の神官長らの判断は人道的に正しく、亜人国家の『狩り』という名の侵略を食い止める防波堤としても、竜王国を利用、援助を惜しむことはできなかった。

しかし、それも魔導国の奸計かんけいの一部として利用されているとは、法国の人間は知るよしもない。

「あー、ひとまずは助かった」

竜王国の城の玉座で、少女形態の愛らしい姿には似合わぬ疲労した  
声音。



人間を喰らうビーストマンの脅威を排除できた事実を軍官房長などから確認できて、本気の本気で安堵する。これで、国民が食い殺される未来はなくなった。その一事こそが大事であった。

竜王などという仰々しい尊名とは裏腹に、戦闘力など一般人レベル——だが、八分の一だけ流れている竜の血によって発動できるが制御は不可能——大量の生贄を欲する始原の魔法の使い手である彼女は、魔導国からの密使を受け入れ、数ヶ月前にはビーストマンの国からの脅威を排除する方策を得ていた。

「ええ。正直、かの国があの沈黙都市を掌管しやうかんすることに成功していたとは」

宰相は冷ややかな目で書類に目を落とす。

沈黙都市——歴史の闇に葬られ、濃霧によって全貌をひた隠し、十万の命と共に遺棄されていた、ビーストマンの古都。

驚きと疑念を混ぜ込んだ宰相の表情を見やって、ドラウデイロンは魔導国から得たアンデッド兵力——沈黙都市から派兵されてきた不死の軍勢を思い出し、悪寒を禁じ得なかった。

「まったく。同じアンデッドが治める国であるからとはいえ、まさかあの沈黙都市を、とはな」

「——あるいは、あの国の王こそが、1000年ほど前に沈黙都市を？」

「あー？ ……そんなわけ……ありえるか？」

沈黙都市を襲ったのは、伝え聞くだけでも魂喰ソウルイーターらいが三体。

聞くところによると、かの魔導王は聖王国を救う際にも、同じアンデッドモンスターを使役して、亜人連合を打ち払ったと。

可能性は十分といえるが、ドラウデイロンは仮説の矛盾に言及する。

「しかし、かの王が沈黙都市を襲って、以後なんのリアクションも起こさずにいるものか？」

「あるいは、長く潜んでいたとか？」

「だとしても、たった一都市を廃都に変えて雲隠れする理由がなくないか？」

それこそ、沈黙都市にしたのと同じような破滅と混沌を周辺国家に

叩き込むのが筋というもの。

あの都市だけが襲われ、そして穴熊のように沈黙し続けるなど、どう考えてもおかしすぎる。不整合そのものだ。

あの都が、何らかの手段で封印——ビーストマンの国の神官団の力で封じられたという噂を聞くが、それもなかなか眉唾物だ。

「あるいはズーラーノーンによる儀式説、などもございましたが」

「そっちの方がありえる——と言いたところだが、その秘密結社の出所も、魔導国の王が暴いたからな」

まさか法国が、という思いを禁じえぬドラウディロン。

人間種保護の名目のためとはいえ、まさかアンデツドの結社まで仕立てあげて、素知らぬ顔で被害者ヅラしていた神官長たちの顔を、女王は思い出す。

「思えば、陽光聖典や漆黒聖典とか、最精鋭部隊を派遣するなりすれば、壊滅や全滅とまではいかずとも、それなりの弱体化が見込めるはずだったからな」

今となつては、法国のズーラーノーンへの対応の甘さが、その実、自分たちの子飼いの犬への応対であったことが証明されたわけだ。

魔導国の大義としては、「そのような邪悪かつ卑劣極まる結社を創設し使役していた罪は、重い」という感じになるだろう。

「ま、うちは魔導国——魔導王陛下のおかげで、とりあえずは安泰だ」「はい。しかしながら、その見返りとして、法国からの戦力を長く留保するようには、という要求もあります」

「それも、あと五日のうちに帰還させることは無理な話だ」

地政学を論じるまでもなく、竜王国から法国へは距離があり、また、竜王国と法国の北部にはカツツエ平野——アインズ・ウール・ゴウン魔導国の領地が広がっている。

いざというときは、竜王国は魔導国と内応し、接する国境地帯に魔導国軍を進駐させることも確約済みだ。つまり、国境は閉鎖される運び。包囲網は完璧という具合であった。

「法国は、どうなるでしょうか」

宰相は思わず呟くが、どうにもならないだろうとドラウディロンは

見ている。

自分だったらケツまくって逃げ出したいところだが、あの国の首脳陣は神の都を捨てることはできないだろう。何より、国是たる六大神信仰からして、アンデッドなどの邪悪なモンスターと手を結ぶことは許されない。闇の神を信奉している割に、そのあたりが非常に面倒な国民性がある。

「あとは南の砂漠地帯——エリユエンティウくらいしか頼りにならないだろうが」

あそこが他国に干渉した話は聞いたことがない……否、ひい爺様じいさまの話だと、他国に干渉しまくった王たちの遺した都であるがゆえに、よそへの干渉を禁じるようになったというべきか。

「なんにせよ600年の歴史も、ここまでだろうな」

その片棒を担ぐ——とまではいかずとも、率先して味方する理由がないドラウデイロン女王は、胸の内ですレイン法国の滅亡と民たちの苦難を、心から謝した。

リ・エステイーゼ王国の宮殿で、第三王女ラナーは、国政を離れた……半ば廃人と化し放棄せざるをえなかった父に代わって、兄である第二王子ザナックと分担した仕事を決裁し終えた。

「ふー……これで、手続きの方は終わりね」

「ありがとうございます、ラナー殿下」

国務長官は謹直な姿勢でそれを受け取り、彼女の執務室を後にする。

そして、彼女の子犬が慰労の言葉を発した。

「お疲れ様です。ラナー様」

「はあ、本当に疲れしました。都市の再建事業や、その労働力の手配。そして、法国と戦争状態に移行する魔導国からの協力要請と、その受諾。クライム、肩をもんでくれる？」

「そ、そのようなことは！」

耳まで赤くして身分の差を慮おもんばかるさまが実にかわいらしく思い、ラナーは微笑みを深くする。

「冗談です。お兄様の方は、どうなさっておいでですか？」

「……先日の内乱に参加した諸侯、その中で生き残った主犯格の刑が執行されました」

その立ち合いを務めたという。

「聞いたことのない名前の男爵、でしたっけ？ この機に乗じて一旗揚げよう？」

「詳細は不明ですが、ズーラーノーンを王国内部に引き入れ、都市壊滅の責を負った者達です。ラナーさまが御心を痛める必要はございません」

悲し気に微笑まれて、思わず下腹部のあたりが疼いた。

ああ、はやくこの子犬と共に、あの方々のもとで働ける日が来ればいいのに。

そうすれば、ラナーはいくらでもクライムと結ばれ、未来永劫をむつみあうことができるだろうに。

「ラナーさま？」

なんでもありませんわと軽やかに席を立つ第三王女。

彼女はポケットの内に常に携行している「箱」を慰撫するように撫でながら、クライムと共に私室を目指す。

その途上で。

「あら、お兄様？」

ザナツク王子の姿を窓外に見出したラナー。

第二王子は宮殿の庭の一隅にある花畑で、木製の車椅子に腰掛ける女性と、何やら会話している。

クライムは女性の名前に覚えがあった。

「レメディオス殿ですね。『元』ローブル聖王国聖騎士団長。九色のうちの白色、だったはずですよ」

「あら。クライムはお詳しいの?」

嫉妬心とは無縁なラナーの口調だが、クライムが自分以外の女性のことを話すと、どうしても心のうちにさざなみを感じる。

「詳しいわけではありませんが。周辺諸国でも名の知れた戦士の一人——でした」

だが、彼女は『壊れた』。

聖王国自体は魔導王の手によって救われたが、レメディオス・カストディオスは、完全に打ちのめされた。

精神に異常をきたし、団長職を追われ、療養のためにと、魔導王陛下の指名で、ザナック王子のもとに。

当初は城のメイドらが世話を務めていたが、なぜか今では、ザナック本人が彼女の世話につくことも頻繁にある。

「ザナックさま曰く『第二王子という「身分のある者」には、かろうじて人らしく接することができる』らしいですよ」

「——そうですか」

早く快復なさるとよいですね、などと心にもないことを言いつつ、クライムが領いて付いてくるのを、ラナーは快く思う。

寝酒の酒杯を優雅に傾けつつ、金髪の青年は皇城の下の発展ぶりと平和ぶりを眺めるでもなく眺める。

バハルス帝国皇帝、ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクスは、無論のことながら、魔導国側についた——つけたことを幸福

に思うべきか。

新しくできた亜人の友のおかげで、最近はずこぶる体調がいい。枕にこびりつく抜け毛もなくなった。

だが、魔導国がスレイン法国を蹂躪する地獄絵図を脳内に思い描くたび、あのときの闘技場のことを思い出す。

(あれがなかったら、俺の人生どうなっていたことか)  
当時のこと。

法国などの諸国と合し、魔導国包囲網を築く計画が、アインズ・ウール・ゴウン魔導王の登場で、すべてがご破算となった。密談をかわそうとしていた神官長らを激昂させ、「人類の裏切り者」扱いされたことも、なつかしい。

いまとなつては、あの時に早々と属国化できて、本当に、本当によかった。

失ったものは少なく、むしろ得たものは大きい。

鮮血帝として恐れられていたのも過去のこと——属国の皇帝という身分も、そんなに悪いものではない。

「ジル、そろそろお休みになつては？」

「ああ」

愛妾のロクシーに寢床へと誘われ、ジルクニフは酒杯を軽く飲み干す。

空のグラスをテーブルにおいて、天蓋付きの白いベッドへ。

バハルス帝国——属国の未来は明るい、何一つ疑うことなく、皇帝は眠りに落ちた。

## ンファイレーアの死

／N f i r e a i s D e a d

カルネ村——否、すでに村と呼べる規模ではなく、魔導国の支配領地——“領域”として扱われるまでに格上げされた。

この領域を守護する大任を得たのは勿論、数多のゴブリン軍を率いる“族長”——エンリ・エモットあらため、エンリ・バレアレをおいて他にない。

「ンファイ？！」

そのエンリ領域守護者と結婚した、彼女の幼馴染、ンファイレーア・バレアレは、カルネ村郊外に増設されたポーション工房にこもっていた。他にもドワーフたちの工房やゴーレム製造工房なども新設されていたが、どの施設も重厚な作りで、万が一の事故の時にも外への影響は少ない設計がなされており、断熱や防音にも優れていた。

慣れないものでは鼻をつまみたくなる薬品や薬草の羅列された棚を背に、錬金術師たる彼は研究書類に何事かを記述している。

「そろそろ夕食の時間だよ。ネムがお腹すかせて待つてるよ〜」

「ああ、もうそんな時間？」

〈永続光〉の魔法のランプがあるせいで昼夜問わず研究に没頭できる環境にあるンファイレーアは、窓の外の暗さに気づけなかった。

「おばあちゃんの方は？」

「最近の赤色の研究が大詰めとか。でも、今日はもう帰ったよ。さすがに歳だしね。無理はさせられないよ」

「それは私もンファイにさんざん言ってるはずだけど？」

ンファイレーアは笑ってごまかした。

精力剤として青色のほかに藍色や橙色などのポーションを自分で

製造し服用したりもしている。

祖母が「神の血」を目指し、その途上で赤紫やら青紫やら藤色やら様々な色のポーションが完成し、ナザリックで試用されている。それらは特定の種族——人間種だったり亜人種だったり異形種だったり、様々な種族で効き目に違いが出るもので、祖母の望む完成品からは程遠い。

が、ンファイレアは発想の転換を行った。

「赤」こそが最高の神薬であるとされるが、果たして本当にそうであろうか。

最近、ンファイレアは属性を付与しやすいポーション「透明」の開発に熱を上げている。

あれが完成・増産可能となれば、今までのポーション体系にも大いに影響を及ぼすだろう。たとえば、ナザリック内にいるという神官軍指揮者さんによる「神聖属性付与」にも大いに流用できるかも。彼の手によって加工される「水色」ポーションは、確かに邪悪な存在を打ち払う神聖属性を投薬者に付与する作用がある。魔導国の冒険者界限でも、なかなか好評を博していた。

それら研究計画を興奮気味に話す夫をしようがなしに見守っていた妻は、とにかく休息のための帰宅を命じた。

「じゃあ、ンファイレア、あまり無理しないで、今日の夕食はンファイアの好きな具のシチューにしたから」

「ええ、何かな？」

それは家に帰ってからのお楽しみね。そう告げる妻が工房を辞した後、ンファイレアも仕事の後片付けを切り上げ、工房内を照らす「永続光」のランプを消した、その時だった。

「やあ」

彼以外には誰もいないはずのポーション工房内に、彼を呼ぶ声が響



く。

鈴の音を思わせる綺麗な声色だが、ンファイレアには心当たりがない。

エンリではない、いったい誰だろうと振り返った、直後、

「がはっ！」

前触れもなく彼は首を驚掴みにされ、軽く宙に浮いた。

「君が、異能持ちの、ンファイレア・バレアレ？」

窓の外からもれる月光で艶めくのは、黒と白に別れた髪色。その下からかろうじて見える耳の形は細長い。左右でこれまた違う色をともし瞳は、まるでお気に入りのお物の前にした子供のように妖しく輝いて見える。

彼には知らぬ存ぜぬ相手であるが、それが法国の漆黒聖典「番外席次」と呼ばれる少女であることは間違いないかった。

少女は打って変わって、感情を窺わせない瞳の透明さで聞いた。ただし。

「さつき奥さんからも名前呼ばれてたし、確定だよね？」

「が、あ、き、君は一体？」

かろうじて呼吸と会話ができる程度の拘束力だが、ンファイレアの筋力脚力では逃げることはできない程度に、巧みに調整されている。

信じがたい膂力。考え難い能力の繊細さであった。

「安心してくれていいよ。用があるのは、君の異能の方だから」

異能と聞いて、彼の脳裏に過日の恐怖が一瞬で過ぎる。

あのときは冒険者モモン——否、アインズ・ウール・ゴウンその人のおかげで事なきを得た。

「ぼ、ぼくの、異能を使おうだなんて考えても、無駄だ！ 僕には僕の意志がある！ 脅されたって！」

精一杯の虚勢。

無論、相手にはそんなことなど「どうでもいい」らしい。

「あはー、大丈夫、だいじょうぶ。異能を使うのは「君じゃない」から、安心してくれていいよ」

「？ い——いったい、なにを、いつて」

「んじゃあ、ひとまず……ゴミ掃除から」

黒白の少女がどこからともなく左腕に取り出したのは、十字槍にも似た禍々しい戦鎌。ウオーサイズ

ンファイレアが驚嘆の声を上げるよりも早く、番外席次は動いた。

「な、」

戦鎌の一撃が、他に誰もいない工房内の虚空を細切れに引き裂いていた。

「に?」

その誰もいなかった空間から、あふれ出る血飛沫ちしぶきの滝。粉々に割れ砕けたのは巨大な聖杖。隠れ潜んでいた護衛のモンスター、その死骸。

愕然と声を奏でた少女……赤毛のメイドだけが、五体満足に、工房内に立っていられた。

「あら? 意外としぶといのがいるじゃん?」

影の悪魔や八枝刀の暗殺蟲数体の骸むくろが消滅しつつあるそこに現れたのは、赤髪を三つ編みに結った戦闘メイドが一人、ルプスレギナ・ベータであった。

番外席次は愉快そうな語調で告げた。

「この私が気付いていないとでも思ったわけ? イヌっころ風情が?」

「ちい!」

「ル、ルプスレギナさんツ!」

知己であるンファイレアが驚愕の声を上げるのを無視して、ルプスレギナは襲撃者へと飛びかかり、反撃の爪——人狼ワウルフの五指を伸ばすが、  
「遅」おっそ

戦鎌の一撃の方が数倍の速さで赤髪の少女の左腕を切り落としていた。

「な、馬鹿、な——っ、〈大治癒〉!」

驚愕と痛覚を感じる直前に、回復魔法の発動で傷を癒し出血を止め、片腕を癒したルプスレギナ。

人狼は「純銀」以外の金属に耐性を備える種族——だが、あの戦鎌は純銀ではない。純銀であれば痛覚の違いでそれとわかる。断定できる。かつて沈黙都市で受けた傷の時のように。しかし、あの戦鎌は人狼の両腕を易々と切って落とすとした。まるで飴細工でも切るがごとく。ありえないことが起こっている——

そんな彼女の状況分析と回復魔法の様子に、番外席次は余裕綽々に応じた。

「へえ。あんた神官？ その恰好なりで？」

「あ？ だったらどうした侵入者ツ！ 私の〈完全不可視化〉をどうやって見破った!？」

舌戦ぜっせんに応じるルプスレギナは本気で激怒していた。

一撃で壊された武装の聖杖は、彼女を創造した獣王メコン川からの贈り物であり、何よりここは、ナザリック地下大墳墓におわす至高の四十一人のまとめ役にして、いまやアインズ・ウール・ゴウン魔導国の君主となった御方が支配する領域。

だというのに、誰にも何にも気づかれずに、アインズから最重要保護対象として指定された若者の工房に侵入を果たすなど、尋常ではないことが起こっている。周囲に駐屯しているゴブリン軍は勿論、ナザリックの警邏たちすら、この領域深部への侵入に気づかないなど、ありえるはずがない。何らかの異能か、未知の能力によるものか、判断が難しい。〈伝言メッセージ〉をとばそうとしたが、何らかの力で妨害されていて、増援すら呼べはしない。

だが、そんなこと的一切が関係ない——ルプスレギナは高らかに吼ほえた。

「何者かは知らんが！ 生きてここから帰れると思うな！」

かつて沈黙都市の任務で、クストに一発でバレた時とは状況が違った。違いすぎた。

本気の口調と戦力で応戦するルプスレギナであったが、戦局はどう見ても彼女の圧倒的不利であった。

味方と主武装を失ったからではない。人質インフィレアがいるからでもない。

圧倒的な、絶対的な、彼我ひがの実力差だ。

黒白の髪の少女は嘲弄<sup>ちやうろう</sup>するように赤毛のメイドを左腕一本で十数度も殴り肘鉄<sup>ひじてつ</sup>をくらわせ、握った戦鎌の石突<sup>いしづき</sup>で首や体の各所を小突いてすらみせた。

完全に遊ばれている。

ありえない反射速度と連撃の数。

人間一人の首を捕らえた人間種を相手に。

戦闘<sup>ブレアデス</sup>メイドの一人たる——ルプスレギナ・ベータが！

せめて相手の情報を持つて帰るか、捕らわれたンフィーレアを逃がすくらいのごときは遂行してみせたかったが、そのどれもがかなわなかった。

やがて、番外席次もメイドとの戦い<sup>あそび</sup>に飽きた。

戦鎌の刃でメイドの腕を脚を腹を顔を情け容赦なく引き裂き貫き、その都度、神官の回復魔法で癒すサイクルができたが、それも長くは続かなかった。

「かはっ！」

信じがたいことに、ルプスレギナの体力<sup>H P</sup>が尽きかけている。魔力<sup>M P</sup>も底が見え始めた。

至高の御方より賜った魔法のメイド服も、彼女の血で真っ赤に染まり果ててしまう。

「あ、あ——」

ついに、ルプスレギナは力尽きた。わずか二分にも満たない戦闘で膝を屈し、その場に倒れ伏した。

番外が「とどめを刺そう」と言わんばかりに、戦鎌の刃でうつぶせに転がる彼女の喉元を刈ろうとするさまを、拘束され続けているンフィーレアは黙って見過ごせなかった。

「や、やめろ！ その人は、僕の恩人の、魔導王陛下の、部下のひとだ！ 傷つけることは、許さないぞ！」

だが、それこそが徒<sup>あだ</sup>となった。

番外席次が好奇の眼差しで赤毛のメイドを見下ろした。

「——へえ？ こんなザコ狼<sup>いぬ</sup>が、魔導王の？ ふふふ、笑えるわあ、それ……ああ、でも」



ンファイレアは手足に力を込めて必死に抵抗しているが、彼のレベル——強さでは、目の前の少女に傷ひとつつけれない。逃れることができない。

「君の異能——『ありとあらゆるマジックアテムを使用可能にする』——その命ごと、私が “もらっちゃやう” から」

言っている内容が理解できなかったンファイレアは、ただ恐怖と困惑に震えることしかできない。

「な、にを、言ってる？」

「さようなら、そして」

いただきます——

微笑む黒白の少女は、まるで死神の魔手のごとく、ンファイレアの心臓を貫き、抉りとった。

「エ……ン」

なんの容赦もない一撃によって、ンファイレアは断末魔を上げることもできず、死んだ。

死体を乱暴に葉棚へ放りすてた番外席次は、今まさに彼から奪い取った心臓を——命を——魂を、まるで禁断の果実のごとく眺め、笑い、そしてその場で貪り喰らう。

「んー、おいし♪」

赤い血にまみれた口元をぬぐった番外席次は満足げに「ごちそうさま」と言っわらて嗤い、やはり音もなく、その場を後にした。

数分後。

「なに………これ？」

夫の帰りがあまりにも遅いと不審に思ったエンリが工房へと戻る

と、瀕死の重傷で横たわるルプスレギナと、殺されたンファイレーアの死体と、対面した。

## 状況確認

／ Situation confirmation

その凶報は、すぐさまアインズのもとに届けられた。

「いま、何と言った」

骨の指が握っていた羽ペンが、書類の上を転がった。

魔導王はエ・ランテルの執務室で、五日後の戦争準備と共に、午後の政務に取り組んでいた。

しかし、あまりにも信じがたい報告内容で、何らかの誤報ではないかとさえ思った。

「——ンファイレーアが、死んだ——だと?」

その報せを持ってきたナザリック第七階層守護者・デミウルゴスは、謹直な姿勢で事実を告げる。

「彼の妻であるカルネ領域守護者、エンリ・バレアレが第一発見者です。殺害現場の状況からして、何者かの襲撃を受けたものと推察されます」

「ば、馬鹿な……彼の護衛……ルプスレギナたちは、どうした!?!」

「……」

デミウルゴスですら即言できなかつた。傍に控える魔将たちなど、怯え竦み震えあがっている。

魔導王は声が激するのをとめられない。とめることができなかつた。

「ルプスレギナはどうしたと訊いている! デミウルゴス!!」

答えるも命じられた悪魔は、拝跪の姿勢のまま、低声を床におとし

た。

「……現在、ナザリック第九階層にて、ペストーニャおよびクスト・



スウの治療を受けております。瀕死の重傷です。おそらく、ンファイ  
レアを殺した下手人による、犯行かと……」

アインズはあふれ出す怒気に蓋することが出来なかった。

沈黙都市での任務を覗き見ていた際、人狼のメイドが純銀の魔法武  
器で傷つけられた時の比ではなかった。

「いいいいいいいい！……どこのだいつだああ!! その犯人はツ!!?」

執務机の上が、骨の腕で一掃された。椅子は転がり倒れ、立ち上  
がった骨の玉体が衝動に駆られるまま蹴り上げ、屋敷の壁を貫通させ  
るほどブチ壊した。

そこで、アンデッドの精神が沈静化された。

それでも、強制的に冷静になっても、アインズの怒りはおさまらな  
い。おさまるところではなかったが、シモベたちへの詫びを入れず  
はいられなかった。

「……すまん。みつともない醜態を」

デミウルゴスは書類の散乱する中でも身を固め、実直な応答を君主  
におくる。

「いえ。御身の怒りは当然のものと、理解しております」

「今すぐナザリックに戻る」

委細承知したデミウルゴスたちを連れて、アインズはナザリック地  
下大墳墓の表層に転移した。

そこで待ち構えていたナーベラルを除く戦闘<sup>ブレイアデス</sup>メイドたち四人——  
彼女らを率い、ナザリック守護の任に就くセバスからギルドの指輪を  
受け取る。彼も彼女らも、ルプスレギナの身を案じていることはわ  
かったが、一言も狼<sup>ろうばい</sup>の声を上げず、ただ主人に一礼する。アインズ  
は「すまない」と詫びて、一挙に第九階層へ。

廊下で居合わせた一般メイドの一人が、驚愕に足をとめた。

「アインズ様!」

「私にかまうな——いや——ルプスレギナの容体は?」

アインズは一路、シモベたちの居住区画を目指した。

訪れた私室——シモベのなかでもルプスレギナに与えられた一室  
は、ペストーニヤと一般メイド、さらにクスト・スウによって集中治

療室のそれになっていた。

部屋の中心で横たわるルプスレギナは明らかに血色が悪く、呼吸までつらそうであった。

あれで本当に治療魔法をかけられ続けているとは、にわかには信じがたいほどである。

「この魔法でもダメ、ですか……」

「——次は〈上位解呪〉の詠唱・二発同時を試しましょう。回復は続けて、少しでも苦痛を和らげられる」

犬頭に腑分け痕があるメイド長・ペストーニヤと、アインズがナザリックに招いた人狼の神官クストの施術は、どれも失敗に終わった。

人狼の戦闘メイドの背中と腹部を貫通した、むごたらしい、傷。

治療魔法を詠唱し続けることで体力を完全に失い死亡することはないが、意識が回復する見込みは——。

「くそっ」

沈静化する意識で、用意された椅子の一脚に腰を落とすアインズ。

ルプスレギナを見舞い、実際の現場に直面して、己に失策や失態、見落としがなかったか粗探<sup>あらさが</sup>しする。

たとえば、そう、護衛人員の数を増やしておけば——戦闘メイドのソリュシャンなどの隠密能力と合わせていたら——などなど、無駄な後悔ばかりが空っぽの頭蓋骨の内に鬱積していく。

「アインズ様、少しだけよろしいでしょうか？」

一時的に治療の現場を他の神官に任せたペストーニヤに促され、顔を上げた。アインズは最も知りたかったことをたずねる。

「ルプスレギナは、……死ぬのか？」

主人からの率直かつ絶望的な問いかけに対し、ペストーニヤの犬の頭は、かろうじて左右に振れた。

「いえ、命の方は。ただ——」

「ただ？」

「私共が調べた限り、あの傷は通常の負傷ではございません。何しろ、彼女を『死ぬなくしているのですから』」

「……死ぬなく、している？」

「アインズは骨の首をかしげる。」

「ええ。死亡不能、いえ「殺害不可」の呪い、というようですが。とにかく、彼女は今、あの傷によって、永続的に苦痛を与えられている状態です。〈呪詛〉の魔法の類であれば、治療も簡単なのですが」

「ユグドラシルとは違う魔法、いや、法則、ということか？」

「そういうことになろうかと存じます………わん」

「アインズは言葉もなかった。「死は救い」などというナザリツクの標語を嫌でも想起させられる。」

「つきましては、クスト殿からお話が」

「なに、クストが？」

沈黙都市を封じていた、この世界では絶滅種とされる人狼、その生き残りである青年は、短く切った黒髪で魔導王に一礼し片膝をつく。

「陛下。ルプーの——彼女の傷についてですが、少々お話が」

「なにか君には情報がある、と？」

内心、藁わらにも縋る思いでクストに先を促した。

「はい。我が義父にして師である、小猫の教皇から聞いたことがあるのです。『永遠に苦しみ続けるための傷を与える』という異能タレントの話を」

「ほう。今回の事件は、その異能タレント持ちの仕業と？」

「やも知れませんが——ですが」

クストはひとつ息を吐く。

「義父が死ぬ前。私が15の時に聞いた十三英雄の話で、「そういう異能をもって生まれた戦士」の話を知ることがあるのです。その戦士は、十三英雄と「敵対した」厄介な相手であった、と。十三英雄が一人・自称「黒騎士」の持っていた魔剣のうち的一本、腐剣コロクダバールタレントよりも強力な威力を持つ異能で、かの騎士がいなければ応戦するのも困難であったと伝え聞いております」

「なるほど——それで、君の義父たち十三英雄は、その戦士からの不死の傷に対し、他にどのような対処を？」

青年は数秒の逡巡を必要とした。伝えるべきか否かの天秤にかけ、「伝える」という選択に比重が傾いたようだ。

「異能持ちを殺害することで強制的に解呪させた、という単純な話で

はごいませんでした。さらに、「死亡不可」「殺害不可」状態というのも、通常人類、いえ、命ある存在すべてにとつては悪しき呪いではなく、これを解決する手段として有効なのは、——」

言葉に詰まる人狼の青年に、アインズは納得の頷きを返す。

「構わない。話してくれ」

「……この異能は、「被呪者に『自死』させる」ことに関しては、何の縛りもない。そのため……」

クストは沈痛な表情で魔導王の視線から目をそらした。

苦痛のうちに意識を失っているルプスレギナに、自死させる——彼女の意識が目覚めようとも、そのような選択肢は、アインズ・ウール・ゴウンに存在しない。

「——他にわかつていることは、あるかな？」

「いえ。私が覚えているのは、その程度のことです……もっと詳しく、教えるをこうていればよかったです」

「いや——参考になった。ありがとう、話してくれて」

アインズはクストをさがらせた。彼自身、度重なる治癒魔法の連発で疲弊している。多くを語らせようとすれば体力が持つまい。

彼の記憶を読むというのも無理がある。彼は若い青年の姿だが、実に150年を生きる異形種の人狼の生き残りだ。そのうちの100年間を、沈黙都市を襲った上位アンデッド封印に費やしていたところに、アインズがルプスレギナを派遣調査に向かわせたのが、彼との出会いであった。

そんな彼の記憶を、15歳の時分まで遡るなど、今のアインズには望むべくもない。それを強行したところで、彼が解決手段を聞いていなければ、ただの徒労、魔力の浪費に終わってしまう。

ちなみに、治療途中のルプスレギナの記憶を読む行為は憚られた。彼女にかけられる回復魔法に影響を与えかねないし、何よりこの魔法は、相手の精神に干渉する魔法。意識不明の重体という状況では、操作すべき精神そのものが機能してくれないのである。

「ッ」

ルプスレギナが苦痛の呻きを上げる。だが、やはり意識は戻ってい

ない。

この骨の身体、アインズに唇が存在していれば、確実に血が吹き出るほど噛み締めていただろう。

「——この誰かは知らんが、これは『挑戦状』と受け取ったぞ」  
ルプスレギナに自死などさせない。

絶対に、絶対に絶対に絶対に絶対に、ルプスレギナの傷は快癒してみせる。  
決意を固めたアインズ・ウール・ゴウン魔導王は、ルプスレギナの治療を続けることを厳命厳守させた後、後ろ髪を引かれる思いで治療室を辞し、もう一人の悲劇の授受者へ面会しに向かった。

「エンリ」

ナザリツク地下大墳墓の第九階層ロイヤルスイートの客間で待っていた少女は、泣きはらした顔で呆然と虚空を眺めていた。

一般メイドに出された超高級品の紅茶もお茶菓子にも手をつけず、ただ、起こったことが真実であるのか疑うような視線と表情で、本当に痛ましかった。

「エンリ……」

再度の呼びかけに、エンリは壊れた人形のように振り向いた。

「アインズ、さま——ンファイが——ルプスレギナさんが！」  
ようやくスイッチが入ったかのように涙をこぼして窮状を訴えるエンリ。

ちなみに、彼女の妹ネムと、ンファイレアの祖母レイジー・バレアレもまた、重要防衛対象ゆえに、同じ客間に通されていた。ネムをカウチの上に寝かしつけた義理の祖母は、孫の死という現実を受け入れ切った表情で目礼を交わす。

「すまない、二人とも。今回の件は、私の失態だ」

「いいや、魔導王陛下——悪いのは孫を殺し、ルプスレギナ殿を返り討ちにしておった何者かの方じゃ」

リイジーは年の功ゆえか冷静に状況を判断できている。

ルプスレギナが孫や自分たちの護衛であることにも察しがついていたのだろう。しかし、それでも解せない。

「ただ……何故なんでしょうな……何故、うちの孫が、ンファイレアばかりが、こんな」

リイジーにとって、彼を失うのは二度目の経験となった。

一度目はエ・ランテルで、そして今回はカルネ領域で。

魔導王アインズの庇護のもと、研究に没頭できたはず、なのに。

「案じるな、二人とも」

アインズ・ウール・ゴウンは宣言した。

「ンファイレア・バレアレは、魔導王である私が蘇生させると、誓う」

臣民にして重要な地位と役目をあたえられた二人は顔を見合わせ、素直に喜んだ。

「ありがとうございます！ ありがとうございます、アインズ様！」

「じゃが、本当に、そんなことが？」

頷く魔導王。

すでに、冒険者たちへの宣布として、魔導王アインズが死者の蘇生を行えることは周知の事実。

ここで、重要なポジション職人として魔導王に奉仕してきたンファイレアを蘇生させないというのは、ありえない判断だ。

「ただ、少しばかり時間を要することだけは、許してほしい……彼とルプスレギナを襲った下手人を調べるためにも。」

エンリもリイジーも納得してくれた。

だが、アインズは黙っていることがあった。

ルプスレギナが未知の現象に陥っているのと同様に、死亡したンファイレアの方にも、「異変」が生じていたことを。

ナザリツクの執務室にて。

「蘇生できんだと？」

ンファイレーアの死亡を聞いた時点で、アインズは彼を蘇生させることを命じていた。

二人を襲った犯人を追うためならば、襲われた二人に問いただす方が手っ取り早い。意識不明の瀕死であるルプスレギナは論外だが、ただ殺された——心臓を一撃で抉られたンファイレーアの死体であれば、簡単に蘇生できるはず。中でも、ペストーニヤの〈真なる蘇生〉トウルル・リザレクシヨンであれば、その程度のことは容易。媒介となる黄金などの用意も、今の魔導国……ナザリツク地下大墳墓には潤沢に存在していた。蘇生させた後でじっくりと事情聴取を行うつもりでいたアインズは、彼の記憶を読んででも、下手人の正体をあぶりだすつもりでいた。

だが、できなかった。

ルプスレギナを治療中のペストーニヤに代わって、デミウルゴスが仔細を述べる。

「蘇生作業を担当したペストーニヤの話によりますと、ンファイレーア・バレアレの肉体、もとい魂魄こんぱくの領域で、彼の死を払えない——いえ、彼の魂を「捕捉できなかった」とあります」

「——魂を、——捕捉できない、だと？」

アインズは腕を組んで考える。

彼自身、リザードマン蜥蜴人への蘇生実験などで、実際に蘇生魔法を実行した前歴がある。あの時に得た経験を思い浮かべると、確かに蘇生対象の魂なる領域に干渉するという表現は正しく思い起こせた。

百聞は一見に如かずの精神で、アインズ自身が高価なマジックアイテムを使用し〈蘇生〉の魔法をナザリツク内に保管されたンファイレーアの死体に施しても、確かに効力が発揮されることが実演できた。では、次なる疑問をアインズは問わずにはいられない。

「ンファイレーアの、彼の魂は、——どこへ行った？」

あるいは、誰かが持ち去ったのか——その線が濃厚だと、アインズ

は直感する。

だとすれば、ンファイレア殺しの犯人しかいないだろう。

「襲撃現場となった、ポーション工房の調査進捗は？」

現場はカルネ領域郊外とはいえ、嚴重な管理監視体制下にあった。トオムの作ったゴーレムの24時間監視装置やナザリックの警邏兵が三個大隊規模で巡回中、おまけに近郊にはトブの森を開拓中の、エンリ將軍配下のゴ布林軍5000までいるのだ。それらすべてに感知されることのない強者とは、果たしてどれほどのレベルの持ち主か。

デミウルゴスは真実無念そうに片手を胸に当て背中を九十度は曲げる。

「申し訳ございません。ナザリックの諜報部員を総動員して、犯人の痕跡を探っておりますが、それらしきものは、いまだなにも——」

「ふむ。潜入や暗殺に長けた盗賊職か？ それとも、それも未知の異能タレントのなせる業か？ ……いや待てよ？」

生まれもつての異能タレントは、原則一人の人間・ひとつの命に一個きりのはず。複数の異能を所有するという話は、噂の橋にさえ聞いたことがない。

「『死ねない傷を与える』異能』だけではない、のか……いや、まさか……」

アインズはデミウルゴス達と共に、日付が変わったあとでも事件解明のために動き続けたが、結果ははかばかしくなく終わる。

とにかく、外に出ているシモベたちや法国への使節団——アルベドの最強チームに『周辺警戒を厳重せよ』と発布するしかなかった。

スレイン法国への魔導国侵攻まで、あと四日。



## アルベドVS番外席次

r  
／Albedo VS Extra seating order

エルフ王は、自国を捨てた。

もともとスレイン法国に訳の分からん理由で責め立てられ攻め寄せられ、迎撃と防衛を臣下に命じたが、相手の兵站の物量、兵士の練度、戦略と戦術、マジックアイテムの差にお圧された。

そのうえ、火滅聖典などという精鋭部隊まで投入してきた法国の本気ぶりはすさまじく、エルフ王国の首都は陥落したも同然であった。ゆえに、捨てた。

エルフ王は特に未練も執着もなく、自国民らを放置して、王都が陥落されるのを眺めた。

「潮時だな」

助けを求める国民は勿論、敵国の兵士も分け隔てなく殺戮し、蹂躪した。

どいつもこいつも弱すぎた。弱すぎて殺しつくして、何人やったかも覚えていない。

火滅聖典が橋頭保としていた都も手ずから殺しつくし、死体の山を量産しつづけた。

途中、火滅聖典に属する女性隊員どもに命乞いされた際は、喜んで凌辱してやった。

同族エルフとの間には、強者たりえるものは育てられなかった。が、あるいは「同じ人間種であれば」、その中でも精鋭に属する聖典とやらの一員であれば、我が落胤らくいんを強き者として育て上げられるやもしれぬと

いう、当然の判断。どの女も驚くほど弱く思えたが、行為の後のこと——命があるかどうかなど、知ったことではなかった。運が良ければ我が種を孕み、育てることもかなうだろう。その時にはあらためて回収できるよう、わかりやすい首輪——入れ墨のごとき魔法をとりつけてやった。人間たちは野蛮なことに、エルフを奴隷とする際に耳を削ぐが、エルフ王は己の奴隷に魔法の首輪——高位の魔法〈奴隷〉<sup>スレイブ</sup>を与えられるのだ。その魔法効果によって、首輪をつけられたものは主人に逆らうことはできない。魔獣を〈調教〉<sup>テイム</sup>する、その人間版というべきだろうか。

半裸で泣き崩れる女のうなじに、鎖のような紋様が浮かび上がるのを見て、エルフ王はかつての記憶が呼び起こされる。

「ふむ、思い出すな」

昔。

法国の切り札であった女を騙し、<sup>たぶら</sup>誑かし、捕らえたことを。

当時は、「第一席次」という最強の号を与えられていたか。

その女を本物の鎖で縛り犯して、確かに我が子を身ごもるまではいった。それは確かだ。生育状況もよかったはずだというのに、出産間近というところで、漆黑聖典に奪われてしまった。あれでは無事に生まれたかどうかも分かりはしない。

「楽しみだな。生まれた子が女であれば、強者であれば、我が胤<sup>たね</sup>を受けた子は、より強くなるだろうな」

左右で色の違う瞳が、王の描く未来の展望に明るさを増す。

ゆくゆくは己の子らによる精強な軍を作り上げ、世界を席卷する。

——かつての彼らのように。

——我が母たちのように。

——圧倒的強者として。

エルフ王は、己が治めるべき地が火に焼かれ、荒廃の一途をたどることなど眼中になかった。助けを乞う民の声や嬰兒らの悲鳴をすべて無視し、逃げ惑うエルフも人間も目に入ったものはすべて殺すか犯し尽くした。

強さこそが彼のすべて。

弱き者には何の興味もない。

彼は、自分が産んだはずの子の国を目指す。

美しい夜の帳の下。

強さのみを渴望し、愛情などとは無縁の価値観しか持たない王は、己の欲するものを求め、スレイン法国・東部の森へ到達する。

一方で。

スレイン法国の北部——魔導国と隣接する国境地帯で、アルベドたちにも、急報を知らされた。

「——ルプスレギナが？　ンフィーレア・バレアレが？」

魔導国宰相にして守護者統括たるアルベドをしても、そのような事態は意外<sup>いそが</sup>の出来事であった。

至高の御方であるモモンガ——アインズ・ウール・ゴウンその人が「最重要」と目していたポーション生産職人が殺され、その警護をひそかに担っていた戦闘メイド、ルプスレギナ・ベータが瀕死の重傷を負うなど、予想だにしない窮状と言える。

現在、アルベドたち魔導国の使節団は、魔法で作られた〈要塞<sup>フォートレス</sup>〉に駐屯し、法国から魔導国への要求内容を飲むか否かの回答を待っている状況にあった。

その中でも「貴賓室」に値する最上級の部屋でしどけなくソファの上で休息を取っていたアルベド。魔導国宰相は、報せをもってあらわれた今回の副官——パンドラズ・アクターの言を、一瞬だが誤報か何かではと疑った。

しかし、カルネ領域にて行われた凶行は事実であり、ルプスレギナは治療を続け、ンフィーレアは蘇生さえまならないという、最悪の状況。

下手人はナザリックの諜報や警邏<sup>あみ</sup>の網をかいくぐった事実からし

て、間違いなく、この世界においては強者の位置にあると断定してよい。

だが、それほどの強者が、どこに隠れ潜んでいたのやら。帝国属国化の折に時を同じくして、凄腕の暗殺者集団イジヤニーヤも魔導国の幕下ぼくかに加えたが、彼らでさえも現地の住人の中では強い程度の部類でしかない。大陸中で暗躍していたズーラーノーンも、既にアインズ・ウール・ゴウンの掌中に握られている。いまだに情報乏しき大陸の極東か。それとも噂に聞く南方の浮遊城・エリユエンティウの手のものによる仕業か。あるいは法国か。

しかし、現在法国と魔導国の状態——戦争まで秒読み段階という状況で、先制攻撃を討ってくる可能性は低い。どうにかして交渉し、最悪、先の帝国に倣いなら「属国化」を提案してくるものと、誰もが信じて疑わなかった。いくら国民がアンデッド憎しといえども、どれほどの災禍と戦火が降りかかるかは瞭然りょうぜんたる事実であった。

彼我の国力差・軍事力の差は、火を見るよりも明らかだ。

それなのに、至高なるアインズ・ウール・ゴウン魔導王の温情ともいえる交換条件——要求を無視し、あと四日を待たずして奇襲攻撃をかますなど、アインズの火の瞳に油を注ぐような大愚である。法国による襲撃の線は薄いと、誰もが信じて疑わなかった。

いずれせよ、副官パンドラズ・アクターを通じて、アルベドは警戒態勢の強化をアインズから命じられた。『警戒を厳げんにせよ』と。守護者統括たる女悪魔は、一も二もなく従った。

「わかったわ、パンドラズ・アクター。周辺警戒レベルを準戦闘態勢レベに移行します」

「承知しました。それで、アルベド様の護衛の方は？」

「私の方は今の状態で大丈夫よ。部屋の周りは甲虫ロイヤルガードの近衛兵たちもいるし、何より私は、栄えあるナザリック地下大墳墓の守護者統括であることを忘れないで。

いざとなれば「真なる無ギンヌンガガツツ」と「この娘ルベド」もいるし、問題はないでしょう」

世界級アイテムを膝において彼女が撫でたのは、ナザリック最強の

「個」と称される、彼女の妹——その投影装置のひとつである立方体の鞆かばんであった。同じものがあと七つあるが、これを使用するのはまず「ない」と思われた。そもそも「真なる虚」自体の威力も規格外。何も憂うことなどありえなかった。

「それよりも、索敵範囲とその人員を増やしたいわ。アインズ様から借り受けたハンゾウや監視機能ゴーレムたちと共に、この要塞周辺の調査監視を徹底させなさい」

承服の声と共にパンドラズ・アクターは立ち上がった。彼女と同等の智者である彼にしても、アルベドの護衛として残される世界級アイテムと最強の「個」の存在は、侵入者を圧倒してあまりある。

つい癖のように最敬礼で四本指を額に当てる同僚の顔面は、相変わらず白い仮面に包まれていた。

人間たちの国では三個の穴で構成されただけの顔立ちという奇特性さを隠す目的もあるが、この仮面によって彼は頭部破壊などの致死性ダメージから守られている。敵国に隣接した上での警戒態勢下では、はずすことは愚かと言える。

アルベドの貴賓室を辞したパンドラズ・アクターを見送り、アルベドは一人思案にふける。

「——何故、ルプスレギナを重傷どまりにしたのか」

言つては何だが、今回の相手の強さから察するに、戦闘メイト程度の戦力など瞬殺することも可能だったろう。彼女と共に姿を隠して護衛任務を果たしていたモンスター十数体が、悉く殺され消滅しているのだ。それが何故、わざわざルプスレギナだけ「死ねない傷」をおわせる必要がある？

ルプスレギナ個人への怨恨えんこんでないとすれば、魔導国の主に対しての挑発行為にしかならないだろう。

——否。

それこそが狙いで、わざわざ解呪不能の呪いを施したのか？

魔導王の部下ごとき、いつでも襲って殺せるといふ自信と、挑戦の意図を感じ取る。

さらにもうひとつ。

「——何故、このタイミングで。ンファイア・バレアレが襲撃され、蘇生不能にさせられるのか」

アルベドの頭脳をもつてもわからなかった。

より正確には、判断がつきがたい、というべきか。

彼の特異性を列挙するならば、

- 1、魔導国のポーション生産事業に携わること。
- 2、カルネ領域守護者、エンリ・バレアレの夫であること。
- 3、『ありとあらゆるマジックアイテムを使用可能』という異能持ちタレントであること。

どの項目にしても襲撃されるのにたる十分な理由だ。1と2に関しては、魔導国の国家事業にかかわる問題であるため、可能性は大と言える。とくに1に関しては、冒険者たちへのアイテム給付率が低下する事態に直結しかねない。だが、3に関しては、殺すよりも生かしておく必要がある。ちようど、人間だったころのクレマンティーヌが、ンファイアに「叡者の額冠」を使わせるべく拉致し、無理やりマジックアイテムを使用する生贄の人柱としたときのように。

「いったい、何が起きてるのかしら?」

「アンタでもわからないの? 魔導国の宰相様ともあろうものが?」

侮蔑ぶべつに侮辱ぶじよくの言を重ねる声は、突如として現れた。

アルベドは即座に戦闘態勢を構築——ドレス姿から鎧姿に換装し、バルディッシュ戦斧せんを抜き払う。異変を察した貴賓室警護のロイヤルガードたちが雪崩なだれ込もうとするが、それも、黒白の少女の一刀で細切れに裁断されてしまう顛末てんまつをたどった。

アルベドの視線の先には、いつの間にか開いた（内部から施錠されていたはずの）貴賓室の窓に腰掛ける、黒白の髪の少女。ロイヤルガードたちを瞬殺し消滅せしめた戦鎌ウオーサイズは、戦士であるアルベドの目から見ても超級の一品と判じることができた。

少女の髪に隠れた耳は細長く、左右の色違いの瞳からもれる感情からしても、ただの人間種——半森妖精ハーフエルフでないことは見て取れる。

「貴様、何者?」

状況としては、ンファイレア殺害の状況と酷似していた。

が、ナザリツクが誇る守護者統括は冷静に、月あかりのさす窓から飛び込んできた少女を油断なく睥睨へいげい。

少女は愉快気に嗤わらいながら、ただ、「ここ」へ来た用件だけを告げる。

「どこぞにいるか知らない、無敵の強さを誇る『魔導王サマとやら』と戦うには、部下を一匹一匹つぶして、『挑発する』のが手っ取り早くていいんじゃないかなあ、と思つて？」

「貴様、まさか！」

アルベドは確信する。

ルプスレギナを瀕死に追い込み、ンファイレアを殺害した下手人——それが目の前にいる事実を覚さとる。

しかし、解げせない。

この要塞周辺は、当然のことながら彼女の最強チームを含む魔導国の使節団で埋め尽くされている。にもかかわらず、それらを一切無視して現れた侵入者の存在というのが、はなはだ解げせないのだ。暗殺者アサシンや盗賊ローグに反応する警戒網や、同職種のモンスターらに気づかれることなく、アルベドの——魔導国宰相の——ナザリツク地下大墳墓の守護者統括がいる貴賓室に到達するなど、どのようなカラクリやイカサマなのか理解できない。さらに、緊急用として持たされている〈伝言〉メッセージ用の手鏡も機能しないというのは奇妙すぎた。まるで、少女の存在によって妨害ジャミングされているかのようなわけではないか。

否。

原因究明そよりも優先すべきは、対応と対処だ。

少女の武装は十字槍にも似た戦ウォー鎌サイスが一振り。

身に帯びる衣服はどのような魔法効果があるのかは知らぬが、用心に越したことはな

「っ!？」

いきなり斬りかかれた。

人間であれば容易に頭頂から股下まで割断していた一撃である。

アルベドはLv. 100戦士の反射速度で躲かわし逃のがれることができ

だが、あまりの事態の変転ぶりに言葉を失う。

——強い。

ナザリツク外の存在で、そのような感慨を覚える自分が、とにかく腹立たしい。

「へえ。意外と強いね、アンタ？」

黒白の少女はおもしろいオモチャを見つけた子供のようにケタケタと笑う。

その侮玩する態度が癩に障った。「なにがおかしい」と叫びたい衝動を抑えて、アルベドは反撃を試みる。

戦斧による一閃。

あやまたず少女の首を切断する軌跡を描く斧刃を、少女は戦鎌で受け止めない。

「ば、ばかな」

アルベドが瞠目するのも無理はない。

一撃必殺の威力を込めた戦斧は、凶悪に嗤う少女の可憐な左手——“人差し指一本”で止められている。

ありえない。彼女が同じ強さ——L.V. 100であると仮定しても、その戦闘能力・肉体強度は、アルベドの理解と常識を超えていた。いや、アルベドは全力ではない。悪魔状態に変身した本気の状態であれば、あるいは。

(いや、もつと確実な手段を！)

守護者統括は迷わなかった。

アルベドは切り札を使わざるを得ないと確信。彼女に与えられた世界級アイテム“真なる無”。それをを用いて、完膚なきまでに相手を破壊破碎する以外の処方をも、女悪魔は見いだせなかった。

しかし、それも一手分、遅い。

「へえ？ アンタのそれ凄そうだね——だったら」

番外席次は己の衣服を早着替えの効果で別のものとする。アルベドは愕然と眼を見開いた。

それは、竜の黄金の刺繍が眩しく輝く、白銀の旗袍——今回の魔導国の侵攻理由となったアイテムの概要情報と酷似していた。



使うものには一定の制限・条件があるアイテムであるが、今の彼女——番外席次には、とある青年から奪った『ありとあらゆるマジックアイテムを使用可能』という『異能』があった。

「『傾城傾国』——発動」

——ゾワリ。

その言葉を聞いた瞬間、アルベドの意識が真つ白に漂白されかける。

「うっ、あっ！」

白く、白く、塗りつぶされていく、女悪魔の心。

アインズから賜った、精神支配をも完全無効化する高級装備も用をなさない。これは精神操作——この至近距離でそう気づけたのは、彼女には同格と呼べるアイテムが手中にあったから。

アルベドは即座に気づく。これが、今回の戦争の主因——シャルティアを支配しかけた力——アインズに悲嘆と激憤を与え、何者かに精神支配されかけた守護者を御方自らの手で殺す事態に追い込んだ、最強の洗脳力——

「む、だ、よ、ー！」

守護者統括は精神が白濁しつつある中で、抵抗を続けた。

アインズの言う通り、世界級アイテム保有者は世界級アイテムの効果を受け付けないという話は真であった。——そのはずだった。

「私は、ナザリック、地下、大墳墓、守護者、統括、アルベド！」

誇り高く一步を踏みしめ、『真なる虚』を逆に発動し返そうと構えるアルベド。

そんな彼女の様子を見ても、番外席次は飄然としていた。

「あく、意外と粘るね。じゃあ、ちよつと揺さぶってみようか」

意味不明な言葉を告げる敵の少女に対し、アルベドは無力だった。

「『あなたの主人は、だあれ？』」

「それは——アインズ・ウール・ゴウン、魔導、王！」

漂白されかける意識の中で、懸命に抵抗するアルベド。

魂を振り絞るような叫びであったが、黒白の少女は「嘘ばかり」と見透かしたような白黒の瞳で女悪魔の宣言を嗤笑する。

『あなたが仕えるべき、本当の主は、いったい誰？』

「……………それ　は　？」

意識が遠のくを感じる。

彼女の質疑に、アルベドは応えきれない。

それを見て取った黒白の少女——番外席次は、禁断の言葉を口にす  
る。

『あなたが——『愛している』のは、いったい、だあれ？』

まるで祝福の聖歌せいのように、弔鐘ちようしやうの音色のように、女悪魔の脳内  
で反響し残響し続ける、精神操作の波状攻撃。

アルベドは両膝を屈し虚空を眺めた。震える瞳は小刻みに揺れ、緋ほ  
く爛たやかな指先は黒髪を梳すいて、ついで乱暴にかきむしられる。守護  
者たる自分を汚し犯そうとする力、それに抵抗しようという気概が、  
一挙に一瞬に遠のいた。

『……………そう。かわいそうに、あなた自身、本当の主に仕えられなかつ  
たのね？』

憐憫なのか嘲笑なのか慰撫なのか、それすらも判然としない、甘く  
蠱惑的な少女の音色ねいろ。

だが、その言葉は心地よくアルベドの脳内を揺さぶり続け、彼女の  
あるべき姿——思考——思想——欲望を昇華、増幅させる。

『さあ、教えて？　あなたが、本当に仕えるべきは？　心の底から本  
当に、愛あしているのは？』

『誰だ』という精神操作の問答に、アルベドの意識は、完全に奪略され  
た。

自分の手中にあるアイテム——己の創造主からの賜りものさえも、  
もはや、アルベドにとっては害悪——『ゴミ』でしかない。



「失礼、アルベド様！」

ノックもなにもない礼儀に欠けた突撃であったが、確かにそこは戦場と化していた。

より厳密には、戦場の跡であった。

破碎された屋根。転がる調度品。鎧姿で直立する、ナザリック地下大墳墓の守護者統括。

いったい何があったのか訊ねる直前、背後につきしたがってきたハンゾウたちモンスターの群れが斬殺もとい惨殺された。

パンドラス・アクターも攻撃を加えられていたが、幸い、身に付けていた純白の仮面によって致死には至らなかった。

たたらを踏んで室内に飛び込む上位・二重の影を、黒白の少女は好奇の視線で追うのみ。

「くっ。一体、何も——の？」

少女へ対する誰何の声は、黄色い軍服の背後から刺し入れられた戦斧の刃で遮られた。アインズから、否、モモンガからいただいた軍服が、中央から赤黒く染まり血を滴らせる。

黒い口の穴から吐血するパンドラス・アクターは、自分を背後から刺し貫くアルベドの様子を見て愕然となる。

「なっ、にを——アルベ——ド」

完全装備のアルベドの表情は、兜のうちに隠れ窺い知れない。

だが、その声音にこもる愛情と憎悪は、まぎれもなく本物であった。最強チームの副官として、かの方より貸し与えていただいたナザリックの同胞を、守護者統括は快い心地で斧の一刀を浴びせまくる。

「ごめんなさいね、パンドラス・アクター。私は、あの御方のために——」

——オマエを殺す。

「させはしない！」

パンドラス・アクターは、アルベドの刃から強引に逃れた。

彼の、二重の影としての変身能力が発揮されて、彼の輪郭と全容が、揺らぐ。

しかし、ナザリック最高の智者として名高い彼でさえ、この状況は

混沌の極みにあった。

どう対処すればよいか、どの姿となって迎撃すべきか、数瞬以上も迷うパンドラズ・アクター。彼の背後から戦鎌を振るって舌なめずりする黒白の少女が狙い、前方のアルベドが漆黒の戦斧を振るって猛追してくる――

十五分も続いた戦闘の後。

パンドラズ・アクターの抵抗もむなしく、アルベドと番外席次によって、完全に殺害された。

そして、

「それじゃあ―― 〴〵いただく〴〵ね」

殺されたパンドラズ・アクターの心臓もまた、番外席次の胃の腑へとおさめられた。腹八分目にも届かないという様子で下腹部をおさえる少女は、ひとつ頷いた。

「うん。それなりにおいしかったわ。んじゃあ、行こうか」

その様子を黙って見過ごしていたアルベドは、番外席次に促されるまま、彼女と共に要塞を後にした。

## 反逆者

／ T r a i t o r

事態は急転直下の様相を呈する。

かすかに震える声か、短い命令を下す。

「もう一度、言ってくれないか……デミウルゴス」

ナザリック地下大墳墓の第十階層——“玉座の間”にて。

普段であれば第九階層の執務室に守護者らシモベたちを必要ないけ招集して合議を開くのが通例化していたが、今回ばかりはそうはいかない。

水晶の玉座——世界級アイテム“諸王の玉座”に座するナザリック地下大墳墓の最高支配者は、第五階層“氷河”よりも寒々しい極低温の声を発する。

「……アルベドが、反旗を、翻した、だど？」

うなだれるように跪拝する第七階層守護者は、簡潔に述べる。

「事実でございます」

アインズは苦虫を万単位で噛み潰しているような歯ぎしりをあげた。

デミウルゴスは事実確認を進める。進めないわけにはいかなかった。

「今、御身の玉座にて開かれているナザリックのマスターソース、そこらをご覧いただけばわかる通り、守護者統括たるアルベドは、完全に、我等ナザリックと、敵対していることを意味しております。——加えて」

「パンドラス・アクターの、……死、か」

これも、玉座のマスターソースで確認できた事実。

真っ赤に染まったアルベドの名と、空白となったパンドラズ・アクターの項目。

「我々は、ナザリック最高智者たる三人のうち、二人を、失ったか——」  
アインズはこめかみを骨の指で押さえた。

事態の深刻化の加速度に、アインズは存在しない脳が痛み出すのを錯覚する。

夜が明けるの待たずしてもたらされた急報——魔導国使節団に属するシモベたち——レベルとしては80にも達する15体や、アインズの産み出した永続性を持つアンデッドは、確かに、見た。

貴賓室を破壊するよう夜空に飛び出し、徹底抗戦を敢行するパンドラズ・アクターを嗤<sup>わら</sup>って襲う守護者統括・アルベド。

そして彼女と、謎の黒白の少女によつて完全に挟<sup>きょうげき</sup>撃され、ものの見事に惨殺される姿を。使節団に属する者らはパンドラズ・アクターの助力に加わろうとする端に瞬殺され、彼の副官権限として加勢を禁じられ、その地域からの一時撤退を命じられた。そうして迎えたのは、最悪の結末。いくら宝物殿の領域守護者——至高の四十一人に化けられるという特別かつ強大な権能を与えられたナザリックの三智者の一人でも、戦巧者二人を相手にしては分が悪すぎたのである。

パンドラズ・アクターは謎の少女に心臓を挽<sup>も</sup>ぎ取られる形で絶命し、彼を殺害した守護者統括と謎の少女は、唐突に行方をくらませた。これが、アルベドの離反のすべてである。

アインズは直下の問題から目をそらすように、ひとつの心配を口にした。

「ナーベの、いや、ナーベラル・ガンマの様子は？」

エ・ランテルでの『法の執行者』冒険者チーム『漆黒』、その片割れの女魔法使いとして活動していた二重<sup>ドッペル・ゲンガー</sup>の影の戦闘メイド。

これに応えたのは、戦闘メイドの長姉たるユリ・アルファであった。「はっ。パンドラズ・アクター様の訃報<sup>ふほう</sup>に接し、甚大なるショックを受けたようで……シモベとしては不適合ではありませんが、第九階層の自室にて休養をとらざるをえず……誠に申し訳ございません！」

優しい姉たるユリは、訃報を伝えられた妹が泣き崩れた時の姿を想

起せずにはいられない。

ナーベは同胞にして上位種たる「パンドラズ・アクターの死」を知らされた瞬間、一時失心するほどの不調に見舞われた。

妹の不調をシモベにあるまじき失態であると叱咤するがごときユリの語調であったが、アインズはゆっくりと頭かぶりを振ってナーベラルの体調を気遣う。

「ナーベラルは、モモンに化けたパンドラズ・アクター、彼と共に任務に精励して長い——ショックを受けるのも当然だろう。責めるな」

命じられたと同時に妹の失調を許されたユリは、感謝の念と共に頭をさげた。

どの道、ナザリック外でのシモベたちの活動は危険な状況にあるため、呼び戻す時間が省けたともいえるだろう。

エ・ランテルは、アインズが造り出したアンデッドモンスターの行政官や警邏兵で満たされている。一時的に冒険者チーム“漆黒”がいなくなろうと、問題などおきようがないレベルで、治安維持は継続している。属国のバルス帝国や諸領域についても、さしたる問題はない。

無論、自分が造り出した存在パンドラズ・アクターたる生きる黒歴史を喪った事実、アインズにとっても多少の不快感と喪失感を味あわせた。自分でも意外なことに、あれがこの世界から消え失せた事実にショックと呼んでよいものを感じるとは。しかも、ンファイレアの蘇生不能と同様に、パンドラズ・アクターの復活も不可能である事実が、事件の関連性・連鎖性を完全に明示している。アルベドと共にアインズのLv. 100NPCを殺しおさせた“戦ウォー鎌サイズを振るう黒白の少女”——ルプスレギナを重傷に追い込み、ンファイレアを殺した容疑者の可能性はどの程度のものか——たった一夜も明けぬうちに、ナザリック内外は混沌化を余儀なくされている。

「わかっていることは、この黒白の少女が、法国の漆黒聖典に属する「番外席次」である可能性が高いということだ」

番外席次の情報を持ちえなかった守護者らは困惑に首を傾げたが、アインズは一人のシモベの名を呼ぶ。



「クレマンティーヌ」

「ははっ！」

震える声で鋭い返礼を発し、白いマントを羽織った聖女風に装った女が前に進み出た。

かつては愚かにも冒険者モモンに惨敗し死亡したズーラーノーンの幹部の一人だが、今ではアンデッド化を果たした上、アインズの支配下に属するシモベと化している。

アインズはそのつもりはなかったが、我知らず詰問——尋問するがごとき瞳の圧でクレマンティーヌを玉座から見下ろす。

「貴様が言っていた「番外席次」とやらの身体的特徴——黒白の髪、白黒の瞳、戦鎌の武装——間違いないか？」

「わ、つ私が知る限り、ま、間違いないかと」

「ちツ。だとすると、犯人は法国で確定か？」

「あ、いえ、あの」

「うん、どうした？ 何か意見でもあるのか？ 遠慮せずに申せ、我がシモベ・クレマンティーヌ」

我がシモベという単語に赤面してしまう癖がついていた元漆黒聖典第九席次たる女は、一同の前で私見を述べてみせた。

「わ、私を知る限り、アンチクショ、いえ番外席次の女は、神官長たちです。英雄級の力を持つていた当時の私をすら扱い難い「豺狼」です。英雄級の力を持つていた当時の私をはるかに超える戦闘力の持ち主であり、世界に十指とない異能をもっている、などと言われておりました」

「ふむ。して。その異能とやらの詳細は？」

「も、申し訳、ございません——同じ漆黒聖典でも、奴の情報については多く持ちえず——そもそも奴が外で戦うことすら稀であり、共に活動したこともなく、それほど多くの情報は有しておりません……無能なる我が身を、御赦してください！」

玉座の間の床に額づくクレマンティーヌは守護者らの眼光と気配——ある種の嫉妬心の炎に怯えきっていたが、

「いや。容疑者の正体が知れた事実は大きい。お手柄だ、クレマンティーヌ」

アインズのその一言で絶頂物の笑みを浮かべ引き下がった。

「それにしても、ふん「番外席次」——『絶死絶命』か」

たまらなく不愉快な状況の連続だが、しかし、今は最も重要な問題に目を向けねばならない。

「かろうじて容疑者は知れたが、一番の問題は——アルベドが、何者かの支配下に落ちた一事に集約するだろう」

「と、申しますと?」

「忘れたわけではない——法国にあると判明した、シャルティアを洗脳せしアイテムの存在を」

デミウルゴスは微かに首を振った。

「馬鹿な。一連の事態は、法国による先制攻勢の一環である?」

「ありえない、とも言いきれん状況ではあるな? 容疑者が漆黒聖典の一人である以上は」

「しかし。だとしても、アルベドに与えられていた世界級アイテムによる防護は?」

「何の意味もなさなかったのか……それとも、世界級アイテムを超える、何らかの法則か……あるいは何らかの理由で、アルベドが自己の意思で『真なる虚』を放棄し、相手の支配下に下ったのか」

その『真なる虚』は、魔導国使節団の手の者によって回収済みだ。アルベドに与えられていた世界級アイテムであるが、とりあえず宝物殿に——領域守護者を失った宝物殿に安置するほかにない。

あらゆる可能性を検討するアインズであったが、現時点では十分かつ確実な答えは得られない。

「失礼ながら、アインズ様」

「どうした、シャルティア?」

「はい。アルベドが敵の支配下に下ったうえは、情け容赦の必要などございせん。期日を待たず法国を滅し、パンドラズ・アクターを葬った謎の存在諸共ご処分なさり、しかる後に復活させてやるのが一番かと存じます」

実際に、洗脳状態から解くべく殺された守護者の提言は正鵠を射ていた。

しかし、

「それは難しい、かもしれん」

「何故でありんすか？ 敵が法国の者であろうと何だろうと、御身に衝突いた以上は生かしておく価値はございんせんが？」

シャルティアの疑問は守護者らが共有するものであった。

ここで、アインズは守護者らには内密にしていた事実を告げる。

「……アルベドには、最強チームの一員、いいや、その一角を担うべく、  
『ルベド』の指揮権を、与えてしまっていた」

「な！」

「ソレハ！」

「あの、えと最強の？」

「第八階層に、いる？」

「何故にそのような！」

シモベたちは驚愕と疑問の吐息をつかすにはいられない。

ナザリック地下大墳墓において最強を誇る第八階層『荒野』——  
そこを守護すべきアルベドの妹までもが、敵の手中に落ちた虞おそれがある。

いや、あるどころではない。

アルベドが完全に敵の支配に下った以上、それは可能性の話ではなく確定事項の次元に属するだろう。実際、法国との国境地に残された使節団に確認した——アルベドが携行していた「投影装置」八つも、貴賓室から完全に消え失せていたという事実。

「これは、完全に私の判断ミスだ」

アルベドに乞われるまま、至高の四十一人を——仲間を搜索する名目で『最強チーム』……ドリームチームなどを作り出しておきながら、この醜態ぎまだ。

仲間を見つけるどころか、仲間たちが造り出したシモベたちに、重大な危難を負わせるとは。

玉座に背を預け、がっくりとうなだれるアインズは思わず一声をこぼす。

「……………支配者失格だ、私は」

「『そのようなことは！』」

「けっしてありえんす！」

「そうですよー！」

「あ、ああ、ありえません！」

「御身以外二、我等ノ支配者タル存在ナド！」

デミウルゴスとセバスが同時に否定の声をあげ、シャルティア、アウラ、マールレ、コキュートスがそれぞれの言葉で追隨する。

彼らの主張を手を振って制するアインズは、頭を抱え沈黙し、とにかく現状でなしえることを決裁する。

「法国への侵攻準備は継続。魔導国使節団には、ドツベル・ゲンガーの影の一体を召喚し、アルベドの代行としよう。これで連中の目くらいは誤魔化せるだろう」

はずだ。

アルベドが法国の手に落ちている可能性は高く、ナザリックの情報  
が筒抜けになっている可能性があることも恐ろしいが、だとしてもすべてが可能性の話。

法国側から何らかのアクション——アルベドを人質のごとく使用して我が身の安全を図る事態になれば、さてどうすべきか、本気で迷うアインズ。

そんな魔導王のもとに、ひとつの<sup>メッセージ</sup>〈伝言〉が届いた。魔導国使節団に派遣していたエルダーリッチからの連絡である。

「どうした？ アルベドの行方でもつきとめ……………は？」

守護者らが沈黙と共に見上げる魔導王は、信じられない報を受けた。

「スレイン法国が、東の都市から襲撃を受けている？ 我が軍ではない、何者かに？」

ほぼ同時刻。

「どういうおつもりですか?!」

第一席次は、唐突に聖域を空にし、一人で“下準備”に出ている番外席次が連れてきた人物を見て驚愕するしかなかった。純白のドレスに黒髪と黒い翼、頭には角を持つ絶世の美女。

「この方は魔導国の、宰相閣下たる方ですよ?! それをまさか洗脳・支配下において帰還するなど、正気の沙汰ですが!?!」

彼の視線の先には黒髪の女悪魔……両手には八個の立方体で構築された鞆を提げた、魔導国の宰相位にある人物がいた。

番外席次はわずらわしげに手を振ってみせる。

「つるさいわねー、いいでしょー、べつにー。いろいろと使えそうだったからさー」

勝手に出撃した彼女は、持ち出していた神の遺産“傾城傾国”を乱暴に放って神の柵へ戻す。柵の魔法できちんと折りたたまれたチャイナドレスの白銀の偉容を見た漆黒聖典隊長は、絶句した。

「……………まさか、あなたが、アレを使つて?」

ありえないと第一席次は思った。

あれの使用条件を、彼は知悉している。

だが、番外席次たる彼女には扱えないはずのもの。

彼女は平然と説明してのけた。

「前から目をつけてた異能持ち——『ありとあらゆるマジックアイテムを使用可能』のやつを奪ってきたからね」

魔導国の防衛体制などによって、以前から有名だった異能持ちたる存在が、魔導国のカルネ領域に居を移していたことは、風化聖典の調べでわかっていた。

楽勝だったわと嗤う番外席次に対し、第一席次は叱責の声をあげるしかない。

「馬鹿な。何を勝手な。——場合によっては“利用対象”に指定されていたとはいえ、上からの命令もなく、そのような暴挙に撃つて出る

など——」

今がどういう状況下であるのか、彼女は理解しているのか、本気で悩ましく思える。強大な敵国に侵略されるか否かの瀬戸際で、国内では逃亡すべきか自決すべきか——否、神の法によって自殺することは許されぬ法国民は、どうしようもない思いをかかえ、残りの時日<sup>じじつ</sup>を待っている。

アンデツドの国の慈悲を得て、降伏するのか否か。

あるいは神の法と加護を信じ、徹底抗戦を試みるか否か。

だというのに。

彼女は、番外席次は、それらすべてを台無しにしようとしている。

「……宰相閣下を人質に、魔導国の侵攻を止めようとも？」

「はあ？ それこそ、まさかでしょ？」

番外席次は戦鎌を肩に担いで明言する。

「これで、魔導国は、魔導王の野郎は、この私と戦わざるを得なくなつた。自分のとこの部下を拉致<sup>らち</sup>られたりブチ殺されて、黙っていられる王様なんて、歴史上一人もないしね？ それにさー、このアルベドとかいう女悪魔ちゃん、こいつの精神支配する時に見た情報がさ、んもー爆笑モノで」

「あなたは、いったい、何を考えている!!!」

人類の守護者を自負する男は吼えた。

二十代の見た目だが、それよりもはるかに若い少年の本気の怒声に對し、少女は愚物を見るような目で答えた。

「勿論<sup>もちろん</sup>、あんた知ってるでしょ？」

幾度となく聞かせてやったことを、彼女は繰り返して言った。

「私より強い男<sup>ヤツ</sup>を探すために」

そして、

「私よりもっと強い「子」を得るために」

そうして愛おし<sup>いと</sup>そうに下腹部を撫でる少女の様子に。第一席次は臍<sup>へそ</sup>を噛んだ。

彼女の主義主張は一貫して、これだ。これ以外にありえないのだ。  
彼女の内<sup>なか</sup>には。

神官長らが期待している仲間意識すら欠如している。復讐心とやらとも、ある意味において無縁だ。母親の恨みを晴らしてやろうだのなんだの、何を言っているのか本気で理解できていない。

国家も国民も関係ない。

信仰も思想も意味がない。

——「愛」すらも、持ち合わせていない。

ましてや、人の命など。

戦いつくし殺しつつくし、そうして喰らい続ける彼女にとっては、人の手に摘み取られる野花のごとく、掴みつぶして踏みつけにして当然の対象。

そのようにして育った。

そのようにして育てられた。

第一席次の彼の前に、当時を知るものらが目の前にいれば、間違いなく彼らを許さなかったことだろう。

ただ、ただ強さだけを追い求め、能力を喰らわせ続けて、その強さは、もはや、大陸屈指どころの話ではない。

大陸一。

そういつても過言にはならない——そう、第一席次は確信している。『絶死絶命』という号にふさわしいと、確信を込めて、思う。破滅の竜王だろうと、白金の竜王だろうと、……魔導王でさえ、彼女には敵しえないはず。

何しろ、彼女は、戦力として露見した瞬間、アーグラランドの竜王らと結んでいる「世界の盟約」が破られる。「世界の盟約」にとって、確実に反するモノ。ゆえに徹底して隠され、そのための能力まで取り込まされた。

六大神の血を覚醒させた神人である己をも超越しつつくした者——

それが彼女——漆黒聖典「番外席次」だ。

人外じみた力。

あまりにも特異な異能<sup>タレント</sup>。

半森妖精ゆえに老いぬ女の身体。

自分が神の血を覚醒させ、イキっていた時から変わらぬ麗容<sup>れいよう</sup>——

(どうして、この方は……この人が……)

そう疑念の檻とらわに囚とらわれる第一席次に、聖典隊員の一人たる女性・第四席次「神聖呪歌」からの〈伝言メッセージ〉が届く。

「どうした？ こちらはそれどころじゃ——何？ 法国の東の都が襲われている？ まさか、魔導国の侵攻——では、ない……？」

最悪の事態を想定していた第一席次であったが、「神聖呪歌」の報せる内容は、彼の想像を上回っていた。

「法国東部を襲っているのは、——あのエルフ王だと?!」

番外席次とアルベドは、興味なさげに聖域の窓外で滅びゆく国——  
曙光の空を眺めていた。



その襲撃は唐突すぎた。

軍勢も何も引き連れていない、たった一人の男。

特徴的な長い耳。エルフの装束。朝焼けの日差しを受けた金髪が、黄金のように輝きを放っていた。

魔導国との戦争が勃発しようかというこの時期、法国の国境を鎮護する各都市は、厳戒態勢下にあった。

当然、東の都市——東都の門を護る衛兵たちも、噂に聞く魔導国の侵攻の噂に戦々恐々としていたわけだが、そこへ現れた金髪のエルフが、たった一人。

無論、この都市に国境外からの来客があるなど、首脳部からは聞きおよんでいない兵たちは首を傾げた。

「一体何者だ？」

「魔導国の、使者か？」

「さあ——とにかく警戒態勢を維持しろ」

聖騎士兼守衛長の男——この門を護る責任者が命じ、歩哨上の守備兵たちも、早朝の珍客に矢と視線ををむける。

「そこでとまれ！ ここより先はスレイン法国の都！ 許可なき者は」

門衛の班長の一人が叫んだのと同時に、その首は胴体と泣き別れた。

直立した姿勢のまま、赤い鮮血を放つ噴水と化した、同輩の、死体。足元に転がる首は、驚愕の表情に硬直する死相に彩られ、仲間たち

の悲鳴と混乱を誘う。

彼を正確に射殺した敵は、つまらなさそうに聖樹の長弓を下ろす。

守衛長が自己の生存本能に従うまま、命じた。

「撃て!!」

攻撃を加えたエルフに対して、衛兵たちは一斉に矢を放つが、すべてが遅きに失した。

エルフ王は瞬時に動く。降りかかる矢を十数本「素手で掴み」、それらを「投げ返した」。

たった一秒の凶行。

それだけで、門を護る数人の額や喉が矢に貫かれた。

尋常ならざる戦闘力である。個人レベルで披露してみせる芸当ではない。だが、衛兵たちは矢を射続け、剣を構え盾を掴んだ。

守衛長がへ神の御旗の下にアンダー・デイヴァイン・フラグという魔法で、部下たちの恐怖を打ち払い、折れかけた精神を奮い立たせる。他にも魔法兵や重装甲兵などの精鋭が投じられるが、たった一人のエルフの前に、すべてが蹂躪される。

そうして、エルフの様子を——その容貌を激闘の最中で確認した守衛長が、完全に確認した。

金髪の下にある美貌の中で異彩を放つ、『色違いの瞳』の持ち主は、法国を守る彼の知りうる限り、一人しかいない。

「あれは、エルフ王だ!」

法国が長年にわたり戦い続けた国の主。

戦争では圧倒的有利で事を進めた法国であったが、エルフ王都侵略も間近というところで、火滅聖典が全滅。各都市に駐在していた法国軍も、すべてが消息を絶った。

どういった事態でエルフの国が滅びたのか露とも知らぬ守衛長は、エルフ王と一合を交わすべく突貫し、そして呆気なく王の握る剣で四肢と首を裂かれは勿ねられ、戮殺りくさつされる。

門は数刻とかがらずに突破された。

悠々と門の隔壁を飛び越えるエルフの王、彼の圧倒的な能力<sup>ちから</sup>で。スレイン法国の東都は、エルフ王の侵入——侵犯——侵略を許すことになった。

「馬鹿な——そんな馬鹿なことが！」

報せを受けた法国の神都に首脳部は、混乱の上に混乱を極めかけていた。ありえざることだと、神官長たち法国の最高指導者たちは頭を振った。

エルフ王の単独行動による、エイヴァーシャー大森林地帯の焼失と荒廃。

最後のダメ押しに投じたはずの火滅聖典の働きで、戦争は法国の勝利で終わる、はずだった。

しかし、そうはならなかった。

エルフの国は、確かに滅んだ。

しかし、それは法国軍でも聖典の手柄でもなく、まったく未知の何者かの蹂躪を受けてのこと。

——まさか、エルフの王が自ら、自分で自分の国を滅ぼしたなどとは思えない神官長たちは、突然のエルフ王の東都襲撃を受け入れ切れずにいた。

「もしや。魔導国は、エルフ王と結託していたのか？」

「馬鹿な、そんな情報があれば、風花聖典が搦<sup>な</sup>んでいるはず！」

「もう、どうすればいいというの！」

誰もが絶望し項垂<sup>うなだ</sup>れて当然の状況。

だが、それでも、自分たちが何とかしなくては、法国の民が蹂躪され、国が滅ぶのみ。

そう理解していても、状況はどうしようもなく切迫していた。緊迫の度合いを深めすぎていた。

司法・立法・行政の三機関長が悲嘆にくれ、軍事の最高責任者たる大元帥すら、事の趨勢すうせいを信じられず呆然としている。強壯無比を誇る魔導国、伝説に語られるアンデッドばかりで構築された軍との戦争戦略など、まともにも立てられるはずがない——そこへ東都襲撃の報だ。緊張の糸が切れたように脱力するものもいる始末——

そんな中で、最高神官長の声が、荒野に浸みる清水のごとく、混乱する全員の心をとらえた。

「鎮まれ、皆の者」

六柱の神官長と三機関長、研究機関長に大元帥が彼を見やる。

「我々は神の信徒。我々には六大神の加護がついている——けつして、諦めてはならぬ」

法国の最高執行機関を構成する十二人は、スレイン法国の御旗下、1500万にも及ぶ国民の代表たる彼らは、部屋の奥に安置された六体の像に頭を下げた。

自らの諦念や絶望を恥じるように、深々と。

「レイモン・ザーク・ローランサン」

「はっ」

最高神官長の呼び声に、土の神官長の鋭声えいせいが響いた。

彼は即座に、作戦案とも呼べぬ打開策を口にする。

「急ぎ、漆黒聖典の現構成員を東都に送ります」

魔導国の侵入に備えて、北方の都に送り込まれていた戦闘要員たち——絶対聖域の守護者たる番外席次を除く、ほぼ全員が、投じられることになる。

「それで、どうにかなりうるか?」

法国の最高位に座す最高神官長の問いに、レイモンは顎を引く。

「——なしてもらわねばなりませんまい」

元漆黒聖典第三席次として、十五年も戦い抜いた護国の英雄——土の神官長は、腹を括くくったように笑みを浮かべた。

「レイモンよ。いざとなれば、我も戦場に赴おもむこうぞ」

元陽光聖典に属していた聖戦士——温厚そうな老人にしか見えぬ風の神官長ドミニクからの進言であった。信仰系魔法の使い手とし

て一、二を争う実力を備えた光の神官長イヴォンも、陰険そうな見た目とは裏腹に、力を貸そうと領いてみせる。火の神官長ベレニス——水の神官長ジネデーヌ老——闇の神官長マクシミリアンもまた、それぞれの思いでレイモンを見つめる。

メンバーの中では若輩に位置する四十代のレイモンは、しかし、それらありがたい申し出を固辞する。

「神官長まで出兵する事態ともなれば、それこそ、この国が滅ぶときと相なりましょう」

それに何より、あの魔導国との交渉状況も、未だに難航したままである。

北方の国境地帯に要塞を構えた使節団は、四日後の回答期日まで居座ったままとせらる。

「とにかく今は、エルフ王の滅却滅殺をこそ急務とします。

そのために、第一、第二、第三、第四、第五、第六——第十、第十一、第十二席次を、東都防衛の任に就かせます。この九人で、エルフ王を撃退してもらおうしか、他に打つ手がない」

誰もが納得のいく布陣であり、現状において有効戦力と言える九人であった。

第七席次「占星千里」は自室に引きこもって久しく、吸血鬼騒動の際に死亡した第八の「巨盾万壁」、第九の「神領縛鎖」の穴は、まだ埋められていない。英雄の領域に到達しうる人類など、そうそうに埋め合わせが効く人材ではないのだ。この状況で魔導国が侵攻してきた時には、最悪、番外席次を動かして、アンデッドの魔軍を掃討してもらおう策で行く。

戦線を二つ築くことが確定する前に、東の守りを堅持する。

そんな彼の意図とは別に、神官長らの多くは別の方策——もとい思案が頭にあつた。

「私の、個人的な意見としてはあるが、『あの娘』に直接、仇討ちをさせたい——とも思わんではないが

「いえ」

神官長の一人の提言に対し、レイモンはそれを固く否決する。

「番外の、彼女の規格外の力は、魔導国および魔導王へと集約せねばなりません——復讐などの私情をさしはさむ余地は、今回にかぎつていえば、どこにもありはしない」

神官長のまとめ役を務める男は、どこまでも冷静かつ冷徹を極めた。

最高神官長の報を見やれば、老人は黙って頷いてくれる。

彼の裁可を受けて、レイモンは確信を込めて頷いた。

「彼ら九人であれば、かのエルフ王に対抗できる——そう信じましょう」

東都侵略を王が「単騎」でなしているという事実が不安材料であるが、人類最強の英雄たちであれば拮抗可能であるはず。

レイモンは心の底から神に祈った。

人類の守護者たる彼らが、法国を襲う輩を一掃してくれることを。

そして、願わくば。

魔導国との戦争で、彼らがアンデッドの王を、打ち破る未来を。

しかし、彼の真摯かつ真剣な神への祈りは通じない。

そもそもにおいて、彼と彼ら——法国の首脳部は、まだ知らない。番外席次が神官長らにも知らせぬうちに、魔導国および魔導王との戦争準備を進めていること。

その一行程として、魔導国宰相たる女悪魔を、<sup>アルペド</sup>「半ば」<sup>なか</sup>自身の支配下に組み込んでしまったこと。

彼らが頼みの綱としている番外席次——“絶死絶命”——彼女の存在こそが、法国を最終的に滅亡させる根本的な理由となることを、彼らは知らない。

まだ。

時を一夜ほど遡る。

ところ変わって、アーグランド評議国——天界山セレスティアにて。

「魔導国の、使者？」

謁見を申し出てきた者たちの身分——冒険者という地位をまったく隠そうともしない態度に興味を惹かれ、竜王は彼ら男女四人からなる冒険者チームを宮殿最奥に招き入れた。

評議国の最高支配者、その首座に位置しているといつてよい、最強の竜王——“白金の竜王”こと、ツアインドルクスⅡヴァイシオンは、己の宮殿をたずねるべく、はるばる魔導国から冒険に来たアダマントイト級冒険者チーム“フォーサイト”の任務内容を聞いた。

「我々は、魔導王陛下下の意思を御伝えすべく、ここに参上いたしました」

眼鏡をかけた戦士——“フォーサイト”の代表たる男は、魔導国冒険者に支給された無限の背負い袋——その中でも特別な封書をおさめた文箱を取り出し、掲げみせた。差し出されたそれを、ツアーは器用に尻尾の先で掴み受け取る。そして、中身を検めた。

「魔導王陛下は、アーグランド評議国の竜王の方々に、友好関係の樹立を望んでおります」

「ふむ。君らは魔導国の友好使節——その『先駆け』とでも考えるべきかな?」

「おそろくは」

ヘツケラン・ターマイトと名乗る戦士は微笑んだ。

アーグランド評議国は、魔導国と直接の繋がりが無い。

国土はリ・エステイーズ王国を挟んだ状態にあり、戦争とも政争とも、いまは無縁。

一冒険者に友好使節の真似事をさせるといふのはどうかという意見もあるが、そもそも魔導王が「新たな冒険者たち」に望むのが「未知を既知とすること」であり、未知なる国との「折衝や交渉」というのも、十分に任務の範囲に属するという話だ。それに何より、彼らフォーサイトが首からさげた冒険者の証はアダマンタイトのプレート——ただの銅級や銀級よりも強者に位置し、魔導王からの信任も篤いということの顕れ、これ以上ないほどの、特使としての証明であった。

さらに言うと、ツアー自身が冒険者チームとして旅をした時節も存在し、王国のアダマンタイト級冒険者『朱の雫』を自領内に招いている彼である。魔導国の唱える「新たな冒険者」自体への興味も当然あった。

ツアーは竜の首を頷かせる。

「なるほど。確かに、魔導王陛下からの心遣い、受諾した——評議国内で審議し、近いうちに結論を出そう。僕以外の竜王も、おそらくは友好関係を築くに値すると、そう判じるはず」

「ありがとうございます、ツアーインドルクスⅡヴァイシオン竜王陛下」  
ヘツケランを含む四人の冒険者が跪拝の姿勢からさらに頭を下げた。

漆黒の軽装鎧や魔法武器を備える四人は、ツアーの鑑定眼から見ても、十分に勇者たりえる。

(この僕を前に、ここ)まで堂々と任務を忠実にこなす意思力と精神力



——よほどの修羅場をくぐってきたか——魔導王陛下とやらは、よほど人材登用と育成が得意なのか、それとも——?)

噂や風聞にしか聞こえない魔導王の為人を一人黙考していたツアーの知覚力に、何かを感じる。

「陛下?」

「いや、なんでもなし……重要な任務ご苦労だったね、魔導国の冒険者くん」

ヘッケランたちの微妙な困惑を無視しつつ、彼は自分の感じた違和感——世界を汚し穢す力の一端を感じ取るのに夢中になった。

そう。

これは、あの強大な吸血鬼——ツアーの鎧による斥候を送った折にも感じたもの、それと酷似している。

ちなみにだが、魔導王アインズが『朽棺』を抑える際にもツアーの感知力は働いていたが、大陸の東部——評議国とは別の自領内のどこかというところで、目下調査中という状況であり、彼の「鎧と四武装」も出払っていた。

(何者かが世界級アイテムを使った? それも、あの強大な吸血鬼に使おうとしたのと同じ? あの吸血鬼はモモンというものによって滅ぼされたらしいが——これは、今回も、完全に発動した、わけではない?)

竜王の知覚力が、特定の場所にわだかまる違和感を脳内に刻み込む。

場所は……法国と魔導国の境、か……。

ツアーは、評議国の宿に戻るフォーサイトを見送り終えながら考えを巡らせ、ひとつの決断を下した。

## エルフ王VS漆黒聖典 | 2

King of elf VS Utterly dark  
Scripture | 2

「死守せよ！ 何としても！」

魔導国との戦争を考慮し、東都防衛のため駐屯していた法国軍は、たった一人の戦力に滅ぼされようとしていた。

号令と悲鳴が交錯し、魔法の炎弾や雷槍をもともせず、エルフ王はまるで無人の野を行くがごとく、その華麗な歩みを進め続けた。

屈強な重装甲兵が振るう戦鎚を受け流すのと同時に、その戦鎚を使つて、重装甲兵の頭を兜ごと破砕してみせるエルフ王の殺戮能力。

遠距離からの狙撃や魔法も、まるで意味をなさない。とくに、弓などはエルフの伝統的な武装ゆえか、一本たりとも喰らうことなく、逆に弓兵たちを射殺す材料に変じさせてしまったため、一斉射による掃討も禁じられる。王は魔法への耐性もすさまじく、法国軍のふるうそれではエルフ王を倒すどころか、拘束し歩みを止めることもできない。たった一人の人間の歩みを妨げることすらできなかった。個人が有していてよい武力ではないと誰もが思う。これが、自分たちが敵対し戦争を仕掛け、陥落させようとしていた国の王の力なのかと絶望する兵たちを、聖騎士や神官らが何とか鼓舞する。だが、彼らまでもエルフ王の鉄の鍬を前にして倒れ伏していく運命をたどった。

「ふいふい……」

いくら法国軍が勇壮勇敢でも、エルフ王は止まらない。

王は深い笑みをたたえ、色違いの瞳で戦場を睥睨する。

法国軍は虐殺され続けるのみ。この状況で、命乞いに投降をしよう



めに築かれた瓦礫の山であったが、エルフ王は涼しい顔でそれら障害物を引き裂き道を切り開いてしまう。いったい彼の握る剣はどれほどの業物であるというのか、あるいはマジックアイテムの効能なのか、まったく知りようがないが、法国軍は必死にエルフ王の侵略を止めにかかると、その時。

「ん？」

エルフ王がはじめて足を止めた。

「少しはマシなものが出てきたようではないか」

彼が見つめる先で、ありえないものが都市に現れた。

その獣は、ギガントバジリスクとよばれる魔獣——それが三体——難度の数値で言えば83にも及ぶモンスターが、狂暴すぎる威嚇音を発し、石化の視線を有する両目で、エルフ王を見つめていた。通常人類であれば、“石化”を喰らう前に逃げ出すしかない凶悪なモンスターだが、三体が敵とみなして攻撃しているのは、エルフの王以外に存在しない。

ギガントバジリスクたちは都市瓦礫の隙間から這い出してきて——彼らは特殊能力で、その巨体ながら蛇のごとく狭所をくぐりぬけてしまうことが可能であった。

そして、そんなギガントバジリスクたちを使役する人間の声が、東都に満ちる。

「皆さん、よく頑張りました」

十本の指それぞれに指輪をした、優男としか表しえない英雄が、法国軍前線指揮官の肩を叩いた。

「あ、あなた、さま……は？」

「皆の献身と敢闘は、必ずや我らが神の喜びとなるでしょう」

戦場に現れた男は、敵意とも殺意とも無縁そうな温厚な人物であったが、法国軍の誰もが、その人間との“格の違い”を意識せずにはいられない。

それほどの強者の気配が、彼にはあった。

彼は迎撃につとめていた法国軍を後退させ、改めて、今回の敵対人

物——殲滅対象を瞳に映す。

「三体同時による『石化』には、さすがにエルフの王といえど、抵抗しきれないようですね？」

クリムゾンオウルとよばれる真紅の梟フクロウが舞い下りる右手。

まったく別種の魔獣を多数従える、その力——金髪を短く切りそろえた男の威容を見て取って、エルフ王は確信する。

「そうか、貴様が噂に聞く漆黒聖典第五席次「一人師団」——名は確か、クアイエツセ・ハゼイア・なんとやら、だったか？」

「……クインティアです。以後、お見知りおきいただく……その必要もございませんが」

「ふははは。それもそうだな。これから死合う者同士。名を知っておく必要もあるまい」

石化状態におかれていながらも、会話を楽しむエルフ王の様子に、クアイエツセは油断ならないものを感じる。

石化の状態異常は、文字通りに対象を『石』と化す。三体同時ともなれば、確実に体の各所が石となって、行動不能に陥るはず。

だが、エルフは歩みを止めた程度——完全に石化はできていないことを意味する。

さらにギガントバジリスクを召喚して、石化を強めるべきか逡巡しゆんじゆんするクアイエツセだったが、彼の頭上に、巨大な影が差しこんだ。

それは建物の残骸——東門尖塔の一部を持ち上げて跳躍した同胞——「人間最強」——白髪白髭に白い胸毛を露わにする半裸の巨漢。

第十席次の『攻撃』であった。

「おおおらあああああああああああッ！」

轟音豪声と共に、硬直していたエルフ王の偉容が、「人間最強」の超重量攻撃の下敷きとなった。

それを至近で受けたクアイエツセは、大量の塵埃の暴風にあてられ目も開けられない。

『やった？ やったの、クアちゃん？』

〈メッセージ〉で繋がるのは、戦場を俯瞰する位置で魔法の箒に跨る第十一席次の声であった。

「……さすがに。これでやれていれば、話は早いのですが」

「人間最強」が隣に立って斧を構えるのと同じように、「一人師団」も召喚した魔獣軍に命令を下す。

砂塵の向こうより飛来するは、〃オリハルコンの鍔<sup>やじり</sup>〃。

弓撃を読み切った第十席次が背負っていた巨大斧で振り払い、  
クリムゾンオウル  
真紅の梟の爪がかるうじて攻撃を掴み潰す。

クアイエッセは、足元に転がる鍔に目を落とした。

（法国軍の皆をやった鉄の鍔とは違う……今までとは違う武装……多  
少は本気を出したということでしょうか）

そう読みつつもエルフ王の動向を慎重に探る一人師団。ギガント  
バジリスクの一体の感覚野が途絶えた。悲鳴をあげる間もなく死亡  
したことを意味する。切り殺すなどすれば猛毒の体液を盛大にあび  
てくれたことだろうが、果たしてあのエルフ王に通じるや否や。

「むこうー！」

魔獣から伝わる感覚野を頼りに、指をある方角へ伸ばすクアイエツ  
セに、「人間最強」も渾身の力を込めて瓦礫弾を投擲・直通させた。砂  
塵の向こう側で着弾する音がしたが、固い金属音をともなっていた。  
剣によって弾かれたか切り裂かれたと直感する二人。さらに、もう一  
体のギガントバジリスクの命が奪われるのを悟ったビーストテイ  
マーは、周辺に黒い穴を広げ、新たなギガントバジリスク二体を召喚。  
「！」

召喚された瞬間、その二体がオリハルコンの鍔<sup>やじり</sup>二本同時に額を射  
抜かれ絶命した。さらに、召喚済みだった三体目のギガントバジリス  
クも消滅したのを確認。

（三体同時召喚での〃石化〃が通じなかった！ どれほどの肉体強  
度・耐性保有者だというのだ!?!）

愕然としつつも、クリムゾンオウルをさらに二体召喚し、己を護る  
盾を厚くする。

瞬間であった。

「クアイエッセー！」

巨漢に似つかわしい畜声が、仲間の窮状を報せる。

彼の背後へと回り込んでいたエルフ王の剣が、一人師団の首を魔獣の梟はこと勿ねとぼそうかという、まさにその時。

「おおっと」

血に濡れたような赤い手裏剣の束が、エルフ王を攻撃から防御の姿勢へと強制的に移行させる。

エルフ王は足元に散らばる特殊な武器……“忍具”を投擲した敵を探すが、彼の視界内……東都の通りにはそれらしい敵は見当たらない。

「すまない、「天上天下」

危機を脱したクアイエツセは、暗殺者の仲間——第十二席次に感謝を述べた。「礼は不要」と告げて隠密性をあげた同輩が姿を消す。そこへ白髪白髭の巨漢が斧を振るつて突撃し第五席次を援護。クアイエツセは呼吸を数瞬で整える。

久しく感じていなかった、死の気配——それを、あのエルフ王は漆黑聖典第五席次に味あわせた。

(第一席次が投入されるまでの前哨戦、必ずやこなしてみせる)

今回の作戦において、クアイエツセたち下位の聖典メンバーが中心となつて、エルフ王の能力や体力を消耗し、そこを上位の席次である第一・第二・第三・第四などで打倒する。補助要員として第六席次も温存組に組み込まれた。

何しろ、魔導国との戦争が秒読み状態という段階だ。漆黑聖典の中でも、最強との呼び声高い彼らの力を温存することは、戦術的価値がありすぎる。

クアイエツセは決意を新たに魔獣を召喚する。

今度は、弓矢での攻撃でも殺しにくい硬度と難度を備えた魔獣——アイアンライノセラスを四体。鉄アイアンライノセラスを鎧アーマーつた犀はギガントバジリスクのような特殊能力にこそ恵まれていないが、その突進力と攻撃力、なにより防御性能は折り紙付きだ。実際、鉄の硬さ以上の身体でオリハルコンの鍔やじりをはじめてみせる姿から見ても、あのエルフ王と戦うのに十分な戦力だと数えられる。

最強のビーストテイマーと呼ばれる第五席次「一人師団」が先陣を

切り、第十席次「人間最強」、第十二席次「天上天下」が、エルフ王の侵略の足を止め続ける。

それを戦場である東都の空で飛行しながら見守る第十一席次は、逐一戦況を報告し、強化魔法などを適時送って、クアイエツセたちを援護する。エルフ王は武装を消耗し、自分たち強者との戦闘で、確実に疲労を蓄積していくはず。

彼ら漆黒聖典の作戦は見事にはまった——誰もがそう信じて疑わなかった。

。

漆黒聖典の戦闘開始から、すでに二時間が経過した。

(これ、いける？ いけるのかな？)

十一席次は、東都の空から仲間たちの戦いを援護支援しつつ、その推移を冷静に見聞していた。

第五席次「一人師団」——最強のビーストテイマーの称号を持つ青年。

第十席次「人間最強」——白髪白髭、半裸で巨大斧を武装とする蛮人。

第十二席次「天上天下」——赤色全身タイツに鎧と金属板を纏う暗殺者。

そして、普段は歩くことすらだるくめんどい……こうして空を魔法で飛んでいる方が好きな、下着姿も同然の装備に大きなトンガリ帽子をかぶった女——第十一席次は、引きつった笑みをこぼす。

(ここでエルフ王をやっちまえば)  
すべてがうまくいくはず。

聖典隊長である第一をはじめ、第二・第三・第四・第六席次は力を温存できたまま、魔導国との戦争を迎える。

正直、魔導国との戦争なんて死ぬほどだるい展開に参加するのはゴ



メンこうむりたいたいところ。東都防衛およびエルフ王抹殺の任務などという仕事も、実のところいやでいやでしょうがない。だが、任務である以上は従わざるを得ない。

何より、

(クアちゃんを死なせたくないし)

自分のような、痴女も同然な姿——神の遺した遺産とやらでも露出度の高い恰好をした、気色の悪い怠惰たいだな女を、クアイエツセという男は無二の仲間として受け入れてくれている。

ほかにも同性の「神聖呪歌」さんや、年代の「占星千里」ちゃんもいるが、一番仲が良いと呼べる——呼びたいのは、この若者だけであつた。

クインティア家の歴史において最高の英雄との呼び声も高かつた——  
——  
彼の妹は、そんな兄と事あるごとに比べられ、周

囲からの「片割れ」扱いに耐えきれず、漆黒聖典第九席次の地位を捨て、ズーラーノーンに身を移したと聞く。が、巫女姫の最秘宝を盗んだ——100パー嫌がらせだろうと個人的に思っている——咎とがで追われ、今では行方知れずの生死不明である。

(クレマンちゃんも心配だけど……占星千里ちゃん、相変わらず部屋に引きこもって震えて仕事にならないらしいし——支援役の私が頑張らないと)

普段は国の命令・任務すら面倒くさがる姿が祟たつて、皆から「責任を押し付けるのがうまい」とまで評される彼女だが、こと戦闘に関しては話が別だ。

漆黒聖典内では下位に位置するとはいえ、第十一席次は高位の魔法詠唱者だ。

あの魔導王レベルには遠く御及ばないにしても、人類の守護者たる英雄として、恥ずかしくない姿を。

「さきほどから気になっていた魔力の発生源は貴様だな？」

第十一席次は、完全に虚を突かれた。

都市上空500メートルを超える高空に、あのエルフ王の姿があった。

「え、あ、な、んで？」

「高度な隠密性のほかに、斬撃や射撃に対する多層防御陣が見えるな。そうして下にいる聖典の隊員どもを逐一支援していたわけだな？」

おまけに指揮監督までやりおおせるとは、なかなかの戦働き。だが」  
これで終いだ、そういつてエルフ王は第十一席次が構えた箒ごと蹴り落とした。

彼女の〈遠視〉の魔法で観た地上では、エルフ王を見失った仲間たち——クアイエツセが、上空にいる彼女を眺め、その名を叫んだ。

クアイエツセは第十一席次の名を叫んだ。

人間最強と呼ばれる白髪の蛮人・第十席次、および天上天下と呼ばれる暗殺者・第十二席次も、上空へと飛び上がったエルフ王の姿を確認。

「ジャイアントイーグル！」

クアイエツセは呼び出した巨大すぎる鷲ジャイアントイーグルの背に乗って、墜落を余儀なくされる第十一席次のもとへ急いだ。

いくら聖典隊員とはいえ、第十一席次は物理攻撃に弱い魔法詠唱者。いつも装備している魔法のトンガリ帽子で常時〈魔法盾〉マジックシールドなどを張れているが、あのエルフ王を前にして、どれほどの効能を期待できるか。

巨大な鷲はあやまたずして、砕けた魔法の箒から墜落した第十一席次を背中にいるクアイエツセに受け取らせた。

「しつかりしろ！」

名を呼んだ青年の呼びかけに、第十一席次は呻き声をあげること  
しか答えられないが、それでも同僚の命があったことに安堵するク  
アイエッセ。

「スキありだな」

そんな彼の横っ腹を狙って、エルフ王が流麗な体捌きで剣を振  
る。

なんらかの異能か、マジックアイテムによる飛行能力——これま  
でずっと地上戦を展開していたエルフ王が〈飛行〉できる事実を確  
認した第五席次は、最悪の事態を想起した。

（空を制することができるのであれば、他の都市——神都への侵入  
略も容易ではないか！）

そんな最悪を想起する彼を堅守すべく、ジャイアントイーグルの  
体目が犠牲となった。

唐突に足場を失い浮遊感の虜とりことなる第五席次と、気絶する第十一  
席次。

とつさに彼女の身体を引き寄せ、新たなジャイアントイーグルの背  
に乗るクアイエッセ。

「遅い遅い」

「おおおおおらあああああああああああああああ！」

連続して強襲するエルフ王を、第十席次——人間最強が奇襲強襲す  
る。

飛行でなく、単純な彼の脚力・強靱な跳躍力のなせる業であった。  
渾身の力で振り下ろした斧の一撃で叩き殺す——ことはできな  
かった。

「第十席次！」

クアイエッセの見る前で、エルフ王が斧刃の一刀を間一髪で身を  
翻ひるがえしして躲かわし、強襲者の分厚い胸板をバツ印に切り刻んだ。

肋骨を砕き、肺腑や臓器どころか、背骨にまで達する深さの傷だ。  
回復薬を飲む暇もない、即死。

彼は肺から逆流した血を口から大量に零して、東都の建物を砕き割

りながら墜落する。

「これで、まず『一匹』」

片付いたといわんばかりに、凶悪かつ黒い笑みを浮かべるエルフ王。

クアイエツセは色違いの瞳に恐怖の片鱗を感じつつある己を胸の内<sup>おのれ</sup>で叱咤した——恐怖を司るは、闇の神——ただのエルフごときに臆<sup>おそ</sup>しては、神に申し開きが立たない。クアイエツセは第十一席次をかばいつつエルフ王を睨み据える。

「さて」

さらなる魔獣を召喚しようと黒い穴をあける第五席次を斬る——よりも早く、彼は己の背後に近づいてきた暗殺者・第十二席次を振り返ることもなく、剣の先で心臓を串刺しにしていた。

「ふー」

第十二席次「天上天下」の驚愕と絶望にまみれた吐息と吐血が、彼の赤いマスクをさらに赤黒く染める。

「この私を——エルフ王たる我が身を『暗殺』しようなどと……百年、早かったな」

「……に、げ、ろ。クイン、テイ、ア」

エルフ王は返す刀で背後にいる暗殺者の首を優雅に刎<sup>は</sup>ねた。

ついでとばかりにジャイアントイーグルの頭を蹴り砕き、クアイエツセたちを地上に墜落させる。

「これで、『二匹目』だな」

エルフ王は建物の屋根に悠然と降りて、戦闘の痕で打ち壊された大通り——避難が完了し閑散とした市場に落ちた二人の聖典メンバーを見やる。

次々と討たれていく仲間を前にして、無力すぎる己を実感するクアイエツセ。

いくら蘇生魔法によって蘇ることができるとしても、人の死を——仲間の死を前にして、彼は冷淡なままではいらなかった。

——まだだ。

——まだやれる。

第十一席次を背後に護るように、彼は奥の手を試みる。特大の黒穴が彼の前方に開きかけた。

第五席次「一人師団」たる身でも制御不能な魔獣——あのエルフ王どころか自分をも殺戮するだろう地獄の亡獣と呼ばれるモノを召喚すべく、彼はすべての魔力を注ぎ込もうとするが、

「そこまでです、第五席次」

彼の召喚を抑止する声と手に制される。

驚きのあまり彼はそこにいる人物への礼節を欠いてしまう。

「だ、第一、席次……………隊長！」

周囲を見れば、第二席次、第三席次、第四席次、第六席次の姿も見える。

漆黒聖典隊長・第一席次——荘厳な鎧姿には似つかわしくない、みすばらしい槍を巧みに振るう若者が、太陽を背にするエルフ王と対峙していた。

エルフ王VS漆黒聖典 — 3

King of elf VS Utterly dark  
Scripture — 3

第五席次「一人師団」——クアイエツセ・ハゼイア・クインティアは、心の底から罪を謝した。

「隊長、申し訳ありません——此度のエルフ王抹殺の任において、……第十と第十二席次は」

「わかっています」

隊長は項垂れる部下の肩を叩いた。

東都の戦況は、彼ら上位メンバーも把握済み。

人間最強と天上天下が死亡、第十一席次は戦闘不能の重傷で、第五席次の背にかばわれている。

「第五席次は、三人を連れて脱出を——二人の死体は神都にて、復活の儀を試みます」

「——承知しました」

蘇生不可の呪い——あの強大な吸血鬼がときはなつたような強力な呪詛のかけられていない死体ならば、何も問題なく蘇生できる——生命力がさがる関係で、強さは蘇生以前よりも低下するだろうが、おそらく問題はない。クインティアの召喚したジャイアントイーグルが、二人の死体を回収して東都を離れる。

「四人での東都防衛の前哨戦、ご苦労さまでした」

「んま。がんばった方だと褒めてやっつくよ、クインティアのお坊ちゃん」

「あとは我ら五人が引き継ぐ。安心めされよ」

「こちらは大丈夫ですから、ね？」

「……………うす」

隊長をはじめ、第二、第三、第四、第六席次、それぞれから励ましの言葉を受け取って、クアイエッセも第十一席次と共に、鷲の翼に運ばれていく。

その姿を確かに見送った隊長・第一席次は、あらためて、中空を舞うエルフ王と相対する。

「エルフ王が〈飛行〉の魔法まで体得されている、あるいはマジックアイテムを有している、という情報はなかったのですがね——」

確認するように独語する隊長。

それを長耳ながみみの聴覚で拾ったエルフ王は、悠揚ゆうようと語って聞かせる。

「真の強者たるもの、空を制するくらい、アタリマエのことではないか？」

第一席次をはじめ、漆黑聖典上位メンバーは配置についた。

前衛に第二席次と第三席次、後衛の位置に第四席次と第六席次。そして、彼らの最前衛を護る位置に、隊長たる第一席次が槍を構えて立ちただかる。

エルフ王は疑念に眉をひそめた。

「前衛に魔術師風の男を置いて、後衛に聖騎士風の男をおくのか？」

第三席次と第六席次のことだろうと承知する隊長。

だが、これが彼らのベストポジションであると皆が自負している。

第二席次は小さな帽子飾りに緑の衣服、螺旋を描く細剣レイピアのごとき武装を二振り構えた、いかにも軽薄そうな茶髪の男。

第三席次は黒いローブ姿に樹木の杖を握り、宝玉にも似た武器を周囲に浮かべ、両手に魔法陣を彫り込んだ、老齡の男。

第四席次は長い金髪の女性で、翼を思わせる飾り付きの緑のベールで頭を覆い、神聖な羽衣と鏡のように磨かれた円盤状の装備が目を引きく。

第六席次は金髪を後ろに撫でつけた男で、青と銀の鎧を観に帯び、特徴的で豪華かつ巨大なグレートソードを構えている。

第四席次と第六席次が魔法詠唱を始めた。

「〈全体飛行〉」 マス・フライ マス・フリーダム マス・マジックシールド マス・フルポテンシャル  
「〈全体自由〉」 サモン・ア宁德ッド・3rd マス・プレス・オブ・ホーリーナイト 全体魔法盾 サモン・エンジェル・3rd 全体全能強化

「〈第三位階死者召喚〉」

「〈神の御旗の下に〉」 アンダー・デイベイン・フラグ マス・プレス・オブ・ホーリーナイト サモン・エンジェル・3rd 第三位階天使召喚

「第四席次の魔法で死霊が三體、第六席次の魔法によつて炎の上位天使が三體同時召喚される。」

死者と天使、あわせて六體のモンスターにそれぞれ襲われるエルフ王はそれらを剣で捌こうとするが、三體は実体を持たない死霊であり、もう三體はそれぞれが炎の剣を握つて迎撃体制を整えている。

また、第四と第六の各々が唱えた魔法による強化が、漆黑聖典の五人全員に供給され、すべての準備が整つた。

「いぐぞー！」

隊長の号令一下、チームはひとつの生命体のように、虚空を漂うエルフ王を急襲。モンスター六體を着実に仕留めていたエルフ王の手腕は見事なものだが、第一席次のふるう“みすぼらしい槍”を奇特な視線で流し見ながら剣ではじくエルフに、第二席次と第三席次が襲いかかった。

「くらつときな、遅滞一閃”！”

ゆるい螺旋状にねじれたような細剣の鋭く迅い一振り。

それをエルフ王は剣で防御しようとするが、何らかの効果があるものと看破し、一瞬で回避に転じた。

「ちい、んじゃあ次、〈早足〉発動！」 クイックマーチ

もう一振りの細剣に込めた魔法を起動し、自己の速度を上げる。さらにこの魔法発動は自動的かつ効果時間ごとに威力が増していく仕組みで、〈駆足〉〈疾走〉と、続々と魔法武器保有者の速度を加速させる。

エルフ王は静かに悟る。

「時間魔法系統のマジックアイテムのようだな？」

それだけじゃあないぜと言わんばかりに、王の矢の先に狙われ、そして矢を放たれた第二席次は、一瞬で姿を消した。

長久の時の中で、的を初めて外したエルフ王。彼は正確に事態の詳細を把握する。



「ふむ。いま、時が『跳んだ』な？」

「ご明察、DA☆ZE！」

レイピアの二連撃を浴びせかける第二席次。

〈タイム・ジャンプ時間跳躍〉の魔法は、回避手段としてはうってつけすぎる魔法だ。相手が的を定めたとしても、時間を文字通りに『跳んで』しまう。

王を押搦するように笑う、レイピア使いの青年。——時間跳躍の使い過ぎで少年のごとく若く見える見た目だが、実際は三十代に届く、歴戦の騎士であった。

第二席次「時間乱流」は、遅滞魔法・加速魔法、各種時間魔法の使い手であった。聖典のナンバー2——番外を込みで考えるとナンバー3に位置して当然の希少なマジックアイテムの担い手として、長く漆黒聖典の隊長クラスの働きをなしてきたが、神の血を覚醒させた「第一席次」の登場で、そのお株は奪われて久しい。それでも彼は軽薄な笑みを浮かべつつ、人類の守護者としての任務に精励してやまず、第一席次たる隊長へも尊敬の念を惜しまない……そういう努力は認められる。

「第三の旦那ア！」

彼が尊称のつもりで使う呼びかけに、魔術師でありながら前衛をなす第三席次が応えた。

老齢の姿からもわかる通り、現状の漆黒聖典にあつて最年長として、長く任務に励んできた魔術師が詠唱を始める。

「ツインマキシマイズマジック魔法二重最強化・マジックフィスト魔法拳——」

現れたのは透明に輝く巨大な握り拳が左右に二つ。それが彼の杖の命令を受けたように打ち出されるが、それで終わりではない。

唱えた魔法は一発だが、彼の周囲を旋回浮遊する宝玉のような飾りからも、同種の魔法が吐き出される。

その数は、六つ。つまり、魔法一発が、彼のと合算して七つ分——合計十四本の魔法の腕が魔術師の周辺に現れ、エルフ王をその防御態勢したたと強かに殴りつけたことを意味する。

「同じ魔力消費で、同種の魔法を複数回分発動できるアイテムか！」

エルフ王の審美眼は正確かつ迅速を極めた。「いかにも」と頷く第

三席次は、魔法の巨大な拳で打ち据えられ掴みかけられるエルフ王を後退させる。魔法の拳による豪拳の乱舞には、オリハルコンの鏃も用をなさない。南方の地で信仰される神の一種——アシユラを彷彿とさせる烈腕の連撃であった。

長い金髪の額に、はじめて汗の雫が、ひとつ。

「曇みかけるぜ、隊長！」

第二席次の軽い口調に呼応する第一席次。

聖典の隊長が振るうにはあまりにもみすぼらしくボロくさい槍の一振りであったが、その威力は回避に徹するエルフ王の長髪を幾本か削ぎ落とし、ついで東都の壊れた門の隔壁にまで破壊力を及ぼした。地響きが都市に轟く。「ひえー」と軽く驚きの声をあげる第四席次。「さすが第一先輩バイセンつス」と尊敬の眼差しを向ける第六席次。

あれこそが神人——アンデッドの魔軍をも掃滅せしめるだろうと目される、まさに神の血の覚醒者の一撃であった。

そんな圧倒的力を振るってみせる第一席次であったが、

「……やはり、私の本気の戦闘力では、都市を破壊しかねない……」

そう言つて、東都の防衛という意識に傾注する青年。エルフ王が空で戦えるというのは好都合。空を舞った瞬間に、彼の神人による槍撃がエルフ王を貫くことになる。

無論、相手もそのことに気づき、都市に降りていく。

「逃がさねえからな！」

第二席次は〈時間跳躍〉を繰り返し、エルフ王の弓撃をもともせず追撃。同様に追ってきた魔術師も、両手に刻印された魔法陣から〈炎弾〉や〈雷槍〉を釣瓶撃ちにする。そうして足を止めた王の背後から、第二席次の遅滞スキルが襲い掛かり、エルフ王の速度を奪い取る。

単純な作戦だ。

第二、第三が前衛としてエルフ王を都市上空に追い立て、そこを最前衛の第一席次に潰させるという構図だ。第四、第六の支援補助魔法も完璧。大勢は完全に聖典上位陣が握ったも同然であった。

「ふむ。いかな」

エルフ王は第一席次の五度目の槍撃をしのいで、思案する。

「これでは我が子を奪いにいけぬではないか」

「我が子？」

第一席次が興味を惹かれた。

前々から、神官長らの話は聞き及んでいた。

番外席次の安寧を乱す存在——母の復讐を——やはり、エルフ王こそが、彼女の父親であるときとみて間違いないのか？

しかし、番外席次は父親に関してはそのほどの興味を懐いていなかった——そう、強者との“子”を望む彼女であれば、自分を生み出した強者たる父に、その身をゆだねに行こうとする壊れた思考も、十分あり得る。それほどまでに、彼女は自分と伍する絶対的強者の存在を希求していた。しかし、第一席次——神の血を覚醒させた若者でも、彼女には到底、勝ちえないという歴然たる事実。

エルフ王は強い。

だが、神人である第一席次の攻撃——その破壊力の規格外ぶりは、彼の想定を上回っているように見受けられる。防御ではなく、完全なる回避一択であった。

「しようがないが、こちら奥の手を使おう」

聖樹の長弓をどこぞに消したエルフ王は、次の瞬間、ありえざるものを取り出してみせた。

聖典メンバーの誰もが絶句して、その威容もとい異様な兵器に目を瞠る。

「え、弓？」

「なんてデカさじゃねえよ！」

呆ける第四席次に、第二席次が怒鳴り声をあげる。

隊長は即座に理解した。

「！　バリスタだ！」

通常は城の護りとして据え置き式に設置される大型弩砲——投擲される矢の太さも長さも尋常でない、攻城兵器が、エルフ王の抱える奥の手であった。攻城兵器の反動を鑑みれば、どう考えても携行兵器として不適合だが、エルフ王の膂力なら可能か。なんらかのマジックアイテムである線も捨てがたいが、分析に要している時間などない。

「ふふふ、光栄に思うがいい。『聖樹のバリスタ』だ。

我が母である十三英雄が一人、エルフ女王の聖遺物ぞ?」

大の男数人で引くはずのテコを軽々と引いて装填を終えると、極太の弦に引き絞られた巨大な矢は、一同の中で最もか弱そうな支援役に向けられる。

「まず、その邪魔くさい女からだ」

恐怖に立ちすくむ「神聖呪歌」は、これまで弓の攻撃をすべて神聖魔法の防壁や、アンデッドの召喚魔法で防いできた。

が、あの超弩の矢が相手では防御など役に立たない。エルフ王が引鉄もとい「落とし金」を操作した瞬間、第四席次の五体が貫かれる――寸前であった。

「先輩!」

『どうあく』  
獰悪な射撃音が、戦場を引き裂いた。

彼女を突き飛ばした青と白の鎧を着込んだ第六席次が、魔法杖として使用していた幅広のグレートソードを盾のごとく構えるが、無意味だった。

彼の身体は極太の矢にグレートソードや鎧ごと貫通され、大量の鮮血と肉片を後方へ吹き出し、あっという間に絶命してしまう。

「――あ、……」

「第六くん!」

第四席次の悲嘆と悲鳴が日の落ちかけた東都の空に木霊こだまする。

「クソ、あんな武装ありかよ!」

時間跳躍を行い、攻撃をよけるのではなく攻撃を仕掛けに行った第二席次であったが、

「来ることはわかっていたぞ」

「な……?」

跳躍した時間の先で、バリスタを小脇に抱えたエルフ王は剣を振りぬいていた。

盛大に彼の下腹部が抉れ、臓物がまろびでる。

「な、んで?」

「跳躍をあれだけ繰り返せば、こちらにも出現時間ぐらい、見切れるとは

思わんか？」

逃げに徹しておれば無敵だったなど評するエルフ王。

その場で膝を崩し倒れ伏す第二席次の少年っぽい顔立ちを、エルフ王は果実でも踏むがごとく破碎してしまった。

「おのれ！」

魔法の拳でアシユラもかくやな変貌を遂げていた第三席次が、両手の魔法陣を合わせ強大な魔法を練成しようとした瞬間、彼もまたエルフ王の持つバリスタの餌食えしきとなった。

「ご、おおおお、おのれ……………」

魔法の拳たちで引き抜こうとしたが、手遅れであった。

彼の心臓と頸動脈と脊髄は巨大な鉄の鏃やじりで貫通され、死を免れることは不可能であった。力を失った宝玉が、彼の骸の周りに転がり落ちる。

「さて、残りは」

金髪を軽やかになびかせる美貌の王。

エルフ王の美しい微笑みの先にいた「神聖呪歌」は涙目になりながら、第六席次の死に報いようと魔法を唱え、抵抗する意思を見せた。が、すぐさま第一席次に止められる。

「た、隊長くん？」

「ここは私が——私でなら、あのエルフ王と拮抗しうる——あなただけでも脱出を」

「でも、でも私の支援や回復がないと、いくら隊長くんでも、ッ!!」

相談する二人を待つ義理もなく、エルフ王はバリスタを射出。

超級の威力と暴音で第四席次の頭部を狙った一撃を、第一席次の槍が見事に払いのける。だが、あまりにも急激な対応速度で、神人の身体が悲鳴をあげかけた。

「隊長くん!!」

「ッ、逃げる、第四席次「神聖呪歌」！ エルフ王の脅威を、神官長たちにお伝えしろ！」

彼は彼女に任務を与えることで脱出の道を与えた。

そして願わくば、番外席次——彼女の無事を思う第一席次の意思を

受けた第四席次は、涙をぬぐって撤退の道を進もうとするが、

「えーん、えーん」

場違いにも戦場に響く、赤ん坊の声が一同の耳を劈く。つんぎ

見れば、第一が払いのけたバリスタが突き刺さった住居——そこで怯え震える母子の姿が。

(しまった！)

避難できずに残っていた東都の民だ。法国軍の誘導が間に合わず取り残され、エルフ王と漆黒聖典の戦闘が始まり、一般人で乳飲み子を抱えた身の上、動くに動けなくなつたに相違ない。

神聖呪歌も驚き、第一席次と共に彼女らを護るべく〈飛行〉しているが、第一席次とバリスタの威力で、建物は見るも無残に彼女たち全員を崩落の中に巻き込んでいく。

「く、……「神聖呪歌」——第四席次！」

瓦礫の山から這い出し、一瞬は絶望しかける第一席次。だが、第四席次は、護国の英雄たる務めを、果たした。

咄嗟に召喚したアンデッドの骸骨兵たち三体で母子を崩落から守り、自らは大量の瓦礫の下敷きとなり果てた。彼女の下半身は円盤状の防具ごと完全に潰れ、もはや痛みすら感じていない。

「えーん、えーん」

「ああ、なかないで……いいいだから……」

「ご……、ごめんなさい、ごめんなさいいー」

「いいえ。いいのです。おかあさん。さ、はやく……にげて、……わたしには、かまわず……しんと、へ……」

そう言い残す神聖呪歌に促され、赤子を抱いた女性は東都から神都への道を行く。口々に謝罪の言葉を紡ぎながら、泣きわめく我が子を、しかと抱いて。召喚主の死で骸骨兵が消え去り、第四席次の骸を瓦礫が飲み込む音が都市を満たす。

それらを見守り見送った第一席次は、エルフ王の見る前で膝を屈した。

バリスタをはじめた時の威力と、瓦礫のダメージ、長時間の戦闘での疲労が合わさり、もはや立つこともままならなかった。疲労を無視する装備はしていたが、建物の崩落時か、バリスタをはじめた時の余波で、壊れたらしい。さらに最悪なことに、彼ほどの存在を癒せる水薬ポーションは、スレイン法国には存在しなかった。

「興奮キョウゲンめだな」

漆黒聖典をほぼ壊滅状態に追い込んだエルフ王は、真実落胆したように、英雄の無様ぶざまな姿を嘲弄ちやうろうする。

「弱者を守ろうとするからそうなるのだ。必要な犠牲と割り切り、見捨てておけばいいものを」

「——はっ。なるほど。どうやら、あなたと、ぼくの、価値観は、違い過ぎる、よう、だ」

第一席次は額から流れる血をぬぐうこともせず、バリスタを装填し終えたエルフ王を見やる。

「私の国の、……神の教えによれば、『強き者は、弱き者を、助けること』……それが義務つとめとされている。弱者を切り捨てるなど、あつてはならない……許されざる大罪だ」

「はっ。ぬかすな若造。その教えとやらを守って、結果はどうだ？ その神とやらは、いまの貴様を守ってくれているとでも？」

エルフ王は真実呆れかえったように金髪を揺らして頭かぶりを振った。

「隊長ともあろうものが、知らぬはずもなかるうに。貴様ら法国の暗部——聖典などと自称する有象無象が、どれほどの国で暗躍した？ どれほどの長きに渡って暗闘を繰り返してきた？ どれほどの人血を祭壇に捧げ、無辜むこの民を葬ってきたか。——知らんとは言わさんぞ？」

痛いところを突かれた。

それぐらいのことは、漆黒聖典の首領たる第一席次も知悉している。

一年前に全滅した陽光聖典、彼らが行っていた特殊任務の内容——

近日では、火滅聖典がエルフの国で焼き払った森妖精の都市——各神殿に祀られる、巫女姫という名の少女Ⅱ人柱たち——それらを、法国首脳部は、必要な犠牲と断じて、文字通りに切って捨ててきた。

そんな国に属しながら、このような綺麗ごとを垂れ流す英雄の存在など、エルフの王にしてみれば、理解の範囲外だろう。

それでも、第一席次は血まみれの死相に笑みをたたえる。

「言った、はず、だ。これは、義務だ。私が私である限り、人が人である限り、『そうあれかし』と定められた事柄に、すぎない。見返りなど求めることではない。私が私であるために、弱き者を、守る。護り続ける——そう決めている——そう、決め、た——ただ、それだけの、こ、と」

理解不能と言いたげに眉根をあげて嘆息するエルフの王。

疲労からくる睡魔に襲われる男へ、王は裁定を下す。

「つまらん男だ。

我が手にかける価値すらない、虫ケラめ。

そこで勝手に野たれ死ね。それが、王たる私が貴様に送る手向けとしよう」

「……………」

東都の日は没した。

第一席次の意識は、そこで途切れた。

エルフ王が向かう先、神都の聖域に在るであろう半森妖精——彼女ハーフエルフの無事を祈願しながら。

魔導国の侵攻予定まで、あと三日——



## 交渉と出撃

／Negotiation and sally

「どうか、もうしばしの猶予を!!」

魔導国との交渉会議の場——北都の行政議会議場に足を運んだレイモンは、滝のような汗を流しながら懇願する。

「先もお伝えした通り。現在、我が国はエルフ王との戦いの最中であり、……どうか貴国の寛恕かんじょのほどを示していただきたく、」

「は。何を馬鹿なこと」

その先を続けさせない美声が、朗々と議場に響き渡る。

「アインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下下の要求は『絶対』です。寛恕を示せなどと、人間の分際で出過ぎた真似をしないことね。ここで殺されたいのかしら」

氷のように冷たい女帝を思わせるアルベド……『テンパランス暗闇の調べ』配下の二重ドッベル・ゲンガーの影の声に、レイモンは愚直なほどまっすぐに応じる。

「『ケイ・セケ・コウク』は、我等が六大神の遺のこせし神の遺産——それを魔導国に差し出すことは、我が国の国力低下のみならず、我が国の威信が地に落ちます。断固として、受け入れがたい」

だが、その言葉は大地の巖いわのごとく頑健一徹。

彼の補佐を務めるエンヘラ・リード・ガヒー補佐官も、さすがは土の神官長であると誇らしげな思いを一瞬ながら胸に宿した。

しかし、魔導国使節団の反応は冷酷かつ冷淡に過ぎた、

「なりません」

黒髪の女悪魔は、先日の『降伏勧告』、事実上の『宣戦布告』の時に比べれば、法国への対応と態度は軟化している。

……魔導国の宰相は二重ドッベル・ゲンガーの影の替え玉と化していて、彼女は可能な

限りの範囲でナザリック守護者統括アルベドの口調や性格を模倣してみせる。その再現度は満点とまではいかずとも、法国の交渉役たちを騙すには十分すぎるほどの女帝ぶり（れいり）で伶俐な笑顔を浮かべてみせた。

「我らがアインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下は、今回の法国の対応に關して、『誠に遺憾である』との仰せ（おほ）でございます。要求内容は『即日』のうちに受理されるものばかりご考慮されておりました様子でしたので」

絶句するレイモンたち法国陣。

「期限までは残り三日——それ以内にことがなされなければどうなるか……法国はその身で、己の愚かさのツケを支払うことになるでしょう」

交渉決裂を告げるように、アルベド・ドツペルたちは席を立った。

長卓に残されたレイモンたちの鎮痛に項垂れる様子は、演技の色や影は見て取れない。彼らは本気でアルベド・ドツペルが本物であると認識していると理解できる。

「これはどういうことなのでしょう……」

ナザリック三智者の最後の一人となってしまったデミウルゴスは、第九階層の空き部屋に設けられた『対法国作戰本部』内にこもって、（ミラー・オブ・リモートビューイング）で確認していた交渉現場の様子に頭をひねった。

連中、魔導国宰相が現れた事実を——番外席次の支配下に落ちて法国へと渡ったはずの守護者統括が何食わぬ顔で交渉の席に現れた様子に、何の疑問も驚愕もしていなかった。

そこから導き出される答はひとつ——法国首脳部は、アルベドが番外の手に落ちた事実を知らないということ。

「しかし、何故？」

魔導国宰相位……ナザリック守護者統括という地位にある彼女から得られる情報たるや、まさに価千金（あたいせんぎん）だろう。ナザリックの守備体制状況の詳細。魔導国の産業革命の計画草案。アインズ・ウール・ゴウンその人が掲げる理想郷計画——すべての種族を等しく、ナザリック地下大墳墓の管理下に置くという（計画実態や運用方策はデミウル

ゴスでもよく知らされていないが、アインズの考えること、必ず意味があるはずと信じている)。

さらにいえば、今回の戦争でのナザリックの、魔導国軍の勢力規模と展開地図は、アルベドの脳内に、確実にしまいこまれているはず。彼らが演技をして、法国は魔導国に追い込まれる獲物の位置にあることに変わりない……そういうポーズをとっている可能性はあるのかないのか、デミウルゴスでも容易には察しえない。

(まさか、アルベドをさらっておきながら、軍事方面・政治方面で利用する気がない？ いや、そんな、馬鹿な話が)

あるものだろうかと眉根を寄せて本気で熟考にふけるデミウルゴス。

(では何故、敵は……番外席次は“傾城傾国”を使用してまで、アルベドの支配に乗り出したのか)

ただの気まぐれや遊び感覚で国の枢要を拉致するはずがないという常識——固定観念が、デミウルゴスの思考思想の迷路を複雑にしていた。

(ナザリック第七階層守護者ともあろう身が……まったくほんとうに情けない)

アインズにはどう報告すべきだろうかと悩むデミウルゴスは、組んでいた腕を離し、掌で膝を叩くようにして立ちあがった。

守護者らが居並ぶアインズの執務室にて、灼熱の悪魔は跪拝の姿勢を四角くこわばらせる。

「そうか。敵の意図はデミウルゴスをもってしても掴みえなかった、と」

アインズの呼吸を伴わない失望の声に、デミウルゴスの臓腑は振じ

切れそうなほどの罪悪感にさいなまれた。

「大変、申し訳ございませぬ！」

片膝について深く頭を下げるデミウルゴスの様子を、アインズは心の底から許す。彼自身、襲撃されたカルネ領域の慰問や、襲撃者の調査、ルプスレギナの見舞いにと多忙を極めていたが、交渉現場を鏡で共に見ようという気概・勇気は持ちえなかった。本当に敵の手に落ちたアルベドの姿を確認でもしたら、悲憤や激昂で何をしでかすか、自分でも自信がなかったのだ。

アインズは改めてデミウルゴスの罪を赦す。

「いや。謝る必要はない——」

ナザリツクが誇る智者たるデミウルゴスがわからぬ以上、この問題は誰にも理解できまい。そう自分を責めるな、デミウルゴス」

「はっ。……しかしながら、期日まで残り三日。我等の魔導国軍は出征準備は万端整っておりませんが」

アルベドは番外席次の手に残ちたまま。

当初の計画案はデミウルゴスとコキユートスの手によって多少の改善が加えられているが、それをアルベドが読み切っている可能性があるというのが問題であった。

ふと、守護者の一人たる吸血鬼が鼻を鳴らした。

「まったく。あの大口ゴリラ——」

同じ<sup>アインズ</sup>殿方の寵愛をを求めてやまぬ好敵手たるシャルティアは、本気でアルベドの造反に腹を立てていた。

しかし、自分もまた同じアイテムで洗脳されかけた手前、大ぴらに批判できるほど、彼女は厚顔無恥な守護者ではない。

守護者らの誰もがアルベドの動向と反逆に心砕く中、ふと、アインズは思う。

「案外というか。敵はこの私を挑発し、直接、魔導王を戦場に引きずり出すコマとして、アルベドを洗脳した、とも考えられるか？」

アインズはその可能性を<sup>ざんみ</sup>吟味する。

魔導国軍が強大無比であることは周知の通り。そのような魔軍を打倒するのに有効な手段として、魔導国の君主たるアインズ・ウール・

ゴウン魔導王を討ち取るというのは、確かに有効な戦術手段であった。

「しかし、それはアインズ様が孤軍で——魔導国軍の支援のない状況を構築する必要が」

「アルベドが現れれば、私はそちらの対応に向かう……そう考えた可能性は十分だろう」

そして、洗脳されたアルベドに魔導王を討たせ、法国は自国の安寧<sup>あんねい</sup>を勝ち取る——堂々たる勝利だ。筋書きとしては悪くないのではなからうかと、本気で自説に納得しかけるアインズ。

「あ、でも、あの、アインズ様」

「どうした、マールレ？」

「ア、アインズ様が討たれるなんて、そのようなことがありえるのでしょうか、か？」

確かにと首肯を幾度も落とす守護者たち。

アインズは何度も自分の強きは絶対ではないと説<sup>と</sup>いて聞かせているが、それでも、守護者たちにとっては納得しようのない、説得力をともなわない自己評価であった。

事実、アインズのなした功績と勝利は数えきれない。

自分たちの創造主、至高の四十一人のまとめ役であるアインズ・ウール・ゴウンに、敗北などありえるのだろうか？

アインズは諭<sup>さと</sup>すように告げる。

「私とて完璧ではない。とくに、アルベドにはナザリック最強戦力の一角たるルベドを貸し与えている状況であり、そもそも今回のような事態を招いた責任もある」

そう言っただけ聞かせるが納得しがたい様子で考えを深めていく守護者たち。

アインズはとりあえずの散会を命じ、個々に休息を与える。とくにデミウルゴスなどは政戦両略で使い続けているので、本当に申し訳なく思っている魔導王アインズ。

(ないはずの胃が痛い……だが、それ以上に)

仲間が造り出したNPCの一人が、敵の手に落ちた事実が、彼の精

神力を摩耗させてやまない。

タブラ・スマラグディナがこの場にいたら、アインズは万の言葉を尽くしてでも、彼への謝罪を紡ぎ連ねているだろう。

(アルベド……どうか、無事でいてくれ)

ただ祈るような思いで、アインズは残る期日を待っていた。

否<sup>いな</sup>。

もはや待つのをやめるべきかと、本気で考慮すらしている魔導王。

彼の中では、スレイン法国に侵入するルートを、本気で構築し始めていた。

ところ変わって。

法国最奥。

神聖に浄め<sup>きよ</sup>められた円卓の間で控える最高神官長のもとに、ここより上層の絶対聖域の守護者たる黒白の少女が姿を現す。

「何か用、ジイさん？」

およそ上位者に対する礼にかけた番外席次の声と態度に、最高神官長は何も言わない。

その前に、ひとつ確認しておくべきことを、ひとつ。

「聖域にいるあの御方は……ルーファウス様のご様子は？」

「サラのこと？」

育ての親の一人故に、敬称も尊称もなく、名前で呼びつける番外の態度。最高神官長は痛ましい思いをそのままにしたような溜息を吐く。

「もつとあの方を敬<sup>うや</sup>まぬか……そなたにとっては、育ての母の一人であらうに」

「つつてもねー。最近はオルガンの前で身動きみじろひとつしないし」

闇の神の第一の従者の状態を聞くことが本題だったのかと首を傾げる番外に、最高神官長は本題を切り出した。

「東都が陥落した」

「あらま。漆黒聖典が、ほぼ全滅って、本当だったんだ?」

まるで他人事のように興味薄そうに肩をストレッチする番外。彼女は、自分がここへと呼ばれた理由に察しがついたようだ。

「彼奴をきやつ、エルフ王を神都にいれるわけにはいかぬ。おまえの手で止めるのだ」

「ああ、はいはい。『出動』ってわけね」

軽く準備体操しつつ、エルフ王の詳細な情報をもらう番外席次。

生き残って帰還した第五席次と第十一席次、さらには風化聖典の諜報と巫女姫の〈遠見〉のおかげで、エルフ王の真の実力が判明した。

「巨大なバリスタ?」

「そう。奴が自称するには、『十三英雄が一人・エルフ女王の遺物』だのなんだのと」

「へえ。おもしろそうじゃん?」

最高神官長は肝が冷えた。

狩りの獲物を見定めたがごとき番外席次の姿に、薄ら寒いほどの闘気——オーラを感じ取る最高神官長。

自分よりもはるかに若く見える番外席次だが、その実、自分よりも90年は年長に位置しているとは、余人には信じがたい光景である。

氷塊を肺腑が滑り落ちるような悪寒を禁じ得ないのは、彼女の絶対的な強さに起因するものか。

法国の最高神官長——神人の一人として、覚醒させた神の血で、仲間らと共に長く護国の任務につき、自分の傍系にあたる「第一席次」のように戦場を馳はせたこともある——が、今や枯れ木のごとき老体。100歳を超える宗主にすぎない。血風の舞う戦場ではなく、この法国最奥の地を主戦場と定め、神官長らを導く長としての役割——スレイン法国の御旗の下で聖務をこなしてきた時間の方がはるかに長いだ

ろう。彼の宗派は光であるため、土の神官長であるレイモンが、己の後を継ぐべきものだろうと見定めている。光の加護より土の恵みへ。無論、他の宗派の存在も、これからながく法国を守護していくことだろう。

そんな彼が懸念しているのが、この目の前にいる少女——黒白の髪に隠した長い耳、白黒の瞳には敗北を知らぬ圧倒的強者の圧力を秘めていた。

「本当に、そなた一人でやれるか？」

魔導国軍との戦力として温存しておきたかったが、背に腹は代えられない。

愚問にも思える問いかけをあえて行う最高神官長に、番外席次はつまらなさそうに肩をすくめた。

「第一と伍する程度じゃあ、期待薄だけどね」

「そうではなくてだな……」

第一席次と互角の戦いであつたと評する風化聖典や巫女姫らのへ遠見の結果であるが、番外席次にとつて第一席次ごときと同程度では、そこまで楽しめる要素はないらしい。何しろ彼女は、第一席次が9歳で神の血を覚醒し、絶大な力を周囲に誇示して暴走気味であつた当時に喧嘩を売られ、そして一方的にボコリ、厩舎きゆうしやに連れて行つた先で馬の小便で顔を洗わせたほどの実力者だ。

彼女の求めてやまない、絶対的強者の存在。

それがエルフ王であるとは、彼女は見做していなかった。

「あるいはこれも神の配剤か——ともあれ、この任は、そなたの母の仇討ちあだうを兼ねる。けっして、ぬかるなよ」

「へいへい——ジイさんたちの言う通りに」

復讐という概念からも無縁そうな——すべての物事に関心の薄い黒白の少女。

法国に三人いるとされる神人。

一人は最高神官長、一人は現「第一席次」、そして、最後の一人であるところの「半森妖精の神人」は、戦鎌ウォーサーズを肩に担いで、正式に出撃する。



「あ」

番外席次は思い出したように振り返った。

「今、聖域に私の支配——あー、協力者」が来てるから、そこんどこよろしく」

「……うん？」

最高神官長は首をひねるしかなかった。

法国、神都の絶対聖域。

そこは漆黒の大聖堂。

闇を建材としたがごとき、絢爛豪華な黒の伽藍。

通常人類では一步踏み出すこともできない、重く澄んだ空気。

典雅かつ荘厳なパイプオルガンの演奏者席に座する、亡霊のごとき影。

そこにいるアンデッドは、聖域の一隅、講堂の列席の最後列に座る気配に、“何か”を感じる。

圧倒鵜的強者の気配。

愛に生きる魔の種族、

そして、『何者か』のオーラの、その名残なごりだろうか。

闇の神スルシャーナ、その第一の従者としてアンデッドになりおおせた亡者の影は、オルガン奏者の席に座り続け、漆黒のベールを顔面に垂らしたまま、微かすかにも動かない。

アルベドもまた、時が来るのを待つように、聖域の中に居座り続ける。

黒い色のオーラ——彼女の主人たるアンデッドのそれをまどわりつかせたまま、彼女は待ち続ける。

## 第二章 —— 番外席次 魔導王の潜入

／The MAGIC KING's sneaking in

「東都が壊滅したらしい」という報せ——噂が、法国の首都である神都を席卷していた。

実際に東都からの大量の避難民を受け入れ、大量の配給列がならび、仮設の集合住宅が魔法で敷設され、何より、大量の負傷者——軽傷・重傷を問わず、大量に神都郊外へ搬入されている。従軍した息子を探す母の声や、母とはぐれてしまった嬰兒の叫び。人と人の人の濁流で、避難所となった神都郊外は埋め尽くされていた。同時に、大量の死亡者の山も。東都蹂躪を開始した当初に、エルフ王によって弑逆された軍人や市民が最初に避難者の列の先頭を行ったが、治療の魔法の甲斐もなく、落命するものが多かった。父を失った娘が悲嘆の涙を流し、重傷だった子らを治せなかった神官につっかかる父や母の姿も多い。

まさに、混沌を絵にかいたような状況下にあつて、その声は冷静に部下の名を呼んだ。

「どうだ、アウラ」

避難民に扮した十代後半という黒髪の少年が、世渡り上手の仮面を顔面Ⅱ両耳の位置にかけた男装の闇妖精に問いかける。

法国では奴隷制が生きており、森妖精・エルフなどの売買が盛んだと聞く。ダークエルフの入荷の報せはここ数年ないらしいが、とりあえず守護者たち二人をそのような業者の目に留まらせるのは不快の極みでしかない。今回の任務は潜入を主とする。とにかく、正体を露

見しないアイテムに加えて、アインズは幻術でモモンを幼くした少年の姿で、事なきを得ている。

野伏<sup>レンジャー</sup>として長けたアウラは特殊技術<sup>スキル</sup> “空の目<sup>スカイ・アイ</sup>” によって、アインズが指定する範囲を目視・探査する。

「目視可能範囲、および探査可能範囲内に、アルベドの存在は確認できません、ア——サトル、様」

言い直したアウラを、アインズは褒めちぎるように頭を撫でた、

「そうだ。今の私は “サトル” という名だ。……魔導王の名は決して、口に出してはならんぞ」

えへへと微笑むアウラと、小声になるアインズ。

どこで誰が聞き耳を立てているやもしれぬ状況だ。法国領内で、アインズを “様” 付けするようなものがいれば、非国民の烙印を押して詰問してくるだろう。そんな面倒をかかえる余裕など今はない。

ちなみに、今回の潜入任務は、実行する上でデミウルゴスやセバスには難色を示されたが、なんとか押しとおした。ついてこようとするシャルティアやコキュートスを説得するのはなかなか面倒ではあったが。

元氣一杯に答礼を返す少女に対して、女装した闇妖精<sup>ダークエルフ</sup>の弟も追隨する。

「サトル様は、あの、どうして、その、こちらに？」

「無論、目的があつてのこと——だが」

アインズは言葉を斬って周囲を眺めた。

アルベドがいる可能性が高いのは神の都にある “聖域” とやらだろう。そこに、彼女を支配下においた番外席次 “絶死絶命” がいるという情報は掴んでいる。元漆黒聖典であるアインズのシモベ——クレマンティーヌの証言であつた。

しかし、アインズ——もといサトルは、東都の避難民たちを飽くことなく眺める。

「私が経験したことのない戦争を、この身に味わえるかとも思つてない」  
アインズにとって戦争は、魔法一発で現れたバケモノ五体で敵軍を蹂躪したり、人質を取る亜人を殲滅し自陣領を奪還したり、あるいは

部下コキョウトスの一人の成長を期して徹底的に手を抜いた後の、絶対的な示威行為ばかりであった、

しかし今回、ここにある戦争は、違う。

今までとは種類が違うというべきか。

救護所のひとつをのぞき見る。

「薬は、薬はもうないのか？」

「おれは、もうダメだ、ほかのやつを」

「いたい……痛いよ、母さん……おかあさん」

「しにたくない……しにたく……な……ッ——」

「頼む……妻と、娘に……愛している、と……伝——」

「くそ。こいつはもうだめだ！ 茶毘だびの穴に持っていけ！」

「神官たちの魔力はもう空だ！ とにかく傷を塞げ！ 傷口を縛って少しでも血を止め続けろ！」

神都からの援助はまだかたがなり散らす現場責任者——なんらかの部隊長クラスでは、ここにいてはすべてを救うことは不可能に近い。

それでも、彼は己の職責を守り通すだろう。

聖王国での領土奪還戦でも、こういう光景はいくらでも見た。死んでいく若者。恋人に託ことづけを残す兵士。それらをアインズは救わなかった。そもそも救いきる手段を持ちえなかったし、何より、ナザリックの利が薄いと判断できた。カルネ村で行われた虐殺の被害者——レベルの低い村人でも蘇生させ得る魔法も使用しなかったのと同じように。

アインズは心動かされなかった。

その本性は、アンデッドだから。

自分が無数に持つポーションを与えれば、ある程度の数の人間は救えるだろう。それによって恩義を買うこともできるはず。しかし、そうはしなかった。

（俺はこれから、この国を地獄に落とすだろう）

三日後にまで迫りつつある、魔導国と法国の交渉期限。それを超えればどうなるか……そのための犠牲となる法国の民は、果たしてどこまで膨れ上がるのか。

(1500万人、か)

法国の総人口を聞くと、さすがに存在しない背筋が怖気で震えるのを感じる。

1500万人を殺戮するとしたら、どのような魔軍によるものか。北からの攻め手は十分。西の聖王国や亜人領などからの戦線も手配済み。

(だが、まさか、こちらが戦いを仕掛ける前に、東の都が「陥る」とは) 噂話で聴くと、漆黒聖典——法国の最精鋭部隊まで投入されたが、それでもエルフ王は東街道を進み、街々を侵略を続けているらしい。

馬鹿げていると一笑にふす法国民は多かったが、エルフ王の強さが現地人のそれを超越するなら、それもありえるだろう——陽光聖典を一夜もかけず壊滅させた超越者<sup>オーバーロード</sup>たるアインズのように。

(エルフ王と会って、こちらの陣営に加わるか交渉すべきか? —— いや、これほどの力を誇示し、それを発露<sup>ちゅうちよ</sup>することを躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>しない個人だ。『品がない』。沈黙都市のクストや幽霊船のキャプテンのように、理知的かつ従順というわけがない。最悪、敵対する可能性の方が高い、か)

エルフ王への対応を敵対の方向で調整するアインズ。法国を利するつもりは毛頭ないが、それでも、アインズは場合によっては彼を止めねばならなくなる。

「神都で、法国の神官長どもがいるはずの神殿各所をめぐってみたが、アウラが感知できなかったのは意外だった」

「申し訳<sup>ご</sup>ございません、サトルさま。いっそ、中にまで入って偵察できればよかったです」

「いいや。気にするな、アウラ」

アウラの探查能力で、アルベド一人見つけ出せないというのは憂<sup>うれ</sup>うべき事態だ。

聖域とやらの力による感知阻害だろうか。あるいは、単純に「神都にいない」という可能性もあり得るとみて、こうして東都からの避難民が蔓延<sup>はびこ</sup>る郊外に足を運んでみたが、最精鋭部隊の中でも最強と目される番外席次の姿さえ確認できない。やはり、エルフ王討伐の任に就

いたとみなす方が正しいのか、正しくないのか。

「しかし」

森の奥地に進みつつ、アイنزは法国の首都——神の都をあらためて振り返る。

感嘆に値する都だった。墮とすのが惜しいほどに。

六大神を祭る神殿を中心に都が築かれたような街なみで、多数の防壁や隔壁、巨大な堀などを有し、有事の際には——つまり戦時下の今において状況に対応する力を発揮できる点が素晴らしい。

鏡で覗くのと違う、生の景色——これまでアイنزが見てきた人間の国家の仲では最上級に位置するといっても過言にはなるまい。

「クレマンティーヌ」

「はッ」

アンデッドとして製造可能にまで存在を昇華させたアイنز直属の部下は、白いマントに身を包み、千変万化の仮面マスク・オブ・カメレオンによって人相を変えているが、高位存在たるアイنزやアウラ、マールレの目を誤魔化せるものではない。

——彼女に気づくものがいたとしたら、そいつは法国枢要部に近い存在、と見做みなしてまちがいないだろうし、クレマンティーヌ自身、アンデッド化によって身体能力は強化されている。彼女が知っている神官長なり補佐官なりを見つけ出すのは容易よういだろうと思われれる。

「とりあえず、十番まで」連れてきてしまったが——釣りで言うところの「エサ」をやらせる、我が不徳。今は状況が状況だ。許せ」

「いいえ、まったく構う必要はございません。私は此度の作戦の「一番手」を担う榮譽を預かったも同然。『二番』『三番』のものらが、悔しがる姿といったラ——」

「どうした？」

「『六番』の目をくらんくください、ア——サトル様」

言われるがまま、アイنزは自己の使役したアンデッドと視覚共有する魔法を詠唱する。

目に映るのは、四十代ほどの男性とその補佐官という風情がある姿だ。

クレマンティーンヌ “一番” は、その男の素性を説明する。

「今『六番』がみておりますのは、土の神官長、レイモン・ザーク・ローランサンと、その補佐官、エンヘラ・リード・ガヒーです。二人がいるのは土の神殿特区……ここ神都郊外からは少々距離があります」

「ふむ。奴らを即座に捕らえ、アルベドの所在をなんとしてでも聞き出してやりたいところだが——法国の神の都は〈転移魔法〉対策が張り巡らされているのだったな」

ここは敵地。

ナザリックに送るにしても、転移阻害の神の加護とやら——正直、邪魔くさくてうっとおしいが、神都防衛の観点から言うと、絶対に必要な措置なのだろうと理解できる。

教義としては『神の地を己の足で闊歩<sup>かっほ</sup>できないものは不信仰者である』という古臭い戒律のせいでもあるらしい。最高位の転移である〈転移門<sup>ゲート</sup>〉であれば使うこともできるが、あまり長距離をとばせないのというのは、さすがは神の都、というべきか。

「アウラ、捕獲する”ことはできるか？」

「かつしこまりましたっ！ サトルさま!!」

敬礼したナザリックの第六階層守護者の片割れは、もうひとりをアインズの護衛に残して、一瞬にして姿を消す。〈透明化〉に類する魔法ではなく、単純な脚力によって、ここから土の神官長がいる特区とやらに “跳んだ” のだ。

「ん？」

レイモンは違和感と呼ぶには不適格な、明快な敵意を感じた。

「神官長？」

エンヘラたち補佐官が足を止める神官長を怪訝そうに見やる、直後。

「やあ、やあ、お久しぶりでース♪」

全員が度肝を抜かれたように、聖女風の白マントに身を包んだ女戦士を見やった。

「ク、クレマンティーン！」

驚嘆するレイモンに続き補佐官らが続く。

「元、漆黒聖典・第九席次？」

「『疾風走破』か？」

「ズーラーノーンの幹部に選ばれた？」

「巫女姫の最秘宝を奪った大罪人が、何故ここにつ?!」

戦闘態勢を取るエンヘラたち。だが、クレマンティーンはあくまでも『エサ』——『囚役』でしかない。

「ほいっと」

エンヘラだけが振り返って気づいた、アウラの声。

どこのだれか分からない——装備された『マスク・オブ・ゴイイングスル世渡り上手の仮面』の効果で、普通の人間にしか見えない少年が、土の神官長・現在の六大神官長のまとめ役の首根っこを掴み、信じられない膂力でさらっていった。目にも止まらぬ速度。追うことや攻撃を仕掛ける猶予すらない。

……わずか数キロの距離など、彼女にとっては跳躍可能な距離にすぎないのである。

代わりに、クレマンティーンの凶悪な声が応じた。

「悪いけど、エンヘラちゃん。私の任務に付き合ってもらおうよ！」

「くそ、いったい、なにが?!」

クレマンティーン『六番』が、三日月を思わせるような黒い笑みで補佐官たちを殺戮し、貫通爆裂魔法のステイレット三本同時で、エンヘラの魔法防御を貫こうとしていた。



「お連れしました、サトルさま！」

「うむ、よくやった。アウラ——」

「げほごほ。い、いったい、なにが？」

一瞬の出来事であった。法国の空の風を切る感触さえ刹那の出来事であった。

突如として法国の神都中心部から郊外の避難所地帯へと連れてこられた土の神官長は盛大に尻もちをつき、黒髪の少年を——謎の双子を引き連れ、さきほど土の神殿特区で居合わせたはずのクレマンティーンが従属の姿勢で片膝を落とす謎の存在を凝視する。

「はじめまして、になるのかな。土の神官長レイモン・ザーク・ローランサンくん」

神官長として——元、漆黒聖典で戦い続けた英雄の瞳で、その少年の膨大な敵意を、見る。

「き、貴様は!?!」

「んん？ さすがに、この姿では示しがかんか——」

黒髪の少年は周囲に結界型の魔法を張って——〈認識阻害〉という、ズーラーノーン接收の際に新たに得たマジックアイテムを使って、東都からの避難民たちの視界から悉く外れる。

あの威容を、骸骨の恐怖そのものという異形を、法国の民が見る心配はなくなった。

そして、仮面を外し、幻術を解いて、少年は魔導王としての姿——骨の異形に立ち戻る。 “絶望のオーラ” は相手のレベルを考慮し I<sub>いち</sub>でとどめた。

レイモンは瞠目<sup>どうもく</sup>して言葉を失っている。

「……………馬鹿、な……………ま、まど、魔導?」

「馬鹿などは失礼だな? 私は、アインズ・ウール・ゴウン魔導王——まさか、君ほどの地位の人間が、私のことを知らないとは言うまいな?」

レイモンは混乱している。

クレマンティーンの登場から数瞬にして、敵国の首魁たるアンデッドと対面を果たすなど、想定<sup>らりがい</sup>の埒外であった。

そして、彼は気づく。

「……………あなたは、あの御方では、スルシャーナ様ではない」「は?」

唐突な理解と判断に、今度は魔導王の方が虚を突かれる。レイモンは四十代……十代のころから漆黒聖典で活動してきたが、その二十年来の年月が、確実に「あの御方」と発するオーラとは違うと、わかる。わかってしまう。若い隊員であればいざ知らず、あの御方の——オルガン前の席で硬直される時間が長くなって以来からも、レイモンはずっと、「彼女」を見てきた。

闇の神……八欲王によって弑しいされたスルシャーナ。

その、第一の従者たる、彼女を。

「予想はしていた。あの御方が何の反応の示さないのも当然か。魔導王アインズは、あの御方を創りし創造主にあらず——それが知れたな」

「待て。何の話だ?」

「さあ、殺せ。言っておくが支配ドミネイトの対策はされている——我ら神官長は、けつして敵国に情報を売り渡すことはしないし、できない——そういう装備を体内に仕込まれているのでな」

「……」  
見事な覚悟ではあったが、アインズが第一に知りたいことはひとつしかない。

「土の神官長——番外席次「絶死絶命」は、どこにいる?」

「なに? なぜ、そんなことを?」

予想外の尋問しんもん内容に、レイモンは眉をひそめた。アインズは無いを舌を鳴らしつつ確認を進める。

「私を知りたいのは、番外席次の居所だ。やはり神都にいるのか? 神都の聖域とやらか?」

「聖域のことまで知っていたか……当然か、クレマンティーンやズーラーノーンが、そちらの手に落ちた以上は」

「奴ヤツはドコにいると訊きいている——ツ!!」

片足で大地を撃砕・激震させてしまう魔導王。

守護者二人がぐらつく大地にたたらを踏んで、クレマンティーンが遠い木陰で身震いしながら事の次第を眺めている。怒りや苛立ちは一瞬で鎮静化されるが、自分がそこまで焦っていることに気づかされる。火の瞳が普段よりも熱く大きく燃え上がっているような気さえるアインズであった。

一方で。

〈恐怖〉の対策を超えるほどの恐慌状態、その半歩手前ぐらいのレイモンは、冷や汗を滝のように流し、歯が鳴るのをこらえながら、先日、彼女へ与えられた出撃命令——最高神官長命令を魔導王に打ち明ける。「ば、番外席次、彼女は、エルフ王討伐の任に就いた——当初は魔導王の侵攻軍への対策に温存するはずだったが——そういえば、その時に誰か“協力者”を連れていくとかなんとか?」

「そうか。わかった」

アインズはレイモンへ心の底から感謝しつつへ即死<sup>デス</sup>の魔法で殺した。

綺麗な死体となった土の神官長への興味をなくし、アインズは即座に命じる。

「勇敢な奴だ。殺したままにするのは惜しい、死体はナザリックに持ち帰ろう。神官長の暗殺は確実に法国の国力低下を招くだろうな。よし、クレマンティーン、エサ役は終わりだ。おまえが死体<sup>レイモン</sup>を運び出せ。“六番”たちも即座に神都を離れ、ナザリックへさがらせる——アウラ、マール」

「は、はい!」

姿勢を正す守護者二人。

「私はエルフ王のもとに行く。——そこに番外席次がいる——そして」

アルベドも、そこにいるはず。

世界級アイテム<sup>ワールド</sup>をそれぞれ身に帯びた守護者二人を連れて、アインズは東の街道を目指す。

## エルフ王VS番外席次

King of elf VS Extra seating  
order

フランスの東都、その残骸とも呼ぶべき地を、彼女は訪れた。

「なんてことだい」

年季の入った勇壮な声の持ち主は、破壊された都市の光景に嘆息をあげつつ、彼女なりの祈りの型を目前で切る。彼女の師から教わった、死者への追悼であった。

「それにしても、よくぞここまで——」

十三英雄が一人・エルフ女王の遺したバカ息子——現、エルフ王の仕業しわざと聞いて呆れかえる老婆。腰に帯びた剣が重く鳴り響く。

ツアーに頼まれ、ユグドラシル由来のアイテムを探索・収集するよう依頼されていた彼女は、破壊された東都を見て眩いた。

「今回の件。世界の盟約に反するわけでもないが、さすがにこれは、止めたほうがよくはないか？」

彼女は虚空へと声を飛ばす。

しかし、その声を受け取ったものは、ここにはいない。

「ああ、そうじゃな。フランスが興おこつてより600年——不滅の国家など存在せぬ、だが——」

リグリット・ベルスー・カウラウは、フランスが減びることが現実味を帯びつつある事実を受け入れ切れずにいる。

自分自身、国を棄てた——世界を護る大義のために——そのつもりではいたのに、いざ目の前になると、胸の奥がくすぶってならない。

「わかつとる。ツアー。余計なことはせん。法国自体にエルフ王を止めることが出来なければ、それまでの話——そもそも、戦争を仕掛けていたのは法国の方が先なんじゃからな」

それでも、彼女は内心で思う。

なにしろここは、彼女の生国——生まれ故郷であり、暗黒邪道師から「死者使い」の号を受けた、思い出深い土地でもある。彼女自身が生まれ育った村は北の都の郊外にあった。ちょうど、カツツエ平野との境目に位置する、小さな開拓村であったが、今ではもう、魔導国とやらの開拓事業以前から、その面影さえ残っていない。十三英雄最後の戦いで多くの国が亡び、多くの土地が焼かれ、多くの命が散っていった。

リグリットたちの奮戦と敢闘、そして、何よりも偉大なアイテムの恩恵——否——呪いにより、十三英雄最後の敵・神竜は封殺された。亡骸はツアー達の手で可能な限り解体され、大陸各地に隠された——もう二度と、この「龍」が復活しないことを願って。

だが、結果として、十三英雄たちの多くはエルフ女王を含め多くが死に絶え、彼らを率いた最強のリーダーと、彼の子を身ごもっていた彼女は、死んだ。

思い出しただけで祈る手に力がこもる——当時の自分に、もつと才が、能が、力が、技が、術が、れべるとやらがあれば。

彼と彼女の悲劇を防げたのではないか……。そんな埒のない思考に囚われて、2000年を流離ってきた。

今ではリグリットは人類最高峰の力の持ち主となり果て、信仰系魔法や精神系魔法の影響で老化を最低限に抑え、寿命による死を先延ばしに出来ている。

まさに生きた伝説——十三英雄の「死者使い」は、この地に凝る死の瘴気を蒐集しつつ、まだ息のあるものを見つけた。

瓦礫に肩を預ける、立派な鎧を着込んだ戦士は、意識不明瞭な眼差しで、リグリットの死に装束ならぬ不死装束を仰ぎ見る。

「おお。おまえさん、まだ息があるね……待て、その「槍」は！」  
鎧の豪華さや強壮さなど目に入らなくなるリグリット。

老婆が注目したのは、どこの誰が見てもみすぼらしく古ぼけた、一本の槍。

だが、ツアーの審美眼——現生竜王の感知力にしてみれば、それは「世界一個」に等しい、法国の最秘宝である。

その装備を託されえる国の戦士となれば、該当者は一人しかない。

「——そうかい。アンタが当代における漆黒聖典の第一席次あたりかい？」

第一席次と呼ばれた若者は、わずかに警戒しつつもたずねる。

「……それを知る、あなたは……いったい？」

「わしかい？ そうだね。冒険者、は、もうやめて久しい。とりあえず、オマエさん達の古いセンパイということで、納得してもらおうかのう」

リグリットは第一席次に、自分が持っていたポーション瓶を開けて飲ませた。神の霊薬には遠く及ばない劣化ポーションではあるが、第一席次は槍を杖に立ちあがれるまでに回復する。

そして、彼は東都の瓦礫の山を手探りで掘り返しはじめる。

「いったい、どうしたね？」

「このあたりに、仲間たちの、死体が……持って帰って、やらないと」腐って土に還ってしまえば、蘇生することが難しくなるから。

「そんな状態でよくぞ死人にかまってやれるね——」気に入ったよ」

リグリットは魔法を唱える——〈死体回収〉と。それで東都の残骸の下敷きになっていた第二席次、第三席次、第六席次、そして第四席次の死体を見つけ、「宙に浮かせた」。

そして、それらをどこぞより召喚した棺の中に収める。

「このままだと腐敗し劣化する一方だからね。わしの「棺」に入れて、少しでも劣化を防いでやるよ」

「コフィン——！ 屍衣シコロウダの上位アイテム——すると、あなたさまは、

あの「死者使い」のツ?!」

「そう呼ばれることも多いねえ」

そういつてリグリットの周りを盾のごとく浮遊する棺の群れ——  
合計して十一個。

第一席次の仲間たちの遺体を収めた以上の棺を、指を鳴らして瞬時に消し去るリグリット。

「さて。残る問題はおまえさんなわけだが」

「私は、大丈夫、です」

「だいじょうぶなものかね。エルフ女王のバリスタを受け流したのだろうか？ あの〈致死毒〉〈即死〉属性付与の巨大弩砲は、仲間内でも色々物議を呼んだものさ。まあ、神竜との戦いでは何の役にも立たず終わってしまった遺品だが……自分の身が第一席次だからと言って、無理をしちやいかんね」

リグリットは懐かしい思い出話を花開くでもなく、淡々と彼らを追いつめた十三英雄の遺品について語った。

「安心おし。『死者使い』であるわしだが、然るべき処置を施せば、おまえの仲間たちも蘇生できる。聞いたことないかい？」

「は、……はあ……」

「それで、肝心のエルフ王の行方じゃが？」

リグリットがたずねた時、日は落ち切っていた。

かの王に襲われた神都方面の街々が、煌々と夜を照らす篝火かがりびとなつて、二人の行く先を示している。

「ここらへんかな？」

やる気のない声と共に、黒白の髪に白黒の瞳の少女は街道の真ん中に戦ウォー鎌サイスを突き立てる。

「エルフ王ね、アンタら魔導国は、何か情報とか持ってるの？」

「いえ、とくには」

そう答えたのは、濡れ羽色の黒髪が美しい、純白のドレスを着込む

女悪魔、アルベド。

「我らが魔導王陛下も興味の対象とはみなしておりました。ゆくゆくは、アウラやマーレを連れて、観光がてら様子を見に行くというご計画もあつたはず」

「へえ。意外とナメくさつてるといふか。それとも余裕綽々のあらわれ？」

「無論、我が国とナザリック地下大墳墓は神聖不可侵。守護者らも無敵の強さを誇っておりますので」

「はは。無敵だなんて、よくもまあ大言壮語できるわよね？ 現に、私の支配下に下ったアンタが？ 頭の中を覗いてみたときの、「1500人侵攻の時」は、第八階層とやらまで蹂躪された——敗北した程度の連中なんですよ？ 守護者つて連中？」

ケラケラと挑発するように嗤う番外席次だが、アルベドにとつても、もはやナザリック地下大墳墓のことなど「どうでもいいこと」。笑顔で無視することができた。今の彼女の意中にあるのは、目の前にいる協力者・番外席次かのじよを使つて、自分の欲望のぞみを達成すること、ただその一事のみである。

「お？」

「ようやく、こられたようですね」

二人の視線の先に、月光の中で淡く輝くような金髪をなびかせた青年が現れた。

ここを抜けられたら神都という街道を張つていて正解だった。

わざわざ蹂躪される街を助けに行くような「余分なこと」はしない番外席次とアルベドを見つけ、エルフ王は歩みを止める。

「ほう。次の守り手は随分と犯しおか甲斐のある雌メスのようだが……待て。貴様のその耳？」

「あ？」

番外席次が不快気に長耳を髪の下に隠した。

エルフ王はそれにも構わず、番外が半森妖精——ハーフエルフである事実を、確認。

「なるほど。ようやく会えたわけだ。——我が娘に」







髪の毛、珍しいエルフの恋人を連れた——？

「……きい、さ、まあ」

かつての思い出などどうでもいい。なぜ、このような時に彼と彼女を思い出したのか、まるで解げせない。現実の痛みをこらえることすら、満足にできないでいるエルフ王。

月光の影に、死の足が見える。

倒れ伏す芋虫を睥睨へいげいする番外席次の、その白黒の瞳には、何の情もありません。

「き、さま、いったい、なにもの、だあああああッ!？」

戦ウォー鎌サイズを天高く構える半森妖精ハーフエルフは、黒白の髪をなびかせ、白黒の瞳で嗤う少女は、死の神にして闇の神——スルシャーナの遺物を振るって、エルフ王の首を刈り切った。

「あ」

てんてんと転がる敗亡の王の首を、番外席次「絶死絶命」は任務のため回収する。

「私は何者か——だって?」

エルフ王だったものの首を思い切り踏みしめ、彼女は苛立ちのまま街道の森を無数に引き裂き伐採してしまう。

『そんなことなど関係ない』と言えなかった番外席次「絶死絶命」。

彼女は吐瀉としやするように告げた。

「それは、私が一番、知りたいことだわ」

番外は、エルフ王の半開きの眼に、思い切り唾つばを吐きかけた。

刈られた際に短くなった金髪をひつつかんで、大量の血を街道の大地に降らせながら歩き始める。

番外席次は自分に任務を下した最高神官長ジイのもとへ向かうべく〈転移門〉を開く。

神都の転移対策も、数多くの異能タレントを持つ彼女には通用しない。

アルベドは番外席次の後をついていくようにして、〈転移門〉のうち

に消えた。

魔導国の法国侵攻まで、残り二日に迫る状況下の出来事である。

## 闇よりの神託

／ From darkness, oracle

番外席次 “絶死絶命” の戦鎌ウオーサイズによつて、見事に斬首されたエルフ王の首。

翌日、明朝みようちようから、彼の首は槍の穂先に貫かれ、法国神都の大広場に晒さらされた。

見物客でごつた返す広場は法国軍で管理統制が敷かれていたが、いっ激発するやもしれない爆薬のごとき有様であった。

東都の民を中心に、法国の人々は祖国を蹂躪じゆせせんとしたエルフの愚王ぐおうへの呪詛じゆそを吐き連ね、その死にざまを口汚く痛罵つうばし、石礫いしつぶてや汚物を投げ続けて、森妖精の王を汚辱の私刑にかけてつづけた。

「ざまあみろ、耳長みみながごときが！」

「神の国たる法国にかなうわけもない！」

「私の妻と、娘を返せ！ この凌辱王めが！」

「我が国と民を戮なぶり者にした罪、地獄へ落ちて償つぐなうがいい！」

喧騒は魔女を焼く大火のように燃え広がるばかりであった。積年に積もりに積もった薪たきぎと油が、斬首された王の前で炎上し続けている。

大広場に満ちる熱気の渦は、一時ひとときの勝利に酔いしれ、長年の敵を嘲虐ちょうできる事実じじつに、一時的ながら支配された。

魔導国の侵攻まで、二日に迫った、この時に。

「……あれは、ダメだな」

聖域を有する神殿から遠く離れた大広場の騒乱に、光の神官長イ

ヴオンは肩をすくめてみせる。

火の神官長ベレニス、水の神官長たるジネディーネ老も同意見であった。

「まるで自分たちにはもう敵なしという態度と言行——これから『魔導国と戦争しよう』という重要な時に、この熱狂ぶりは、——いただけないわね」

「やはり……エルフ王の死は公表すべきではなかったか？」

「だが、東都方面の街々であれだけの暴虐を繰り広げたエルフ王だ。唐突に姿を消したとあつては、無用の混乱を招きかねない」

イヴオンの言は正しく、皆が納得した上で、首は晒された。

それこそ。今度は自分の住んでいる地域がエルフ王の凌辱と蹂躪にさらされるのかという恐怖が沸き立つだろう。何より、エルフ王を「見失った」などと公表すれば、法国首脳部は無能集団かという誹りまぬがを免れない。絶対に、エルフ王の討伐は公表せねばならなかったのである。

そうしなれば、国内は混乱の極み——魔導国との戦争どころではなくなる。

「あるいは、この時期のエルフ王の暴虐も、魔導国の作戦の一環か？」  
「ありえん——そう断言できぬ我が身が、口惜くちおしい限りじゃよ」

魔導王の智謀の糸は、大陸全土に散っていたズーラーノーン壊滅にまでこぎつけた。だとすれば、エルフ王をつかって、自己の軍略と戦術に有利な状況を編み出した可能性は、ゼロとはいえないだろう。もはや法国の民草は、魔導国との戦いなど忘れたように、エルフ王への怨嗟の炎にその身を焦がしている。わざわざ奴隷のエルフを連れてきて「おまえたちの王は死んだ！」と絶望させる悪趣味な主人まで湧く始末だ。魔導国の示した譲歩要件を飲むことは不可能であるというのに、それすらも忘れた様子で、たった一人の王の死に、狂熱をあげている。

あれでは、いざ魔導国と開戦するとなった時に、どれほどの士気と国威が残っているか、まるでわからない。

そうでなくとも、法国国内の戦力は衰退する一方であるというの

に。

「……エルフ王との戦いで、漆黑聖典が、第一席次まで投じておきながら、早々に事態を鎮静化できなかったことは、手痛い失敗じゃった」  
「仕方あるまい。いかに戦力減耗していたとはいえ、第一席次をはじめ、彼らは我が国の最精鋭。彼らでどうしようもできないほどであったエルフ王の実力を看取しえなかった、我々の失態といえよう」

「しかし、かのエルフ王がここまでの戦巧者だったとは」

「奴はここ100年、実戦の場に出たことがない。戦力を見量ることは、ほぼ不可能であった上、戦場に出すのは女エルフばかり」

「おかげで法国の捕虜収容、いやき隠す必要もあるまいか、エルフの奴隷市場は大いに潤ったが、今はどうでもよい話じゃな」

重要な問題はひとつに絞られる。

漆黑聖典、彼らのほとんどはエルフ王によって弑された。生き残っているのはわずか数人。最初から戦いに参加することを拒んだ第七席次「占星千里」。戦場から舞い戻ってこれたのは、第五席次「一人師団」クアイエツセ・ハゼイア・クインティアと第十一席次の二人のみ。第十と第十二席次は死体となって運ばれてきた。蘇生の魔法はかけられたが、生命力の減衰でしばらくはまともに戦うこともできないだろう。

残る聖典上位メンバーについても、良い結果は生まなかった。諜報に出ていた風花聖典の報せで、エルフ王の取り出した巨大弩砲——バリスタに、なすすべもなく蹂躪された。唯一拮抗出来ていた第一席次は、都市から退避し損ねていた民を護るべく行動し、戦闘不能に陥るという事態にまで追い込まれたらしい。諜報が主である彼らではあるが、戦闘後、第一席次たちの回収に向かうも、その間に何者かによって回復された第一席次は、エルフ王を追って発ったという。

その後の行方は知れず、風花聖典隊員たちでも、その足取りはようとして知れない。

「最高神官長」

ご決断を。

そう促す闇の神官長・マクシミリアンは言い放った。書物を

フロートイング・ボード  
〈浮遊板〉で浮かべた彼の意図は、あまりにも明白であった。

彼は述懐を続ける。

「法国が亡びる事態、これだけは避けねばなりませんまい。魔導国からの要求を呑み、即時、降伏の儀を」

「き、貴様、正気か！ 気でも狂ったか!?!」

神聖な領域にはふさわしくない、怒号。

蛮声をあげたのは、風の神官長ドミニクであった。

普段は温厚そうな老人という彼であるが、元陽光聖典隊員として、数多の異種族を殺戮してのけた実績を誇る。その敵意はまさに烈火や氷雪のごとく苛烈であった。

ドミニクは主張する。

「600年の昔、我ら人類を守護したもう六大神——神々の遺せし最秘宝を敵国に、アンデッドの国にくれてやるなど、言語道断だ!」

無論、マクシミリアンも黙したままではいられない。彼は彼なりの意見・正論をぶつける。

「最秘宝は他にもある。ケイ・セケ・コウクのみを失ったからといって、それで国が亡ぶものか!」

「何を!!」

「愚かなことはやめなさい、二人とも!」

二人の間に割っていったのは、火の神官長ベレニスであった。

「我らがこうして割れること・内紛することこそ、魔導王の邪智陰謀じゃちいんぼうであることを思い出しなさい!」

二人は互いに殴り掛からん勢いとなっていた自らの行いを謝した。

しかし、事態はそれで済む話では、ない。

対立する意見をまとめる必要がある。

だが、その役を担うべき土の神官長だけが、この場には欠けている。

「あのレイモンが」

「行方知れず、とはな」

「魔導国の仕業に相違なからうがな」

元漆黒聖典という護国の英雄。大量の補佐官が同行し、中でもパラダイン老の魔法すら防いでみせる力を有するエンヘラがいながら――



―諸共に行方をくらませてもらった。

「十中十二……いや十五で、魔導国の所業じやろうて」

「それ以外にありえん」

「レイモンは元漆黒聖典、そんじよそこらの暗殺者やワーカーに殺されるようなタマではない」

「こちらが要求をのむ前に侵攻してこんとも限らんど、これは」

「だからといって、あんな要求を呑むなど！」

できるものか。

そう唾棄するドミニク。神聖なる神殿内でなければ唾でも吐きかけていただろう渋面で、法国の未来を憂う。

「レイモンよ……おぬしこそが、次の最高神官長であつたらうに」

「最高神官長……」

全員が納得のため息を吐いた。

一同の中で最も悲しみが深いのは、間違いなく彼であつた。

レイモンは六神官長のまとめ役としての責務を遺漏なく發揮し、その功績と業績も申し分ない。何より、100歳を超える神官長にとつて、ここで40代の若い後継者を失うことは、あまりにも大きな損失であつた。

最高神官長は、項垂れていた姿勢をまっすぐに戻す。

「かくなるうえは、あの御方の指示を仰ごう」

「御方……それは！」

最高神官長が言おうとしている内容に、全員が気付いた。そして、納得もできた。

番外席次によって守られる聖域、その最奥であるパイプオルガンの席上に座す、スルシャーナ第一の従者。

しかし、

「あの御方に、我々の声が届くのでしょうか」

「届くことを祈りましょう——高位アンデッド——上位死霊ハイレイイスの王侯となりはてるまで、この国のために戦い続けてくれた、ルーファウス様のもとに」

全員の意思は固まった。

もつと早くこうしておけばという思いが頭をよぎるが、彼女は不死者にして異形種<sup>モンスター</sup>。ズーラーノーン盟主の座というのも、実のところはただの飾りであり、実務や聖務の面では、副盟主の黒竜——ピーターがすべてを担っていた。

神官長らは、最高神官長を先頭に、静やかな足運びで、それ自体が儀式のごとく、神殿最奥の聖域に集う。

窓からの薄明かりにルビクキューを久しぶりにイジくつっていた番外席次が、雁首揃えてやってきた最高神官長らの決定を推理する。

「とうとうサラの奴に意見でも聞く気になった？」

不敬な、という声を全く黙殺して、最高神官長は儀礼的に、誠意の最高守護者・番外席次「絶死絶命に」最敬礼を示す。他の神官長らもそれに倣った。

「我等が神の一人・闇の神・スルシャーナ様のご神託を賜りたく」  
「あつそ。勝手にどうぞ」

儀典もなにも関係ない様子でルビクキューで戯れる番外席次。この若さと美しさで、ここにいる誰よりも長命な人生を戦いに費やしてきたとは、到底思えない。しかし、それこそが事実であった

神官長らは聖域——聖堂の中に足を踏み入れる。

その榮譽に耽溺<sup>たんでき</sup>したのも、つかの間。

「ん……あれは？」

信徒席の端の方で、赤いブロック状の鞆を足元に置いた女性が見えた。最高神官長は思い出す。

「番外席次——あの娘の協力者じゃ」

とはいうものの、彼自身その姿を確認したのは初めてのこと。

黒髪の女性で「純黒」のドレスを着込んでいるが、顔つきは判然としない——真っ黒い仮面に覆われているというべきか——悪魔の扱う魔法のひとつ〈暗黒<sup>ダークネス</sup>〉の状態異常を応用した身分偽装の力であった。ドレスの色も、これによって変化させているに過ぎない。

そちらへの興味はいったん棚上げとして、最高神官長たちは聖域の奥へ。

かつては600年前。

ここで神々の婚儀が盛大に行われたこともあると聞くが、その面影はもはやどこにも存在しない……魔法によつて清潔に保たれただけの講堂——その当時、婚儀の主役の一人として、闇の神と添い遂げ、その死の果てにアンデッドへと転生を果たし、戦いを続けるうちに高位の存在へ転化した、一人の女性が、今、ここにいます。

全員が総跪拜の姿勢で、オルガン席の端に座る漆黒の影——暗黒のヴェールで顔面部を隠す、死霊レイスのごときアンデッドの背中を見やる。その名を、最高神官長のみが、重々しく告げる。ただの後ろ姿だというのに、気をしつかり保たねば魂を引き抜かれかねない圧を感じる

「ルーファウス様」

これだけでも、彼女の名を構築する一部に過ぎない。番外席次が口にしたサラという女性名と同様に、夫であるスルシャーナに関連する姓名もあるが、ここで告げるのは憚はばかられる。

名の一部を呼ばれたことで、アンデッドの意識が覚醒を果たしたが、身動きできないことには変わりなかった。

自分を起動させる鍵のような名を呼ばれたアンデッドは、臆面もなく最高神官長に訊たずねる。

『——私を呼び出すとは、ただ事ではございませんね。何事ですか？』  
「はっ。至急の事案につき詳細は省きますが」

最高神官長は魔導国と呼ばれる敵国国の出現、および、その要求内容を赤裸々に告知し、尚且つ、頼みの綱の漆黒聖典の大部分が壊滅状況にあることも隠すことなく告げた。

『それは、こまりましたね』

ルーファウスは笑ったようにも聞こえた。笑うしかない状況でもいうべきか。とにかく彼女は、600年の間、けっして過つことのなかった神託を述べる。

『わかりました。それほどの状況では致し方ありません。傾城傾国は、魔導国に譲渡するように』

驚き、抗議の声をあげかける神官長ドミニクは、しかし即座に姿勢を正した。ルーファウスに抗弁するなど、まさに神の意志への反意にほかならない。

『どうか。……どうかフランスの民が救われるように、よき道を、皆で………』

ルーファウスの意識が途切れた。

神託を賜った最高神官長は決議を下した。

「我等フランスは、魔導国に降伏する。武装勢力は解体、首脳部も凍結を容認——そして」

最秘宝のひとつ“ケイ・セケ・コウク”の譲渡が正式に決した。

涙を呑み啜り泣く神官長たちや三機関長ら。

しかし、これこそが、フランスを救う唯一の手段だと、誰もが信じた——信じるしかなかった。

それらフランス首脳部の決定——スルシャーナ第一の従者たるアンデッド、サラ・ルーファウスによる神託を、アルベドは興味なしとばかりに完全に無視して立ち去り、番外席次も一面もそろってないルビクキューを放り棄てて、聖域から姿を消した。

## 降伏調印／アインズVS番外席次

／Surrender signing , AINZ VSE  
extra seating order

「降伏か……」

リ・エステイゼ王国の密談用に使っている私室で、ザナツクはラナーから「あくまで噂ですが」と注釈を入れられる。

しかし、ここにいる二人はすでに魔導国の動向を完璧に把握できている。

「法国が、あのスレイン法国が、魔導国に膝を屈するか……」

これで、この地域の人類史に残る人類国家は、リ・エステイゼ王国のみ、となった。

帝国は既に魔導国の属国と化し、聖王国にしても南北統一と共に魔導国との協調関係を結んでい久しい。そして、竜王国にしても、その動きは、魔導国に利するところが多い――

「お兄様は、いかがお考えですか？」

「考え？」

「このまま、密約に従い、リ・エステイゼ王国の全権を魔導国にゆだねる――という密約です」

「それは、おまえがすでに締結済みの売国文書だろうが。俺の密約は、とにかく『大陸東部に逃げる』……それだけだ」

ラナーが意外そうに目を丸くするのを、第二王子は一笑に付した。

それである魔王の手から逃れられるとは限らないが、噂に聞くブラチナム・ドラゴンロード白金の竜王勢力圏内であれば――ザナツクはそこに賭けるしかなかった。

魔導国宰相であるところのアルベドが支配・拉致されたことで、こ

こちらの監視は手薄。あとは、彼女と自分の運に任せるまま、逃亡の道を選ぶのみであった。

ラナーは咎めるといわけでもなく、兄の自棄にも似た企みが成功するかどうか考えて、やめておいた。

「お兄様のことですから、お父様と一緒に、国と心中するものかと思っておりますが」

「心中か……それも考えないではなかったが」

戦士長の遺した装備を着込み、あの魔王と一戦交える自分を想像して、ザナツクは疲れたような笑みを浮かべる。

似合わないどころの話ではないし、あんな魔軍と正面切って戦う軍などザナツクの手中には存在しない。

家臣に裏切られて首を差し出されるイメージが、現実味を帯びて湧いてくる始末だ。

そんなことは御免被る——故に、ザナツクは、第二王子としての地位を棄て、国を捨てるのだ。

……一人の女を連れて逃避行に奔るなど、数年前の自分では想像もつかなかったことだろう。

「はあ……どうもこうもないさ……すでに、我が国の財政状況は破綻寸前……内乱のあった都市……破壊された市街地……処刑者のリストだけウン千人ときてる……もはや、国家としての体制を保つことすら、難しい」

「そのうえ、反乱分子となりうる元聖騎士長殿——レメディオス様の面倒まで押し付けられましたからね」

不良債権の山を突き付けられているようなものだ。

元聖騎士長の件はともかくとして、これら国務の一切を処理しきる妹の悪魔ぶりは、兄の目から見ても魔王じみて見える。

せめて。

もっと早く自分が王位を継いでいたら。

あるいは、あの戦争で魔導国に大敗する未来を予見できていれば……そう思わずにはいられなかった。

「おまえこそ、これからどうするの？」

「私は勿論、この国にとどまります」

「そして、おまえはおまえの密約で、ナザリックの『外地領域守護者』を拜命し、彼らの軍門に降るか?」

悪魔たちとの取引を、ラナーは否定しなかった。

軽やかな笑みが邪悪な漆黒の色彩を帯びはしたが、もはやその程度で驚き臆するザナツクではない。背中から小さな蝙蝠の翼や天使の羽を生やしたとしても「ああ、そうか」と納得するだけだろう。

ザナツクは静かに論じる。

「レエブン侯をはじめとして、有力貴族もそれとなく国外退去……逃亡を促している……：：：法国が魔導国の支配下に降れば、次は残っている……」  
「……」しかないわけだからな」

「ええ。『人類最後の希望の地』としての役割を持ちうる国——『リ・エステイーズ王国』」

太平洋楽に嗤うラナー。

それでも、ザナツクは平静でいられた。

あの内乱時——ズーラーノーンによる混乱がおこった際、魔導国宰相アルベドを通じて、魔導王との密約を交わした彼だ。

いざというときは、今の地位も何もかも捨てる覚悟でいる……：：：そんな自分を許せずにはいたが、一人の女性との出会いで、そんな生き方も悪くないと思えた。

ザナツクはまもなく出奔する——半病人のごとき精神崩壊者、レメディオス・カストディオを連れて、ナザリックから可能な限り逃げおこせる腹積もりだ。

「おまえはいいのか? クライムを残したままで?」

「だいじょうぶです。クライムは私と共に此処で果て、そしてナザリックの軍門に降る——お父様の最期を看取るのは、私とクライムだけにになりそうですわね?」

悪魔的な嗤笑を両頬に刻む妹を直視できず、ザナツクは首を振った。

「なんにせよ。法国が落ちて、その中の反抗分子が王国へと至るように、方々に働きかけている。……事は慎重に、な」

無論ですと可愛らしく微笑む妹。

その落差は温泉と氷水ほどで、若干心臓を痛めそうになるザナツク。

リ・エステイーズ王国は今後において、「人類最後の要害」「人類の最期の砦」として、アンデッドの魔王の国に立ちはだかるシナリオだ。何しろ法国が亡びれば、今まで人類の守護者ヅラしていた連中が、この世界から消失を余儀なくされる。

もちろん、それを「よしとしないもの」は、法国を棄てるだろう。そして新たな、最後にして最期の抵抗勢力として、人類国家としての自主自立を保っている（という）と怪しいが、少なくとも民はそう思っている）リ・エステイーズ王国、その門をくぐるしかない。

たとえそれが敷設されたレールの上をブレイキなしで走るトロツコに乗るようなことだとしても、抗えいきれるものは限られている。

反攻の旗頭は、可憐極まる第三王女——ラナー・ティエール・シャルドロロン・ライル・ヴァイセルフ。

その護衛役は無論、戦士長の指輪を受け継いだ王女付きの騎士クライムと、ブレイン・アングラウス。

当初はザナツクがその役を果たそうという案もあったが、外見などの求心力に難ありと評され、すげなく却下されており、それを聞いた本人は心の底から安堵した。

人類最期の抵抗の地となる予定の、リ・エステイーズ王国——その王都では既に、ナザリックのいと尊き御身の魔手が、着々と駒を配置し終えていた。

（法国が落ちれば、俺は彼女と共に、レメディオスと共に国を出て、大陸東部——ナザリック勢力圏外に逃げ落ちる——）

腹はくくった。

魔導国宰相が拉致された現状、今、この状況を利用せねば、ザナツクと彼女が救われる未来は存在すまい。

父を残していくことはしのびないが、今のザナツクにとっては、ただの抱えきれない重荷でしかなかった。

（度重なる不孝をお赦しください——父上）



もはやザナツクをザナツクとも認識できない、廃人同然の国王を思う。  
とにかく、あとは法国が無事に魔導国の幕下に加わることを祈るのみ。

「それでは元気でな、我が妹よ」

「はい。お兄様」

可愛らしく微笑む悪魔のような妹との、これが今生の別れであった。

第二王子であることを棄てたザナツク・ヴァルレオン・イガナ・ライル・ヴァイセルフ——否、ただのザナツクは部屋を辞し、小箱を撫でる妹——第三王女、ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフと別れた。

残されたラナーは、兄の行く末を案じるでもなく、ただ、己の欲望をかなえる箱を弄び、自慰に耽り続ける。

法国からの早馬によって、かの国が魔導国との戦争を「避ける」道を選んだことが知れた。

降伏調印式は明日——魔導国進行予定の一日前に執行される予定だ。

「意外と粘ったな」

アインズの総評に、デミウルゴスは跪拝の姿勢を崩すことなく微笑んだ。

「アインズ様がアウラに命じ捕らえた土の神官長、彼を御身自らの手で暗殺できたことが決定打となったようです」

それはなにより、と眩くことができないアインズ。

建造途中の魔法都市カツツエの王城の中で、魔導王はひそかな落胆と失望を覚えていた。

自らの手で殺した土の神官長の記憶を読んだが、アルベドに関する直近の記憶は、最初の使節団での交渉——初対面以来、なにも存在しなかった。

「魔導国宰相——アルベドのことは、向こうは何も知らないのだな？」

「はっ、間違いございません」

デミウルゴスは断言する。

アインズは小さな苛立ちをあらわすように靴を鳴らし始めた。

何故、法国首脳部はアルベドが番外席次に囚われた事実を知らない？ 意図的に隠している？ そんなわけがない、一国の宰相を捕らえておいて、人質交渉の席を用意しないなど、ありえるものか。

（番外席次の行動が読めない——いや、読めなくて当然なのか？ 俺程度の頭脳など、一般人のそれだ。正直言って、たかが知れてる。——それでも）

アルベドの安否を深く気遣うアインズ。

法国内部をくまなく調査中の隠密モンスターは二個大隊に匹敵するが、それで彼女たちの影も何も踏めないとは。ニグレドに代表される探査チームも、良い結果を報告できずにいる。

「アインズ様。いささか危険やもしれませんが、降伏調印の際に、アルベドのことを法国首脳部に問いただしてみては？」

「ああ。もう、それぐらいでしか、彼女の行方を探る手段がない——まったく、とんだ無能ものだ、私は」

「な、そのようなことは！」

「いいや、実際そうなのだ、デミウルゴス。現に、アルベドを、タブラさんの子どもをさらわれるという大失態を犯した——私は」

『アインズ様！ 緊急事態でありんす!!』

唐突な〈伝言〉の発動に、アインズは即座に食らいついた。

「どうした、シャルティア」

『降伏調印式の場に指定された、我が陣営の魔法で建立した〈要塞〉に敵襲！ 法国の降伏調印式をブチ壊すつもりでありんすえ!』



は、たったひとりの、否、たった二人の蹂躪を受けている。

一人は番外席次「絶死絶命」。

そして、もう一人は。

「いったい、何をしでかしてやがる、この筋肉ゴリラが！」

シャルティアが神器級アイテムのスポイトランスで刃を交わす、全身が漆黒の女戦士——ナザリック地下大墳墓・守護者統括——アルベドにほかならなかった。

二人は互角の戦闘を繰り広げつつあるが、シャルティアの方が分が悪い。真紅の鎧に換装して、エインヘリヤルを使ってでも、もう一人の暴虐の嵐をとめるべきか迷ったが、アルベドの周囲を旋回する装置が問題であった。ルベド。ナザリック最強の個と称されるものは、シャルティアの認識委ではまったく歯が立たない難敵——同胞をそのように呼称せねばならぬ時日が、第一・第二・第三階層守護者にはなはだ不快であった。

「この大馬鹿が！ ルベドの指揮権ごと敵の手に落ちるなど、守護者統括失格でありんすね」

嚇すような声色に対し、アルベドは氷塊のような冷たい微笑みを兜の下にひそませる。「それがどうかしたというの？」と言わんばかりの、その超然とした態度が気に食わなかった。

「こんな反逆行為！ アインズ様がいくらお優しいと言っても限度がありません！ 少しは」

「どうでもいいのよ、アインズ・ウール・ゴウンのことなんて」

シャルティアは絶句し、戦斧の重すぎる一撃が、真紅の吸血鬼の防御態勢を盛大に崩した。

怒気と烈気に満ちたアルベドの一撃は、見事にシャルティアの首を破断してみせる——が、

「鮮血の貯蔵庫」——なるほど、一応は開戦した時のための保険を用意していたみたいね？」

シャルティアの頭上にわだかまった鮮血の貯蔵庫のおかげで、破断された首は即時回復できた。しかし、シャルティアの好戦意識を刺激するには、あまりにも過剰な血の量を使ってしまう。

「……殺してやる」

本性に近いヤツメイウナギの顔になりかけるシャルティアだが、

「やめよ、シャルティア」

その小さく細い方を掴む骨の指の感触に振り返らざるを得なかった。

「ア、アインズ様ツ?!」

「シャルティアはコキュートスと合流し、軍の再編……いや、調印式に来た法国の首脳部避難のために、今すぐ下りろ。これは命令だ」

その命令内容は、守護者同士での争いを見たくない御方の我儘が多分に含まれているとわかりながらも、シャルティアは指示に従うしかなかった。

アルベドと二人きりとなったアインズは、世間話でも始めるように話し出す。

「久しいな、アルベド。何をしている?」

「聞こえなかったのか? それとも私の言葉など」

「聞く価値もない」——ええ。まさに、その通り。アインズ・ウール・ゴウン魔導王の言葉など、この私にとっては、何の価値もないのです」

アインズは純粋な驚きを得ていた。

あのアルベドが、転移当初から傍に寄り添い、共に過ごしてきた守護者統括が、あからさまな侮蔑の色で、魔導王の火の瞳を見やるなど、夢にも見られそうにない光景であった。

「……………」

アインズはショックを受けはしたが、それでやるべきことに変更はない。

「裏切ったのだな、アルベド」

この私を——アインズ・ウール・ゴウン魔導国を。

「無論」

盛大に尊大に頷く女悪魔に、超位魔法をぶつけるべきか迷う——刹那。

「ちよつと、ちよつと。そいつは私の獲物でしょうよ」

「うふふふ。確かに、そうだったわね。ごめんなさい」

アルベドの隣の空間に、黒白の髪に白黒の瞳の少女が現れる。

何の予兆も、魔法の気配もなしに。

(いったい、こいつは?)

そう疑念する暇もなかった。

気づいた瞬間、アインズの首元に、戦鎌の黒鉄色くろがねいろが迫っていた。白黒の瞳が、戦いに植えた獣のように細く鋭さを増しているのがイヤでも目に入った。

しかも、戦鎌の攻撃は、戦鬪前に張っておいたマジックシールドの積層三枚をすり抜けていくという、異様な状態を経験。

「くおー!」

前のめりにかわ躲せたのは奇跡に近い。長く冒険者モモンとしての実戦経験がなければ、確実にアンデッドの即死要件——首を切り落されていた。そんな魔導王の不格好を、番外は心底あきれたように放言する。

「うわダサ」

「くツツ!」

頬骨が赤くなりそうなほどの羞恥しゆうちを覚えるがそれよりも早く魔法を唱える。〈魔法三重最強化・魔法の矢〉で九十矢×2が解放され、さらには得意の死霊魔法〈即死デス〉や〈心臓掌握グラスプハート〉を番外席次の肉体にむけて発動した——発動したはずなのに、番外は鼻を鳴らして魔導王の戦いぶりを嘲弄するのみ。

「いま、なんかした?」

「ばかな……………ツ!」

即死魔法も、180発の魔法の矢も通用せず——

今さら、前線に出てきたことを悔やみそうになるアインズだが、アルベドとシャルティアが矛ほこを交まじえる姿を見ては、他の者達に任せておける余裕など存在しえなかった。

アインズは可能な限り別の属性魔法も試し打ちするが、番外席次はそれを避けることなく、すべてを「無」に帰していく。

「こんな、莫迦なことが！」

馬鹿げているにもほどがあった。

ユグドラシルの法則に反している——少なくとも、すべての攻撃に対する耐性を備える”など、ユグドラシルでは不可能な芸当だったはずだし、アインズが転移してから続けてきた戦闘実験でも、その確証を得ていた。

しかし、たった今。

それを打ち破る存在が、目の前に屹立<sup>きつりつ</sup>している。

魔導王アインズの目の前で、戦鎌を頭上高く構え、振り下ろす——  
たったそれだけの動作で、〈飛行〉中のアインズの身体は、一直線の墜落を余儀なくされた。

「げほ、げほ、がはっ！」

戦鎌の殴打+落下による物理ダメージが、肋骨と背骨、頭蓋骨と骨盤、大腿骨と上腕腕を幾片か砕いてしまっている。

たった一撃でこの威力——しかも、相手は本気ではなかった——余力の存在を嫌になるほど感じ取れてしまった。

「アインズ・ウール・ゴウン……どれほどの強さの男かと期待してたけど……」

墜落した骨の玉体の近くで、半森妖精の少女の声が降り立つ。

そして、右眼窩<sup>がんか</sup>の火の瞳に唾を吐きかけながら、言い放った。

「弱<sup>よわ</sup>っ」

## 怒りの炎

／Flame of anger

時をわずかにさかのぼる。

魔導国と法国の国境地帯、そこで降伏調印式の儀が執り行われるはずだった。

だが、

「アインズ様の命令！ さっさと避難するでありんす！」

魔導国軍はシャルティアの大号令で撤退を敢行。

式典用装備の死の騎士<sup>デス・ナイト</sup>や、魔導国国旗を掲げた上位死霊<sup>ハイレイイス</sup>、国賓とな

る法国首脳部を乗せるための——カツツエ平野の陣容の厚さがいか

に広大かつ強大であることを示す魂喰<sup>ソウルイーター</sup>らしいの豪華な馬車も、すべてが無

駄に終わったが、そんなことに拘泥<sup>こうでい</sup>してよい状況ではない。

シャルティアは自分の幕僚たち——吸血鬼の花嫁<sup>ヴァンパイア・ブライド</sup>や吸血鬼の騎士<sup>ヴァンパイア・ナイト</sup>

らに命じて、法国首脳部の守備にあたった。

「い、いつたい、何事だというのですか」

それはこつちが最も訊きたいでありんすね——とは叫ばないシャルティア。

とにかく、番外席次が魔導国軍を攻撃していることなどを簡単に説明し、これは法国の命令であるか問いただす。

無論、相手にはそんな作戦命令を出した覚えがない。最高神官長とやらを拜命する100歳のジジイまで、どうしてそのような事態に発展しているのか理解できていないありさまだ。

「母の仇は討てたのだろうか？」「エルフ王を殺して、安寧を取り戻したはず」などという神官長らの言葉を一切無視して、シャルティアは真



紅の鎧姿で迎撃する。

「くっ！」

「アンタも意外とやるねえ。こっちの方を洗脳しとくべきだったかな？」

「!! 洗脳されるのは、もう御免でありんす！」

一閃されるスポイトランス。だが、体力奪略の効能は発揮されない。単純に相手の体力ゲージを削れていない証左であった。

「やめよ、番外席次！」

闇の神官長マクシミリアンが吼えた。

「これ以上の狼藉は、たとえ神が許しても我らが許さん！ 我等は魔導国に降った！ 故に」

「だ・か・ら。」

もう「用済み」なんだよ、おまえらはさ」

番外の遠距離からの一撃で、マクシミリアンの首が両断され、彼の命が潰える。半森妖精の少女は、神官長らが見たことのない狂暴かつ凶烈な嗤笑でもって、老人らを眺めやる。

「法国は、それなりにいい隠れ蓑だったし、強い奴を喰らうのにも使えただけどさ——魔導国に降る弱者じやくしゃになるんだったら、もう強者わたしにはいらねえんだよ」

「ば……馬鹿な」

「そなたは漆黒聖典の隊員として、長く任務に精励してきた。それらすべての功績と業績を、この一夜の暴走で無に帰するつもりか!？」

黒白の少女は「もっちろーん♪」と軽妙すぎる笑みを浮かべて、弱者に成り下がった連中の抹殺を図る。

「させるかっつーの!」

それを一人で防ぐシャルティア。交錯し続ける槍と鎌。数合も繰り返される死刃の遣り取り。

コキュートスとデミウルゴスは軍の再編と撤兵のために、アウラとマーレはアルベド搜索班を率いて法国南部に、セバスはナザリツク防衛のため、それぞれの任地についていた。こいつの相手はシャルティア一人でなさねばならないが、今のところは問題ない。

（問題なのは、奴がアルベドを連れて来ている可能性、それに！）

クソ弱い敵国の人間をかばいながらの戦闘であるため、シャルティアはエインヘリヤルの使用を強行できない。一日一回だけの特殊技術である上、使い所は慎重を期する。代わりに、シャルティアは別のスキルで番外席次の足を止めた。

「特殊技術 ススキル “血落の棺獄” ブラッドフォール・コフィン！」

このスキルに囚われたものは、相手が善属性100であれば100回分の追加ダメージ、500の極善であれば500回分の凶悪な連続追加ダメージを加える、ある意味においてシャルティアの最終奥義ともいべきスキル。なのだが、

「どんな技かと思えば……こんな棺で、私をとらえておけると思えるわけえ？」

わかり切っていたことだが、番外席次はその言動などから察するに、悪属性に傾いている。ダメージを与えることはできず、真紅の監獄はほんの数秒で内側から食い破られた。しかし、番外席次の足を止め、視界を奪うには十分すぎた。

その間に。

「早く逃げなんしー！」

番外席次の殺戮対象は、魔導国の軍のみならず、法国軍——とくに首脳部へと集約している。すでに、軍を統べる機関長・大元帥は敗死をとげていた。首斬られた同法国人の姿に、それでも、神官長らは番外席次への説得を諦めきれない。

「馬鹿な——こんな、ばかな……」

「これは、何かの陰謀に違いない——」

「あの娘が、私たちの命令に反するなんて……そんなこと」

シャルティアは思った。こいつら、なんらかの能力——精神系のそれで、番外席次への好意や愛情を操作されている向きがある。唯一の例外は、悲嘆のまま膝を屈し、その場でうずくまる最高神官長一人ぐらいだろう。

（奴の異能や魔法、マジックアイテムの可能性が——いや、そんなことどうでもいい！）

とにかく、奴をこの場に釘付けにし

「ばあ♪」「がう！」「久しぶりね、シャルティア」

シャルティアの右肺臓が背側中から貫かれた。

血反吐をはかされたシャルティアが見たのは。

「アル、……………ベド……………」

戦斧の刃先で僚友を背後から強襲した、守護者統括の姿であった。

「クソガツ。やはり、来ていたか……………あの番外席次とやらと共にっ！」

「うふふふ。私は彼女の協力者だもの。来ないわはずがないでしょ？」

協力者という単語に首を傾げそうになるシャルティア。

……………これで、チビすけ<sup>ア</sup>たちの強行偵察と探索任務は完全な空振りで終わってしまったか。

番外席次が、国外退去・逃亡する可能性を考慮し、それに追隨して南下するだろうというアインズの予測であったが……………まさか、御身の慧眼でも、番外とアルベドの降伏調印式の強襲と破壊行動は読み切れなかったというのは、シャルティアにとって最悪の事態を呼んだ。

彼女は鎧の下に大量の鮮血を零しつつ、特殊技術<sup>ス</sup>「鮮血の貯蔵庫<sup>ブラッド・プール</sup>」を発動（これは、魔導国国内の重犯罪者などを処刑した際に貯蔵したものである）。吸血鬼にとって必要な回復力の源泉を頭上にたっぷりと浮かべつつ、魔法による回復は温存する。

そうして、

「いったい、何をしでかしてやがる、この筋肉ゴリラが！」

傷を閉じながらシャルティアは問いただした。

栄えあるナザリック地下大墳墓・守護者統括たるアルベドに。

「こんな反逆行為！ アインズ様がいくらお優しいと言っても限度がありません！ 少しは」

「どうでもいいのよ、アインズ・ウール・ゴウンのことなんて」

その言葉の重みは鋼の意志によって編まれたもの。シャルティアは、彼女が本気で……………洗脳状態にあるとはいえ、本気でアインズ・ウール・ゴウンという尊名への敬意と賞賛を忘れた……………否、持ち合わせていたことすら「ウソであった」かのように、はつきりと告げたことを

知った。

知った以上は、ナザリツクを護る……アインズ・ウール・ゴウン御方を護る第一・第二・第三階層守護者は、完璧な殺意の虜となった。しかし、それもアインズの一言ですべてが覆る。

「調印式に来た法国の首脳部避難のために、今すぐ下りろ」

そう命じられた上は従う以外の選択肢が存在しなかった。

しかし、このときシャルティアは、アインズの命令を無視して、自らの命をも顧みることなく守護に徹するべきだったかもしれない。

シャルティアが離れた直後、アインズ・ウール・ゴウンは番外席次と会敵し、ほんの数分で敗北を喫した。

アインズ・ウール・ゴウンが敗北を喫した。

それ自体は、アインズ自身の意中にはさほどの影響を残さない。敗北から学ぶことの多さを、彼は知っている。勝利することばかりしかできないものでは絶対に持ちえない価値観と判断基準を彼は独自に持ち合わせていた。

「っ、くそっ」

それでも、今回の肉体に負った物理ダメージは、転移後に味わったものとしては究極のダメージ量であった。

立ち上がるとしても全身の骨という骨が碎けるか割れるか欠けるかして、無事なものを探す方が難しいときている。

「弱<sup>よわ</sup>」

そう唾を吐きかけられるようとも、アインズは火の瞳を絶やさなかった。

「こんなクソ弱い魔法詠唱者<sup>マジックキャスター</sup>に、諸国はビビりちらしていたとはね……逆に感心しちゃうわ」

「ふ、褒めてくれたのかな？」

体は動かなかったが、言葉は十全に発せられた。

その反応は予想外だったとばかりに呆れ笑う番外席次。

戦鎌を肩に担いで、割れた頭蓋骨をつまさきで嘲弄していると。

「それ以上の攻撃・無礼は私が許しません」

アルベドが法国首脳部の撤収に尽力したシャルティアの追撃を止めて戻ってきた。ルベドの根源装置をスカート上に旋回させる漆黒の女戦士は、あくまで「協力関係を結んだ」だけの女に対する信愛などない世数で、御方を護る。

「アインズ・ウール・ゴウンには何の価値もないって、アンタのセリフじゃなかった？」

「それは変わりません。しかしながら、その方が私にとって、命よりも大事な御方である事実に変わりはない——この意味、わからないとは言わせないわよ」

一触即発の二人であるが、アインズはその間隙を逃さなかった。

召喚魔法で上位アンデッド三体を使役し、自分を運ぶ中位アンデッドとして死の騎士を選択……だが、

「そんな簡単にやらせるわけないでしょうがよ？」

上位アンデッド三体が二秒半で切り刻まれ、死の騎士が体力1を残して即死せずに残れた程度。それも、死の騎士の突撃をさくりと刺し貫く番外席次。

逆に、ここでボロボロのアインズにとどめをささない番外席次の手技には驚きを禁じえなかった。

「さて……………あ？」

アインズは這いずっていた。

右半身がうまく動かず、胸骨や背骨が悲鳴をあげるが、構わずに前へ。

「逃げられると思ってんの、アインズ・ウール・ゴウンさくん？」

援軍は期待できない。

召喚したモンスターは即殺されて意味がない。

それでも、アインズは……………モモンガは……………鈴木悟は前を向き、進み

続ける。

(諦めない)

絶対に。

その無様を嘲笑する番外席次、貞淑な表情で止めようとするアルベドの目の前で……

「……………あ？」

白金の竜鱗で出来た輝かんばかりに磨かれし鎧……スケイルメイル竜鱗鎧が、姿を現した。

アインズは咄嗟に、「たつちさん？」を連想するが、細部がまるで違う。

四つの武装を空中に浮かべた鎧は、一步、また一步を大地に刻み付ける。

そして、長い沈黙の後で声を発した。

「……………何故だ」

誰もが答えを持っていない状況で、その鎧は“番外席次”……“絶死絶命”だけを見つめて、呟いている。

「何故、貴様が生きている」

アインズは様子を窺い続ける。鎧の紡ぐ音声は澄明ちようめいかつ闊達かつたつで、大樹の朝露を連想させるが、今のそれは、毒草の一滴に変じている。壊れた骨の体をいたわりつつ、鎧の内から反響する感情——怒りをつぶさに察知していた。

「その力、その気配、その存在——この200年、忘れたことはなかった……」

「なんのハナシ？」

鎧の男は、黒白の少女に襲い掛かった。

彼女の知らない、彼女の名を口にして——

『『とうてつ饗饗』！』

瞬間、彼は鎧のもとに現れた。ブラチナム・ドラゴンロード白金の竜王ツアインド

ルクスIIヴァイシオン、その偉容が。

だいおんじょうこの世のすべてを燃やし尽くすかのような「炎」が、竜の怒りの大音声と共に吼え吐かれていた。

“饗餐（とうてつ）”

／World Enemy TOUETTE”



それは、ありえざる生誕であった。



法国のみならず、世界各地に、黒塗りにされた歴史書がいくつかある。

それは「十三英雄」——しかして、その実態、その本当の物語の結末は、ただの悲劇譚であった。

多くの人々に伝来されている物語、彼らの活躍は200年前。

十三人の英雄によつて、世界の擾乱じょうらんや危機がいくつも解決されていく、王道冒険譚。

しかしながら、彼らの多くが非人間であったことを知るものは多くないし、実際の数も十三をはるかにうまわるといふ。人間の国の都合で、物語は容易に書きかえられるもの。

そんな十三英雄の中で有名なものを列挙するならば——

「トネリコの枝を振り回して幾多の竜を退治し、人間の姫を娶ったゴブリン王」

「天空を駆け続けた有翼の英雄」



トライヘッド・ドラゴン  
「三つ首竜に騎乗した魔戦士」

「忠実なる十二の騎士と共に水晶の城を支配した姫君」  
など。

見るもの読むものの好奇心を駆り立て、冒険への夢を溢れさせる素晴らしい物語ばかり。

だが、その最後は多く語られることはない。

もつといえ、当事者たちのほとんどが戦死するか、生き残った者もあまりにも重い「敗北」という結果だけを受け入れ、世界各地に散った。

そんな歴史の闇に葬られた書物を有する法国神都——その郊外の、名もなき神殿——立ち入りを誰にも固く禁じられた墓所に封じ入れられた、饗饗とうてつの封殺体。

十三英雄リーダーの世界級アイテム「ダヴはオリーヴの葉を運ぶ」によって封じられ——結果、彼は恋人を自分の手で殺し、そうして自死を選んだ。

恋人の名は——あるけー・みい。リーダーと共にユグドラシルを旅した女錬金術師アルケミストであり、同じギルドの仲間同士であった二人は手を繋いで、花火降り注ぐお祭り騒ぎの超広場で——あのユグドラシル最終日を迎えた。

彼女は長い銀髪のエルフという外装ビジュアルに、〈飛行〉可能な翼付きの軽装鎧を胸当てとする、弓矢が主武装の、まるで天使のようなエルフだった。

そんな恰好ではあったが、エルフの矢の腕前のみならず、錬金術の極みのごとき戦闘力と防御力。機動力で仲間たちの旅を助けてくれた。ポーシヨン製造の技術は彼女の模倣を後世の人間が行っている結果である。

さらに、エルフの女王は、彼女を「義理の妹」と言って賞賛を惜しまず、ドワーフの工王も、彼女の生み出す高位錬金術の産物には舌を巻いたという。二人は同時に言ったものだ。

「リーダーにはもつたない、もつたいなさすぎる」と

彼らにはほかにも様々な仲間が出来た。

トネリコの杖と称された木剣を持って竜殺しで活躍した、人型に近すぎたゆえ一族を追われた小鬼ゴブリンの劣等種たる王子。

四本の暗黒剣を持つ、厨二気質で闇妖精の血を引く黒騎士に、彼と愁嘆場を幾度も演じた、十二騎士を従えし魔法劍姫。

三つ首竜トライヘッドドラゴンと称された多頭水蛇に騎乗する、これまた人型に近すぎた女オーガの劣等種による、魔戦士。

ユグドラシルから転移してきた——同じ超広場にいた世界級アイテム保有者——「口だけの賢者」こと牛頭の賢人ミノス——「砂漠の小天使」こと熾天使セラ——「風巨人」エアジャイアントとよばれた風の大精霊のハステア……

暗黒邪道師に師事した「死者使い」リグリット。

最終決戦の前に、自分の正体を教えた「白銀」。

この世界を旅するうちに、二人は恋に落ち、そして将来を誓い合った。

そんな彼女ではあったが、リーダーの子を「身ごもった」ことで前線から離れることに。

だが、悲劇はここから始まっていた。

彼女はとある陰謀によって、破壊カタストロフの竜王ドラゴンロードの手のものからとあるアイテムをもらい、愛する彼の危機を救うべく、アイテムを、起動。

よって、彼女は神竜——「四凶」とうてつ「饕餮」とうてつの核として組み込まれ、その体は饕餮とうてつの各部位に散った。顔下半分は逆鱗の位置に、右腕は左足に、左足は鬣たてがみの一部に……彼との子を孕んだ大きな腹は、どこへいったのやら見当もつかなかった。



そして、“1999年前”。

とある雨の日だった。法国の名もなき神殿、誰も立ち入ることのできない神殿から、“産声があがった”。

神殿へ立ち入った、当時の最高神官長……宗派は水であった……彼が見出したのは——出産する……肉片。

神殿という場所柄、邪悪にも神聖にも見える光景であったが、彼にとってそれは、授かりものに等しかった。



彼の娘は、当時の第一席次であり、魔法剣姫に仕えた十二騎士の代表筆頭であり、生き残った剣姫と、剣姫が暗黒騎士と共に自由に生きるべく四本の聖剣と四本の魔剣を各地に封じた。

そんな彼女は、エルフ王を愛していた。

もう一度言うが、彼女はエルフ王を愛していた。

父にも、主人であつた魔法剣姫にも、「あれはよした方がいい」と忠告されていたが、彼女はエルフ王だけを愛してやまなかつた。

嫌な奴だとはわかつていた。

プライドが無駄に高い男だった。

女と酒にうるさい、エルフの王子であつた。

己の美貌と力量を信じてやまぬ、高慢な王族そのものだった。

そんな彼が。

十三英雄、リーダーの少年に敗れた事実を、涙を流して悔しがっていたのを見た。

リーダーや母親たちの剛さと勁さに憧れ、純粹に修行し、稽古と鍛錬に励んでいた姿を見るにつけ、彼女の胸のときめきはやまなかつた。

彼に惹かれることが、どれだけ愚かしいか、彼女はわかりきってい

た。

自分は法国に仕える身であり、エルフとは当時友好関係にあったとはいえ、純粋な人間種以外との婚姻など、認められようがなかったから。

だから、彼女は彼に騙される道を選んだ。呼び出されるまま彼の別宅を訪れ、そして、そのまま彼の愛の言葉を受け入れた。

たとえその愛が、自分を騙すための偽りに満ちた、虚言であったとしても。

彼女はエルフ王に「騙されて」ではなく、本気で彼を愛してしまっただがゆえに、彼の凌辱と拘束を受け入れ、その縛鎖とりこの虜とらとなった。

そして、漆黒聖典の同胞らが無理やりにも救い出した最高神官長の娘だいいちせきは確かに、エルフ王の子を孕んでいた——が、母親の生育環境が良くなかったのか、生まれた子はすぐに死んでしまった。

エルフ王も彼女の環境には気を使っているつもりでいたが、母親の肉体を鎖で拘束したままにしておいて、子に影響を与えぬという道理がない。流産して当然というものであった。

そうして……彼との子が死んだ母は、壊れた。

何度言い聞かせても「父たちが殺したのだ」「彼との子を不浄と見做して殺しだんだ」と暴れ泣き喚く始末。そこにいたのは、十二騎士の筆頭、漆黒聖典第一席次を女だてらにこなした戦士ではなく、ただ、子を奪われた儂あやふしくも哀れな母親にすぎなかった。

彼との愛の証である子を奪われたと妄想した彼女は、人間の他の孤児らを生育する気にはならなかった。他の男を夫に持つなど、到底あり得ない。彼女は来る日も来る日もお腹をさすって、彼との子を夢想し続けた。誰もが目を覆いたくなるほど、壊れた娘……



だが、最高神官長は、名もなき神殿で生を受けた、黒白の髪と白黒

の瞳——長い耳を持つハーフエルフ——しかし、間違いなく、神竜の血肉を受けた仔の存在が、娘を救ってくれと思うた。

帰り道の雨の中で、最高神官長はこれを「神からの恵みである」と信じて疑わなかった。

彼の思惑通り、娘たる第一席次は狂喜して、その仔の母となった。黒白の髪をやさしく撫で梳き、白黒の瞳——色違いの瞳というエルフ王と同じ特徴が、ますます気に入った。「彼の子が戻ってきた」と信じて憚らなかつた。

その色は、「神竜」である。『饕餮』の色と、本来の「父母」である。『両親』の色……奇跡のような血のかけ合わせであったといえる。

母たる第一席次は、その子が望むまま戦場へと連れ出し、戦いを教え、そして敵の心臓を『捕食』する様までも愛おしく想いながら育て上げた。

「とてもいい子です。私と彼の子は」  
もつとも。

育てられた仔自体に、育ててくれた当時の第一席次たる女性への愛情や尊敬は、持ち合わせがなかつた。

なぜなら。

彼女は人間でありながら人間でない胎はらから生まれた……人間種と異形種の『混合者』であつたから。

彼女が「純粋な人間種の女性であること」が使用条件の『傾城傾国』の使用条件からアブレていたのも、異形種という側面が付随していたことが、影響としては大きい。

戦いを欲するの、付きつきりであつた母の教育の成果というより、『饕餮』の持つ捕食欲求「暴食」を満たすことが第一義にあるのだ。

そんな彼女の暴食……暴走を、当時の最高神官長？は黙して見守つた、彼女自身に何にも告げず、明かさず、秘密にしたまま、当時の最高神官長は世を去つた。

そうして、

育ての母・一号……旧・第一席次が死にたえたあとも、彼女は法国

を守る戦いに参じ続けた。

第一席次を超える力を持った最精鋭、漆黑聖典・番外席次としての、その任をこなした……………

これが、1999年前の墜とし仔————この世界における完全超越者————番外席次“絶死絶命”の秘匿された生まれであつた。

竜の口——喉元から迸ほとぼしつたとは思えないほどの超巨大な破壊光であつた。

天と地のすべてが白い光のうちに融けて曖昧となり、遠方で起こる轟音が遠雷のごとく轟き続ける。

それは、極限の爆発。

超高熱波の爆風であつた。

暴音と灼熱と閃光によって生み出された衝撃波は大地を——魔導国と法国の国境地帯を吹きとばし、舞い上がっていく土砂と塵埃のキノコ雲が上空に現れる。その下にある生命など、軽く粉微塵になつて死に絶えているイメージしか湧いてこない。

「……………す、げえ」

法国の北の都は全壊しているだろう。戦争準備で市民が避難していたことは救いだが、駐屯していた法国北方方面軍は……………

瀕死の重傷でありながら感嘆の声を零すアインズは、その破壊光の源泉となつた白い竜を見やる。

神聖な雰囲気、猫を思わせる体のしなり、頭の前から尾の端まで全景を見渡すことができないほどの巨大さは、雄々しすぎて言葉にならない。千年の樹齢を誇る大樹にも似た雰囲気、といえば伝わりやす

いかもしれない。

「これで、饗饗を仕留められれば話は早いのだが」

「トウ、テツ?」

ツアーに護られる位置にいるアインズは、その単語の意味するところを推し量れない。

当然のこと。「四凶」『饗饗』は、ユグドラシルでは未発見のまま、サービス終了してしまったワールドエネミー。アインズが存在をかからも知らなかったのも無理はなく、実際、同じプレイヤーであったリーダーたちも、誰一人として詳細を知らなかった。ツアーは納得して頷く。

「アインズ・ウール・ゴウン、魔導王殿。このような形で出逢うことになつてしまい、慙愧に耐えない」

「……はえ?」

「親書を送ってくれただろうか?」

「あ、ああ」

アインズはようやく自分の記憶の整合性を取り戻した。自国のアダマンタイト級冒険者・フォーサイトに持たせておいたものを思い出す。

同時に、彼はツアインドルクスⅡヴァイシオンの威容を見上げた。

いきなり現れた、あの『たち・み』を彷彿とさせる『白銀』の鎧に助けられた直後に、その鎧がばらけるのと同時に、白金の竜王ブラチナム・ドラゴンロードの威風堂々たる竜王の姿が転移してくるなど、予想だにしない展開でしかない。アインズはできるだけ割れ砕けた骨の身をいたわりながら、竜王への礼節をつくす。

「……ツアインドルクスⅡヴァイシオン殿」

「ツアーと呼んで、かまわない」

「え、いや、そういうわけには」

「……今は長つたらしい名前を呼ぶ時間がない」

彼の竜眼の先で勸善な微笑みを浮かべ続ける黒白の少女は、突如現れ、そして超高熱波を吐き出した竜王に対し、『無傷のまま』応答する。

「ツアインドルクスⅡヴァイシオン。『白金の竜王』。いつかは喰つてみたかったんだよね〜♪」

いつになく上機嫌な番外席次。

ツアーの炎を至近で受けたはずの彼女は、傷ひとつ見当たらない。  
戦鎌ウオーサイズを抜き払う黒白の少女は、白黒の瞳の先に、捕食対象を映して傲岸ごうかんに嗤わらう。

とくに防御した感じでもない——身に帯びた衣服は焦げひとつ付いていないのに。

隣に立つアルベドが、漆黒ヘルメス・トリスメギストスの全身鎧ヘルメス・トリスメギストスの特殊能力——三度まであらゆる超高威力ダメージを完全に無効化する——を使って、ツアーの炎攻撃をしのいだにもかかわらず、だ。

ツアーは毒づいた。

「くそ。饕餮のバケモノが!」

かつて数万の命を喰らい、数国を壊滅へと追い込んだ化け物竜——もとい『龍』。

「法国はどうやって、こんな盟約を破るような存在を顕現させた? ワールド世界級エネミー……200年前に封じたものが、何故、人間の少女の形を……リーダーと彼女の血を混ぜた身体で!!?!」

悔しげに悲しげに呻くツアーの語る内容は半分も理解できないアインズだったが、アイテムボックスから自分を癒すグレート・リールサル「大 致死」をこめたアイテムを取り出し、起動。おかげで、少しは肉体の痛みからわずかながら解放される。その間に考える。

(法国は、何かしらの禁を犯している? これは利用すべきか? 否か、利用できるか否か)

「あまり大それたことは考えない方がいい、アインズ・ウール・ゴウン」  
ツアーの竜眼がアインズの骨身を見下ろしていた。

「重要なことはただひとつ……世界の敵を滅ぼすことのみ、だ」  
そう言われて、嫣然えんぜんと微笑む番外席次と、巨大な大樹を思わせるツアーを見比べる。アインズは一言。

「……私の名前も長つたらしいからな、アインズと呼んでくれて構わない」



「そうか、それはありがたい、アインズ」

「それで。私としてはツアーに協力する腹積もりだが……どうやら番外席次、あの黒白の少女に、我が部下の一人を操られてしまっている」  
「傾城傾国の完全支配能力？　なぜそれをあれが行使……いや、今はそういう詮索の時ではないか」

ツアーは竜の巨大な四肢を大地に突き立てる戦闘態勢を構築。

アインズも体力は危険域だが、残された潤沢な魔力で魔法を詠唱。

ここで一矢報いてでも、アルベドの奪還だけは果たしたい。アインズは魔導国軍をカツツエ平野にすべて帰陣させる命令をへ伝言メッセージにデミウルゴスに出した後、彼が止める間もなく戦闘準備を整える。

「魔法三重最強化・災厄の黒き刃」

一過性のへ現断よりも格段に兇悪かつ絶大な攻撃力を誇る、悪属性の黒き刃が三枚、アインズの周囲を旋回する。

触れるものすべてが黒い闇に烈断され、大地さえも、その刃の威力に脆く引き裂かれる。

絶大な魔力を感じたのか、番外席次は口笛を吹いてみせた。余裕の表情。これで彼女を斃せるとは思えんが、少なくとも攻撃手段としては最高位に位置するへ災厄の黒き刃だ。

ツアーはアインズが極悪属性に位置するプレイヤーであることを看破へかんぱしつ、自己は自己で超高熱波の再装填を終えていた……竜王の喉が赫赫と輝く。

超絶の炎が再度法国北方の空と地を焼き払った。

その超高熱波の嵐の中を、番外席次は超然とへ飛行する……完全火属性対策とは思えない。

まったく別種の能力……異能を複合させているわけでも、ない。

（——純粋な身体能力のみ、だと!!）

異能を感知し鑑定する魔法がある。魔導国ではそれを行うためのアイテムの製作開発にも尽力し、その試作機をアインズは密かに見つめるが、コンソールに表示されている番外席次の状態はへ飛行のみ。

あの業火は、階層守護者でも何名かは成すすべもなく殺戮されるだけだろう。火に完全耐性をもつデミウルゴス、純粋な戦闘力と回復力

に秀でるシャルティア、この二名が関の山か。

だというのに。

(なんなんだ、あの女は!??)

この世界に転移してから長いこと経つが、それでも、これほどの脅威を感じたことはなかった。頭蓋骨にない脳髓がしびれるほど恐怖しかけ、次の瞬間には沈静化されるほどである。

「シャアハッー！」

炎を吹きかけてくる竜の口に飛び込みながら、番外は戦鎌を振るう。

「グッー！」

ツアーは業火による攻撃を諦め、回避しようと鎌首を振ろうとするが。

「そんなデカブツで、私から逃げ切れると思ってるの?!」

竜の巨体を巨大すぎる翼によって飛翔させるツアー。

そんな彼の翼を引き裂こうとする鎌の一撃を、アインズのブラック・ブレッド・オブ・デイスターの黒き刃の一本が薙ぎ払う。が、番外席威の鎌の一刀を浴びた一本が、半ばで折れて使い物にならなくなる。あの戦鎌の能ウオーサイズ力か、少女自身の異能かは、判断がつかない。

そこへ情け遠慮容赦なく完全装備状態のアルベドの戦斧が、アインズの頭蓋を真一文字に割断しようとするのを、ツアーの長大な爪の二本が阻む。

両陣営は再び距離を取らざるを得なくなった。

「すまない」

「いや、こちらこそ」

短くやりとりするアインズとツアー。

だが、ツアーは己の最大火力を吐き出せる状態を維持していたが、  
フランスの北方が炎の国と化しただけで、これといった成果に結びつかない。

さりとして。鎧状態——下でバラけている竜鱗鎧スケイルメイルと四武器を使用しても、さしたる違いはない。むしろ、中身のない鎧を操るのに必要とする集中力は並外れて膨大だ。少なくとも、番外席次という大敵を前

にして、操作して戦闘に参加させる余裕などない。せめて、ツアーが宮殿に戻り、遠隔操作に戻すか、内部にツアーの鎧操作に呼応できる人物——剣士が必要なのだ。

「どうする？ 手はあるのか？」

「ううむ——」

黒い長大な刃を回しながら、アインズはツアーに問うた、瞬間だった。

「なんじゃなんじゃ、えらく騒がしいのう」

ツアーはその声に驚愕する。

番外席次とアルベドも、その老婆の登場には好奇の視線を向ける。

「あーあ、儂の故郷が、法国は東も北もボロボロじゃ……………いったい、なにをしとる、ツアーよっ！」

十三英雄が一人。

重い剣を腰にぶら下げ、幾多もの棺を宙に浮かせ現れた。死者使い“リグリット・ベルスー・カウラウが、みすばらしい槍を構える第一席次の若者を連れて、法国と魔導国の国境地帯に姿を現した。

## 撤退と逃避

／ Withdrawal and Escape

「東都からここまで徒歩<sup>かち</sup>で、よくぞついてこれたものだな」

リグリットは薄笑いを浮かべて、旅の道連れとなった若者を振り返った。

「——これでも、現、第一席次なので」

漆黒聖典の中でも別格の存在——神人。

みすばらしい槍は杖に使うには不適合にも見えるほど古臭く、脆そうであるが、豪華で勇壮な鎧を着込む青年の体重を完全に支えて歩かせてくれた。

リグリットは見慣れたその槍……歴代の第一席次に託される “槍” を見やる。

使った者の存在そのものを生贄とする、まさに “神の槍” だ。もしも、この槍が、あの神竜に通じていたら——そう何度も思い返しそうになる自分を嘲<sup>あざけ</sup>るように、短く失笑する。

「さて。儂の目標である、北の戦場——魔導国との国境地あたりまで来たわけだが。本国から指令をもらわんでよいのか？」

リグリットの物言いに、第一席次は笑う。

「有事の際には、北の国境での戦いに備えよという命令を受けておりました……体の方も、ようやく調子が戻ってきたところ。存分に魔導国と戦えるはず」

「ほう、そうかい。まあ、漆黒聖典・第一席次は法国の最精鋭の中の最精鋭。独自の判断で動くことも、ままあることじゃったのう」

第一席次はリグリットの語る法国の知識の豊富さに、軽い疑念を覚

える。まるで経験者は語るがごときを地で行くリグリットは気にすることなく、北の戦場予定地を見渡せる丘の上にたどりつく。

「地図を見るに、このあたりに魔導国軍が布陣して？」  
いなかった。

暴悪な魔軍——不死の軍勢——骸骨の白い尖兵は一体も確認できない。……それどころのものではないものが、戦場を席卷していたのだ。

「な！　なんだ、あの竜は？」

若者の驚愕に、リグリットもまた無言で驚きの息を発した。

「あの白金の竜鱗——巨大な翼——ま、まさか！」

第一席次が言及するのは、大陸でも随一の知名度を誇る龍王<sup>ブラチナム・ドラゴンロード</sup>“白金の竜王”の威容そのものであった。

リグリットは眉を大いに顰<sup>しか</sup>める。

「どういふことじゃ？」

彼女の疑問は三つ。

一つ目は、自分の知己<sup>アー</sup>が法国と魔導国の戦場地にいたこと。

二つ目は、自分が竜王<sup>ツアー</sup>の巨大な気配に気づけなかったこと。

三つ目は——

「弱くなっている？」

あのツアーの力は、まさに大陸屈指の力だ。吐き出すドラゴンブレスは最強にして災厄の一言——喰らった者は粉微塵になるほどの熱波に焼かれ、残るものは影の残滓のみという、究極の爆裂攻撃であった。あの炎によって、神竜から無限に湧いていた眷属の雑魚竜群も一掃<sup>カタストロフ・ドラゴンロード</sup>できていたし、破滅の竜王どもへの復讐戦も、なんとか制することができた。

しかし、法国北都を竜王の劫火<sup>ごうか</sup>で焼滅させた威力は、神竜との戦いで見せた時よりも遥かに威力が落ちている。彼女にはそう感じる。リグリットは咄嗟に自分の力を自分で見る——何者かのスキルによって、戦場全域にレベルダウンにも似た“弱体化”が降り注いでいた。

「名づけるならば、<sup>マス・パワーエクト・ウイークネス</sup>“全体完全弱体化”とでも呼ぶべき、か？」

これの発生源は——黒髪と白髪にわかれた、白黒の色違いの瞳をもった、一人の少女。物騒かつ寧悪な戦鎌も印象的だ。

気づいているのかいないのか、激したツアーは戦いを続行しているうえ、何故か傍近くにいる漆黒のローブを着た魔導王アインズ・ウール・ゴウンの攻撃魔法に「護られた」。ここで展開されているべきなのは、法国と魔導国の戦争ではなかったのか？

「チツ……ったく。出てくるなら事前に一言くらい寄せればよいものを、あの馬鹿竜め」

何がどうなっているのかこれっぽっちも理解できないリグリットだが、隣の第一席次が膝を屈するのを見やった。体力がなくなったり、状態異常の罹患などではない。

「おい、どうした？」

「あ……あ……そんな、マクシミリアン神官長が……」

彼が〈遠視〉の魔法道具——双眼鏡に似たそれで見つけたのは、仲間の死を悼む法国首脳部。

さらに、誰かの姿を見て、悄然と肩を落とす。

「番外——あなたは、………貴女はそこまでして」

丘の上の雑草を掻きむしる青年の苦悩っぷりに同情の念を禁じ得ないリグリットであったが、状況はそれどころではない。

「儂は依頼主のもとへ」

否、

「友のもとに馳せ参じるとしよう」

棺を空中に、剣を腰にとりだした老婆。彼女が「お前も来るか」と訊く間もなく、第一席次は槍を杖に立ちあがった。

「はてさて」

完全戦闘態勢で戦場に飛び込んできた闖入者ちんにゆうしやに、アインズは完全に混乱をきたした。ここへきて援軍——と呼ぶには少なすぎる二人を眺め、それでも、警戒の火の瞳は揺るがない。

闖入者は続けて述べ立てる。

「少しは冷静になれ、わが友よ。いったい全体、何をそんなに昂たかぶっておる？ “白金の竜王”ともあろうものが？」

「どうやらツアーの知り合い、仲間仲間に殉じる戦力と判ずるほかにない。

呼びかけられた方は、老婆に対して敬愛と友誼に満ちた一声を吐き落とした。

「そもそもがじゃ。この戦場、法国と魔導国の戦争が気になると言つて、儂にここへ来るよう依頼したのは、そなたじゃろうて」

「昂ぶりたくもなるさ、リグリット。自分の目の前に神竜—— “饕餮とうてつ” がいる以上は」

「な、なんじやと?！」

老婆の様相が一変した。

驚嘆の表情を浮かべて、ツアーが鼻面を向ける黒白の少女——番外席次を見つめた。

そして、その少女の面影から、懐かしい誰かのそれをみつけてしまひ、一言こぼす。

「……………リーダー?」

まさかそんなありえないと繰り返し否定する老女に対して、番外は酷烈なほど汚い嗤笑ししょうを浮かべた。

「だれ、ソレ? 昨日のエルフ王といい……最近、私のこと誰かと勘違いする連中多すぎじゃね?」

厄年かよと心底迷惑そうな番外席次。それを兜の下で笑っているアルベド。

「まあ、なんでもいいわ」

黒白の少女はわずらわしそうに肩にかかる髪を払った。露わになりかける長耳。半森妖精ハーフエルフの異形のバケモノは、闖入してきた老婆たちへの攻撃を敢行する。

たった一秒で距離を詰める番外の凶悪で黒い笑みに、老婆は一瞬で対応。

「ツアー、鎧を！」

『貸せ』と叫ぶ前に、スケイルメイル竜鱗鎧と四武器が、飛ぶ。

リグリット・ベルスー・カウラウのもとへと。

刹那で行われる広範囲連続交差斬撃で四武器をはじくスルシャーナ死の神の鎌——だが、彼女の腰にはまだ得物がある。

「へえ？」

鞘に入っただままの剣一本でトドメの刃をふせがれた番外は素直に感嘆する。

法衣ローブの上からツアーの鎧を身に帯びた老婆は、完全な戦乙女と化した。緩く結った三つ編みが揺れる。

「ぬん！」

リグリットの太刀筋は歴戦の剣士のそれであった。200歳以上という老体ではなく、200年の修練の極みに達した、一撃。それは大地を割り、空を裂く剣撃——だった。

それを番外席次は軽やかに足蹴あしげにする。

「意外とやるじゃん、婆さん！」

「チイツー！」

竜鱗鎧ツァーの兜を装着した状態で、ようやく彼女の戦闘能力ステータスは完全に、上昇。

「一番！」という老女の声と共に、棺のひとつが、開く。

『……久々の出番だn』

棺の中に保管されていた棺の中で最もリグリットが長く使っている『かつての敵手』——それを、アルベドの速攻劇が撃砕し轢殺してしまう。

「ば、ばかなっ?!」

愕然と一番の棺と死体の破壊ぶりを見やるリグリット。

そのまま武装する老女へ踵落としを振り下ろしにかかるアルベドの暴乱であったが、アインズのブラック・フレード・オブ・デイズスター〈災厄の黒き刃〉——三本の内で半壊した一本で妨害される。



アルベドは黒い翼を広げて、アインズの〈魔法の矢〉などを破碎粉砕しつつ、彼との戦闘を真つ向から選ぶ。

「……あの黒いのも、相当やばそうな相手じゃな！」

「すまないね、リグリット。また面倒に巻き込んだ」

その言葉に老婆は200年前を思い出し出してならない。

四武器と棺十個を背後に浮かべ——うち四つに入っている漆黒聖典隊員は使えないため、計六個の死者を駆使して、リグリットは番外席次との戦いに挑む。

「戻ってこい、アルベド！」

ブラック・フレード・オブ・ディザスター

〈災厄の黒き刃〉を旋回・操作しつつ、必死の声で呼びかけるアインズ。

だが。

「戻る？ どこへ？」

アルベドの兜の下の表情が読み取れない。

女悪魔は心底から清々<sup>すがすが</sup>しい心地を声にする。

「自由となった私はようやく、私の望みを果たせる」

「望みだと？」

ナザリック守護者統括の地位にあったNPCが、心の奥底から望んでいたこととは、何か——アインズは咄嗟に答えることが出来なかった。

それも当然のこと——アルベドは言い募る。

「ええ。私の望み。そのために、できることをなしているだけです——邪魔なパンドラス・アクターを殺めた<sup>あや</sup>ことも、ナザリックに反旗を翻<sup>ひるがえ</sup>したのも、番外席次というコマに協力しているのも、すべて、その一環にすぎません」

「おまえの、望み？」







ンは撤退する……

番外席次と戦闘を繰り広げていたツアーとリグリットたちも、マレの〈魔法三重最強化・大地震〉の影響をもろに被<sup>こうむ</sup>った。

「僕らも撤退する、リグリット!」

「はあ、はあ……つたく、歳は取りたくないものだね……」

喉を灼熱に赫くするツアー。

「現、第一席次の坊!」

「は、はい!」

「あんたは法国首脳部の皆を逃がしに行きな——急げ、30秒もやれんぞ!」

この日、三度目のツアーの炎。

大熱波が法国北部を完全に蹂躪する。

さしもの番外席次とはいえ、竜王の息吹を涼風のごとく受け流すことは難しい。あらゆる攻撃の手を封じる時間ぐらいは、稼げる。

「ところでツアー、撤退場所は?」

「……とりあえず魔導王の陣営を頼ろう。法国には、折を見て協力を要請する」

「そうじゃな——わかった」

こうなつては法国も魔導国もないが、アインズの戦闘力——彼がプレイヤールかどうかぐらいの確認はしておきたい。

ツアーとリグリットは、魔導王の手を引く闇妖精の少年少女を追い、真紅の吸血鬼——どこかで見えたことがある気がする槍の使い手が殿軍を終えるのを眺めつつ、巨大な白竜は友を掌の上ののせて、戦場を離脱した。

## 支配者(ついで)

／?The Great One Imitation”

「法国は魔導国に全面降伏いたします」

現最高神官長のサインと各種アイテム——神の秘宝を、魔導王代理を務める悪魔デミウルゴスが粛々と受け取った。

「いささか混乱はありましたが、貴国とこうして降伏調印式を迎えられたこと、嬉しく思います」

「そうですね——お互いに」

デミウルゴスは珍しく懽然と、あるいは暗然と、法国の面々と握手を交わし、その場を見届けたコキュートスやセバスと共に、魔導国へ帰還すべく、部屋を辞した。

見送ったのは、調印式に参加した光と火の神官長と、法国軍の高級士官や聖典隊員たち……漆黒聖典の五席次や、第十一席次も含まれていたが、例外なしに誰もが項垂れ、震えあがっていた。

魔導国に降った事実にはない。

三者から立ちのぼる強さ——圧倒的な力量の差を感じて。

彼らを護衛すべく派兵された十数体の蟲ロイヤルガードの近衛兵など比ではない。

精強をもって鳴る漆黒聖典の二人すら、「勝てない」と思考が麻痺しかけたほどであった。他の聖典の隊員では、三名が部屋を出た途端に緊張が解けて失心したり嘔吐するものもいる始末。

(あんなものと戦おうとしていたのか……自分たちは)

絶望感に打ちひしがれる「一人師団」ハゼイアを、震えながら彼の袖をつかむ第十一席次がいる。彼女は無言で問いかけていた。

——法国は、私たちは、どうなってしまおうのだろう——と。

そんな二人の様子を、デミウルゴスらの供回り役に付き従ってきたクレマンティーヌが眺めていたが、何も言わず立ち去ってしまった。

生き残った法国首脳部——番外席次による殺戮劇と、直後の魔導王と白金の竜王の介入前に死したマクシミリアン闇の神官長のほか、多くの犠牲を出した。その場へ参じることができた——とある人物に導かれた第一席次によって、法国首脳部で最も優先度の高い最高神官長、光の神官長イヴォン、火の神官長ベレニスは連行……避難することができた。だが、水の神官長ジネディーネ老は老齡を理由にその場にとどまり、風の神官長ドミニクは番外席次への特攻を敢行して即死、そしてそれに追随した三機関長の三人は——間に合わなかった。番外席次を殺さんと解放された大熱波。法国北都方面を完全に巻き込む、竜の息吹ドラゴンブレスによって。首脳部と北都は事実上の壊滅を余儀なくされたと言える。

それ自体は仕方がない。

そもそもの問題は、法国側にあった。

番外席次——彼女の暴走と陰謀を、だれも止めることが出来なかった。察知することすらままならなかった。

彼女に与えられた能力——『他者の異能などを取り込み、喰らい続ける』——それによって得られた隠密性、通信妨害や傍受、転移能力ならびに戦闘技能——それらは数え上げればきりが無い。

中には『相手の傷を癒させない能力』『彼女へ好意を持つ能力』『命令を可能な限り順守させる能力』『戦場で常に優位に立つ』すべての存在が弱体化する』などもある。

聖域に戻った最高神官長は、寂しくなりすぎた……たった三人だけとなった円卓の部屋に、一人の客人——元法国の民である流浪の剣士——老婆を招き入れていた。

彼は動きにくい100歳の体で、彼女に対し尊崇の敬礼を送る。

「——お久しぶりにございます、最高神官長リグリット様」

「元元 じゃ！ 元元 をつけんか、馬鹿者めが！」

「ふふ。相変わらず手厳しい限り——お変わりがない」

「ふん。おまえさんは随分と老け込んだようじゃのう」

一度は魔導国の陣営に寄ったリグリットであるが、彼女は法国首脳部の様子を確かめるべく、神の都をたずねていた。

最高神官長は老いた頬肉をあげて、童心にかえったように微笑んだ。

「リグリット様——元・最高神官長……もう、何年ぶりになりましたでしょうか？」

「そうじゃなあ……確か、前にルーフアウス殿が戦いで少し動いた時じゃったから、八十……九十年はたったかのう？」

100歳を超える神官長は、懐かしい思い出話に花を咲かせていたかったが、そうもいかなかった。

「今回は、誠に、恩に着ます。我等を救ってください」

「なあに。おまえさんらが生き残れたのは、その坊のおかげであり、おまえさんらの運があつたからじゃ」

六柱の大神に感謝しておけというと、リグリットは第一席次の青年に向き直る。

跪<sup>きは</sup>拜の姿勢でそこに佇む青年は、老婆の正体を知って納得の笑みを浮かべる。

「最高神官長でもあられたのですね」

「元元 じゃ、というに」

リグリットは呆れた風に肩をすくめた。緩く結われた髪房が揺れた。かつては生命力に富んだ色をしていた髪色が、今では白いもので染まり果てている。

「儂<sup>わし</sup>程度は、聖典の第二席次程度がちょうどいい席じゃったよ」

当時を思い出すように、リグリットは窓辺に座り佇んだ。平和な童歌が聞こえてくるのを耳にする。

元、漆黒聖典・第二席次「百<sup>ひゃっかんごしゆ</sup>棺護手」——十三英雄・暗黒邪道師の



弟子——百の敵の死体を使って戦える、アンデッド使役の術者——  
「死者使い」リグリット・ベルスー・カウラウ。

法国の首都はだいぶさま変わりしていたが、香の焚かれた神殿の香りは相変わらず心地よい。

「神竜に敗けた後の当時、法国を力押しで導ける神官は、儂しかおらんだからな」

神竜との戦いで、多くの命が喪われた。十三英雄のみならず、多くの国軍を導入して——そして蹂躪を受けた。

人間の国も、それ以外の国も、多くが滅ぶか破壊されるかの道を進んだ。国民一人残らず、国土ごと消滅したものもあった。大陸の地形そのものが変じるほどの大戦——否——大災。それがワールドエネミー。神竜——「饕餮」という存在であった。

そんな状況に追い込まれた中で、リグリットは生き残った少ない仲間たちと別れ、故郷の復興に尽力する道を選んだ。

暫定的ながら最高神官長として辣腕らっわんを振るい、六色聖典を回復させ、憲章を、秩序を、綱紀こうきを取り戻した。荒廢こうはいと頽廢たいはいの一途をたどる国土を堅守するに至った。

そうして数か月後、彼女はすべての職を辞して旅に出た。

神竜に蹂躪され破壊された諸方諸国を巡る、孤独な旅へ。

ツアーとまったく同じ、だが、彼を一切伴わない旅路へ。

そうして。

彼女の後を継いだ最高神官長が、番外席次を肉塊か岩塊のごとき封殺体から取り上げ、壊れた我が娘に赤子を託した……

（何かが違っていたら、儂が番外とやらを取り上げたことじやろう——そして……そして……）

考えるだけ無駄なことだとわかっている。

あと一年、旅に出ることを我慢出来ていたら……そんなどうしようもない空想が脳裏を離れない。

そうしていれば、すべてが違ったことだろうに。

生まれた番外席次——黒白の髪の半森妖精……否……『ワールドエネミー「饕餮」の仔』は間違いなく、リグリットの手で殺され、今日の殺戮と蹂躪はありえなかった。

「最高神官長。本当にいいのじゃな？」

「はい。国民にも宣布済みです」

禍の仔を生み育んだ罪は、償わねばならない。

「我々、スレイン法国は、この国を捨てることと相成りましょう」

神都の民は、法国が魔導国に降った……降伏した事実を受け入れられずにいた。

さらには、「全国土からの避難」まで命じられ、訳が分からなかった。

「法国の軍は見掛け倒しだったのか」「アンデッドの国に寝返るなど、政治中枢はどういう神経をしておる」「我等の生活は、子供たちの未来はどうなるのか」……そういう罵詈雑言の嵐は、魔導国軍の神都進駐と共に、鳴りを潜めた。

大量の魔導国の国旗をもって、一糸乱れぬ進軍を見せる、アンデッドの兵団。

死の騎士が隊伍を築き、上位死霊の群れが空に巨大な魔導国の国旗を広げる。

大神殿を擁する大広場にて、魔導国の宣撫武官……エルダーリッチらを従え、彼らよりも強壮かつ豪華なローブを纏う上位アンデッド、地下聖堂の王の号令は、簡潔を極めた。しわがれた声ではつきりと告げる。

『法国の民はすべて、魔導国へ移住。』

この地・スレイン領域は「封印領域」として、何人の居住も許され

ない』

誰もが沈黙と困惑の繭に包まれて当然の、魔導王の絶対強権。そんな中で。

理由を問いただした勇氣ある若者に、地下聖堂の王は答えた。

『この地に大いなる災いあり』と、魔導王陛下のお達しがある。その大災を取り除くべく、魔導国は全力を挙げて抗するものである』

大いなる災いの詳細は、問われても答えられない、その必要も、何より時間がないからだと話す宣撫武官。

『避難……否、移住手順は各エルダーリツチによる転移にて、数日中行う。安心せよ。これは法国首脳部の決定でもある』

それを証明するように、光の神官長と火の神官長、そして、普段は拝謁することも稀な最高神官長まで、地下聖堂の王の後方に控えていた。

石でも投げられて当然の状況に、光の神官長イヴォン・ジャスナ・ドラクロワが進み出て、生き残った神官長としての責務を果たす。切れ長な目に瘦せこけた老爺ろうや——いかにも陰険悪辣おもんばかそうな見た目であるが、光の神官長として、法国の民の未来を慮る姿は本物であった。「諸君らは魔導国の民となる。繰り返す、諸君らは魔導国の民となる！——納得がいかなぬ者は留まるがよい。止めはせぬ。だが、命の保証はないと心得られよ！ 既に、その大災によつて、闇の神官長、水の神官長、風の神官長、および三機関の長たちが殺され、法国の北部方面軍も壊滅した！ よいな！ 我らが生き残る道は、魔導国へ逃げることに！ これのみであることを、しかと、胸に、刻め！」

彼の涙ながらの布告と血を吐かんばかりの覚悟の言葉に、最高神官長が静かに首肯する姿を見て、神都の民もすすり泣く声を響かせ始める。

「うう……うあああ……」

あるものは激しく慟哭し、あるものは膝を屈して大地を打ち付け、またあるものは神の聖歌を口ずさみながら子供の手を引いて、各々の選択——避難するか否かを決するべく、家路いえじについた。

ここに、スレイン法国は事実上、亡びた。

法国の避難命令の一件を落着させたデミウルゴス達であったが、彼らの業務は山積していた。

消えた番外席次とアルベドの捜索。

ルプスレギナ治療の継続。

ンファイレアとパンドラズ・アクター、復活不能の件。

とにかく、問題の核は番外席次と、それに協力するアルベドにあり、その処理をどうするか、アインズに決議を得ようと試みているのだが、結果は芳しくない。

ナザリック守護者統括の裏切り——もとい暴走行為が、相当こたえたものとみられた。

まさか、法国の民すべてを避難させよなどという命令、デミウルゴスでも思いつきもしない慈悲のかけ方であるが、それも当然、番外席次との苛烈な戦闘を思い起こせば、法国民に累が及ぶのは確定された未来と言えた。

デミウルゴスは喫緊の問題を口の端にする。

「想定よりも、法国の民は従順でした。つきましては、アインズ様のエルダーリッチ部隊をもう少々増員するご許可を承りたく」

「……」  
だが。デミウルゴスたち守護者らが報告する内容は、魔導王アインズ・ウール・ゴウンの脳内に入っていない。

彼はいつもの執務室ではなく、玉座の間にいた。

飲んだことのない酒精を持ってこさせ、構造的に飲めもしない骨の肉体に浴びせるように飲み干そうとする。明らかに常の魔導王の行いでないことは明らかであった。玉座は彼が空けた酒瓶が幾本も転

がり、アルフヘイム産ワインの朱色で、血でも流してみたようなありさまであった。一般メイドらが片付け掃除をしようとしても、アインズが苛立ちの声で彼女らを一喝して、それをさがらせる。これも、普段の優しい彼からはかけ離れた行状である。

彼が自暴自棄に陥った理由——

アルベドの設定を書き変えた、あの玉座に座りながら、彼女との戦闘——暴走としか呼びようがないアルベドの「正常ぶり」だけが、脳裏に刻まれて離れなかった。

いくら鎮静化されても押し寄せてくる、後悔の津波。あのととき、あんなことさえしなければ、……その一念がアインズの心を占拠してやまない。

自分を『愛している』と壊れた遊具のように連呼し、地割れの底に閉じ込められた女悪魔の絶叫——もう、どうしようもなかった。

「アインズ様?」

「……もういい」

「? 何が、でありんしょうか?」

「もう、つかれた——」

「お、お気持ちわかりますが、今は御身の力がどうしても必要に」「うるさい!」

主人の怒声に肩を震わせ、凍りつくデミウルゴスと守護者たち。

「どいつもこいつも! 誰も『俺』の気持ちをわかってくれない! もうたくさんだ! もうウンザリだ! もう何もかも——何もかもが!」

アインズの心の天秤は、完全に瓦解した。ナザリック第一という思想が吹き飛ぶほどの罪の意識が、鈴木悟の脳を圧迫してならない。

「俺は魔導王でも、至高の御方でも何でもない! ただの平のサラリーマンだぞ! そんな俺に、こんな、こんな『支配者ごっこ』……もうたくさんなんだよ!」

普段であれば沈静化されて平静さ冷然さを取り戻すアインズが、己の心にある汚濁と沈殿物をブチまけ続ける。

「ルプスレギナの傷は癒せず、ンフィーレアもパンドラス・アクターも

喰われ、あげくの果てにはアルベドまで洗脳、——いいや洗脳などではない——あれは全部——全部、俺のせいだ!!!!」

「そんな!」

「御身のせいだなどと!」

「俺が悪いんだよ! 俺が! 愚かにも! アルベドの設定を書き変えてしまったばっかりに!!!!」

玉座の肘置きを、骨の右手首が碎けるほど殴りつけるアインズ——否——モモンガ。

業火の瞳から溢れようもない涙をこぼすように、オーバーロード超越者の怒号と烈気はとどまることなく、何の罪もない守護者たち——NPCに降り注ぐ。

「俺は、おまえたちの最高支配者でも何でも無い!」

このナザリツク地下大墳墓の、支配者でもなんでも無いんだ!」

一人の男の心からこぼれだす涙声に、魂が凝固したがごとく、はいき拝跪の姿勢から身動きみじろひとつできない守護者たち。

アインズは世のすべてを呪い、だき唾棄するように書類の束を投げ捨て、玉座から立ち上がり、まるで逃げ転ぶような足取りで、段を降り始める。

「もうウンザリだ……支配者ごっこなんて……ウンザリだ……もう、疲れた——つかれたんだ、俺は——」

ぶつぶつと呟く声にも、かつての覇気は失われている。

シャルティアも、コキュートスも、アウラやマール、デミウルゴスやセバスすら、アインズの——モモンガの——鈴木悟の逃走を止められない。他のシモベや戦闘ブレイクメイドも、ただただ、呆然とモモンガの行状を眺めやることしかできない。

まるで親に置いていかれまいと縫りつく我が子のような視線を感じても、アインズは……モモンガは……鈴木悟は、絶対に振りかえることはなかった。

彼は、ナザリツク地下大墳墓を捨てるように、玉座の間を後にした。

完全に捨て去られ置いて行かれた形の守護者たち一同は、ただ悄然と項垂れて落涙するもの——天を仰いで己の創造主の名に救いを求めるもの——えいじ嬰兒のように啜り泣くもの——魂が震えるような悲しみに押しつぶされて号泣するもの——これも何らかの策の一環、御身の智謀知略かと疑うこと、〃それ自体〃によく疑念を懐くもの——己の失態や失言を真つ先に疑い拳を握るもので、完全に六分されていた。

ナザリツクの表層にまで転移して、ギルドの指輪を乱暴に引き抜き投げ捨てた鈴木悟は、もはやアインズ・ウール・ゴウンでもなんでもなかったが、その名を呼ぶものはまだ残っていた。

「おや？ 伴ともも連れず、いったいどうしたんだい、アインズ・ウール・ゴウン魔導王？」

スケイルメイル竜鱗鎧と四武器を大事そうに尻尾に抱きながら、草原で一休みしていた〃白金の竜王〃 ツアインドルクスⅡヴァイシオン……ツアーであった。

「何の用だ——魔導国のことなど、いいや俺はもう、こことは何の」

関係はないと言おうとした矢先、竜王の口が開いた。

「君。やはり『ユグドラシルのプレイヤー』だね？」

魔導王を——至高の御方であることを辞めた者は、足を止めた。

「——何故そう思う？」

「君に装備された世界級アイテムは決定的じゃない。だが、自らの拠点ホームを捨てるNPCは存在しないからさ——」  
「本名は何と？」

決定的と言えた。ツアーはユグドラシルを知っている……

途切れ途切れに鈴木悟すぎきさとると名乗るプレイヤーに対し、ツアーは提案する。

「悟君さとるくん。ちよつと、僕と共に来る気は、あるかい？」

竜王の存在感に気けおされたわけでなく、単純な好奇心によって、鈴木悟はツアーの背に乗った——



## 占星千里

／Astrology thousand miles

こうなることは分かっていた。

こうなると分かりきっていた。

いま法国の青空を、魔導国の真紅の国旗がたなびき、伝説のアンデッドによる黒い行軍が、神の白き都を満たしつくしている。その惨状に人血が一滴も流されていないことは不幸中の幸い、というべきなのかどうか、正直わからない。

私、漆黒聖典・第七席次こと「占星千里」は、その正確無比な占星術と遠見の魔法の超人的な精度によって、この地位につけられた。私程度の魔法詠唱者はごまんといえるのに、私が読む「未来」の的中率は、異常なまでに高かったことで、空いていた第七席次の位置に就いたのだ。

そこまではよかった。

この能力のおかげで法国の要職に就けたことは誉ほまれであり、まごうことなき英雄クラスの待遇が約束された。

任務以外は多額の報酬で贅沢三昧。法国神都の甘味処かんみどころ全制覇ぜんせいはいを成し遂げた時は、満足感で「いつ死んでもいい」とさえ思えた。

けれど、そのあとが最悪も最悪だった。

一年以上前の「占い」——彼女自身は知らされていなかったが、世界の揺り返しなる事象を危惧していた神官長らの命令で、「法国に敵しうるものはいるか」という問いかけをうけた。そんなものがあるものだろうかと思つたのも束の間、「もうとにかくヤバイ奴が来る」という結果が見えた。

どうヤバくて、どんなにヤバいのかまでは伝えようがなかったけど、とにかく「破滅」級の災いが起こることが見えたことを、かろうじて伝えた。

その結果を聞いた法国の首脳部——我が上司たる神官長——たちは、おそらく「破滅の竜王」級の敵が出現したと判断して、それを支配下におくべく、傾城傾国を持ち出した。

けれど、その結果は見事に大失敗。

とにかくヤバい奴の一撃で、聖典メンバーとカイレのおばあさんが死に、捕縛を試したメンバーも殺される結果に終わった。あんなバケモノ吸血鬼は放置一択とした首脳部の判断は、正しかった。

その吸血鬼を殺ったという「漆黒の英雄」モモンとやらについて、私は何も見えなかったと報告した。おそらく、奴が持っていた第八位階を封じたとか吹聴していた水晶クリスタル、それに類するだけの防諜の魔法アイテムがあり、モモンの情報を読めなくしているのだろうと、結論された。まあ実際は、私が見るのを躊躇って——恐怖して——「見えなかった」ことにしただけで、私は遠見でモモンを覗くことすらしなかった。完全な職務放棄の始まりである（実際、占星千里も知らないが、モモン状態での監視対策は万端にととのえられており、彼女がモモンを監視していたら、間違いなく壮絶な被害が漆黒聖典と法国首脳部にもたらされたことだろう）。

そうして、のらりくらりと日々を立ちまわっているうちに、超級にやばい仕事が舞い込んだ。

《王国と帝国の間で起こる、カツツエ平野の戦争を監視せよ》

だが、実際に起こったのは戦争ではない。

あれは、ただの虐殺であり、蹂躪であり、冒瀆であった。

あの日。

王国と帝国の戦争を覗き見る任務の時に、私は「死の魔軍」を見た。伝説に謳われる「死の騎士」、沈黙都市を壊滅させた「魂喰らい」による100体を超えた騎行を。

そして、その戦争の結末、終局、終焉、すべて。

帝国は、魔導王は、一つの魔法で数万の命を奪い、五体の化け物モ

ンスターを召喚し、それを王国軍にぶつけた。

王国軍は壊滅し、後に残った魔導国軍も無傷という大完勝。「喝采せよ」と命じるアンデッドの声が、聴覚の底に根を張って離れてくれない。

私は、もうそれ以上先の未来を読むことは嫌になっていた。あんなアンデッドが諸国に振りまくものは、災厄と滅亡の嵐に決まっているから。

唯一、魔導王の戦いについては任務内容であったために、話した——話せる余地がまだあった。

しかし、それ以上のことは………言えなかった。

私は好奇心に敗けて、「法国の未来」を占った。

そこでは、法国が「敗ける未来」しかなかった。

何度繰り返し占っても、結論は決まりきっていた。

その絶望を目にして以来、私は、固く自室の鍵を閉ざし、鎖で縛り上げ、誰の侵入も許さなかった。「何を見たのか」を話すことも拒み続けた。

なにしろ、自国の滅びを見てしまったのだ。

誰に、どう弁明したところで「ありえない」「馬鹿げている」と恫喝され否定されるだけ。無駄な抵抗というより、狂人の戯言たわごとに墮するものである。

幸い、そうして引き籠った私でも、首脳部は優遇し続けた——神官らに命じ、自室に食事を届けさせ、最低限の生活を送らせてくれた。だが。

占星千里が事前に「見た」通り、東都は蹂躪され、北都は焼滅し、神都にいたっては、いまご覧の通り。残された西都と南都の住人も、まもなく魔導国の隷奴れいどに落ちるだろう。

祈りは通じなかった。

自分の見たものが、間違いであってくれと願ってやまなかったが、未来は彼女の見たままを裏切らなかつた。

「……どうすればいいんだろう……」

枕を抱いて考える。

未来は変わらなかった。

変える努力を放棄した自分が言ってもあれだが——この運命は、絶対的すぎた。

どこをどう捻じ曲げても未来は変わらず、法国の未来は破綻的結末を迎えるだけ。

どうやっても法国は滅び、聖典は潰え、魔導国の蹂躪を受けるのだ。北と東が潰れるのが先か、南と西が消えるのが先か、その程度の違いしかあるまい。

「お腹すいた……」

こんな時だというのに腹は空くもの。

いつそ餓死して、この未来を変えられなかった責任を取るべきではないとも思うのだが、見た目通り若い女子高生風の占星千里は、まだ死にたくなどなかった。

法国を抜け出して、どこぞに落ちのびるべきだろう……でも、どこへ？

瓦解寸前の王国？

魔導国の属国領？

それとも、南の先にある浮遊城？

極東の果てにあると聞く、白金の竜王の勢力圏——までは、行ける気が到底しない。

どれも解決案・打開策としては下の下であるが、このまま神殿に留まることも危険だ。

光の神官長は、魔導国に降ることが最善の道と説いたが、果たして本当にそうなのか——駄目だ。未来を見るのが怖すぎて、ベッドの中でうずくまるしかない。

「……八方ふさがりじゃん……」

占星千里は悩んだ末に、自室からの脱走を敢行した。

ごく近未来の像を見ることで、衛兵の巡回や神官らの右往左往する様子を観察し、脱出ルートを構築。

狙い目は私の配給・食事を運んできた直後。私はそれを数分で平らげ、廊下の隅に置いて、行動を開始する。

ずっと引き籠っていた私が外にいるのがバレれば、確実に目立つだろう。首脳部にも、あれこれ根掘り葉掘り問いただされるに違いない。

うん。それだけはごめんだね。

(衛兵が行った——十秒後、次の角を左——その次は休憩室に二分隠れる——神官団の死角をつくように移動——神殿の裏口に！)

回り込んだ。

法国での自分の立場はなくなろうが、知ったことか。命あつてのなんとやらである。

(よし、見た通り、ここはやっぱり手薄！)

魔導国への対応で、警備には穴が開いていた。占星千里はうまいこと大神殿裏口から脱出し果せようとして、

「……………え？」

手が止まる。

ごく近未来しか読んでいなかった占星千里は、その未来を予期することが出来なかった。

彼女の脳内は一瞬にしてパニック状態に陥り、フリーズする。

何故、何が、どうして、どうなって——こんな未来が???

裏口の扉が——外から開けることは不可能な封印がされたはずの扉が——開く。

「失礼するよ」

「……………ぴえ？」

占星千里は間抜けな鳴き声でさえするしかなかった。

裏口から現れたのは、見事な竜鱗スケイルメイルの白銀——もとい、ス白金の竜王ツツアインドルクスⅡヴアイシオンと、

「あ、ああ、ま、魔導、王——？」

陛下と呼ぶべきだったろうか——

アインズ・ウール・ゴウン魔導王、そのひとであった……はずだった。

「はあ——」

盛大に肩を落とす骸骨は、占星千里の両目を睨むのをやめ、優しく

諭すような声で言った。

「違う」

「え、だ、だって」

「私はサトル——鈴木・悟だ」

その低声を受けとった占屋千里は、

「……………」

何も言えはしなかった。

「リグリットから教わった裏口があつてね。聖域とやらのある大神殿に乗り込むには、そこを使うといい。〈認識障害〉の指輪も、二人分あることだしね」

「へえ……………」

気のない返事の鈴木悟ことモモンガ——元アインズ・ウール・ゴウン魔導王に対し、ツアーは笑いながら応対。

竜の背中で飛行中、白銀に四武器を浮遊させる竜鱗鎧スケイルメイルを通して、二人は飲めない茶をたてて憩いじいでいた。

「とりあえず。ナザリックとやらの監視がなさそうなところと云えば、現在占領地下の法国だろう。ナザリックの者は、君の“本当”の素性すじょうや動向どうこうは知らないだろうが、まさか法国内部、それも大神殿に逃げ込むとも思うまい。近隣諸国の中で、親しいと思われる人物あたりを探るはずだ」

「……………まあ、確かに……………」

最初は勢いに任せて、属国のジルクニフや、王国で密約を交わしたザナツク、最近なかば降伏状態の竜王国の女王や、ドワーフ鉱山で働くゴンドあたりに話を聞いてもらいに行こうかとさえ思った。が、

ツアインドルクスⅡヴァイシオン……ツアーとの共闘関係を維持したままであることを、端<sup>はな</sup>から失念してしまっていた。これほど王の悩みに適した存在は、RPGには存在すまい。

(いや、俺はもう王じゃない)

RPGの支配者なんて、最初から無理難題にすぎたのだ。

魔導王など、もう、やめだ。

ナザリック地下大墳墓の最高支配者という地位さえ捨てた、今の自分は、ただのモモンガ——否——ユグドラシルプレイヤー・鈴木悟でしかない。

ツアーは鎧越しに鈴木悟と話す。

「サトル君」鈴木悟のままでは長すぎるからと教えた名前の方をツアーは呼んだ。「君が魔導王を続けようがやめようが、それは僕の知ったことではない」

いきなり核心を突く一言。

この地に何百年と生きるドラゴンの王「白金の竜王」は、とにかく現状における共通の敵を確認する。

「問題なのは、我々が共に対峙したあの黒白の少女は、ワールドエネミー、かもしれないということだ」

「ワールドエネミー……」

ぼやくような口調のサトルにツアーの鎧は頷く。

そして語った。200年前に封じた強敵の中の狂敵、災厄にして最悪なる存在……ワールドエネミー。名は「四凶」の「饕餮<sup>とうてつ</sup>」。

「詳細は省くが、リーダーの世界級アイテム「ダヴはオリーブの葉を運ぶ」によつて、奴の存在は封殺することには成功した。だが、完全に破壊することもできなかつた」

「それは何故？」

「リーダーには、彼女を殺すことができなかつたからだ」

饕餮と融合した彼女を、リーダーは確かに殺した。だが、世界級アイテムでとどめを刺す……その直前に、彼は全身全霊を使つての自殺を遂げた。

「おかげで神竜……饕餮の活動は抑止できたが、今度はこちらが手詰

まりとなつてね。対ワールドエネミーに特化したリーダーの世界級アイテムではあったが、その使用中の死によって、生きているのか死んでいるのか判然としない……特殊な「封印」状態に据え置かれたんだ」

「ふむ。生きているのか死んでいるのかわからない」

シユレデインガーさんちの猫、だったか？ 友人から聞いたことのある言葉を心の中で反芻するサトル。

「とにかく。その状態にもっていったことで、饕餮は活動不能にまで機能を停滞させ、それを僕の作ったレーザーエッジで分解した」

「え」

「ただ、僕の道具作成スキルは、父や兄妹たちと較べて情弱に過ぎる。造ったレーザーエッジはとりあえず解体程度には使えたが、奴の心臓や核を破壊するほどの威力は出せなかった……まったく慙愧に堪えんよ」

「ちよつと待て。あれを作ったのはツアーだったのか」

「あれ？」 ツアーは数瞬を思考に埋めた。「ああ、王国にある奴か！

あれは友好の徴として、前国王の時に送ったレプリカのうちのひとつだ」

「そうか、そういうことだったのか」

首を傾げる鎧を無視して、サトルは考えをまとめる。

ユグドラシルの法則を超えた武器——その製造者は「竜王」……そして、竜王のみに扱える始原の魔法の存在。

すべての点が繋がれたような爽快感があった。

「だからユグドラシルの法則を超えた力を——うん？ だが、ユグドラシルの力を超えられるのなら、ワールドエネミーだって、ユグドラシルの存在に変わりないのでは」

「そこが、世界級クラスの厄介さだね」

鎧のツアーは白銀の指を一本立てた。

「ユグドラシルでも200しか存在しない世界級アイテム、9人いるワールドチャンピオン、魔法職のワールドガーディアン、そして、世界の敵——これらは、竜王である僕らをも凌ぐ力を有している」



正直に情報を述べ立てる白金の竜王。

「僕らはこれを「世界の守り」と称している。だが、この力は本来、この世界にあつてはならない存在だ。そこで、我が父の竜帝が中心となって、盟約が結ばれた——世界を護る盟約が」

その内容は、世界を汚そうとする力を抑止すること。

たとえば、発見された世界級アイテムの数量を確認し、それを厳正に管理すること。この盟約は、評議国のほかに竜王国と法国、そしてツアーの仲間たちの子孫が生きている大陸中央や、八欲王を喪ったエリュエンティウなどで批准されている。

だが、

「法国は盟約を破った……破っていた……あんなバケモノを育て上げ、人類の守護者などと僭称させるとは」

唾棄するような口調のツアーに、サトルも黒白の少女の戦闘力を思い出す。

Lv. 100の自分が一撃で打ちのめされた——ユグドラシルでも、あれほど一方的な攻撃を受けた記憶は、サトルにはなかった。

ツアーは盟約の説明を続ける。

「ワールドエネミーの征伐も、そのうちに組み込まれている。とくに連中は、物事の交渉というものが成り立たない存在であることが多く、その上、攻略法を知らぬこちらの住人では手のつけようのない大災害となって襲い掛かるからだ」

「……なるほど」

「慈母などは、あの力を、世界に匹敵する敵を大いに利用・使うべきだと信仰し、前破滅の竜王らの専横を許したことで、200年前はひどいことになった。だが、僕はあのような事態は二度と御免だ。父の尻拭いもいところだが、こればかりは仕方ない」

「うん、おおよその理解はできた」

サトルは答えた。

そのうえで、

「俺が持っている世界級アイテムを奪い取る、または封印するという意志は？」

「それは『ありえない』」

竜王は翼を羽ばたかせて明言した。

「世界の盟約によって、アイテムの保有権は個々人に保証されている。もつとも、君以外の者が、君の世界級ワールドアイテムを使って悪事を働く場合などが発生した場合は、話は別だ。君が管理できないのであれば、我が宝物庫に、エリユエンティウの守護者たちに預けることになる」  
「なるほど。それと、もう一つ」

「どうぞ？」

「ナザリックに存在する世界級ワールドアイテム——俺のを除いた10個は、  
どういう扱いを？」

「基本は個人所有の場合と変わりないよ。アイテムの中には、拠点運営や拠点防衛に必須な能力を——、え……10個？」

そう10個だ。

アイنزの腹に装備されたそれ以外のアイテム——諸王の玉座、  
カロリックストーン、熱素石、ヒュギエイアの杯、山河社稷図、幾億の刃、強欲と無欲、  
アルベドが破棄した『真なる無』ギンヌンガガブ、桜花聖域の領域守護者が持っていた（今はシャルティアが預かっている）「一つ」、そして二十のうちの  
「二つ」——総計10個。

「どうした？」

「……………」

呆然とする鎧は頭を振った。

さすがのツアーも、10個の世界級ワールドアイテムを保有するギルドなど、他に例を見ないのだろう。「リーダーからそんな話は聞いたこと、あつたかな？」と記憶を探る。

彼はしばらく腕を組んで考え込み、

「やはりここは『盟約に従おう』——ナザリック地下大墳墓の世界級ワールドアイテムは、そのまま安置されるということ。うちの評議員たち、各竜王にも話は通しておくよ」

寛大さを見せた白金の竜王。

サトルはもう関係ない拠点ではあるが、ナザリックが無事に守られたことに安堵した——場合によっては、奪い合いになつていたかもし

れないと思うと、無い肝が冷えあがる。

(そうなっていたら、俺は)

ナザリックを護ろうと思えたのだろうか——そんな不吉すぎる思索が空洞の頭蓋内をよぎった。

そして、現在。

竜王の存在を〈認識阻害〉の魔法で隠しつつ、二人は法国の大神殿——その裏口に立っている。

神殿の裏口で腰を抜かした少女は、女子高生風の身なりで、サトルの顔に瞠目どろもくしている。おそらくは、彼女の魔法能力や特殊技術スキルによる看破能力が強すぎるせいで、こちらの〈阻害〉を透過させてしまったようだ。

そして、腰を抜かすのも当然。

この顔は多くの者にとって死の象徴であり、不吉の代名詞——アイズ・ウール・ゴウン魔導王そのものなのだから。

「いや、絶対完全に、モロに魔導王の陛下じゃん？」

しかし、サトルは重ねて訂正を求めねばならない。

「ち・が・うー！」

「……うえー？」

あらゆる死を覚悟して腰を抜かしたままの占星千里女子高生に対し、魔導王ではない骸骨の魔法詠唱者は、告げる。

「私の名は、スズキサトルだ。アイズ・ウール・ゴウン魔導王では、断じて、ない。長ければサトルと呼んで構わん」

「は、……はあ」

ようやく納得を取り付けたところで、ツアーが女性に対し命令——もとい、お願いする。

「それじゃあ、気を取り直したところで。僕らが見えている君、ちよっ

と聖域まで案内しておくれよ

「聖域つて——まさか、あの御方のいる?」

鎧が領くのを見て、占星千里は「無理無理無理無理!」と首と手を同時に振り続けた。

「あ、あそこは——あそこだけは本当にダメで」

「いいじゃないか、案内くらいしておやり。お嬢ちゃん」

その声の主はツアーでもサトルでもない。

告げた老婆の声に、占星千里は振り返って驚き、ツアーは懐かし気に、サトルは初対面の人間に対する反応を、それぞれ示す。

「やあ、リグリット。約束通り、連れてきたけど?」

「ふふ。よく来たのう、ツアー、魔導——いやサトルとやらを連れて。ルーファウスも、自分と近い上位種族が近くにいれば、少しはまともになるかもしれないじゃろうて?」

「? ルーフア? なに?」

「あなたの醸し出す強壮な『負のオーラ』は、あいつにとっては良い影響を与えるはずじゃ。おおっと挨拶が遅れたなサトルとやら。儂の名はリグリット、よろしく」

「はあ……」

「あ、え、おばあさん、あなた——ルーファウス様のこと、し、知って?」

「案内してやれ、第七席次・占星千里」

そう告げた若者の声に全員の視線が集中する。

「今は火急の時であり、こちらのご隠居様——リグリット殿は我々の大先輩であらせられる。命令には従いなさい」

「儂は命令じゃのうて、お願いしとるだけだぞ?」

「ええ、ええ。わかっておりますとも」

「た、……隊長くん」

「ようやく部屋を出られたのだな。息災そうで何よりだ、占星千里」

領き、同輩の無事を確認できた第一席次は、責めはしなかった。占星千里が恐慌に閉じこもったこと、アインズ・ウール・ゴウン魔導王の情報以外の「未来」について語らなかつたことの責を一切問わな

かった。

占星千里は大粒の涙を流しつつ、一行の案内を務めることに相成った。

## ルーファウス

／R u f u s

魔導国と法国の国境地——その戦闘痕が生々しく残る戦場跡の、地下数百メートル。

そこをまるでピクニック気分で歩く、ウォーサイズ戦鎌を左肩にかけた少女が、一人。

彼女は確かに白金の竜王たるツァインドルクスⅡヴァイシオン——ツァーの炎を浴びて吹き飛ばされたはずだが、まったくの無傷。その声も、常の様子のそれであった。

「やつほー、生きてる?」

地割れの底で、恋焦がれる男の名をぶつぶつ虚ろにつぶやきながら、何もない無空を眺める女悪魔を、黒白の少女——番外席次が呼びかけた。

「随分と深く閉じ込められたじゃない?」

アルベドがようやく、番外の方へ視線だけを転じた。黒白の少女は続けて感想を述べる。

「ナザリツクの森祭司も、やるやつはやるもんだね?」

「……マールレの魔法だもの。彼は、ナザリツク地下大墳墓の第六階層『ジャングル』の階層守護者。これぐらいの地殻変動は、出来て当然のことよ」

「なるほどね、つて彼? え? 彼女じゃなくて?」

言われた内容に疑問符を浮かべる番外席次。

が、強者に位置づけてもいい闇妖精ダークエルフの少年に対する興味は、一瞬で霧散した——所詮は魔法職——自分以上の力を持った『真の強者』たりえるとは思えない。

実際、彼が臣従しているアインズですら、一発でノックダウン寸前だったのだ。彼の部下であるマーレの身体能力など、番外の足元にも及ぶまい。年齢<sup>よわい</sup>100にも満たないような子供に食指を動かせるほど、半森妖精<sup>ハーフェル</sup>のバケモノは節操なしではなかつたのである。

彼の姉たるアウラと共に、せいぜいデザート程度にはなるだろうかと、番外は本気で考える。

「まあ、それは置いておくとして」

問題は目の前の女悪魔だ。

半洗脳状態は維持したままだが……

「モモンガ様……どうしてわかつていただけなのですか？ 私はこんなにも、こんなにも、御身のことを思って、……想い焦がれて」

黒髪に純白のドレスを纏う悪魔の失恋に、黒白の少女は肩をすくめた。

「なあにをしょぼくれてんのよ、一回ぐらいアインズ様とやらから拒絶されたくらいで」

刹那、アルベドは番外席次の首にバルディッシュを突き付けた。

彼女の髪の毛が数本ハラリと風に流れる。

「アインズ様じゃないわ。彼は、モモンガ様……モモンガ様なのよ、いわね？」

「わかつてるってそれぐらい」

彼女は言いながら、戦斧の刃先を指先で下げさせる。女悪魔は納得し、武器を納めはしたが、やはりモモンガの拒絶とシャルティア達の妨害は、猛省すべき要素が多すぎたと、作戦プランを早急に練り直す。そんな彼女の真剣そのものという様子に、一人で爆笑しそうな衝動を抑え込みつつ、番外席次はアルベドの抱える「矛盾」を思う。

彼女の設定……強烈な記憶……最も大事な事柄は、『モモンガを愛している。』だ。

だが、果たして。

そのモモンガ様とやらが、いなくなつた時。

彼女は何を思い、どのような暴挙に打って出てくれるのか——

(いやあ、楽しませてくれるわ。このバカ悪魔は)

番外席次は、自分が半支配下においた……自律した意識を保ちつつ、自我の求める衝動に身を任せるままにさせた暴走状態のアルベドを、壊れる手前のオモチャ同然に玩弄がんろうしていた。そして、それは玩弄アルベドされる側にとっても既知の事実——それでも、彼女にはそうすることが最善手であると思考するに至ったのだ。

「ま、何はともあれ」

「ええ」

お互いがお互いを駒扱コマいしつつ、二人は地下をのぼり、国境地帯を進む。番外席次の隠密おんみつの異能タレントを使って悠然と。

二人が目指すのはカツツエ平野を超えた先。カルネ領域に囲われた平原の、さらに奥深く——

魔導国の枢軸たる魔導王が居を構え、幾千幾万のシモベ共ぼっこが跋扈するはずの、ギルド拠点。

「またしくじるのはごめんだよ?」

「次は本気でやるわ……それにナザリック全軍相手であれば——ルベドの使用も辞さない」

使えばモモンガの身にも危険が及んだかもしれないぬと使用を断念したことが敗因であり失敗の大元であったと、女悪魔は分析。

次は容赦なく狩るつもりだと宣言するかのように、彼女はルベドを“起動”。

八個の赤い立方体が、ひとつの“像”を描き出す。

ふと、アルベドは姉ニグレドが言っていたことを思い起こさずにはいられない。

——スピネルルベドはいずれ、ナザリックに災厄をもたらさだろうと。

それはこういうことだったのだなと納得するアルベド。

彼女たちの前に現れたのは、赤いドレスに長い赤髪、瞳の色も真紅に染まり、その長手袋やピンヒールに至るまで赫く塗られた少女。

アルベドとよく似た、しかし少女体の姿をしたそれは、“神人合一”のシステム……黒化ニグレドから白化アルベド、そして赤化ルベドへ。



完全と不完全を融合させた、錬金術の最終過程にして最終段階——  
神と人の合わせ姿——ナザリック最強の「個」と称されし存在。  
彼女はシステム上「自我」を持たず、指揮権を委ねられた姉・アル  
ベドの命じるままに動く暴力装置として、その武力を遺憾なく発揮す  
ることだろう。

「いいね、ますますアンタらのこと気に入ったよ」

番外席次は凶悪な笑みを浮かべ、アルベドの本気度を確認する。

——ふと下腹部の疼きを覚える番外席次は、内心で語りかける。

（大丈夫だよ——「母さん」）

黒白の少女は己の本能と欲望が命じるまま——「母さん」と呼ぶ  
べき存在が己の内でも求めるまま、敵を喰らい続けていくことを約束す  
る。

下腹部をそれとなくさする番外。

きっと自分は、母を復活させる依代よりしろにすぎないのだろう。だが、そ  
れが何だというのだ。これほど素晴らしい存在かあさんが外に出られるよう  
になれば、それはきつと番外にとつて、祝福すべき事柄に違いない。  
そう確信しながら、より強き者を、強き胤たねを、強き種しゅを、番外席次は  
求めに征く。

自分という最高の母体から生まれるのは、「世界の敵」と評すべき  
モノ——暴虐と冒瀆を全世界に撒き散らすだろうが、そんなこと知っ  
たことではない。

何故なら、「母」は生誕を、誕生を望んでいる。

これ以上の理由など、他にいるだろうか？

（もう少し待ってね、母さん。もっと強い奴等なら、あそこには確かに  
いるはずだから）

噂ワールドに聞く階層守護者どもは期待薄だが、それぞれに装備されている  
世界級アイテムは、実に興味深い。宝物殿のものを含む世界級アイテ  
ムが10個——それをすべて「番外席次が喰らえたら」？

……彼女たちは一路、「ナザリック地下大墳墓」を、目指す。

ナザリツク地下大墳墓とは反対方向——法国の神都、その大神殿にて。

漆黒聖典・第七席次「占星千里」の先導を享けつつ、アインズもといサトルは、ツアーヤリグリットらと親交を温める。

「それにしても、見事なアンデッドぶりじゃな。サトルとやら」

「まあ。これでも死者の魔法使いでは最強種たる死の支配者だからな」

「オーバーロード？ おお、ルーフアウスから話は聞いておった」

「ルーフアウス？」

「あ奴がアンデッドとなったのは550年前頃じゃったが、まだ自我を保つ余裕はあった。じゃが、本格的に活動できるようになったのは、闇の神が八欲王に自害同然の殺害を依頼した500年前からじゃ。そして、亡き夫の遺志を継ぎ、法国を護るべく暗躍暗闘を続けた。400年前の極東戦役も。300年前のガテンバーグでも。200年前の『大戦』も、然りじゃ。じゃが、100年前、いやさ90年前の戦で、アンデッドの最頂点の一種に変貌してからは、兎角自我を抑えることに全能力を振り分けざるを得なくなつてのう。今はこうして、ルーフアウスの奴は聖域にふさぎ込んでおるといわけじゃわい」

「ふーん……なあ、さつきから、そのルーフアウスって誰のことを言つて」

「ぶぶ、無礼ですよー！」

占星千里が思わず声を荒げて振り返っていた。

アンデッドと老婆——二人の視線……あるいは死線を受けて、半瞬もせず女子高生風の身体を縮こまらせたが、「ぶ、無礼なんですよ」と弱弱しい小動物のごとく言い募る。

リグリットは笑った。

「そうじゃったな。儂としては220年の友人。つついあれが闇の

神スルシャーナの第一の従者——漆黒聖典の最頂点に位置することを失念してしまうわい」

「220年」

「200年前は、まだ自我を抑制できておったが、100年前からはほぼ動けんくなつてのう——上位死霊ハイレイスのさらに上へと進化することになつてからは、とにかく周囲の人間を害さぬよう、気を配りまくつておったよ」

あつげらかんと告げられた言の葉に、第一席次と第七席次は瞳目を禁じ得ない。サトルもまたリグリットの言う200年というご長寿に、あついで興味をひかれた。

「なに。パラダインの坊がやってることと、基本的なことは変わらんさ。どちらかといえば、向こうが私のまねをした、というべきなのかねえ？」

「パラダインの坊」

「もつとも、私自身わが師である暗黒邪道師・エメト殿からの教えで、これだけの永き生を謳歌させてもらつとるだけじゃが？」

帝国最強の魔法使いを「坊や」扱いしてしまうリグリット……元・法国の最高神官長であり、旧・漆黒聖典・第二席次であり、十三英雄の一人たる「死者使い」である彼女は、ツアーの方へ水を向ける。

「ところで、ツアーよ。本当に良いのじゃろうな、おまえさんがここへ……法国の大神殿に侵入なんぞして」

ツアーの身分と立場を慮つての発現であつたが、ツアーはそれを一笑に付す。

「呼び寄せてきたのはそちらだろう？ 第一、国際問題にしようにも、ここにいる僕は“空っぽの鎧”でしかない。本体は法国国境地外においてきたから、不法侵入には当たらない——だろう？」

「かかかか！ あいかかわらず口達者な竜じゃよ、おぬしは」

まるで少女のように呵々大笑する老婆——年相応ではないというよりも、彼女は今も少女のような心意気でここにいるのだろう。

なみの人間では不可能な精神構造の妙みょう、とも言えた。

そんな老婆に対し、ツアーは応年と変わらぬ調子で疑義を述べ立て

る。

「しかし、ふむ、上位死霊ハイレイイスのさらに上か……よくわからないが……50年前に現れた、八欲王が一人、ニヴルヘイム・ワールドチャンピオンと、同等あたりだろうか？」

「そこはわからんよ。儂の師である暗黒邪道師にもっと教えを乞うておくべきじゃったかのう」

「待って、ちよつと待て」

与えられる情報量に、サトルの存在しない脳がパンクしかける。

「ツアーは八欲王を知っているのか？」

「ああ、いや、知っているというかなんというか」

「ふふん。こやつの数少ない汚点じゃよ、サトル。ことが終わった後でゆつくりと語ってやるとしよう」

「そうはさせないぞ、リグリット。話すときは、せめて僕の口から話す！」

「はいはい」

二人の姿を見て、サトルは懐かしい思いに駆られた。そう。

サトルにも、こういう風にからかい合った友がいた。椰揄やゆし合っても、喧嘩しても、協力して共に戦う仲間がいた。

だが、今のサトルはどうだ。

たった一人……自分一人……そう思いかける中で、  
(そうだ)

思い出した。

ナザリックの守護者たちを。

シャルティアとアウラがいがみ合い、マーレがおどおどと仲裁を試み、デミウルゴスとセバスが舌戦を繰り広げ、コキュートスが……

(いやいや、思い出すな)

胸の底を温めかけた思い出を、サトルは一瞬でシャットアウトする。

もう、彼らのことなど、知らない。

自分はナザリックを捨てた……棄てたのだ、サトルは。

「こ、この大階段を、のぼりきつたところが大聖堂、聖域となります……」

第七席次は緊張した声で階段を指し示した。

「案内ご苦労」という第一席次やリグリットらの声を受けて、思わずその場へへたり込む女子高生風の少女。

「も、もう歩けにやい」

「彼女は私が」介抱の名乗りを上げる青年・第一席次に対し、三人は頷いて後を託した。

コツリコツリと段を刻むリグリットとツアー、そしてサトル。

神殿の最上層に位置するそこに彼らはたどりついた。

「ここが？」

「ああ……」

リグリットは頷き、その静謐せいひつな空気をかき乱すように前進。ツアーとサトルも後続く。三者の足音がよく反響する。

「スルシャーナ第一の従者——サラ・ルーファウス……と、これ以上言うのは死の神への冒瀆行為にあたるわい。とにかく彼女のいる聖域は」立ち止ったリグリットはひとつの夜色の扉を開いた。「ここじゃ」

あれほどの戦闘をこなすリグリットでも重い扉を開けると、濃い闇の瘴気——のようなものは吹き出てこない。

代わりに、アンデッドの動きを抑制する香が廊下の窓の外へ。

「……おおお……」

一瞬だけ身がまえたサトルは感嘆の声をあげた。

中にあつたものは大聖堂。

そして、サトルが思わず声をあげるほど荘厳な「夜」があつた。

そこは闇の聖堂といふべき場。建材も天井も、壁や柱、信徒席やシャンデリアにいたるまですべてが、夜色にそまって、極小の星に煌いている。

まるでギルド拠点の内装のようだという感想を、サトルは何とかえんげ嚙下する。

奥の席に人影アンデッドというか、同族を感知する気配があつたためだ。

「ルーファウス」

リグリットは呼びかけた。

奥のパイプオルガン席に座る、一体のアンデッドへ向かって——しかし応答はない。

「サトルよ。そなたのオーラ系スキルとやらを最大にしてみてください」

「え、だが」

「大事な。この聖域は外部とは完全に隔絶されておる。影響は出ん」

そこまで言われ頼まれれば、断ることなど難しい。リグリットやツアーが、この程度のことには影響を受けるとも思えない。

オーラと言えば、確か、クストが言っていた。

『沈黙都市にいた地下聖堂クリプトロードの王のオーラと、あなた方のオーラは確実に、違う。敵か味方が判別できるぐらい違いましたよ』と。

それが関係しているかどうかまでは判然としないが、とにかくサトルは、リグリットの願いを順守する。

「スキル：絶望のオーラ——レベル5V」

アンデッド固有の、漆黒のオーラが、聖域内の浄化された空気を汚染していくのがわかる。

なるほど、あそこにいるアンデッドは、この神聖な空気の中に自分を封じ込めるつもりで閉じこもっていたわけだ。

しかし、それをサトルのオーラが粉微塵になるまで破壊した。様子を窺う三人。

彼らの見ていた漆黒の影——その後ろ姿がゆつくりと、顔をあげる。

そして、

ドオ——ン

ゴオ——ン

というパイプオルガンの音色が響き渡る。そして緻密な旋律が、闇色の手で押された鍵盤から奏でられる。

オルガンの弾き手が久方ぶりの目覚めで興が乗ったように紡がれる聖歌は、サトルには聞き覚えがあった。

「イベントNo. 09 ワールドエネミー・九曜喰らい、の？」  
戦闘用BGMだった。

そのパイプオルガンアレンジというべきだろう。

幾多もの音階音層音質が複雑に混濁しつつ、ひとつの交響楽を生み出していた。

人間技では不可能な超絶技巧を、アストラル星幽界体の手足を分割統御し、見事に再現され奏でられるパイプオルガンの演奏に、一同はしばし感動の吐息と共に耳を澄ます。

淀みなく押し込まれ踏み込まれていく手足の鍵盤群。パイプの音階を調節するための微細な作業も見事すぎた。

それを、たった一人で。

……最後に、物悲しい旋律を刻んだ演奏会は、幕を閉じた。

そうして、ようやく満足を得た奏者席——席の端に座っていた『影』が、立ち上がる。

「ふあああああ……」

まるで、永い眠りから覚めたような女性のおくびが、聖域内に響く。肩をぐりぐり回し、実体のない体の疲れをほぐそうとしている。その身に骨と関節があればバキバキ音色をあげたに違いない。階段をのぼってきた第一席次や第七席次が、感動に身を震わせ、目頭を押さえやすらいた。

そして、スルシャーナ第一の従者——アンデッドは振り返る。

「あ。あら、まあやだ、お客さまかしら？」

驚愕に肩をびくつかせる女性の挙措。

しかし、その面貌は純黒。

眼球も鼻梁も耳朶も口唇も存在しない黒き相貌に、漆黒のヴェールを被った上位死霊——そのさらに上位の存在——闇の色の貫頭衣を纏う最上位死霊女王——サラ・ルーファウスが、そこにはいた。

## 守護者（シモベ）たちの覚悟

s / Resolution of defence person

ナザリック地下大墳墓・第九階層の「バー・ナザリック」。  
飲み干され、テーブルに叩きつけられるショットグラスの音が盛大に響く。

「ふい〜……」

酒精を嗜むには幼さの残る階層守護者に対し、警告を促す声が降り注ぐ。

「アウラ様、それ以上は〈毒消し〉の魔法でも  
「ああん？」

第六階層守護者の片割れは、小さな一口サイズのショットグラスを積み上げつつ、ドスのきいた一喝を浴びせる。

闇妖精の階層守護者は、彼の気遣いを無にした。

「いいから、次のニヴル Heim 産ヴオトカを持ってこい！ 追加で20個！ レモンも忘れるに！」

「——かしこまりました」  
呂律のまわっていない注文ながら、副料理長の茸生物は丁重にオーダーを受諾。

アウラの肢体は幼年のそれであるが、すでに76歳から77歳へと歳を重ねている。何より、このナザリックを守護する仲間であり、地位としては最高位に近い階層守護者だ。副料理長ごときが差し出口をし続けられる相手ではない。いくら地位など飾りであり、同等の位置にあるシモベ同士と言えど、「客人」への礼節はわきまえねば。それが副料理長の考えである。



「……くそまじい」

酒精など嗜たしなまないアウラだが、酔わねばやってられないのが現状だ。

アウラは毒耐性の装備を外しているが、ショットグラスに注がれる強力な酒精にも、それなりに耐性を備えていた。つまりは、闇妖精ダイクエルフが故の毒耐性である。

「ううん……おねえちゃん、のみすぎだよお……ぐうう……」

だが、弟のマーレが真正面席で盛大にテーブルの上に突っ伏し、潰れているように、彼女たちにも限度はあるのだ。アウラはその許容量に挑戦するかのようになり、空になって逆さに積んだショットグラスの山を落ち着いた照明の下で透明に煌く積木のごとく積み上げていく。あまり上品なバーの楽しい方ではないが、本人は知ったこっちゃないと言わんばかりに、新たなグラスを仰いだ。ふと、弟の唇から寂しげな涙声なみごゑが紡がれる。

「ひっく……ぼくたち、ぐす、どうすればいいの……おねえちゃん」

「……、……そんなの……そんなの、知るか」

「……うう……アインズさまあ……」

アウラは再びグラスをガンッと積み上げた。

そして。

今日この日に限って、バーナザリックの客人は、彼女たちだけではない。

「……」

「……」

「……」

カウンター席で並んでビールジョッキ(樽サイズ)を空にしているコキユートスとデミウルゴス、そしてセバスが、沈鬱な表情で考えごとに耽っていた。

彼らの考えること……憂慮すべき事柄は、ひとつだけ。

——このナザリックに最後まで残っていた至高の御身、最高支配者であるギルド長、アインズ・ウール・ゴウン魔導王、モモンガを失つ

たこと。

彼らにとつては、仕えるべき最後の主君に捨て置かれたような状況だ。

誰もが迷い、戸惑い、自己憐憫と自己嫌悪のはざまを行ったり来たりしている。

あのとき、ああしておけば――

このとき、こうしておけば――

そのとき、そうしておけば――

数え上げればきりが無い。

特に、デミウルゴスあたりは深刻だ。

彼ほどナザリツクの政務と軍務の両輪にたずさわり、アインズの、いやさモモンガの裁断を仰ぎ、その見事な差配ぶりに舌を巻いて称揚し続けてきたが、その表情の苦吟<sup>くぎん</sup>ぶりは、これまでの比ではない。彼は額を抑え、自己の不孝ぶりに嘆息する。

「ウルベルト様に託されておきながら……私は、アインズ様を追いつめただけやもしれません」

「デミウルゴス様」

「私が、もつとアインズ様の能力に疑問を持つていれば」

「ソノヨウナ不敬ヲ働ケルオマエデハナイ」

セバスが嘆くように首を振り、コキュートスが極寒の腕で僚友の憤怒に燃え焦がれそうなほどの熱気を纏う背中をさする。

副料理長は御三方の飲み方こそ――樽サイズのジョッキではあるが――このバーナザリツクには相応<sup>ふさわ</sup>しいと考えている。お子様な第六階層守護者たちと比すれば一目瞭然だ。

が、副料理長自身も、アインズがナザリツク地下大墳墓を「お捨てになった」と聞いて、心に騒<sup>さわ</sup>めくものを感じる。否、感じないシモベなど一人もいない。実際に、最後の御方<sup>モモンガ</sup>から捨てられる現場に直面した階層守護者たちのほとんどは、自分たちの行動に間違いや失敗の種子が眠っていた可能性を考え、こうして酒精の力に頼り切ろうとしている。ちなみに、第九階層には他に食堂があり、ラウンジや大衆酒場の類もあるのだが、そちらは他のシモベ達――第九階層の一般メイド

をはじめ、他の様々なシモベ達が悲嘆の涙を流し、悲惨な状況に慟哭している真つ最中ときている。意識不明で治療継続中のルプスレギナ以外の戦闘メイトの皆も、与えられた自室でそれぞれ途方にくれたり、さめざめと涙を溢し、呆然と過ごしたり、縋るように博士の日記を読んだり、悄然としつつ蟲たちの世話をしている。なにより、ナザリックの「階層守護者」が落ち込むような事案の時には、ここバーナザリックへ訪れるのが通例化して久しい。

副料理長が三人の男性守護者に、サービスでリキユール十種を用いたオリジナルカクテル「ナザリック」でも勧めようかと思つた、その時。

「揃いもそろつて、こんなところで管を巻いてたんでありんすかえ？」  
通例化の原因を作つた第一・第二・第三階層「墳墓」の守護者は、バーナザリックの扉を叩いて現れた。

シャルティア・ブラッドフォールン。

彼女だけは常の様子で、列将たちの惨状に眉を顰めている。テーブル席のアウラが真つ赤に燃えそうな顔で振り返つた。

「何よ……自分だつて、うつく、前に反逆未遂を犯したときは」「そうね。それが、どうかしたでありんす？」

「ここでさんざんナザリックに反旗を翻した自分のことを猛省し、酔えもしないのに酔つ払いに来たのも懐かしい。

だが、今は過去を回顧している時ではない。

「アインズ様がお残しになった死の騎士たち中位アンデッドは、まだ十分使えるでありんすえ。わたしの命令でとりあえず表層の警護を命じておきました。それでも壁役がせいぜいでありんしようが、ないよりはマシなはず」

「……壁？」

「ナザリックの防備を固めんことには、話になりんせんからね」「防備を固める？」

「デミウルゴスは息をのみ、本来自分がすべき役割を放擲していた事実を思い出す。

しかし、アウラは不愉快の極みとでもいうべき声色で、シャルティ

アの行動力を嘲弄する。

「ハッ！ ばつつかじやないの？ もうナザリックはおしまいよ！  
アインズ様、いいえ、モモンガ様、ううん違う、とにかく、あの御  
方がいたから！」

自分たちはここを護れたのだ。守るべき価値があったのだ。

だが、至高の四十一人は、一人、また一人と欠けていき——お隠れ  
になり、最後まで残ってくれたモモンガ——アインズ・ウール・ゴウ  
ンすらも、失った。

いったい、彼とアルベドの間に、どのような問題や行き違いがあつ  
たのかはわからない。だが、重要なことはたった一つ。

「わたしたちは捨てられた！ 棄てられたんだよ！ 最後の、至高の  
御方たる、あの方に！」

アウラの絶叫と落涙は、全シモベ達の共通認識であり、共有感覚で  
あつた。

しかし、シャルティアは平然と告げる。

「それがどうしたでありんす？」

「——へ？」

アウラは酔いが引いていくほどの衝撃を受けた。

「至高の御身から捨てられた。至高の御身の不興を買い、棄てられた。  
だから、どうしたというの？」

シャルティアは本気の口調で自棄に陥っていたアウラを窘める。

「私たちの存在理由・根源意識は変わらない。『ナザリック地下大墳墓  
を守護し奉る』こと——そして何より、アインズ様は必ずや、このナ  
ザリックを必要とする時が来ることは、確実の未来」

「必要とする、とき？」

「覚えてる、チビすけ？ 私がアインズ様に罰せられた時のこと」

一度の失敗にくじけそうになった——御身に反旗を翻し、矛を交え  
たことを悔いて悔いてやまなかつたシャルティアを、アインズは、  
たった一言で救ってくれた。

『お前たち全員を愛している。当然、お前もだ』

あの言葉はシャルティア一人のみならず、列席していた守護者全員



に討滅することは叶いますまい。表層は御身の造り出せし中位アンデッド軍に任せ、我等は内部の堅守にあたるのです。各守護者たちは所定の位置へ！ 他のシモベ達全軍への連絡は、この私が責任をもつて受け持ちましょう！」

水を得た魚——というより、油をまかれた炎のごとく強壯さを取り戻したデミウルゴスに命令されるまま、男性守護者たちは動き出す。

セバスが一礼と共に戦闘メイドたちのもとへ神速で駆け、コキユートスは第九階層の蟲ロイヤルガードの近衛兵たちへ指示を送りに進発。

「あんたはどうするでありんすかえ、チビすけ？ 怖いのであれば逃げ出しても構いませんが？」

挑発するがごときシャルティアの口調に、テーブル席のアウラは〈毒消し〉のマジックアイテムを使って、応じる。

「まさかでしょ！ いくよ、マール！ ジャングルの防備を整えるよ！」

「う、うん！ いこう、おねえちゃん！」

守護者たちは再起した。

シャルティアの失敗という起爆剤があったからこそその再燃に、誰も彼もが爆発燃焼しそうなほどあたたかで心地よい歓喜よろこびに浴する。

ナザリックを護ると同時に、至高の御身たる彼を護る——

これほどに、これほどまでに嬉しいことがほかにあるだろうか。

そうして駆け去っていく幼い双子を、シャルティアは慈しみを幾分か含んだ——従姉いとこ、とでも呼ぶべき存在に対するそれに近い感情と共に、見送った。

未来の主王妃は、こうしてナザリック全軍を再起させ、自分もまた第一階層の防護を整えるべく、副料理長ピックキに別れを告げ、〈転移門〉をくぐった。

## 昔語り

### ／Old Story

サラ・ルーフアウス・――

彼女はスレイン法国で信仰される闇の神・スルシャーナの第一の従者……中位アンデッド作成によって此の世界に留まることが許された、死霊<sup>レイス</sup>だった。

だが、闇の神・スルシャーナは、最初から彼女を――恋人だったサラを、アンデッドに変えるつもりはなかった。

「よ、しよつ、と」

存在しない足腰を回して、オルガン席での座る向きを変えるルーファウス。

グレイテスト・ハイレイス・クイーン  
最上位死霊女王――アインズ、否、サトルの特殊<sup>ス</sup>技術<sup>キ</sup>でも一日に作成できる上位アンデッドの中では、文字通り“最上位”に位置する強さを誇る。

肉体を一切もたない星<sup>アストラ</sup>幽<sup>ラル</sup>界体でありながら、装備品によっては物理ダメージを通すことも可能。だが、彼女自身は星<sup>アストラ</sup>幽<sup>ラル</sup>界体への攻撃以外はずべて無効化される。打撃も、斬撃も、射撃などに類する物理攻撃の完全無効化だ。しかも、この星<sup>アストラ</sup>幽<sup>ラル</sup>界体というのは、他の星<sup>アストラ</sup>幽<sup>ラル</sup>界体に属する種族を隷属支配することも可能な反則<sup>アストラ</sup>ぶりで、死霊系種族としては最高峰に位置するだけの能力はある。このアンデッドを打ち倒

すには魔法攻撃系が必要不可欠——だが、純粋な魔法職では、その種族特性故の速度スピードについていけず、一方的にボコられることが多い。つまり、必要となる職業レベルは聖騎士ホーリー・ナイトや魔法剣士マジック・ソードマン、あるいは竜騎士ドラゴン・ナイトなどの特異な職業クラスレベル・魔法系と戦士系を両立させた職業クラスによる攻撃能力が必要になる。たとえば、聖騎士の「光輝の刃V」や、魔法剣士の「火炎剣III」〈雷霆剣III〉〈氷雪剣III〉など。場合によっては、魔法攻撃判定を繰り出せるモンスターの召喚と使用——竜騎士ドラゴン・プレスの竜による息吹攻撃が有効打たりえる。

サトルの脳裏に、ニヴルヘイム・ワールドチャンピオンとミスガルス・ワールドチャンピオンの非公式練習試合の動画が映し出される。物理攻撃完全無効の最上位アンデッドに対し、最上位竜を駆る竜騎士の戦いは、たちち・みーから贈られたおみやげの中でも一、二を争う戦闘動画であった。

「それで」  
そんな淡い思い出のフィルムも、ルーファウスの声で一時中断される。

何もかもがナザリックの思い出と直結してしまう事実苦笑しつつ、サトルは存在しない耳を傾けた。

「それで。この私を起こしてくれた死の支配者オーバードくんの名前は？」

「あ、ええと、ア……鈴木、サトル、です」

「サトルくん、ね。そう畏かしこまる必要はないわ……あなたのオーラのおかげで、私は久々に自由に動き回れていることだし。気楽にルーファウスとか、サラって呼んでくれていいから」

「いやしかし」

サトルは恐縮するというか委縮してしまうというか——相手は数百年を生きるアンデッドだ。

アインズ・ウール・ゴウン魔導王という化けの皮が？がれた今のサトルにとっては、まさに別次元の存在と言える。

純黒のヴェールに隠された相貌も漆黒に錆固められていたが、彼女の砕けた口調は思わず鼻白はなじらむものがある——なにより、

「いいのか？ 俺は君の組織を、ズーラーノーンを壊滅させた、張本人



だぞ?」

そう。

サラ・ルーファウスを盟主に据えていた秘密結社は、もうこの地上には存在しない。構成員の多くは死ぬか捕らえるか、魔導王の洗礼を受けるかして隷従を誓約している。

「うん、知ってる」

にもかかわらず、サラはあっけらかんと事実を受け入れていた。

「あの仔から——番外席次から聞いてはいたからね。ピーターやシモーヌには、本当に気の毒な役目を負わせたものだわ。私は地獄に落ちて当然でしょうね」

シモーヌと聞いて、シャルティアが自階層の玄室でペット扱いしている吸血鬼の存在が脳裏をよぎるが、そつと記憶の抽斗ひきだしにしまい込むサトル。

ピーターというのは誰だろうと小声でたずねると、副盟主としてサトルが対峙し対峙した、小さな黒竜のことであると判明する。

「500年前に、父親に棄てられていたのを拾ってやってね……その恩義に報いようとしてくれたのはありがたいけど、まさか自滅の道を選ぶとは」

親と同じ宿業しゆくごうというやつだろうかと小首を傾げるサラ。

「ま、そのあたりのことはいいわ。今の問題を早急に改めないと、魔導国や法国どころか、世界そのものがヤバいことになりかねない」

「どういうことだ?」

「君たちが対峙した番外席次が、世界盟約に反する存在——彼女が、ワールドエネミーの『仔』であるという情報は?」

「それはすでに僕の感知能力で把握済みです」

ツアーの鎧が答える。

サラは一瞬だが存在しない表情をしかめかけて、その鎧の持ち主——より正確には操作している主が誰か、わかった。

「ツアーくんじゃないの、久しぶり! ——あれ? 90年ぶりだったけ?」

「あの時はどうも、ご苦労をおかけして」

「いいのよ。こちらこそごめんね。後始末まかせちゃって？」

まるで平のサラリーマンが上役に声をかけられたような印象だ。

あの白亜の巨竜ですら丁重に言葉を選ぶ様は、なんとというか、いろいろとヤバい人物なのだということもサトルに教え込んでくる。あるいは、ツアーよりも年長にあたるのかもしれない。そういう雰囲気だ。

「そう気負わんでいいぞ、サトル」

信徒席にドツカリ腰を落ち着け、両足を組んで前の席に置くリグレットに言われ、振り返る。

「状況は逼迫ひっぱくしておる、ルーファウス。事と次第によっては、このあたり一帯に累つらが及ぶ——法国も完膚なきまでに滅びるじやろう」

「滅ぶ、か」

そう聞かされたサラは存在しない肩をすくめて告げた。

「現実味ないわね」

「事実じゃて」

「わかっている。あの仔の暴走を止められなかった——止めようがなかった責任は、何としても取るつもりよ……」

サトル、ツアー、リグレット、そして現第一席次と第七席次の前で、彼女は語りだす。

「すべての発端は、199年前のこと」

ルーファウスは語った。

番外席次のこと。

彼女を見つけた最高神官長のこと。

彼女を育てあげた旧・第一席次のこと。

あまりの強さゆえに「神人」と信じられたこと。

彼女の異能——と呼ぶには邪悪に過ぎる捕食能力のこと。すべて。

「おそらく。あれは饕餮とうてつと同じ能力よ。饕餮は、その暴食によって諸国を食い荒らし、喰らった者の能力をすべて己のものへと変換した」「ふむ——ユグドラシル的には、『捕食』によるステータスの増強と、能力の強奪、というわけか——厄介なワールドエネミーなのは間違い

ない」

「彼女が取り込んだ能力は多岐にわたる。暗殺や暗闘、防諜や監視、それに転移能力や、純粋な戦闘能力に至るまで、すべてが完璧と言わざるを得ない」

「では、どうやって倒す？」

ツアーは腕を組んで述懐する。

「奴には僕の炎も通用しなかった。破壊無効や炎無効にしても、こちらの攻撃が通らないと、やりようがないぞ？」

「手があるとすれば——」

サラが見据える先にあるのは、第一席次の青年が握る、みすぼらしい槍。

「世界級アイテム——光の神が残した、第一席次の槍……」  
「聖者殺しの槍」

サトルは火の瞳を見開いて振り返った。

六柱の装備中、五柱の分は番外と共に聖域に安置されている。そして、番外は、死の神にして闇の神・スルシャーナの戦鎌を受け継いだ。彼女が聖域にいる間は五柱の装備が守られ、彼女がいない間は四柱の装備——火・風・水・土——が聖域に留まることになる。

本来、番外席次はそのために存在する番兵だった、はずだった。

しかし、

「代々、第一席次のみが担うことを許される『聖者殺しの槍』——これを使えば、とりあえず一殺は可能なはず」

「……殺？」

サトルの見つめる先で、第一席次が震えながら瞠目し、問いただした。

サラは朗々と告げる。

「その世界級アイテムの効果は、一人の人間の全存在を代価に、一人の存在を完膚なきまでに殺すこと……意味は解ってるよね？ その槍を引き継ぐときに全部、おしえられるはずだけど？」

「そんな！」

青年は槍の詳細は当然知っていた——それでも叫んでいた。

叫ばずにはいられない理由があった。

「できません！ 自分には、彼女を殺すなんて、そんな……」  
「第一くん……君って、やつぱり……番外ちゃんのこと——」

占星千里は彼の拒絶ぶりからすべてを理解した。

サトルやツアーたちも、同様の納得を得ていた。

自分が死ぬことはもとより覚悟の上。だが、この槍の穂先を彼女に——番外席次に向ける気は、彼には存在しなかった。それこそ、一方的にボコられ、厩舎で馬の小便で顔を洗わされた相手だというのに。第一は番外のことを、恨みに思ったことはなかったのだ。

彼が神官長らから何度も嫁をとるよう……子種を残すように諭され催促されていた、が、その通りにはしなかった、根本的な理由。

だがサラは、平然と第二プランを披露する。

「うん結構。別に、君がやる必要はないよ」

「……え？」

「若い身空、大切な命を謳歌しなさい……というわけで、リグリット頼める？」

「おう——この儂に死ねと？」

「うん」と手を組んで頷くサラに対し、リグリットは本気で愉快そうに大笑いした。

「ハハハハハ。そうじゃな。おまえさんは、世界級アイテムで消滅するよりも重要な役儀がある……とすれば、適任者は元・第二席次にして元最高神官長たる、儂しかおらんだろうよ！」

「リグリット……」

惜別の声を落とすツアーに対し、リグリットは揶揄するような熱い視線を送る。

「なんじゃあ？ こんな婆様が命を張ることに、異議でもあるってのかい——『白金の竜王』よ」

「……いや」

ツアーは鎧の向こう側で居住まいを正した。

「援護は僕が務めよう。万が一にも失敗しないように」

「ふふん。おまえさんの助力があれば、まず失敗などせんだろうて」

二人の間にある見えざる絆のようなものを、サトルは感じた。それこそ、200年来の戦友に対する信頼感が、透けて見えるかのように。

「ところで、サトル君」

「……え、あ、はい？」

「君。ピーターを殺したってことは、『朽棺』はどうしたの？」

「あ………ああ。あの黒い匣はこか」

サトルはアイテムボックスを探った。

死の大螺旋事件——それに失敗した黒竜ピーターが、自死も同然にモモンの剣に貫かれると同時に発動しかけた、慮外の力。しかし、アインズの竜への特攻効果を持つ世界級アイテムによって、『朽棺』は活動を停止。ピーターの死骸だけが黒泥こくでいとなりはて、今もナザリックの調査室で保存されている。

そのときにアインズ・ウール・ゴウン魔導王、もといサトルが採取したのが、この黒い匣であった。

外観は常に朽ち果てた木材で出来ており、いかにも脆そうであるが、死の騎士デスナイトが踏んでも壊れないほどの耐久性を保持している。

サラは告げた。

「君は、その匣はこを使えば、竜王として覚醒することができそうですね」

「……えっ？」

「簡単に言おうと。竜王というのは『継承式』と『襲名式』があり、エルダー・コフィン・ドラゴンロード『朽棺の竜王』は代々アンデッドがなるものなのよ。カタストロフ・ドラゴンロード『破滅の竜王』や『白金の竜王』ブラチナム・ドラゴンロードみたいに自分の嫡出子に継承させる例も勿論あるけど……そうだ。竜王国の女王ちゃん、まだ生きるよね？」

「ああ、ブラックスケイル・ドラゴンロード『黒鱗の竜王』』と言っていた。ナザリックに協力するよう手配した時に、内々のうちに顔を合わせている」

「けれど、あの子の血筋は八分の一『七彩』ブライトネスが入っているだけ。——意味わかる？」

「ああ、そういうことか」

つまるところ。竜王とは各自で名乗っても虚飾にはならない。有名どころは襲名のための段取りがあるものの、それ以外の竜王は自由に名乗ることが許される、というところか。

「無論、『黒鱗』は例外中の例外——彼女が扱える始原ワイルド・マジックの魔法も、犠牲コストがえぐすぎて国民が滅びるって感じらしいし」

「確かに……そんな話を聞いたな」

「にしても。200年前の『破滅の竜王』と『朽棺の竜王』、『吸血の竜王』は、本気で最悪だったわ」

「幸い、現在は襲名竜がないのが現状だが——双方、あのアイテムの行方が知れぬ以上、油断は禁物といったところ」

「ツアーくんの言うとおりね。」

さて。竜王についてはこれぐらいにして、今度はあなたの世界級アイテムについて、情報が欲しいところよね？」

等価交換というべきか。これだけ手の内をさらけ出したのだから、サトルだけ何の手段もありません、は通らない。

実際、ピーターという黒竜を殺した際に、『朽棺』を受け継いでしまったのだ。相応の実力——実戦力は備わっていると見做しているサラ達。

サトルは自分の世界級ワールドアイテムについて語った。

するとサラは指を顎の部分にあてて考え込む。

そして、存在しない唇を開いた。

「うまくいけば、二殺目ができるかも」

「二殺目？」

「君のところで復活不能に陥っている、えーと」

サラは空を指で回した。

「ソフィーレア・バレアレとパンドラズ・アクター」

「そう。その二人を救うためには、最低でも二回、番外席次を殺す必要がある——彼女の異能を剥奪し、魂を解放するといった感じね」

神秘的な口調で告発するサラであるが、その表情は窺い知れない。漆黒のマネキン人形に純黒のヴェールをかぶせたような姿だ。わかるヤツの方がどうかしていると言っている。

「仮にも、法国の仲間だろう？」という問いは、「あなたは、自分の身内が自分の身内を殺しておいて、それを許しておける？」という即答に切って捨てられる。

確かに、正論ではあるのだ。

番外席次は闇の神官長を含む大勢の法国民を犠牲の贄とした。

そしてそれは、ナザリツク——パンドラス・アクターを殺すのに加担した守護者統括にもいえること。

「君が魔導王を続けるも続けないも勝手だけど、『身内殺し』は絶対に許しちゃあ、駄目なやつだよ？ たとえ、それが自分のNPCに向けられたものでも」

「……いわれなくても分かってる」

アルベドのことを思い出し、暗然と項垂れるサトル。

彼女が反旗を翻し、パンドラス・アクターを殺害したことから、すべてがおかしくなった。

(いや、おかしくしたのは俺のせいか)

あの最終日。

愚かにもアルベドの設定をイジったことで、彼女は凶行に奔った——

「待て。今、NPCと？」

「言っただけど？」

「君はNPCを知っている？ ということは、ユグドラシルのことも？」

「うん。知ってる」

サラは誇らしげな声で天井を見上げた。

「思い出すなあ……ギルド……七<sup>セブタグラム</sup>世星……スルシャーナと呼ばれるようになった、彼と出会えたことは、私にとって、絶対の幸福だった」

サラは語りだす。

600年前のこと。

人間が弱かった時代のこと。

魔法など誰にも扱えなかった時代のこと。

ルーファウス家は人々を災厄や異形から守る戦士の家系だったこ

と。

そんな自分を助けてくれた、不思議なアンデッド——彼との、逢瀬。  
最初は警戒感しかなかった。けれど、彼の演奏するパイプオルガン  
がとても美しく、惹かれてしまう自分に驚いた。

そんな自分を認めたくなく、幾度も彼に決戦を申し込んだけれど、  
ただの一度も勝てやしなかったこと。

やがて、人間たちに魔法が普及し、「六人」は「六柱の神」となっ  
たこと。

彼のプロポーズを私は受け入れ、私は闇の初代・巫女姫になったこ  
と。

無論、現在のような観者の額冠を必要としない、ただのパートナー  
関係だったこと。

——六柱の内、五柱が戦乱や寿命で死んでいったこ  
と。

アンデッドの彼は、皆との約束を守り、永続性あるアンデッドに変  
えなかったこと。

皆を醜い姿のバケモノになんてできないと、彼は笑っていたこと。  
そして、私が死ぬときが来た時——

「み、皆さん！ 大変です！」

今まで門外漢として信徒席の端の端に移動していた第七席次「占星  
千里」が警告を発した。

彼女は咄嗟に「視て」しまった。

「番外ちゃん、黒髪の白い女悪魔を発見——これって——カルネ領  
域を超えて、ナザリツク地下大墳墓に向かうルートです!!」

昔語りもそこそこに、最終局面の舞台は整った。

——整ってしまった。





「無傷！」

予想はしていたが、これほどの耐性と韌性——無効化能力は他に例を見ない。

吸血鬼の戦乙女は続けざまに航空部隊を五回投じてみせたが、ナザリック周辺の平原を荒らし炎上させる以上の効果は見込めない。

「チビすけっ！」

まだ数キロ先の余裕がある、などとは誰も思わない現状。僚友の号令に従い、平原の木陰こかげに身を潜めていた野伏レンジャの闇妖精は、躊躇ちゅうちゅうすることなく相手の眉間を四本の矢で狙い撃つ。

しかし、

「甘すぎでしょ！」

番外の言う通り、その矢は黒白の少女に届く前に弾き飛ばされる。

漆黒の全身鎧を着込んだ、純白の女悪魔の戦斧フによって。

「くそー！ 邪魔しないで、アルベド！」

〈完全不可知化〉中のため、声は届かないと分かっているにもかかわらずにはいられなかった。

「マール、アルベドたちの動きを止めて！」

姉の指示メッセを専用アイテムの銀のドングリ越しに受け取ったマールは、戦場を側面から眺められる場所おに降り立った。

「と、〈魔法三重最強化・大地の大波〉！」

放たれた魔法は、この世界に転移して直後、ナザリックを隠匿すべく使ったドルイドの魔法。

さざ波のように波打つ大地が、やがてはすべてを呑み込む土色の大津波に変貌していく。轟音と鳴動。爆破の余韻と臭気漂う戦場を、横合いからの広範囲魔法三連が蹂躪する。

しかし、

「無駄ムダ」

番外席次の戦鎌ウオーサイズが一振りされただけで、大地そのものが割断され、巨大な地割れのごとき様相を呈する。マールの起こした大地の大波はすべてその下に落ちていき、何の意味もなく魔法効果時間を終える。

「そ……そんな……」

絶望の声をあげる闇妖精の弟だが、頭を振って怯懦<sup>きようだ</sup>を追い払う。続けざまに〈大<sup>グレート</sup>地<sup>アース</sup>震<sup>クエイク</sup>〉を放とうと試みて、

「あ」

死神の鎌が一瞬で必殺圏内に飛び込んでくるのを見た。

番外席次の繰り出した神速の投鎌であった。

シャルティアが槍を飛ばしても間に合わない、アウラが矢を幾本つがえようととも無意味——マールが本気で己の心臓を“死”が貫くことを直感した、次の瞬間。

「サセヌー！」

極低温の息吹と共に、投げ飛ばされた戦鎌は斬神刀皇の刃にはじき返されていた。

「遅クナツテスマヌ、皆」

配下のフロスト・ヴァージンたちを引き連れた第五階層“氷河”の守護者が、マールの護衛に馳せ参じた。

否、それだけではない。

「第十位階魔法——〈隕石落下〉<sup>メテオフォール</sup>」

かつては魔皇ヤルダバオト時代にも開帳した、天を引き裂き、地を焼き穿つ大爆発。

第七階層からあがってきたデミウルゴスも参戦する段に至った。

ちなみに、第四階層守護者・ガルガンチュアは、今回の敵が小さすぎる“個”であることから、有用な働きを示せないことは確実であるため、起動すらしていない。

第八階層守護者・ヴィクティムは、ナザリック最後の切り札として、彼の階層に留まっている。

隕石の落下を受けた番外席次とアルベドの両名は——

「無論、無傷ですよね」

アルベドには防<sup>タンク</sup>御役としての回避スキルが豊富にあり、第十位階魔法でも耐久できるのは自然の道理。そうでなければナザリック最奥の玉座の間に据えられる守護者統括とは呼べはしない。

そして、件<sup>くだん</sup>の番外席次も、まるで涼風の吹く無人の野を行くがごと

く爽快な笑顔だ。

実に癪に障るデミウルゴス。牙を剥き、額に青筋を立て、それでも冷徹に、戦場全域を見晴らす。

「あ、ありがとうございます、お二人とも」

マーレの率直な感謝の言葉に、それぞれ相好を崩す——のは、デミウルゴスとフロストヴァージンにしかできない。

「イヤ。無事デナニヨリダ」

「コキュートスの言う通りです。さあ、次の魔法の準備を」

「は、はい！」

マーレは、ナザリック地下大墳墓内で第二位につけるほどの殲滅力の保有者だ。そんな彼が初戦から早々に脱落しては、この後の階層守護の防御線が手薄になってしまう。

シャルティアの立てた作戦は実にシンプルだが、それゆえに効果的だ。

まず、表層にて相手を守護者全員で叩きつつ消耗を狙い、続くナザリック内での戦闘でも戦力減耗させていけば、セバスの控える第九階層に至る頃には狩り頃を迎えるというもの。

しかし、

(いくら戦巧者ゆえに第一・第二・第三階層の三守護を任されているシャルティアでも、あの二人の相手は)

難しいと改めて思うデミウルゴス。

だからといって、各階層を空けることは難しい。

何故なら、向こうにはナザリック地下大墳墓の構造を熟知する女悪魔がいる。

(彼女が向こう側にいる以上、階層を一段二段飛ばしで進行する挙に出る可能性は、十分にある)

つまり、各階層を手薄にすることはできない……下手をうてば、奴等は第六階層までを数段飛ばしに侵攻する可能性もあるのだ。一つの階層に守護者が集中する事態は避けねばならない。ギルド内の転移には、アインズが捨てていったギルドの指輪が必要不可欠だが、守護者全員に普及されているわけではない。実に歯がゆい状況だと言

える。

(こんな時、アインズ様ならば——)

どうしただろうと思う自分を、デミウルゴスは叱咤する。

あの御方に頼りきっていた、それ故に捨てられてしまった己の不明ぶりを恥じる。

しかし、それでも、

「ナザリック 地下 大墳墓 は やらせは しない ——」

彼は己の特殊技術——変身能力で獰悪な姿に形状を変化・解放させ

つつ、その姿でこそ究極の攻撃力に達する魔法を詠唱しようとした、

「へ食 い 散 ら か す —— ツ！」

その時であった。

「何をしている、おまえたち?」

全員が天を仰いだ。

「あ、ア——」

求めていた救い主の姿が、そこにはあった。

白亜の巨竜と共に空を舞う、骸骨の魔法詠唱者——種族名：死の支配者——もはや帰ってくることもないと諦めていた、至高のオーラを纏って。

彼の名を、王としての名を、ナザリックを護る守護者全員が同時に叫んだ。

「ア……アインズ様ツ!?」

ナザリツクが、番外席次とアルベドの敵襲を受けているという一報をもたらされて、サトルは大いに揺らいだ。

見捨てるべきだという思いと、見捨てたくないという思いで。

「どうする、サトル——いやさ、アインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下、かな？」

ツアーの鎧に答えを促されても、サトルは顔面を覆って考え込む。もうあそこに近づくことすら忌避したい自分がいる一方で、もう一度あそこに戻りたくてたまらない自分がいる。

そんな二律背反——矛盾を空洞の胸骨の内にかかえるサトルをどう見たのか、サラが言及する。

「君が行かなくても、私たちは征くよ……番外席次……あの仔を止めるためにも」

サラ・ルーファウスの、世界を護るという一念は本物であった。

彼女は、今や完全に世界の敵として脅威を振りまき続ける番外席次を、どうにかするつもりでいる。

「現・第一席次に問う。法国民の避難状況は？」

「は、あ……すでに移民の民は国外退去しております、ルーファウス様」

「うん。それなら“あの手”が使える——第七席次の占星千里ちゃん  
は、最高神官長に報告を。『ルーファウスは最後の務めを果たす』と」

「え、それ——って」

「急げ、駆け足ッ！」

命じられるまま、第七席次は聖域を出て最高神官長のもとへ急ぐ。

「では、お若いの、聖者殺しの槍を儂に」

「……………はいッ」

様々な葛藤を乗り越えて、第一席次の青年は膝を折って槍をリグ  
リットに献上する。

しかし、彼は槍を手放さなかった。

怪訝そうに眉をしかめる老婆に、彼は告げる。

「せめて、皆様の戦いに、私も同道させてください——彼女の最期を、

見届けるためにも」

みすばらしい槍を握る青年は決然と言い放った。

「まあ、よかろう——じゃが、後悔だけは残さぬように、な」

リグリットは十個の棺を背中に展開し、内四つに入っている漆黒聖典隊員——第二、第三、第四、第六席次の死体を解放。この先の戦いでは使用できない——使用すれば蘇生不可能な不死兵として、リグリットに使われる運命をたどるのみ。そうしないためにも、神殿の神官たちに託す必要があった。

着々と出撃と出立の準備を進める中で、サトルは問う。

「——サラは、ルーファウスは、俺のオーラがなくても?」

「うん。戦うのに必要な分は。けれど、問題はそれとかな?」

「俺がついていった方が、サラには有利——なんだよな?」

「サトル君。別に、義務とか義理とかで動かなくてもいいんだよ?」

「!」

まるでサトルの心底を覗き見たようなサラの言葉に、骸骨のプレイヤーは沈思し、黙考する。

そう。

サトルはこれまで、ナザリックを護ること、魔導国を発展させ、仲間たちの居場所を作ることを、己の義務としていた。そうするにたる義理があった。

しかし、サラはそれを真っ向から否定する。

「自分らしくいられない・自分の思い通りにならない・自分にとって嫌な世界に属することは、時には必要なことかもしれない——それでも、助けてほしければ「助けて」って言える存在が、「逃げたい」っていったら逃げ出せる場所が、人間には必要なんだよ……ユグドラシルのプレイヤーくん」

彼女は何かを懐かしむように、虚空に手をさしのべた。

「私も、彼を追いつめた——ともに寄り添っていたはずなのに、彼の心の叫びに、耳を傾けられなかった。とんだお笑い種よ。何が初代闇の巫女姫だか」

差し伸べた左手薬指——靄か霞の集合物であるそこには、彼が送っ

てくれた、ギルドの指輪——「ギルド・七芒星の指輪」が輝いている。  
サラの脳裏に残響する、

550年も前の、

それは——  
絶望。

『——大丈夫だよ、サラ』

そう言っつて、老衰しきった妻の手を握るアンデッドが、いた。

『僕は一人でも大丈夫、だから』

そう強がつてみせた彼の優しさが、痛いほど妻にはわかった。

『安心して、逝つて、いいから』

サラは、最後に何かを言いかけて、そこで力尽きた。

『……サラ?』

問いただそうとする彼。

『——サラ?』

妻の死を確認する夫。

『……いやだ』

そして——号哭ごうこく。

『いやだ! イヤダア! おまえまで、俺をおいていかないでくれエ  
!』

——それが、彼の心からの願いだつた——  
「ッ」

サラは、泣けもしない死霊の肉体で目頭を押さえる。

彼はサラの死の直前、二人で交わした約束を破つた。

一人になることに堪たえられなくて。

一人でいることに堪たえられなくて。

サラの死体を丁寧に葬るのではなく、中位アンデッドの死霊レイスに変  
え、自分に寄り添い続ける第一の従者とした。

そうして、彼の精神は、壊れた。

彼の心は、異形種にそれにとってかわつた。

法国の民を護るべく他種族を虐殺し、それに異を唱える自国民を、  
悉く死刑台に送つた。漆黒に輝く十字槍にも似た戦鎌に、幾多の命を



刈り取り続けた。

闇の神にして死の神・スルシャーナの誕生であった。

だがサラは、自己の意識を表出することはできなかった。

原因はおそらく、サラ自身をアンデッドに変えた彼が壊れ、異形種の心に支配されたから。

サラの「主人」たるは「彼」であって、異形のバケモノ——生贄の皿を満たしてやまぬ「アンデッドの怪物」ではなかったがためだ。

そして、500年前。

闇の神にして死の神・スルシャーナは、こちらの世界に転移してきた八人のワールドチャンピオンによって、自害同然に弑しいされた。

そうして、サラ・ルーファウス——は、己の意識を取り戻した。アンデッドの怪物が死したことで、その支配能力から脱したので。そして、

サラは亡き夫の残骸を胸に抱いた。

何度呼び掛けても、彼はこたえなかった。

あの優しい声を、サラが聞くことはもう——

「サラ?」

意識を現実に戻す声。

「どうかしたのか?」

「……」

骸骨の姿は、亡き夫とは似て非なる者——彼の顎は、あそこまで峻険ではなかった。

サラは漆黒の相貌を微笑ませた。

「なんでもない……それで、サトルくんはどうするの?」

ツアーもリグリットも、第一席次の青年も、出撃の準備は万端整えた。

そして、サトルは………

ツアインドルクスⅡヴアイシオン「白金の竜王」が戦場に運んできた戦力は、

「アインズ・ウール・ゴウン魔導王」鈴木悟。

「死者使い」リグリット・ベルスー・カウラウ。

「闇の神・第一の従者」サラ・ルーファウス――。

「第一席次」の青年……計四名。

それ以外の戦力――第五席次や第七席次、第十一席次などは足手まといになると判断され、法国の退去行動に加わった。

そして、

アインズ・ウール・ゴウン魔導王は朗々と明瞭に、轟々と明快に、告げる。

「おまえたちだけで、ナザリックを護ろうとする姿勢、誠に大儀たいぎである」

だが、

「この私、アインズ・ウール・ゴウン魔導王を抜きにして、ナザリックの防衛など到底、叶うまい」

守護者全員が涙を目の奥に感じる。それほどの感動であり感服であり、一日たりとも忘れられない、圧倒的な支配者のオーラ。

そう。あれこそが、自分たちが仕えるべき主――至高の御身にして最高支配者たる威光そのもの。

「し、しかし、アインズ様！」

デミウルゴスは異形の姿を元にもどして抗弁する。

「御身は……あなた様はナザリックをお捨てになった！ かくなるうえは、我ら全員で、御身がアルベドや番外席次の勢力圏外にお逃げするまでの時間をかせごうとシャルティアが提案し……そのつもりで我等は！」

「皆のその心意気、見事と評するほかにないな、デミウルゴス」

父に褒められる子のように委縮してしまうデミウルゴスは、その場

で跪いてしまった。他の者も彼に倣って膝を折る。

アインズは一人の守護者の名を叫んだ。

「シャルティア・ブラッドフォールン」

「はッ！」

跪きは拜したままのシャルティアがいるログハウスの屋根に、アインズは降り立つ。

「そなたの提案した策、天晴あっぱれ見事なものだった。この私の留守を預かり、よくぞ戦いの準備を整えてくれた……ありがとう」

「ア、アインズ様……っ！」

「そして命じたいことがあるのだが」

守護者をねぎらい、下命をくだそうとする至高の御身、その背後から、嗤う番外席次と、フルフェイスヘルムで表情を隠したアルベドが迫る……が、

「おっと！」

「今は彼らの邪魔はしないでもらいたいね？」

ツアーの鎧を着用したりグリットが剣を構え、白金の竜王の巨大な竜尾が、したたかに彼女たちの攻撃をはじいた。

さらに、追撃する影が迫る。番外席次とアルベドの背後で、グレイテスト・ハイレイス・クエーン最上位死霊女王……彼女が発生させた黒霧が天と地を覆いはじめる。

「もう、これ以上はさせないよ、饕餮とうてつの仔、番外席次、いえ……」

サラは決然と顎を引く。

「……ッ」

彼女に与えられた本名を告げるサラ・ルーファウス。

その名を聞いた……聞かされた番外席次は、長耳をピンと突き立て、

「あ？あ?？」

不愉快を通り越し、殺意を満面に浮かべながら、死霊の女王を瞳に捉える。

「殺されたいらしいね、サラ」

番外席次が表情を一変させる。余裕ある強者の嗤笑ししやうから、猶予なき

貧者の憤激へ。

「私を、……その名で、——呼ぶなッ！」

激昂する番外席次は、ツアーヤリグリットたちが一時受け持つ。

そして、

「さて、『アルベド』」

「ああ、ようやく……ようやく私の愛を理解してくれたのですね、モモンガ様！」

アインズ・ウール・ゴウンにしてモモンガは、あらためて、ナザリツク地下大墳墓・守護者統括だった女悪魔——兜を脱ぎ捨てたアルベドと、対峙する。



「元守護者統括」アルベド。そのアルベドが指揮権を握る「最強の個」ルベド。そして、漆黒聖典「番外席次」――

「やっ」と

兜を外したアルベドは恍惚に頬を染め、愛おしげにアインズの瞳を凝視する。

「やっ」と私のもとに来ていただけたのですね……「モモンガ様」

こんな時だというのにアインズは、(綺麗だ)という感想しか懐かないほど、アルベドの容貌は美しかった。

濡羽色の長い髪も。山羊のごとく鋭い角も。男を恋慕こいしたつてやまぬ黄金の瞳も――すべてが、美しい。

「ああ、この時が来るのを一日千秋の思いでお待ちいたしております、モモンガ様」

彼女にそう呼称されるたびに、アインズは存在しない心臓がズキリと痛む。

「シャルティア――」

短い命令を与えられた吸血鬼の戦乙女は、鮮血のような鎧姿で一步をさがる。

アルベドが一步、前に進み出て、アインズもそれに続く。

一歩ずつ近づく彼我の距離。

そして、二人は戦場の真ん中で向かい合った。距離にして十メートルもないだろう距離で、アインズ・ウール・ゴウン魔導王は訊たずねる。

「何故、裏切った……アルベド？」

アインズは涼しい声で問い質した。

アインズ・ウール・ゴウンの名を貶め、裏切りと愛情に満ちた笑みを浮かべる、美貌の女悪魔に。

敵の――スレイン法国最強にして最凶の存在・番外席次「絶死絶命」の手に落ちたナザリックの守護者統括は、恍惚とした瞳の色で、相對する至高の主人に、整然と告げる。

「何故？――簡単なことではございません。」

私の愛すべき主人は、〃モモンガ様〃ただ御一人だけ！  
はッ！ アインズ・ウール・ゴウンなど、くだらない！

私が愛すべき方に比べれば！ あなた様の本当の名と比するならば、アインズ・ウール・ゴウンなどという名に——そのような称号モに、いかほどの価値があるというのでございましょう！」

だから。

アルベドは〃捨てた〃。

アインズ・ウール・ゴウンを。それを信奉する同胞たちを。

自分の創造主、タブラ・スマラグディナより託された世界級ワールドアイテム〃真なる無〃ギンズンガガブまでをも捨て去り、あの番外席次〃絶死絶命〃——彼女の能力によって起動した世界級ワールドアイテム〃傾城傾国〃けいせいけいこくの支配に、堕ちた。

それこそが、アインズを、モモンガという愛すべき存在に回帰させる手段に成り得ると確信できた。

そんな、精神を半ば支配されている守護者統括に対し、アインズは——否——モモンガは揚々と告げる。

「ふむ。そうか。」

——だがな、アルベド。〃間違っているぞ〃

何を間違っているというのか理解しかねる女に対し、男ははっきりと告げてみせる。

「私は——俺は、——〃モモンガではない〃」

「……………、えっ？」

言われた内容を、アルベドの耳はとらえ損ねた——わけではない。

「ふむ、聞こえなかったのか？ ならば、もう一度、断言しよう」

モモンガは、アルベドの設定に組み込まれたかんせい陥穽……悪辣な落とし穴の蓋を開いた。

裏切者に対する罰を下した。

「俺は——モモンガという名の存在では、断じてない」

告げられた言葉の重みを、アルベドは受け止めることができずにいた。

できるわけがなかった。

「な、にを——え、……どういう？」

「そのままの意味だが？」

「あ、あ、あア、ありえませんが！ あなた様は間違いなく！ 私の愛するモモンガ様です！ 声も姿も御力も！ 御身より溢れるオーラに至るまですべてが！ モモンガ様のそれでしかない！ ア、アインズ・ウール・ゴウンなどという穢れた名を名乗っておられようとも！ この私が！ あ、あなたを愛する私が！ あなた様のことを間違えるなど!!」

「——ああ、確かに。モモンガという名を、私は使ってきた。アインズ・ウール・ゴウンという名を、この世界で名乗り始めはした。——だが、『アインズ・ウール・ゴウン』が俺の本当の名ではないように、『モモンガ』もまた、俺の『偽りの名』のひとつでしかない」

女悪魔の全身が、心が、魂が引き攣った。

告げられた言の葉の意味を、アルベドは悟り始める。

それでも、その事実を受け入れることは——不可能だった。

「う……そ？」

「何度も言わせるな。事実として、私の本当の名は、モモンガという名では、ない」

「ウソ……う、う、嘘、ですよね？ モモンガ様は、モモンガ、さま、ですよね？」

「知らないのであれば教えよう。私の本当の名は——  
鈴木悟すずきさとる」

彼が明言する本名を——スズキサトルという音色を告げられて尚、恐怖と絶望に震撼する女悪魔は、目の前の出来事を拒絶するしかない。





悪魔の脳髓が、漆黒の闇にとざされる。

アルベドは、『モモンガを愛している。』

——だが、モモンガは、モモンガではない。』

では、モモンガではない——目の前の、愛する御方は、——いつたい誰だ？

誰だ誰だ誰だ、ダレだ——彼は、あれは、アレは、アノ方は、一体なんだ？

自分は、アルベドは、誰を、——何を、愛して——ナニヲ、アイシテ？

「ワ、わた、し、私、は、モモンガ様、ヲ、あいし——愛して？」

「俺はモモンガではないと言っているだろう？」

「あ、ああ、あああ、アアアアアア……ッ！」

モモンガだと「信じてきた者」から浴びせられる、防御不可能の、言の葉の一撃。

モモンガではない——だが、「モモンガ以外の何者でもない信じてきた者」から送られる、最悪にして災厄の事実。

あのとき、あの玉座の間で改変された設定……

『モモンガを愛している。』……

主人から与えられた設定は、NPCの根源に刻印されしもの。

それは、喜ばしき祝福であり、何にも変えがたい恩寵であり、自分というNPCが生存する絶対動因にして存在理由……そのはずだった。

だが——

「う——うそ、うそウソ、ウソウソウソウソウソオ!!」

まんまと騙されていた——かわいそうなNPCアルベドは、前後不覚に陥る

ほどの狂態を見せ始める。女悪魔の心は惨状の極みに達した。

ヘルメス・トリクスメギストス漆黒の全身鎧ヘルメス・トリクスメギストスが着用者の変身能力によって膨張し始め、彼女の生来

の能力が解放されていく——「しかし」。

ナザリツク最高と謳われた智者でありながら、あまりにも愚かしい。アインズ・ウール・ゴウンを『モモンガ』という名に戻そうと、すべてを準備してきた。仲間たちを裏切り、アインズ・ウール・ゴウン

を貶め、逆に協力してくれる力強い駒も揃えた——“なのに”。

その『モモンガ』は、最初から、この世界のどこにも存在しないという、現実。

「ッ、嘘嘘よ嘘おおおおおおおおおおおおおおおオオオオオオオオオオオッ!!!」

醜い本性に変身した姿を露わにしながら、滂沱の涙に濡れていく女悪魔。

『モモンガを愛している。』怪物の巨拳が、悲鳴のごとき咆哮を奏でながら、モモンガ……否……アインズ・ウール・ゴウン——否——鈴木悟に対し振り上げられ——

そして……

「あとは任せたぞ、シャルティア」

「承知！」

暴走するアルベドを吸血鬼の戦乙女に任せ、魔導王は〈飛空〉の魔法で虚空へ逃れる。

憤怒の感情のままルベドを起動したアルベドにより、ナザリックにおいて「最強の個」——ルベドが解き放たれた。

しかし、それも予定内。

真紅に燃えるような、アルベドの妹は、命令に従い「殲滅」対象に据えられたアインズ・ウール・ゴウンへ突撃してくる。指揮権を握っていない今のアインズ・ウール・ゴウンでは、彼女を止める〈上位命令文〉は使えない。

アインズは〈伝言〉を開き、第八階層守護者に対して宣言した。

「ヴィクティム！ 〈生命樹〉シリーズの指揮権を、この私に！」

通信障害の雑音が混ざり中、「承知」の声を紡ぐ胚子の天使。

かくしてナザリック周囲の平原に現れたのは、巨大な地球——普段、マルクト“荒野”の大地に偽装している、球形の大地が戦場に転移・浮上してきたのだ。

アインズとルベドは星の上に降り立つ。

さらに、天上に現れる星々たち。

太陽

イェッド

月

グブラー

火星

ホド

水星

ケセド

木星

ネツアク

金星

ビナー

土星

コクマー

天王星

ケテル

海王星

計十個の星々——第八階層のあれらと呼称されるものたちを使って、アインズはルベドを迎撃する。

「へえ、すごいのが出てきたじゃん……食べ応えありそ♪」

下の戦場では、番外席次が悠々と第八階層のあれら——〈生命樹〉の星々を眺めていた。

「はは、あのバカ悪魔。見事に矛盾を突かれちゃって……まあ、気の毒なことするよねえー、あんたら?」

とてもそんな優しさなど感じられない声音が、自己の周囲を睨めつけた。

周囲には彼女を打倒すべく集った守護者各位とツアーと法国の面々。

「しかし、どうやって私の転移阻害を抜けてくれたわけ——って、話しても無駄か」

ツアーの世界移動なる転移方法は、番外席次の阻害を受けなかったが故だが、それを語りあう時でもない。

逃げ場などなく、彼女自身にも逃げる意思は毛頭なかった。

「そんじゃあ、こっちも始めちゃおう、か」

一瞬の跳躍。

真つ先に狙われたのはサラであった。戦鎌の八連斬撃が交差状に繰り出される。

番外の攻撃は、純粋な物理攻撃だけでなく、いくばくかの神聖属性も付与されている。サラでも直撃を受ければまずいところであるが、「させないー」

第一席次の青磁色の髪が、二者の間に割って入った。アインズからそれなりに強力な剣や槍を渡されているが、どれもあの番外席次の攻撃の前では鉄屑同然というありさまだ。しかし、アインズは潤沢な量の武装を第一席次に下賜してくれた。次は炎を纏う黒曜石の剣が、彼の掌中に握られる。それが壊れば次は霜の降りる長槍を。その次は紫電を奔らせるハルバートを。

豪華な鎧は少なからぬダメージを通してしまいが、サラという作戦の要を護るうえではしようがない損傷と割り切る。そのサラも、作戦遂行のため姿を完全に隠した。

番外はすぐさま問いただす。

「第一席次……おまえ、あの槍はどうした」

「……」

彼は唇を引き結んだ。番外席次は瞬時に理解する。

「まさか」

「正解じゃ、マヌケ」

リグリットが握るみすぼらしい槍……本来であれば第一席次のみが使うことを許される宝重ほうちゆうであるが、彼女の手の中でも充分な働きが約束される。

「ちいー」

逃げの一手を打とうとする番外に、リグリットは逃走の足を封じるべく六棺のうちの二つを使う。

「二号、三号、解放！」

リグリットが展開した六つの棺の内、二つが即座に開いた。中に入っていた死体は200年間、彼女を支え続けた、包帯だらけの「敵」の死体だが、ここで蕩尽とうじんしても惜しくはない。

「とつたぞー！」

番外席次の両足首に絡みつく死体。常人であれば骨が砕け、肉が潰れる握力だが、彼女の前では数秒の足止めがせいぜいだろう。

リグリットは確実に番外席次の心臓目掛け、槍を放った。

(さらばじゃ、ツアー)

一秒で駆け巡る、200年間の走馬灯。純銀の鎧と旅をした、素晴らしい記憶。

貫かれる少女の影――

これで、リグリットの生命は終わりを迎えるが、悔いのない人生、とは言いがたい。

空を舞うツアーが愕然と叫ぶ。

「何してる、リグリット?!」

その声で、ハッと覚醒した。

投鎗で貫いたはず黒白の少女は影も形もない。間一髪でかわ躲し逃げおおせた――否。

「……まさか、幻覚、じゃ、と?」

「そのとおり♪」

背後から突き刺さる死神の鎌が、リグリットの心臓を、ツアーの鎧ごと抉り斬っていた。

「がはあー！」

『『完全幻覚』の能力、お婆さん見るのは初めて?』

リグリットとツアー、双方が血を吐いた。ツアーの鎧の損傷は、彼の傷となり、リグリットも確実に致命傷を受けた。

「こ、この儂が、幻を、相手にしていた、じゃと?」

「お婆さん強そうだしさ――このまま心臓、いただいてもいいかしら

「？」

「よせ、やめろ！」

ツアーは天上から降下し、竜尾で番外の身体のみを器用に薙ぎ払う。

「あー、さすがに竜を幻覚に落とすことはできなかつたか」

竜尾を受けて尚、平然と着地する番外席次。

外れかけた髪の毛の飾り紐を整える余裕さえ見せる。

「リグリット、早く回復、を——？」

鎧が微動だにしない。着用者がいる状態で動かすことは無論可能だが、関節や筋肉への負荷を無視する行為であるため、あまり推奨できなない。

ツアーは心の中で毒づいた。

リグリットの傷は致命的だ。いつからリグリットが幻覚を見せられていたのか、見当もつかない。幻覚を見せるにしても、リグリットはツアーの鎧を着ている状態、バッドステータスに罹患する可能性は限りなく低くなるはずなのに。

あるいは、アインズが生命樹たちを呼び出した時の衝撃な光景に紛れたか……詮無いことを考える自分をツアーは呪う。

それでも、彼は思考と記憶を高速で回転させる。

完全幻覚と聞いて、ツアーは思い出す。300年前にこちらに転移してきた者が所持していた世界級アイテムワールドの能力が、それではなかったか？

(まさか、彼のアイテムを、こいつは喰らっていたというのか?!)

大国ガテンバーグの戦いで、消失したと思われた世界級アイテムワールド。

あらためて饕餮の捕食能力のすさまじさを竜の鱗に感じるツアー。

番外席次——絶死絶命は結論を下す。

「さて、ロンギヌスを使うように仕向けたサラはブチ殺し確定だし、これで私を邪魔する奴、……は……？」

番外席次を襲った、軽くはない衝撃。

見れば、先の襲撃で吹き飛んだリグリットの剣を手に握った青年——第一席次が、彼女の腰を背後から貫いていた。

1999年前の墜とし仔 — 2

／ A d e s e r t e d c h i l d 1 9 9 9 y e a r s b e f o r e — 2



戦いだけの日々だった。  
戦い漬けの毎日だった。

育ての親たる最高神官長や第一席次は、私を戦場に送り続けた。

巫人種の集落を襲い、土長の心臓を喰らった。

異形種の村落を襲い、族長の心臓を喰らった。

様々な心臓が脈を打っていた——それをすべて、私は喰らっていた。

特殊な力を持つマジックアイテム——その中でも神の秘宝に匹敵すると称されるアイテムも、私は喰らうことができた。当時の最高神官長が隠し持っていた『完全幻覚』の世界級アイテムなどがそれだ。私に自由などなかった。

生まれた時から、人類の守護者たりえる力を持つと信じられ、実際にそれほどの能力がそなわっていた。

けれど「私の中」には、何もなかった。

自分の意思も——意志も——遺志さえ、必要ない。

この身は不滅の肉体、不老の身体、不死の存在——半森妖精の血と、世界の敵たる存在の血が入り組んだバケモノ——故に。

人類の敵を滅ぼし、人類の敵になりえるものを殺戮して——それで満足だと思った。

育ての親たる二人が死に果てた後も、私は番外席次として、強さのみを求め続けた。



そうすれば皆が喜んで私を称えたが、私の中は、空っぽのまま。まるでルビクキューの中身のように——空洞のまま。複雑に入り組んだ色の空洞——私そのものであった。誰にも私の心は理解できない——きつと、私自身にも。いったい何をしたかったのか。いったい何を求めているのか。ただこの下腹部に宿る欲求——強き者を望む心だけは、ホントウ真実だと信じて。

そうして190年が経とうという時だった。

「おい、おまえ」

新たな血の覚醒者——神人の子が現れた。たったの6歳。てんでお子ちゃまだった。

「おまえ、つよいんだってな？」

そうだよと私は答えた。青磁色の髪の子は、誇らしげに宣言した。

「なら、俺と勝負しろ！俺は今のところ負けなしだ！負けた方が、一生いうことをきくんだ！」

その挑戦を、私は完膚なきまでに打ちのめしてやった。

殴られた顔が痛むから水を持ってきてと言われ、厩舎に連れて行ってやった。

そこで馬の小便で顔を洗わざるをえない少年の姿は、本当にもう、爆笑ものだった。

それ以来、少年は私の言うことをよく聞くようになった。

第一席次という大役を任じられてから、9年間も、ずっと——

飾り紐の端が揺れる。

怒気と殺意を大量に孕はらんだ声が、少女から襲撃者にそそがれる。

「おいおいおいおい、これはどういうつもりだ？」

「私は、あなたを、とめ」

妄言を吐き散らす前に、番外の繰り出す裏拳が第一席次の胸を突き飛ばし、吹っ飛ばしていた。数メートルは吹き飛び、肋骨数本を罅割れさせる青年騎士。

「げは、ごふあー！」

「私の邪魔だけはすんな……負けた方が言うことをきく……そういう『約束』だろうか？」

「げふ、いいえ……」第一席次は立ち上がって言った。「もう、約束はなしです」

そうか、と番外席次は思った。

思いつつ、腰に刺さったリグリットの剣を引き抜き、戦鎌でバラバラの粉微塵になるまで砕いた。

「奇襲とはいえ、ようやく私に一太刀いれられたわけだ。さすがは、神人。おめでとう、少年」

「げほ、えほ……ありがとうございま」

皆まで言わせるまでもなく、掌底が第一席次の顔面に突きこまれた。

大地にめり込まされる青磁色の髪の少年は、そこで気を失いかける。

「が、あ……」

「助かったなあ、おまえ。もしも私の母さんに一撃いれてたら、それぐらいじやすまなかつたぞ？」

そういつて下腹部を撫でる番外席次。傷はたちまちのうちに癒え、流れた血までも元通りに復元される。究極の癒しの異能だ。タレント奪い取ってから既に100年以上は経過している。

「が、ふ——」

「この私に傷をつけたのは90年ぶりだ。ありがとう、痛みを思い出させてくれて」

だが、この程度で止まる番外席次ではない。こいつに対し、敗北など望みようがない。

彼女はさらに強さを求めているが、目の前の青年——否、少年と呼ぶべき年齢の騎士は、それでも、番外席次の手を掴んだ。

「はなさない、あなたの暴虐を止めるまで」

ゾンツという音色と共に、少年の左腕が肩から断ち切られた。

苦悶にのたうつ弱者への関心を捨て去るように、番外席次は一言。

「じゃあね」

そう告げて、番外席次はナザリツク地下大墳墓を目指す。

と、忘れるところだった。

老婆に——リグリットにはとどめを刺しておくべきと判断した瞬間、彼女が見渡す範囲内にいないことをはじめて覚<sup>さと</sup>る。

おそらく、あの竜鱗鎧スケイルメイルの力で運ばれたか、隠されたか、あるいはその両方か。試しに全周囲を薙ぎ払う戦鎌の一刀をお見舞いしてみるのが、手ごたえはなし。

「まあいい。あとの問題は、サラだけだな」

だが、彼女の姿は見えない。星幽界体アストラルとして、そのあたりを透明になつて漂っている気もするが、果たしてあのアンデッドがそんな観戦モードでこの惨状を放置するだろうか？

「まあ、どっちでもいいや」

彼女は自分を取り巻く中位アンデッドの群れ——死の騎士デスナイトやソウルイーターソウルイーター、デスアーチャーデスアーチャー、デユラハンホースデユラハンホース魂喰らい、死の弓兵や首無し馬の騎兵軍を相手に仁王立つ。

世界移動でツアーと彼の鎧ごと移動したりグリットは、生きていた。

「——昔から、かくれんぼは得意だったからね、君は」

「かつはは。おかげで今日も生きて戻ってこれたわい」

「そうだね……」

それこそ竜の知覚力すら素通りしてしまうほどだ。異能力と呼んでもよい。

しかし、ツアーは心から謝罪する。

「すまない、リグリット。僕の鎧の力、少し過信していたようだ」

「ふははは。なあに、気にするなあ——手傷のひとつやふたつ、慣れっこじゃわい」

そうは言うが、リグリットの負傷は深い。

心臓を貫かれて生きているのは彼女の信仰系魔法による治癒で無理やりに傷を塞いだがため。しかし、もともとが老体。どこで血管が破れてもおかしくない上、戦闘は序盤も序盤である。

「死者使い」の老婆は立ち上がろうとしてたたらを踏んだ。それをツアーの尻尾が器用に支える。

「ちい……目が霞む……さすがに槍を投げるのは、無理になったのう」

「だろうね」

「ロングィヌス聖者殺しの槍はドコじゃ？」

「ここにあるが——いけそうかい？」

なにせリグリットは番外席次の完全幻覚に騙された口だ。先ほどの轍てつを踏まないという保障はない。

「ツアー。おまえさんが儂を番外席次に向けて投擲とうてきしてくれ」

「君ならそういうだろうなとは思っていたが」

相変わらず無茶をする。

言う間に、リグリットは包帯で自分の腕に槍を巻き付けている。

番外の完全幻覚が通じないツアーであれば、問題なく照準し、的を射抜けるだろう。

「問題は、サラの策がハマるかどうかじゃ」

「ああ。それまでに番外席次を二回殺し、魂を回収せねばならない。ナザリツクの者たちにも、頑張ってもらうしかないけど」

二人が見据える先で、中位アンデッドの騎兵軍が壊滅した。

さらに、二人は頭上を仰ぎ見る。

「あんなデカいのを従えねばならんほどの強さなのか、あの赤い少女は」

「……………今のところ、五分五分といったところかな？」

ツアーの見立ては正しかった。

地球マルクトの巨大な球形が削られ岩塊が幾片も落ちるなかで、アインズはルベドを相手に、文字通りの死闘を演じていた。

「土星・火星・水星——峻巖しゅんげんの柱、展開！」

アインズの組み合わせた三つの星の連なりが一つの柱として形成され、セファイロトの樹の一部を構成。

「天王星・木星・金星——慈悲じひの柱、展開！」

さらにもう一列の柱が完成。ただ闇雲に大量のプレイヤーを討滅する暴力装置に、一種の指向性が働き始める。

「海王星・太陽・月・地球——均衡きんこうの柱、展開！」

合計三つの柱に対し、ルベドが猛進。

「撃てー！」

破壊音と呼ぶには圧力と震動が凄まじい世界の中を、アインズはなんとか生き延びている。

ルベドは完全近接仕様。よほどのヘマをしない限りは、あれらの連携指向性攻撃——ビーム砲で弾き追い払うことができている。

(それもあと何回、通じるのやら)

指揮権を握っているアルベドが暴走し、巨大な悪魔形態をさらしているのをチラ見しつつ、シャルティアがよくしのいでくれているのを確認。

『『アルベドは “殺すな”』という命令を与えはしたが、ええい！』

そちらに意識を割いている場合ではない。

「金星ネツァク・地球マルクト・水星ホド——物質界アツシャの防御！」

指示ひとつミスるだけで死を身近に感じる。

三体の防御態勢が間に合わなければ、アインズの頭蓋は盛大に焼け

飛んでいたところであった。

紅い少女は、防御壁の存在を素通りしようとしてもできない。なにせこの力はルベドも利用している。『諸王の玉座』の力——世界級アイテムの防壁としても、第八階層の生命樹は流用できるのだ。

「海王星・天王星・土星——創造界の防壁！」

再びの防壁に退却していく赤い少女。真紅に靡く髪が、まるで彗星の尾のように広がっていく。

（——こちらも早く片付けなければ、皆が！）

彼の眼下で、中位アンデッドの騎兵軍は壊滅を余儀なくされていた。

「あーもー、第二陣もやられた！」

「早イ。アマリニモ早スギルダロウ」

「愚痴をこぼしてもしようがありませんよ」

「迎撃に、出、出ます！」

〈完全不可知化〉を解いた四人の守護者が、等間隔に番外席次を包囲する。

「かくれんぼはおしまい？」

気づかれていた。否。当然かもしれない。

奴はルプスレギナの〈完全不可視化〉を見破って戦闘不能にした圧倒的強者——認めがたいことだが、それが事実なのである。

「ねえ、知ってる？ 私の母さんはさ、天変地異の使い手だったんだって」

「へ、は、母、さん？」

「な、何の話でしょう？」

番外席次は戦鎌による戦闘に飽いたのか……それとも別の目的があるのか、片手に魔法陣を展開し始めた。

アウラをはじめ、全員が目を瞠る。

「あいつまさか！」

「うううう、うそお！」

「あれほどの物理攻撃力を持ちながら！」

「魔法攻撃ニモ精通シテイルトイウノカ、貴様！」

嗤う番外席次は、曇天を引き連れて軽々と詠唱する。

「コール・グレイター・サンダーへ万雷の撃滅」

文字通りの万雷が天空を奔り、うち数本がマールに直撃——する前に、フロスト・ヴァージンの氷壁が、超高電圧の雷を大地に還す。その代わり、黒髪の雪女たちは命を落とした。

だがしかし、魔法攻撃はそれだけにとどまらない。

「ミスト・オブ・スーパリアシッドへ超酸の霧」

次から次へと魔法を詠唱していく番外席次。だが、それらは天候に類する系統に位置していた。

ドルイド系が得意分野なのか、あるいは母が行ったという天変地異を再現しているだけなのか。

「次が来るよ！」

アウラが叫び、守護者たちは一斉に身構える。

番外の手が、激しく大地を叩く。

「グレイター・アースクエイクへ大地震」

大地そのものが激震する魔法。

さらに、この魔法の硬直対策はできていたが、地殻変動による地割れまではどうしようもない。

この前のアルベドと同じように守護者らを地盤の底へ埋めようとする大地の震動を、マールが同じ「大地震」で制する。

「なんとこの魔力量だ。あれだけ強力な魔法を撃って、まだ底が見えない！」

デミウルゴスが驚嘆の声をあげる。

そんな彼に向かって、まるで挑発するがごとく指を突き付け、番外

席次は炎属性の信仰系魔法を詠唱。

「〈神炎〉」

「な、馬鹿なッ!?!」

光輝が奔った。

この魔法は、カルマ値が極善の500であれば規定通りの大ダメージを与えられる魔法であるが、番外席次はそういった法則までも無視して魔法攻撃を落としてくる。——あるいは、そういう異能タレントの持ち主を捕食したのかもしれないが、ここでは判然としない情報である。

デミウルゴスは皆の盾となるように、巨体を前進させた。炎属性への完全耐性を有する己であれば、防げるものと信じて。

劫火と豪炎——そして十字光の衝撃が、悪魔の全身を蹂躪した。

「ぐああああああああああああああああああ——ッ!」

炎獄の悪魔に炎属性はきかないはずだが、〈神炎〉の神髄は、神聖属性においても極大のダメージ量をもたらすこと。炎属性を無視できる盾としては、彼の判断は完璧に正しかった、が、神聖属性への耐性装備を抜けてくる一撃は、予想だにしない事態である。

いくら炎属性に対策や無効化を用意できている、邪悪な悪魔を焼き払う神聖なる炎は、効果こうか靦面であった。

「デミウルゴス!」

「デミウルゴスさん!」

炎獄の造物主が「焼き焦がされる」という異常事態であるが、マールレの回復魔法によって意識は戻った。

「が、不、覚——あまりにも不覚!」

変身した肉体の半分が炭化した炎獄の造物主は、マールレの転移術でとにかく後方に下げられた。悪魔用の特製ポーション風呂でも用意しておくべきだったと歯噛みするアウラ。

「緊急! 急いで第九階層のスパリゾートに連絡! デミウルゴス用のポーション風呂を——聞こえてるの!?!」

怒鳴り散らすアウラだが、番外が傍にいるせいで〈伝言〉メッセージを強力に阻害されている。通信魔法の向こう側は雑音ノイズに染まり果てていた。



弟との連携で使っているドングリ型アイテムは、むしろナザリック内に残しておくべきだったかもしれない。

「お姉ちゃん、僕はとにかく回復に」

「専念できる、といいわね？」

「!?!」

二人が防御する姿勢をせせら笑う番外席次は、マールをかばったアウラの右腕が変形・粉砕骨折するほどの蹴りを入れた。

「ぎいー!」

「お姉ちゃん?!?!」

あまりの痛みに悶絶するアウラ。

自分の防御魔法が通用しないほどの相手にたいし、シャドウ・オブ・ユグドラシルを構えるマール。

そんな少年を味見でもしようかと舌なめずりする番外の背後に、凍河の支配者が刀を振りおろす――

「ぎんねん♪」

そうとしていた分厚く硬い外骨格の腹胸部を、漆黒の戦鎌ウオーサイズはバタでも裂くように斬り裂いて両断してしまう。しかし、まだ致命的な損傷ではない。彼の副腕のひとつが、魔法陣を展開。

「レアイスング・アイシクル穿つ氷弾!」

「ポラー・クロ極地の爪!」

コキュートスが放った魔法よりも、より高位、かつ極寒の爪の攻撃が、蟲の悪魔の全身を凍てつかせる。

冷気に対する完全耐性を、まったく完全に無視して。

「コ、コノ、私、ガ、氷結サレテ、果テルト――ハ――」

「いえ、まだです! マス・キュアウリンズ〈集団中傷回復〉!」

デミウルゴス、アウラ、コキュートスの傷を塞ぎ回復させるマール。Lv, 100である皆の体力は些少さしやうながら戻った……だが、彼の魔力はまもなく空からになる。

「はっ、はっ、はっ、はあっ!」

褐色の肌に脂汗あぶらあせを大量にかく。金髪が額に張り付いて煩わしい。疲労回避のアイテムは装備されているが、とてもそれだけで賄える疲

労量ではなくなったのだ。

「君つてば、だいぶ、いい感じの強さだね？」

「はあ……はあ……はあ……はい？」

杖を両手にかろうじて立ち上がるマーレは、番外席次が何を言いたいのか、本気でわからない。

「その心臓——」

もろうよと言われる刹那、

「！」

番外は瞬時に戦鎌を構え、どこかへと吹き飛んだ。

マーレが覚えていられたのは、そこまでであった。

これでも届かぬとは！

「残念でした！ 私の反射速度と全体弱体化をなめんじやねえぞ、くそ婆ばばあ！」

聖者殺ロシキヌスしの槍を右腕に巻き付けたリグリットを、ツアーの竜眼による正確無比な投擲で射抜く——作戦としては完璧であった。

ただ、惜しむらくは、今回の標的が桁違いの強さを持った超オーパーロード越者すぎたということ。

マーレの脇をかすめて、番外席次の中心を正確に狙撃した一槍は、戦鎌の刃先で防がれている。

これでは聖者殺ロシキヌスしの槍の発動条件を満たさない。

「んじゃあ、死ね」

「ッ！」

リグリットが死を覚悟した、その時。

「いえ、死ぬのはあなたです、番外席次」

「な」

超高速で飛行もとい放擲の速度についてきた第一席次の青年は、隻腕でリグレットの腕に巻かれた槍を掴んで外し、無理やりに番外の胸に――突き刺した！

1999年前の墜とし仔 — 3

／A d e s e r t e d c h i l d 1 9 9 9 y e a r s b  
e f o r e — 3

周辺諸国は混乱と混沌の極みにあった。

リ・エステイーズ王国では、怯えたラナーを彼の騎士が支えるように抱きしめる。

バハルス帝国では、皇帝が魔導国との通信を試みるが、応答など返ってこなかった。

ローブル聖王国では、魔導王教の開祖たる少女が、懸命に魔導王の無事を祈り続けた。

竜王国でも、都市国家連合でも、評議国でも、その天変地異の煩雑さは確認されていた。

万雷が轟音を響かせ、酸性の濃霧が曇天を濃く彩り、神の炎もかくやという爆発の衝撃波が大気を震撼させる。

おまけに、巨大な岩塊上に規則的に展開された大小の球形から放たれる光柱の景色とときは、もはや大地が天上へとぼつていく様としか形容できない。

この世の終わりを、幾万回は想起させて当然の異常事態の、その下で。

番外席次の心臓に、第一席次の古くみすばらしい槍の一撃が突き入れられた。



が驚愕したのを確認できたからでもない。

「僕は、あなたを、あなただけを——愛しています」

そう告げることができた喜びに、彼は心の底から満足する。

初めて会った、9年前からずっと、という言葉は、彼の唇は紡げなかつた。

漆黒聖典「第一席次」は消滅した——彼の振るつたみすばらしい槍……聖者殺しの槍だけを残して。



190年分の強さを持った私に、少年は少ない力と技で幾度となく挑んできた。

そのたびに技が研磨され、腕が錬磨されたのを感じたが、やはり私が食するには値しなかつた。

そうこうしている内に、彼は漆黒聖典「第一席次」——我が同輩となり果せ、喰うことはできなくなつた。

それでも、彼は「稽古に付き合つてほしい」という名目で、私に挑み続けた。

何故なのかはわからなかつた。興味すら持たなかつた。

ただ、彼がこのような戯言をほざくのを聞いた。

「あなたに見てほしいのです。強くなつた、僕を」

そのとき私の中で何が起きたのかはわからない。  
ただ、



それを確認したのは、第十階層・玉座の間に詰めるユリ・アルファであった。

「パンドラズ・アクター様の項目、復活を確認！」

これで、彼の魂はナザリックに戻された。

戦闘メイドや一般メイドたちが快哉をあげる。なかでも、ナーベラル・ガンマの喜びの涙は、普段の彼女からは想像もつかないほどであった。

残るはインファイレア・バレアレ——「すべてのマジックアイテムを使用可能にする異能」、これを剥奪することで、サラの最後の手段が発動できる。

「サトルくん、いける?!」

戦場全体を監視していた——透明な星幽界体アストララルとなつて見守つていたサラに、ルベドの一撃を防御してもらい、アインズ・ウール・ゴウンは大声で告げる。

「どうにか算段は付いた。しかし、今の俺の集中力では、使えて4体までだ！ 十個の星の指揮を執りながら、それ以上の数を使役するのは！」

「じゃあ残り四つは？」

ティファレット、イエソド、ゲブラー、ホド、ケセド、ネツアク、ピナー、コクマー、ケテレル、マルクト、太陽・月・火星・水星・木星・金星・土星、天王星、海王星、地球の指揮を行いつつ、「最強の個」たるルベドを相手取るアインズ。他の誰にもやりおせることは不可能だった作業を完遂するために、まだ、戦力は揃っていない。

ちなみに、上位アンデッドたるサラもアンデッド作成スキルは持ち合わせているが、彼女こそ番外席次討滅の要。今は少しでも力を温存させねば。

「せめて〈伝言〉メッセージが阻害されていなければ」

戦場にいる守護者四人と連絡を取る手段がないものか、否、そんな都合の良いものなど、今の自分には……そう思った矢先のこと。

『おいおい。私を忘れてもらっては困るぞ、アインズ殿』

アインズは、己の懐を探った。



意識を失っていたらしいマール。

気づけば彼は小さな身を横たわらせながら、自分を治療するナザリックの神官、一般メイドの長たる犬頭のメイド長を見上げていた。

「わわあ、ペ、ペストーニヤさん？」

「ご無事で何よりです、マールさま」

腑分痕ふわけあとが頭頂部をはしるメイド長に対し、マールは率直な感謝を告げる。

「あ、ありがとうございます、あ、でも、その、ルプスレギナさんの方は？」

「アインズ様の傘下に降ったクスト・スウ殿が担当しております、ご安心のほどを」

信仰系魔法軍の指揮と教導を任せられた、黒い人狼の姿を思い出すマール。

ペストーニヤは他にもナザリックの治療班を引き連れ、アウラ、コキユートス、デミウルゴスの回復に馳せ参じた次第。

さらに、メイド長は言い添える。

「アインズ様の密命にて、こちらをお届けに」

「この『板』は？」

それはアインズ——否、鈴木悟がいた現実世界の『スマホ』に近い携帯端末の形をしていた。

ペストーニヤの説明が続く。

「旧ブローラーノーン幹部——ゴーレム工房にて工房主任を就任されたトオム氏による試作品です。端末タイプの魔法発生ゴーレム。『伝言』ではなく『テレパシフィック・ボンド念話結合』専用の特化した魔法端末のようなもの。どうかがつております」

「『テレパシフィック・ボンド念話結合』専用？」

「『メッセージ伝言』は本来、遠方にいるプレイヤー同士がやりとりをするための

魔法であり、戦闘に使うものとは言えない。

戦闘に使う上で有用なのは〈念話結合〉——相手と心を繋げ、意思疎通を図れる魔法の方であろう。

こちらであれば声を出すことなく相手との連携が確立でき、尚且つ音声に過敏なモンスターにも覚さとられることもない。ただし。欠点として、自分が思ってしまうことが相手に筒抜けになる魔法とこちらの世界ではなっているのです、そこは、使用上注意が必要になる。

「本来であれば、他の魔法機能を付加する予定とのことですが——今は時間がありません。これでアインズ様と連絡を！」

闇妖精は一も二もなく頷き、板状ゴーレムの通話ボタンならぬ念話ボタンを押した。

『守護者各位に伝達！』

耳元で怒鳴り散らす声。

だが、それはナザリックを捨てながらも戻ってきてくれた、マールたちの最高支配者のそれであった。

同じようにアウラが感涙し、コキュートスが忘我の吐息を吐き、デミウルゴスが御身から授かる命令に心が翼でも生えたように舞いあがる。

アインズは続けざまに心の中で叫んだ。

『回復早々に悪いが、全員、ルベドの起動装置の停止作業に向かえ！』

下四つはアウラ、マール、コキュートス、デミウルゴスに任せる！』  
戦場で、ペストーニヤによる完全回復魔法を受けた四者は、その場で跪きたい衝動を抑え、四方に散ることができる。

このために、この事態を想定して、アインズはトオムを仲間に取り込み、ゴーレム工房の長たる要職に就けたのか。

『ルベドの髪をよく観察しろ！ 彼女を投影している機材！ それのある方角がだいたい分かる！』

彗星の尾のように揺らめくルベドの髪。それを観察検証すれば、箱の位置は特定される。彼女の創造主たるタブラ・スマラグデйнаから聞いていた、非常時用の手段だ。

アルベドが相も変わらぬ暴走状態でシャルティアとやりあっている

る横で、アインズもすでに目当てのものを発見し、中位アンデッド四体を上空四つの投影機に向かわせている。

距離にして十数キロ圏内。

御身の命令を実行する守護者四人。

神速で駆けるアウラ、高速の杖に乗るマーレ、刀を構えるコキユートス、翼を広げたデミウルゴスも、*“それ”*を発見。

——もしも、ルベドの指揮権を、敵性存在に奪われた時の対処法、または指揮権を持つものがいなくなった時の対処法。

ルベドは人型に投影された暴力装置であり、分類としてはフィールドエフェクトの類に位置する。

そのエフェクト発生器官が、アルベドが法国へと携行していった、八つの紅い立方体——

『スイッチを切れ！』

アインズの号令一下。

アウラが一つ目のボタンを押し込み、マーレの二つ目がそのあとに続く。

コキユートスの飛ぶ斬撃が、デミウルゴスの魔法の矢が、それぞれ三つ目と四つ目のボタンを操作する。

そして、アインズの召喚した中位アンデッド・エルダーリッチ四体も。

瞬間、ルベドは動きを完全に止める。

〈……強制停止プログラム、受信しました—— R<sub>ル</sub>ubed<sub>ド</sub>は、完全停止いたします〉

赤い少女は、その痕跡や残滓すら残すことなく、消滅した。

紅い八つの箱だけを、戦場に残して。





し、槍と鎧が割れんばかりに受け止める。

「ぐうー！」

「おまえに何がわかる！ あの方に設定をイジられた時の快樂が！  
あの方に『愛しても良い』と、そう言われたがごとき瞬間の快樂が！  
わかるものかああああああああああああああああああああああ  
ああああああああ！」

アルベドの脳裏に思い出されるは、ユグドラシル最後と称された  
日。<sup>とき</sup>

もう二度と相まみえることはかなわないと諦めていた、至高の御身  
との、逢瀬。<sup>おうせ</sup>

彼がいたから今の自分<sup>アルベド</sup>があり、彼がモモンガだからこそ、自分は彼<sup>モモンガ</sup>  
を愛せたはず——なのに。

「……モモンガ様、……モモンガ様ああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ！」

アルベドの一撃で両膝を屈した真紅の戦乙女。

それでも、彼女は躊躇することなく言い放つ。

「あの方がモモンガ様でないことぐらい、わたしにも、わかっている」  
「……………へ？」

「ああ、忘れもしないであります。わたしの創造主たるペロロンチー  
ノさまが、ナザリックからお隠れになった時、わたしは、モモンガ様  
の本当の名を、聞いた」

聞いてしまった。

ほかのゲームと一緒にコンバートしようかと誘うペロロンチー  
ノの言葉に、鈴木悟は首を横に振り続けた。

「あの方がモモンガ様でもアインズ様でもないことぐらい、わたくし  
はどうに把握済み……それでも、わたしは、あの方のために、至高の  
御身のために戦うと……誓約した」

本気の口調を披露するシャルティアは、自分<sup>ペロロンチーノ</sup>の創造主に後事を託さ  
れた。

そんな彼を偲<sup>しの</sup>ぶように、モモンガもとい鈴木悟はペロロンチーノの

武器——ゲイ・ボウを、今でも大切に保管してくれている。  
その一事だけでも、彼に忠誠と信愛をたてる理由たりえる。

「ねえ、アルベド」

シャルティアは語りかけた。

「あなたはアインズ様を愛してはいけないの？ あなたは鈴木悟とい  
う御方を——」

愛してはいけないの？

「……た……た わごとを言うな ああ ああ ああ  
あ！」

あくまでも拒絶の意思を見せるアルベド。愛の鎖にがんじがらめ  
となった同胞へと、シャルティアは牙を剥くほどの怒りと共に、新た  
な装備を取り出し、構え、そして——起動。

それはアルベド戦の直前、アインズから下賜された武装……広範囲  
に及ぶ対物体破壊……アルベドが放棄した世界級アイテム  
ギンヌンガガフ 真なる無”。

「この、大馬鹿大口ゴリラがあああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ

世界級アイテムの破壊の輝きが、容赦なく漆黒の大悪魔の鎧を呑み  
込んだ——

## アインズVS番外席次、再び

／AINZ VS Extra seating order ,  
Again

「——ふう」

アインズは必要もない吐息を漏らしつつ、事態が順調に推移していることを確認。

(ルベドの完全停止、成功。パンドラズ・アクターの項目、復活。アルベドの暴走もシャルティアが抑え込んだ——あとは)

戦場の真ん中で項垂れる番外席次を遠くに見つつ、アインズは第八階層のあれらをすべて帰投させる。

(さすがにこれ以上へ生命樹<を>を使い続けたら、ギルド資金に響く——収支決算は既に赤字……やむをえない)

だとしても。ルベドを完全に封じ込めただけでも大金星と見ていだろう。さもなければ、ここにいた全員が、ルベドに殲滅・即殺されていった可能性が高い。

(完全停止させた以上、指揮権の問題はリセットされた。当面の間は我等にも使えないが、それもよし——問題は)

番外席次が健在なこと。

彼女が見据える先には、彼女を「一殺」して消滅した、第一席次の遺した槍が転がっているのみ。

そして、世界級アイテム「聖者殺しの槍」で刺されたはずの傷は、完全に癒えていくのを、視認。

(嘘みたいな存在だ——聖者殺しの槍に貫かれて存在抹消されない存在など)



あれが世界級アイテム。聖者殺しの槍であるという確証は、戦闘前の鑑定魔法で確認済みだ。だというのに、番外はその穂先を受けて、健在。実に信じがたい光景と言わざるを得ない。聖者殺しの槍の「存在抹消」は有名であり、その効果は絶対的だ。

それをふせぐには——それこそ、ワールドチャンピオンが〈次元断切〉をタイミングよく使用した時などの特異な状況か。

(対象が、ワールドエネミーである場合か、だ)

ツアーの話だと、200年前に転移してきたリーダー……リクが装備していた世界級アイテムは、対ワールドエネミーに特化した性能を保持していたというが。

(と考えている場合ではない)

番外席次が聖者殺しの槍に震える手を伸ばす。

アインズは槍をどうにか槍を回収できないものか、守護者各位と共に見守っていたが、彼我の距離的にそのような隙も暇も無かった。

(まさか、番外席次も聖者殺しの槍を使って、俺たちを)

そのような不安に駆られた刹那、

「何!？」

槍がひとりでに動いた。

まるで見えない誰かに回収されたように宙を進む。番外の手から逃れた槍は、ある女性アンデッドの黒い手によって握られていた。

「悪いけど、この槍、今は渡せないわよ」

そういったのは、完全に透明化を解除した星幽界体——  
グレイテスト・ハイレイス・クイーン  
最上位死霊女王——サラであった。

番外席次は暗い眼差しでサラを凝視し、手を差し出す。

「寄せ」

「勿論、お断りよ」

「寄せさせて言っただ、クソアンデッド! それは……それは——  
!」

サラは自分のボックスの内に槍を収納すると、再び透明化して逃げの一手に出る。

「あともう一殺——二殺」目はお願いするわ、サトルくん」

「承ったー！」  
うけたまわ

作戦通りに事は進んでいる。

アイنزは守護者各位——アウラ、マーレ、コキュートス、デミウ  
ルゴスを散開させ、そのうえで、自分の世界級アイテムに手を伸ばす。

○○○○・オブ・モモンガに。

「起動」

赤い宝玉がアイنزの手中で輝き、彼の能力値を上昇させる。

今回、アイنزの様子は様子見も何も必要としない——相手の素性と能力  
は知れた以上、全力を尽くして「勝ち」に行く。

この世界級アイテムは、モモンガの切り札の中の切り札——究極の  
能力は5レベル分消費を余儀なくされるが、それに見合うだけの能力  
を發揮してくれる。おまけに、竜特攻装備でもあるため、神竜トウテウ  
“の血を引く番外には、効果覲面となるはず。”

「特殊技術——」スキル “あらゆる生ある者の目指すところは死である——”

アイنزの背後に浮かび上がる謎の時計盤。

「はっ。それが何だ。この間は一発で——」

のした相手だった、はずだ。

しかし、番外は周囲を見やる。

守護者たちがアイنزから距離を取った。

彼らの主が、確実な即死魔法を選択すると理解して。

彼が本気でいることを、「勝利」を掴むべく全力でいることを理解し

て——

弔鐘の鐘が鳴り響きつつ、12秒を刻む……時計の針が一周し、再  
び天を目指す……その前に。

「魔法効果範囲拡大・嘆きの妖精の絶叫——」  
マジック・クワイ・オブ・ザ・バンスー

その即死攻撃を、女の絶叫を聞いた番外席次が、反射的に耳を塞い  
だが、この魔法は効果範囲内の敵へ強制的に叫び声を聞かせるもの。  
その程度でどうにかなるものではない。

「終わりだ」

十二時の鐘が鳴り響いた。

通常の相手であれば、これですべてが終わったはず。完全死とでもよぶべき事象によって、大気と大地までも「死」によって汚染された、直径二百メートルの砂漠の中心に、アインズは立っている。

「が　　ッ！　　っ　　?!」

アインズの発生させた呼吸不可空間に突如迷い込んだ番外席次は、しかし、まだ生きていた。

呼吸できない苦しみに喉を押さええてはいたが、彼女は健在のまま――

「やはり、ワールドエネミーには効き目が十分ではない、か」

そう分析するアインズに対し、番外席次はとにかく呼吸不可空間からの脱出をはかった。

彼女の捕食した異能に「毒無効」「酸素不要」とする異能もあるにはあったが、アインズの起こした事象により空間自体が「死」そのものへと変貌しており、大地だった砂漠にも死の影響は残されている。長居すれば、さすがの番外席次も生命にかかわる。

それを、守護者たちはここぞとばかりに回り込み、砂漠の外側から攻撃の乱舞を仕掛ける。

「グレインアロー「天河の一射」」

「す、へ大溶岩流」

「グスマイト・フロストバーン」

「(次元封鎖)」

ほとんど行動不能な状態で、守護者たちがこれまでの鬱憤を晴らすかのように、周到に綿密に解き放つ特殊技術や魔法、その直撃を浴びる番外席次。

「――っ！――ッ!!」

卑怯なり、とは言わせないアインズ・ウール・ゴウン。

彼女の内に蔵された異能の数――捕食された命の数を思えば、これでもまだ足りないぐらいである。

「魔法三重最強化・心臓掌握」

第一席次に一度は貫かれ、そして元通り復元した部位が、心臓を握る衝撃三連ではじけ飛びそうになる――が、死なない。

「あまりにもしぶといな……………仕方ない」

アインズは守護者たちを念話テレパスで下がらせ、番外から距離を取らせる。

その隙に番外は直径200メートル外へと逃れるが、それも承知の上。

「はあ——はあ……………野郎、クソアンデッド野郎が！」

そう吠え散らす番外席次に対し、モモンガは腹部の宝玉を取り出し、能力を解放——

「そんな攻撃！」

当たるわけがないという言葉を吐く前に、宝玉の色がどす黒い純黒に変色し、

「……………な？」

彼女の中心を、何かが貫いていた。

正確には「生はえていた」。

それは、おそらく——樹き。

どす黒く塗られ、今は番外席次の心臓の血色を吸って脈打つ、木の根。

複数の能力を併せ持つ世界級アイテム〃〇〇〇〇・オブ・モモンガ〃  
〃の中でも最悪最凶の能力。

「な、んだ、これ——は？」

〃死クリフオトの樹〃

「本来であれば、第八階層のあれらと併用させることで究極の広範囲完全即死攻撃となるのだが、貴様一体分程度をやるのに、シナジー効果を生かさせるまでもない」

世界級アイテムそのものに備えられた即死スキルの解放——直径500メートル内の生命を無差別に殺す「死の樹」に、さすがの番外席次も手も足も出なかった。

彼女もまた生命を持つ生者せいじやたるが、故に。

「あ、くそ、が……………——」

彼女の戦ウオーサイズ鎌が、両手からガランと落ちる。

黒白の髪に巻かれた飾り紐がほどけ、大地の上に落ちた。

番外席次は、この瞬間、〃二殺〃目を、二回目<sup>の</sup>死を遂げる。

これで、シファイレア・バレアレの魂は解放される。実際、ペストーニヤの蘇生魔法が、彼の魂を捕捉し、蘇生可能になった事実を告げてくれた。

「さて」

あとはサラの〃奥の手〃とやらだが、果たして？

サラは事の顛末を見届けた。

「……………大丈夫だよ、××」

番外の本名を告げる死<sup>×</sup>霊の女王は、告げる。

「あなた一人に、寂しい思いはさせないから」

彼女はギルドの指輪を握りしめ、そして、

「……………え？」

異変に気付いた。

## “絶死絶命”

／Absolute mortal death

それを最初に感知したのはツアーであった。

「この、気配は！」

リグリットの治療を鎧のパーツで行っていたところに、強大な気配の現出。

その濃度、その強度——間違いなく、世界を穢し犯す力。

アインズ・ウール・ゴウンの世界級アイテムも油断できない強さを秘めていると理解できたのは収穫だが、事態はそれどころではなくなった。

「ゆくぞ、ツアー」

「リグリット、君はもう」

「なあに……いつものこと、じやろう？」

「……………ああ、まったくそのとおりだ」

2000年前から変わっていない。

まったく、よくぞこんな性格で戦場を渡り歩いて、無事で済んできたものだとは呆れ果てる白金の竜王。

「ゆこう」

「共にな」

戦場へ。







絶対に死ぬことはない死神。

まさに「絶死絶命」——

「しつかりせい、魔導王！」

魔導王の眼前に現れたリグリットが、ツアーの四武器の内の一本……大槌を振るって竜の腕を打ち払った。

さらに、守護者たちの特殊技術スキャルや魔法もそれに追従。

どうにか一本目の腕は破壊できたが、番外から溢れるワールドエネミーの黒泥は、別の腕を二本生成しつつある。このままでは罅が明かない。おまけに、

「くそ、奴のスキル『全体弱体化』が強化されおった。奴め、より強くなっておるようだわい——サラ！」

「ルーファウス流・奥義」

天頂部より戦場に振りそそぐ星幽界体アストラルである彼女は、両拳を握って構える。

「『タダノ百烈拳』」

百連発に及ぶ拳撃が、黒の龍尾の接近を封じ落とした。

リグリットの呼びかけに応じ、サラも戦線に加わる——だが。

「これは、さすがに予想外の事態よ。これじゃあ、法国へ彼女を転移させて、ギルド拠点の聖域に封じ込める作戦なんて、出来っこない」

冷徹に戦局を分析するところは、さすがは上位アンデッドの女王といったところか。

「第二プランとかは、ないもんかのう？」

「あるわけないでしょが、そんなもの！」

死者使いの老婆の提案に、サラは静やかな烈声をもって応える。

「ツアーくんの世界移動は？」

「奴に通用するなら、とつくの昔に使ってる！」

「そうよね。じゃあ、残った手段、私らが出来ることと言ったら——そう——『このまま』アインズ・ウール・ゴウン魔導王くんを囷とうてつに、饗饗とうてつを法国・神都にまで誘導することぐらい？」

「馬鹿な！」

真っ先に反駁したのは、守護者らの中で最高位の智者デミウルゴス

であった。

「アインズ様の身に危険が及ぶような策など、到底受け入れられぬ話だ！」

「そうだそーだ！」

「あの、い、いや、です！」

「断固トシテ反対サセテモラウ！」

「……………いや」

守護者らの主張に対し、アインズは透徹とした口調で翻意を促す。

「ここで重要なことは何か、よく考えろ、おまえたち。この私の身の安全か？ それとも、この世界の」

「当然！ 御身の安全には代えられません！」

「……………ええ？」

若干脱力するアインズ。

サラの提示した案が妙手であることを看取し、とにかく守護者たちを説得する。

「——俺には、世界級アイテムの防御もある。心配ない。むしろ、おまえたちに与えた世界級アイテムの方にこそ気を配れ。奪われたり破壊されでもすれば、それだけで敵の利となるのは明白だからな」

「ぐ……………しかし！」

「それぐらいにしときなんし、デミウルゴス」

そう告げる真紅の戦乙女は、鎧を半壊させた身体で、同じく鎧が全壊し失心した女悪魔を引きずりながら現れた。

慣れない世界級アイテムの威力に、彼女自身も巻き込まれてしまったということ隠しつつ、シャルティアはアインズに提案する。

「我等だけでは力不足と御身は御考えあそばしている、ということでありんすね？」

「ああ、残念ながら、守護者がたつた四人——いや、五人では、な」

本当は、友人たちの子であるNPCを巻き込みたくはないという親心が本音の部分であったが、アインズはそれを隠した。

「ならば、ナザリックの全軍をもって、御身をお守りいたしんす」

「……………はい？」

シャルティアの提案に、守護者一同は賛意を示しかけ、歓声をあげかけるが、

「残念ながら、雑魚ザコがいくら集つどおうと『無駄』だ」

白金の竜王に侮辱ともとれる発言をされ激発しかけるシャルティア達を、アインズはなだめ鎮める。ツアーは四武器の内三武器を饕餮の腕や尾にぶつけつつ、確信を込めて告げた。

「あれは饕餮——すべてのものを喰らい、すべての命を自己の能力やステータスに還元するワールドエネミーだ。ナザリツクの中で劣弱な、Lv. 100未満の連中を連れてこられても、奴の『餌』にされるだけ——その餌の数が豊富な分、奴の力は今以上に膨れ上がるだろう——わかるかい？」

シャルティアはぐうの音ねも出さず押し黙った。

「おまけに、奴の全体弱体化の影響は、ここにいるモノすべてに適用される、Lv. 100以下の存在など、あつという間に狩られ喰われるぞ」

守護者たちも、シャルティアの策に乗りかけた己を恥じるように面を伏せる。シャルティアの眷属群も。アウラの魔獣軍も。デミウルゴスのへ最終戦争―悪―による悪魔召喚も。ナザリツク全軍も……まったく何の意味も持たない。

ツアーは、言い聞かせるように繰り返した。

「策はひとつしかない——サラの言う通り、アインズを囿わもてとして、使うこと」

それだけだと断言する白金の竜王。

「死者使い」リグリット共に、饕餮の腕と尾の攻撃を阻む最上位死霊女王の判断に、全員が従う以外の道を持ちえなかった。

「決まりだな」

アインズは決心したように宣のたまい、飛行する。

守護者たちは、あのバケモノを相手に、せつかく戻ってきてくれた至高の御身を、釣り餌も同然に扱う事態に悲憤ひぶんしつつ、御身の決定を尊重する。それ以外に、御身への忠誠を示す手段は持ち合わせていなかった。

「よし——では、——ゆくぞ！」

「ハッ！」「ハッ！」

守護者らの承服の声を連れて、アインズは戦場を離脱するように南下、一路、無人となりつつある法国を目指す軌道に入る。

「にげるなああああああああああああああああああああああああああああああ——」

壊れた番外席次……ワールドエネミー 饕餮化しつつある絶死絶命の喚き声を背後に引き連れながら、神都の聖域を目指す。



私はどうなっているのだろうか？

彼を喪い、

己を失い、

それでどうなるのだろうか？

私はいつたい、どこへむかっていくのだろうか？

よくわからないけれど、母さんの本能は絶対だ。

自分の肉体がバラバラになろうと、自分という存在が意味消失しても、饕餮の欲望を果たせさえすれば、私は満足できるのだ——すべてをコロシ、すべてをクライ、すべてをノミコム。今までヤツテきたように。

私を殺した、あの宝玉——あれを食べれさえすれば、私は……私は……

「本当にそう？」

——え？

「本当に、あなたはそれでいいの？」

——誰、あんた？

番外席次の見据える先に、真っ白い影が、銀髪に長耳のエルフが、いた。

# サラ・ルーファウス・

／S a r a R u f u s

「超位魔法——失墜する天空」  
フォールンダウン

課金アイテムを使用して即発したはずの超位魔法であつたはずだが、その対象に据えられた相手は、

「逃げるなあああああああ、アインズ・ウールウウ・ゴウンンンンン！」

無傷。

言い訳をするつもりはないが、これは逃げているのではない。

これは戦略的撤退であり、戦場を再設定しているに過ぎない。

そう説明したところで無駄であろう黒白の少女——否、もはや黒部分しか残っていない異形のバケモノは、龍の三本指を心臓と背中、そして白かった瞳部分の三カ所から三つ生やし、龍の巨大な尾を首根から生やすという狂態ぶり、アインズ一行を追う。

魔法もスキルも通じない——というより、それすらも饕餮<sup>アレ</sup>は吸収し、己の体力や魔力回復に使用流用している感がある。

とすれば、もはや逃げるしかない。

サラの立てた作戦通り、法国は神都を目指す以外に、ない。

飛空したまま国境を越え、周辺を世界級<sup>ワールド</sup>アイテムで武装した守護者らによって守られるアインズ。

黒龍の分離体——鱗から生えてきた小型のモンスターがゲタゲタ噛みながら口を開き、乱杭歯を剥き出しにして襲い掛かるのを、マーレの「強欲と無欲」が払い落とし、コキュートスの「幾億の刃」が切り捨てる。アウラは「山河社稷図」で、デミウルゴスは「ヒュギエイアの杯」を振るって防御に徹するが、どちらも本来の使い方からは程

遠い。

「雑魚どもがアアアアあああああああああ！」

そう言つて、シャルティアが先のアルベド戦でも使用した<sup>ギンズンガガブ</sup>「真なる無」による広範囲破壊をくわえることで、雑魚の群れは一度消滅を余儀なくされるが、

「クソ、きりがない！」

竜の鱗から分離してきた小型モンスターたちだ。

本体である黒龍をどうにかせねば、焼け石に水にしかならない。

「アインズ様、いっそのこともう二、三度、番外に死を賜つてみてはいかがでございましょう！」

そう提言してくれるデミウルゴスであったが、

「残念ながら、俺の世界級アイテムには、あのスキルと同じように、<sup>リキヤスト・タイム</sup>冷却時間が必須でな」

「ということとは」

「そう……<sup>クリフオト</sup>『死の樹』は連続で使用できないデメリットがある」

完全死を与える<sup>The goal of all life is death</sup>「あらゆる生ある者の目指すところは死である」

——アインズだけの特異なスキルは100時間にも及ぶ長時間の冷却時間を要する。それと同じことが『死の樹』には要求されるのだ。

その冷却時間は10時間——およそ半日——

さらに言えば、とてもではないが、他の能力をためている余裕も猶予もない。通常時の赤色で備わっている能力で、あの暴虐の権化を止められるとは、とても思えない。

「竜特攻の効果は、どうやら期待できない。今の奴は龍であつて龍でなく、人であつて人でもない」

非常に曖昧な状態故に、どの能力も使い物にならないらしい。

「では、このままっ？」

「ああ。できる限り迎撃しつつ、サラの言う通り、法国の聖域——否」  
魔導国と法国の国境地帯を超えた。

「『ギルド拠点に奴を封じる』」

戦闘前のこと。

「ここが、ギルド拠点？」

「正確には、神都そのものがギルド拠点——というべきかしらね」

サラは明朗に告げる。

「本来の都市名はロスヴァイセ——白き戦乙女とか、そんな意味だつて、彼から聞いてるけど」

「都市型拠点ロスヴァイセ、か」

アインズが知る都市型ギルド拠点の中でもとりわけ有名なのは、剣の戦乙女シユルヴェルトラウテが支配する、商業ギルドの拠点だ。

ユグドラシルでも四大商業ギルドに数えられるギルド：ノー・オータム、彼女らが居を構えた「剣の都」の壮麗さ典雅さ広大さは、確かに、神都のそれと近似している。若干、こちらの方が白い建造物が目立ち、神殿の数も多い印象を受けた。

サラは作戦の概要を説明する。

「番外席次『絶死絶命』の命を二回、つまり魂二個分を回収。その後、私が「風の秘宝」こと、世界級の転移魔法アイテム『メルクリウスの羽靴』で、ここへと連行し、ギルド拠点を閉じる——つまり」

「幽閉する、と」

「それぐらいしか、今は対処法が思いつかない」

「だが、そうすると神都は——このロスヴァイセは」

「この地上から消滅する」

あつけらかんと言ってしまう法国の影の盟主。

ズーラーノーンを率い、法国首脳部の相談役としても一役買っていた女アンデッドは、冷厳に冷酷に、世界を護る方法を採択する。

「このまま番外席次を野放しにしておくことはできない。これまで法国の存在として認められていた彼女だけど、彼女は法国の神官長らを殺し、結果的に北軍まで壊滅させた——その責任は取らせなければならぬ。私自身、法国の一人の民として——彼女の育ての親の一人と



して——この法国自体を、滅ぼしてでも」

責任は取らせる。

その覚悟のほどに、全員が納得を得た。

さらに、サラは封印の効果で、ナザリックで治療継続中のルプスレギナへの影響力もなくなることを確約してくれる。すべての問題が一挙に解決される手段が、番外席次の「封印」であったのだ。

「というわけで、サトルくんとツアー、リグリットにあずかっておいてもらいたいものがあるの」

彼女がとり出したのは——正確には、魔法の棚に陳列されていたそれは、「四つの秘宝」「四柱の世界級アイテム」のうちの、三つ。

「サトルくんにはお詫びもかねて「水の秘宝」 《傾城傾国》を——ツアーくんには「火の秘宝」 《アグニの蓮華》を——リグリットには「土の秘宝」 《世界狼の監獄島》を、それぞれ預けておきます」

サトルは純銀純白の袍を、ツアーは赤い蓮華の花を、リグリットは島の模型を、それぞれ受け取る。

三者はそれぞれが持つ効果を教えられ驚嘆しつつ、今回の戦いに使えるものかどうか慎重に吟味する。

「リグリットのは特に強力よ。何しろ、世界狼——北欧神話最大最強のフェンリル狼を閉じ込めた島の名前を冠されるアイテム。使い方がハマれば」

「相手を世界の終焉まで閉じ込めておける、と——ふむ」

「あと、リグリットに預けておきたい巻物があるんだけど」

アインズはリグリットの状態を見る。

ツアーの（決して効果的かつ得意とは言えない）治癒を受けて、かろうじて意識と武威を保っている。世界級アイテムを装備していることに違いはないが、その効力を発揮する頃には——

「アインズ様？」

「なんでもない」

隣を飛行するマールレに、彼は首を振ってみせた。

アインズはボックスの重要項目に位置している世界級アイテム<sup>ワールド</sup>“傾城傾国”が使えないものか（無論守護者の誰か適合者・アウラに貸与することを）思案するが、さすがに、あの状態の相手を——ワールドエネミーを支配する能力など、望みようがないと理解する。

アインズは共に飛行する白竜へ問うた。

「ツアー。おまえが渡された“アグニの蓮華”は」

「ああ。僕の炎をより強くしてくれることだろうね——けれど、いま使えば、強くなり過ぎた炎が、アインズ達や神都そのものを巻き込む可能性が高い。調節や試運転なしで使うには」

「危険すぎるか」

こちらは全員世界級アイテム<sup>ワールド</sup>を装備あるいは所持しているが、それでも、ワールドエネミーの執拗さと攻撃性能は尋常ではない。

理性というものが欠けているとしか思えなかった。

「目標——神都までの距離は？」

「あと5キロ圏内であります！」

マールレの杖に相乗りするアウラの的確な眼が、神都を数キロ先に視認。その間にも、饜飩<sup>とうとう</sup>化した絶死絶命との死闘は続く。雑魚による盾すら劫略し吸収していく相手に対し、召喚系スキルは慎重を期して使わねばならない。アウラは魔獣軍を呼び寄せられず、デミウルゴスも配下の魔将たちを、ナザリックに残さざるを得なかった。それほど相手の、後背から、黒い龍の部位を各所から伸ばして襲撃してくる。

「……サラ」

「んー？」

鱗の小モンスターを片付けつつ、アインズはサラの策が本当に成功するのか、その目算がどの程度のものか尋ねた。

本当に、あの暴虐と破壊の黒龍が、ギルド拠点ひとつの封印で片付けられるのか、疑問を覚えた。

「確かに、そう不安になるのも当然よね——というわけで、リグリッ

ト」

「……なんじやい」

「悪いけど、さつき預けた世界級アイテム」

「おうおう、もう返せと申すか……ケチ臭い女じやのう」

そう笑いつつ、老婆は懐から「土の秘宝」と称される島の模型を取り出した。

それと交換するように、「風の秘宝」『メルクリウスの羽靴』——世界のどこへでも、何の事前情報なく到達できる——ギルド拠点の防衛対策も世界級の防衛以下なら貫通可能な、最高位の転移魔法アイテムを、リグレットに押し付ける。

「奴を終焉まで封じておける措置、確かに受け取ったわ。「百棺護手」  
「サラよ……その二つ名は恥ずかしいから、別のにしてくれんかのう？」

かつての遣り取りを思い出して、吐息だけで微笑するアンデッドの女王。

凝固められた漆黒の相貌に手を添えていた女アンデッドは、元最高神官長にして第二席次であった老婆に感謝を告げる。

「ありがとう。あなたがいてくれたから、法国は200年も寿命を延ばした」

「あー、やめやめ。まるで、最期の別れの儀のような真似は」

「そうね。でも感謝してる。この世界を護ってくれて」

「ふん……こちらこそ、じゃ」

白竜の掌の上で行われたやりとりに、アイنزはこんな時だということに見入ってしまう。

「……最後、か」

サラのやろうとしていることは、大いなる自殺行為だ。

ギルド拠点を封じる上、相手を閉じ込めておくのに使用されるマスターソースの位置……さらには、世界級アイテムを使用し続ける……それはつまるところ……

アイنزは話題を転換するように聞き出した。

「そういえば、サラ。君にはルーファウスのほかに『姓名』があると

聞いたが」

「ああ。私の彼——旦那さまの方のやつね」

サラの彼にして旦那というのは、闇の神にして死の神・スルシャーナのこと。

「私の本当の名前は——サラ・ルーフアウス・<sup>スルガ</sup>駿河」  
「するが？」

駿河さん駿河さんと仲間たちと呼ばれていた——それを聞いた法国の民が発音したのが、スルガさん様、スルガシヤン様……それが「スルシャーナ」の始まりとなったのを思い出し、固定された漆黒の無貌で微笑するサラ。

「神都到達しましたー！」

アウラの声が気持ちよく響く。

眼下には白い、無人の都が広がった。

最高神官長らによる移民活動を終え、人っ子ひとりいなくなった法国の聖域——大神殿の入り口に、サラは真っ先に突入。

「二度中に入って！ 奴を可能な限り奥へ誘い込んで！」

漆黒の竜腕と竜尾の生えた人型のバケモノと共に、大量の鱗状モンスターが殺到。

「うざったいー！」

アインズが<sup>デス</sup>「即死」の魔法を唱えても、雑魚たちは我関せずといったありさまだ。もう耐性を備え始めているのか。

そちらにかまうことなく、サラはパイプオルガン席に座り、ギルドのマスターソースを解放……ギルド拠点『封鎖・閉鎖』の項目に、数秒でたどりつく。やはり、マスターソースで確認出来る限り、神殿と神都ロスヴァイスは、無人！

「よしッ、全員退去！」

聖域を侵食する饕餮化した絶死絶命とサラを残して、アインズとツアー、守護者たちは外へ避難。

振り返るリグリットを最後に、天頂部から順に聖域の窓や扉が完全

に閉じられていく。警報音が鳴り響き、赤い点滅灯が不吉な予兆を嫌になるほど告げてくれた。

そして、敵たちに取り残された絶死絶命は、必死に理性を働かせ、これが罠であることを理解した——が、遅きに失した。

リグリットの棺に残されていた死体——四号、五号、六号、七号が総動員されて黒龍の腕と尾を封じ、アインズ・ウール・ゴウンやナザリツクの守護者のスキルと魔法——ツアーの四武器による打擲ちようちやくを浴びながら、サラの召喚した上位アンデッドが主人を護りつつ、サラ・ルーファウス・スルガの取り出す世界級ワールドアイテムの射程内にとめおかれる。

土の秘宝、もとい島の模型が輝きを発する。

「世界級ワールドアイテム // 世界狼リレンの監獄島グヰ」、起動」

これを起動する時、サラは思った。

憐れみはあった。

哀しみもあった。

それでも自分は、スルシャーナ第一の従者は、番外席次 // 絶死絶命 // を、ギルド内にとどめおくのに最適なアイテムを、使用。

このアイテムの効果は、対象となったものを、その場にとどめおくことに終始する「完全封印」に特化している。

最後に、アインズは女アンデッドが手を振る姿を目撃した。

さよなら サトルくん

そう言われたと直感した。

アインズが大きな頷きを返した瞬間、聖域の窓は完全に封鎖された。

内部から「ココカラ出せええええええ」という少女の叫喚が響き渡るが、世界級ワールドアイテムの効果がそれを完全に阻む。

北欧神話に曰く。神々の奸計で、何者も破壊すること能わぬグレイプニル糸の縛いとについた世界狼フェンリルが封じられた場所——その島の名を冠する世界級アイテムの効果は、法国神都が消滅——ギルド拠点たる都市が封鎖されていくのに合わせ、効果を最大限に増大。このアイテムの最大使用条件のひとつが、ギルド拠点一個の封鎖にあることは、サラ以外の誰も知らない。

「総員退避——」

アインズの号令が旧法国の空を満たした。守護者各位やツアーたちとともに、夕暮れの落ちかける都市の上空を舞う。空の果てが藍色に染まり、月が輝きだす頃。

ロスヴァイセの都が次々と消滅を余儀なくされていく。

「ギルド拠点の封鎖……」

アインズはすべてを目に焼き付ける。

聖域も、神殿も、政府庁舎や軍官施設、小さな民家の類に至るまで何もかもが高速で解体され、その偉容を過去のものにする。

饕餮とうてつの小モンスターたちが、その解体工事——ギルド拠点封印の効果に巻き込まれ、次々と圧殺あつさつ・轢殺れきさつされ、消滅していく。

新手は出てこない。

本体たる饕餮——絶死絶命が、聖域の中に封じ込められているのだ。

アインズは、消滅していく都市の光景を火の瞳に焼きつけながら、一人の勇敢な女性の名を口にする。

「……サラ・ルーファウス・スルガ」

もう二度と会うことは叶うまい。

聖域の中で絶死絶命に殺されるだろう。

貪り喰われる心配はない星幽界体アストラルなのは救いのひとつとってい

い——

そう自分を慰めることしか、アインズにはできなかつた。

「よし」

大仕事を終えたサラは、奴に食われ力を増強させないよう上位アンデッドたちを消し、パイプオルガンを演奏しながら、背後に死の気配を感じ続ける。

あの娘の影が、さらに膨れ上がり、龍の腕だけで六本——龍の尾の長さだけで五十メートルを優に超え、肩から腰にかけては龍の牙列がびっしりと生え揃っていた。しかも、絶死絶命は罫の首謀者を正確に理解し、憎悪の声を吐き落とす。

「覚悟は、できてるんだろうナあ？」

「ええ——そりゃあ、もちろん」

オルガンを巧みに演奏しながら、サラは答える。

演奏曲は無論、彼の十八番——「主よ、御許に近づかん」。

寂しい旋律と荘厳な調べが見事にマッチし、彼女自身の鎮魂歌を奏でてくれる。

サラは宣い続ける。

「あなたを一人にさせるのは忍びないし……何より私は、貴女の育ての親の一人……ここで、共に果てるのも惜しくは」

ないといいかけて、竜腕六本の殺到によって星幽界体の身体を貫かれる。

パイプオルガンも諸共破壊され、濁音を吐き出していた。

「げ、あ……………カ、ナ、エツ」

最後の最後に、自分が育てた仔の名前をつぶやくサラ。

「ばあかガ」

漆黒の眼球がアンデッドの残骸を睨めつける。

嘲弄する絶死絶命は、黒龍の牙を剥いて宣言する。

「——私は、このままでは、終わらない——」

ワールドエネミーと人の中間のような存在になり果てながら、この地に封じられた“絶死絶命”は、サラの五体をズタボロになるまで抉り引き裂き振り斬った。

「ああ……」

ボロ雑巾よりもあっけなく破壊され、意識が遠のくのを感じるサラ。

存在しない心臓が、命脈を断たれた衝撃と悪寒に震える。

(やっぱり、私は、地獄逝き、——ね……)

薄れていく意識の中で、600年間の走馬灯を見る。

幸せだった時代。戦乱をおさめた時代——

不幸だった時代。自らが戦乱を起こした時代——

すべては法国を、ひいては人類を護るべく、行ったことだった。

だが、それらすべてのことが正しかったと呼べるのか、どうか。

(自信ないな)

いや。

きっと自分は間違ったこととしてきただろう。

人類を護るという名目で、人類の大国を滅ぼしたこともある彼女

だ。

(私には荷が勝ちすぎだよ、駿河<sup>スルガ</sup>さん……あなた……)

後悔と懺悔にまみれながら、サラは彼との出会いを思い起こす。

人を護るべく戦っていた自分を救ってくれた、十字槍にも似た戦

鎌。

あの当時は、アンデッドという化け物への警戒と恐怖しかなかったのに。

〈今では自分が、アンデッドの最高位とは〉

それ故の苦労もあるにはあったが、



(最後に、役目を遂げられて、本当に良かった)

サトルが、魔導王アインズのオーラがなければ、サラは通常の思考と行動力をそなえることは不可能であった。彼を連れて来てくれたツアーとリグリットには感謝してもしきれない。

(ああ、そうか)

茫漠とした意識の中、実感する。

(これが“死”か——)

アンデッドとしての死が訪れようという、その瀬戸際であった。

『おかえり、サラ』

誰かの声をきいた気がした。とても、とても懐かしい声だ。

もう二度と、聞くことはないと思っていた、覚悟していた。

サラは黒いヴェールの落ちた、貌かおのない顔かおをあげかける。

元通りになったパイプオルガンを演奏する、骸骨姿の伴侶が目に映った。

「あ……あなた……？」

『うん。がんばったんね、サラ』

「うん……わたし、がんばった……よ——スルガ」

サラはそれ以上、言葉を紡げなくなった。

表情の存在しない上位アンデッドの唇が、微笑みの形に結ばれる。

星幽界体アストラルとしての彼女の存在は、完全に、完膚なきまでに、この世界から消滅した。

# リグリット・ベルスー・カウラウ

／R i g r i t B e r s C a u r a u

アインズは、もう一人との訣別けつべつの時を迎えようとしていた。

「リグリットッ」

見事に更地と化し、生命の息吹を感じられない荒漠とした大地に変換された、法国の首都・神都、もとい、都市型拠点ロスヴァイセ。

その地で命を閉じようとしているものが、一人いた。

「リグリットー！」

しつかりしると叫びながら、竜の掌と空っぽの鎧で、彼女の倒れ伏す姿を支える白金の竜王・ツアー。

「なに……少し、ふらついただけじゃわい」

「リグリット……」

アインズ達が見る間に、彼女の衣装は真っ赤に染まっていくのがわかる。

見かねたアインズが赤色ポーションを取り出して飲ませてみても、リグリットには効果が出ないようだ。

「何故？」

答えはリグリット自身が知っていた。

「儂の身体が、すでに限界を迎えてしまった——とうの昔に、死んでいても同然じゃから、じゃろうな」

精神系魔法と信仰系魔法の合わせ技で老化を止め寿命を延ばしていた老婆は結論付けた。

その場に腰を落とし、ゆっくりと横になるリグリット。

「アインズ、ウール、ゴウン、魔導、王——儂の頼み、聞いてもらえるか？」

「ツアーではなく、俺にか？」

「この旧法国の地が正式に、魔導国の領土と化した以上はな」

リグリットは笑って喀血かっけつした。

「どうやら、重要な血管が切れてしまったらしい。」

それでも、リグリットは亡き友との約束を果たすべく遺言の言葉を紡ぎ続ける。

「あー……儂の死体は、法国南東部の端にでも埋めておくれ……あのあたりが、儂の出生地でな……」「死者使い」の儂にそのような権利は無かるうが、できれば故郷に、骨を埋めたい」

「ナザリック地下大墳墓で治療を受けてはどうだ」という提案を、アイNZは存在しない喉に飲み込んだ。

わかったと頷く魔導王に対し、リグリットは自分のボックスを探る。

「あと、この巻物スクロールを、サラから」

「これは？」

「死に瀕した特定対象の人間を、そのままアンデッドへと変えて隷属させる——上位グレートゾンビとか——そういう魔法が込められとるらしい。

あやつの開発したオリジナル魔法じゃ。名は確かへー不死者になることへの洗礼《バプティズム・トゥ・ビカミング・ザ・アンデッド》

——奴は略して《不バプティズム・ザ・アンデッド死者洗礼》とか言うとったよ」

なるほどとアイNZは思った。

この魔法を研究、習得、あるいは量産することができれば、現在アイNZのシモベと化しているクレマンティーヌたちと同じようなシモベを練成することができらるだろう。長年、サラがズーラーノーン盟主としてやってきたように。

「いらぬのであれば、焼いて捨ててしまってもよいが」

「いいや——ありがたく使わせてもらう。ありがとう」

巻物をボックスの重要項目・最前列に置くアイNZ。

「ツアー、そこにおるか」

アイNZと代わるように、白金の竜王と純銀の鎧が両膝をついて、長年の戦友の視界内に。しかし、リグリットは毒づいた。

「もう目も見えんくなってきたわい」

「無茶をしすぎだといっただろうに」

緒戦からここまで戦い通しだったリグリット。

彼女は今も健在の仲間たちへ——そして、アダマントイト級冒険者  
「蒼の薔薇」たちへの託を遺した。（ことうけのこ）

「これで、思い残すことは……あつたかのう？」

いずれにせよ、サラと共に冥府の扉でも開けに行こうと放言する老婆は、最後の力を振り絞って、白銀の冷たい鎧の掌を握る。

「……ツアー」

「なんだい、リグリット？」

「……約束、してくれるか？」

かつてと同じ遣り取りだった。

十三英雄の仲間たちと焚火を囲み、共に旅をしていた時の光景——  
薪の爆ぜる音からみんなで肩を組んで歌ったバカ騒ぎの声まで、鮮烈に思い出される。

その直後の光景も。

リーダー・リクと恋人である彼女が寄り添って眠り、小猫の教皇の小さくも温かな体を抱いたキーノが、二人の傍で寝息を立てる。エルフの女王とドワーフの工王が酒杯を豪快に打ち鳴らして馬鹿騒ぎを続けるのを尻目に、剣士ジュウゾウと、彼に長年連れ添ってきた聖魔術師サクヤと巫女のテイスが、同じ毛布をかぶって川の字を描いていた。人に近い姿故に迫害され放逐された緑の肌のゴブリン王子が火の番をしつつ装具や木剣を検めている。同じ理由で仲間に加わった女オーガの劣等種と三つ頸の蛇が、仲良さそうに魔獣肉の丸焼きの食事を続けていた。酒が入って舟をこぐ暗黒騎士の隣に魔法剣姫のお嬢様が素知らぬ顔で移動し、満足そうに微笑んで、一心に焚火を眺めていた。

そして、

当時は少女と呼べる年齢だった——未熟な「死者使い」は、酒臭い息で、やおら「白銀」の鎧の彼に、こう、言ったのだ。

『この旅が終わったら、私と二人で、一緒に暮らさないか?』

彼の正体も、空洞の鎧も知らなかった頃の、バカな申し出。

それでも、ツアーは言ってくれた。

『たとえ離れていても、僕らは共にいるとも』

当時はからかっているのかと憤然たる思いで頬を膨らませ、涙すら零したのも懐かしい。

当時を思い出し、リグリットは力なく笑った。

「……ふふ、ふはは……ああ、そうじゃ……な」

神竜との敗戦後。

荒れ果てた諸国を復興させるべく、ツアーが大陸の東へ旅立ち、リグリットが法国の問題を片付けた後に大陸南東へと、それぞれ旅立った。

彼と彼女は共にいることはできなかったが、同じ目的のために、旅を、続けられた。

「……………」

アインズには、二人の絆の深さと長さはわからない。守護者一同も空気を読んで押し黙ったままでいてくれている。

わからないながらも——自分と仲間たちくらの関係であるのであれば、その間に割って入るのは無粋というもの。

二人は『最期』のやりとりを交わす。

「ツアー……サラから受け取った、メルクリウスの、羽靴はねぐつ、「風の秘宝」は、そなたに託すうけたまわ」

「承ろう」

白銀の鎧が羽靴を丁重に受け取ると、魔導王アインズに確かめるように視線を送った……アインズもさすがに故人となりゆく者の遺志を尊重する意を込めて、ひとつ頷く。

最後の心残りもなくなった。

リグリットは安心したように瞼を落として手を組んだ。

「リグリット……ッ」

ツアーからの呼びかけにも、応じられない。  
少し眠いだけじゃという言葉も聞こえない。

「リグリット……………」

こうして、十三英雄が一人である女傑——元・法国の最高神官長にして、漆黒聖典・第二席次にも属していた老兵——「死者使い」——リグリット・ベルスー・カウラウは、息を引き取った。

## 罪と罰／世界の盟約

／Crime and Punishment , Pledge  
of the World

アインズ・ウール・ゴウンは勝利を収めた。

番外席次 “絶死絶命” は封じられた。

スレイン法国とサラ、リグリットという犠牲のもとに。

だが、これですべてが終わったと、全員が楽観することはあり得なかった。

《私は、このままでは、終わらない》

その宣告の不穏さを、その場にいた全員が聞いていた。

不吉な変貌を遂げていき、ついにはアインズの世界級アイテムを捕

食せんと凶行に奔った番外席次 “絶死絶命” 。 彼女が封じられた

のは、都市ロスヴァイセの封鎖と、世界級アイテム “世界狼の監獄島

” の併用あつてこそ。

「おそらくもう1000年は封じられるはずだが、相手は饕餮である  
ことを考えると、それも怪しいやもしれん」

ツアーの提言に従い、アインズはせっかく手に入れたスレイン法国  
の領地をすべて “沈黙領域” —— 何人の侵入も許さぬ監視エリアと  
定めるに至った。

監視役を務めるのは、ナザリック最高戦力のひとつだが、今回はル  
ベド戦での使用に限定された〈生命樹〉シリーズ—— 太陽、月、

ケブラー 火星、水星、木星、ケセド 木星、ネツアク 金星、ピナー 土星、コクマー 天王星、ケテレル 海王星のいずれかが複数体勢で見守り、非常事態には即応できる環境が整えられた（地球は、マルクト 八階層の「荒野」自体に偽装した星であるため、この監視リストには含まれないことも決まった）。

そして、

「アルベド」

アインズ・ウール・ゴウンは、気絶中の元守護者統括と、あらためて対峙せねばならない。

ワールド 世界級アイテム「真なる無」の威力は絶大に過ぎた。

彼女の身に着けていた神器級の鎧「漆黒の全身鎧」は三回まで超位魔法級の大威力さえ耐えられるが、それも装備者の意思が完全であればの話。

能力を発揮することなくバラバラに砕け散った鎧はナザリック第九階層の鍛冶工房で再生・復元することはできるが、相応の出費は覚悟せねばならない。

それでも、守護者一人分の死よりは、はるかに安上がりだが。

しかしながら、シャルティアの命じた命令——「アルベドを殺すな。殺さずに無力化せよ」——は、何もそのような吝嗇くさい動機、理由から発したわけではない。

「アルベド」

純白のドレスもズタボロになりながら、ペストーニヤの回復魔法をかけられたアルベドは、ほとんど一糸しか纏わぬような惨憺たる様を、アインズの前にさらけ出す。

それでも、漆黒の女悪魔は欲望の火を落とし、貞淑に両の手をついて頭を垂れた。

さながら許しを乞うかのごとく。だが実際は——

「アインズ様……どう、か——どうか、ご命じくください」  
「アインズは応えた。  
自害せよと。」

「それは、ならぬ」と。

守護者らの疑念に満ちた声が飛ぶ。



アインズは断固たる口調で言い添えた。

「此度の一件で、アルベドを害すること・殺すことは絶対に許さない。この私、アインズ・ウール・ゴウンの名に懸けて」

力と意志に満ちた声だった。

アルベドは涙を落とし、嘆きの底に留置される。

「何故ですか——私がこのまま死ねば、御身の財貨に影響を与えろはいえ、私の犯した、罪の重さ、此度の反逆行為の罪状は計り知れませんが——どうか、私に、罰を、お与えください」

ついには子どものように泣き出してしまふアルベド。

まるで小さな子が親に叱責されたような泣き声と涙を落とし、しゃくりあげながら自分の今回犯した大罪に、立ち上がることをすままならない。

垂れていた頭は涙と涎と鼻水でぐしゃぐしゃに崩れ、まったく美人が台無しといったありさまだ。

アインズは溜息を落とし宣言する。

「アルベド、お前の罪は認めよう……だが、それは我が罪も同然だ」「アインズ様？」

彼がなにをいつているのか理解しかねる守護者一同。

「今回の責任は、アルベドに過ぎた重責を担わせ、最強チームなどと称させたチーム構成を認め、そして、アルベドの設定をイジった、この“俺”に、すべて起因するもの」

裁定を下す者として、アインズは、迷う。

普通の人間であれば。とつくの昔にすべての責任を放棄して逃げ出すような——現に、彼は一度逃げ出し、ナザリックを捨ててはいる状況——で、しかし彼は断罪する。

下さねばならない。為政者として、裁定者として、彼らの最高支配者として、ふさわしい罰を、アルベドに。

「しかしながら、今回の混乱によって、アルベドが為した罪は重い……我がNPCパンドラズ・アクターを殺戮し、番外席次“絶死絶命”と共に、ナザリックへと与えた損壊は、目に余る」

「はっ」

従容と頷くアルベドは、まるで断頭台にかけられた罪人の心地で、御身に首を差し出した。

「よって、アルベドの地位『守護者統括』という地位を、ナザリック最高支配者の権限によって、剥奪」

「……はい」

おそらく彼女陣も予想していたことであつたのだろう、アインズとしては、仲間たちの決めた役職を変更することに抵抗を感じずにはいられなかった。だが、そうした。

続くアインズが次に告げた言葉は、アルベドでも予測不可能であつた。

「しかしながら、アルベドの能力はナザリックと魔導国の発展に必要不可欠である事実が変わりない——アルベドには宰相位から新たに、『魔導国大宰相』へと正式に就任させる」

「……………えっ？」

「と同時に、各守護者たちへの褒賞恩給として、魔導国での新たな地位を約束する。まず、此度の戦いで見事な戦巧者ぶりを発揮してくれたシャルティア・ブラッドフォールンには、『魔導国大元帥』の称号を」褒賞を授受されたシャルティアはその場で跪いた。

それ以外の守護者にも『大総監』『大導師』『大將軍』『大参謀』などの称号が次々と授与されていく。

それだけの功績をなしたものにへの信賞としては、まずまずの新称号授与と言えた。

しかし、必罰を求めていたアルベドは狂奔きやうほんとまではいかずとも、何故自分が生かされるのか、まったく納得できていない様子であつた。無論、アインズは罰を用意していた。

「アルベド、おまえが今回の一件を『忘れたい』気持ちにはわかる」

アルベドは自分の真意がどこにあるのか、御身に見抜かれた事実を悟る。

「しかし、アルベド。私は今回のおまえの行ったことを、すべてなかったことにするつもりは、断じてない」

「そ、そんな、こと」

死んだNPCの記憶は、シャルティア反逆の件で判明したように、ナザリックを出た後の記憶を亡失する。

その事実実例に則せば、ここでアルベドを殺せば、アルベドの記憶はナザリックを出立する……法国への降伏使節団代表として出発した時のものまで戻される。

アルベドはそれに賭けようとしていた——自分の罪をすべて清算するための死ではなく、自分が気付かされた“モモンガがモモンガではない”という最悪の記憶を、抹消する手段として。

だが、それをアインズ・ウール・ゴウンはさせなかった。

させないために、シャルティアにアルベドを任せ、気絶させたまま放置した。

「アルベド」

自分の本来の目的——記憶の忘失すらも許さなかった至高の御身は、あらためて告げる。

「私がおまえたちすべてを、愛している」

アルベドは至高の御方と呼ばれるべき男を見た。

「だから——お前を殺すことは、私にはできない」

それが、アインズの本音であり本性であった。

仲間たちの遺児ということは無論のこと、ナザリックを共に守護する仲間であること、一人ひとりの個性に惹かれていることを、赤裸々に告白する。

そのうえで、アインズは裸同然で震えるアルベドを抱き寄せた。

「すまなかった、アルベド……私が、あんな設定を与えてしまったばかりに……おまえを暴走させる発端ほったんを作った……どうか、私を、許してくれ……」

その言葉には、魔導王としての虚飾は一切なかった。

ただ、愛するものを傷つけたことを恐れ慄く男の心情しか、見えはしなかった。

「ア、アインズ様」

「うん」

彼が頷いてくれる……たったそれだけのことが愛おしくて、アルベ

ドは彼の漆黒のローブの背中を掴む。

「モモンガ様」

「……うん」

アルベドは滂沱ほうたの涙を流し、まるで縋りつくように彼の胸骨に顔を埋める。

「鈴木、悟、様」

「……うん」

アルベドは思った。

心の底から、〃彼〃を愛おしい——と。

愛おしいと思える自分がいることが嬉しくて、しゃくりあげながら泣き続けてしまう。

「わ、わた、私、は、——あなたさま、を——、愛しても、いいのでしようか？」

「……うん。もちろんだ」

そこが限界だった。

アルベドは骨の身を力強く引き寄せるでもなく、ローブを掴む腕にスキルを溢れさせるでもなく、迷子が求め欲していたものと巡り会えたような泣き声をあげて、大いに泣きぬれる。

守護者たちもその様にもらい泣きをうかべかけながら、アルベドが泣き止むまで、二人の姿を夜天の下にて、見守り続けた。

「今回は、大変世話になってしまった、ツアー……いや、〃  
ブラチナム・ドラゴンロード  
白金の竜王〃殿」

泣き疲れたアルベドが寝入ったまま、アインズが膝枕したままの姿で、魔導王は白い竜と対談を持つ。

「まったくもって、此度の戦いは予想外のことが起きすぎた」

「確かに。——我が戦友の一人まで、逝ってしまおうとは、な」

ツアーは、血の跡がかすかに残る鎧を掌に抱きしめながら、亡き戦友を偲ぶ。

「後悔、しているか」

「後悔？」

アインズに問われたことをツアーなりに吟味し、「いいや」と断言する。

「仲間を喪うという事態も、初めてということではない——2000年前の戦いではもちろんのこと、世界の盟約が結ばれた時にも、多くの血が流れた」

「そうか……すごいな、ツアーは」

対照的に、アインズは後悔に染まり果てた暗澹たる口調で言う。

「私は後悔してばかりだよ——あのときこうしていれば——このときああしていれば——」

数え上げればキリがない。

「アインズ」ツアーは強い口調で論じた。「王たらんとして生きる以上は、ゲームのようにリセットが利くわけではない。決断には時間を要するし、時には血を流すこともあるだろう。敵の血で。味方の血で。あるいは己自身の血で、玉座を真つ赤に染め上げるものさ。覚えておくといい」

アインズは顎を引いて「ああ」とだけ答えた。

いつかはツアーのように、己の後悔にもなれる日が来るのだろう。

アンデッドの特性による鎮静化とは別の領域で、アインズは自己の判断を決する時が来る——今回の番外席次“絶死絶命”戦でも、それは嫌となるほど痛感した。

「ところでアインズ」

「なんだ、ツアー？」

すっかり呼び捨てが定着した両者は、ひとつの盟約について協議した。

世界を護るための盟約に、魔導国の王が、ナザリック地下大墳墓が加わるのは、そう遠い話ではない——

## 人類最期の地 リ・エステイーズ

／Place by the human end

魔導国——エ・ランテルにて。

神都からの避難・退去を半ば強制的に実行させられた法国の民が押し寄せてきているが、街は彼らを受け入れて余りある発展ぶりを遂げていた。警邏アンデッドや亜人の入国審査官などには瞠目するものが多かったが、すべて噂や風聞で聞き知っていた情報であった。

かつては三重の防壁に囲われていた都市が六重の壁を築き、人間と亜人のすみわけが見事になされている。スラム地区とも称すべき貧民窟は潰され、そこで生活していた者たちにも十分な住居と給金、そして魔導国への奉仕活動が義務付けられ、アンデッド農法の補助活動や、ドワーフたちへの給仕人などといった仕事にありつくことができているのだ。

本来の墓場も整理解体され、後の農耕都市の基礎となるプランテーションなどの実験施設に変貌し、そこにあつた死体の大半はアインズのアンデッド作成に使用し、一部は「未来に行う実験」のため死化粧を施し、宝物殿に安置されている。

そんな大都市化したエ・ランテルの一隅で、法国の民を導いてきた最高神官長が、生を終えた。

立ち会った侍医によつて、老衰死であることが公表された。

宗派の慣例に従い、次の最高神官長は生き残った火の神官長ベレニス・ナグア・サンティニが就任し、その補佐として光の神官長イヴォン・ジャスナ・ドラクロワが選任された。

二人の神官長らの言葉に従い、多くの法国の民が魔導国での移住生活、その苦難を乗り越えることを神々に誓約したが、1500万を数

える民の中には、一部例外も発生した。

そもそも亜人種や異形種への差別意識が根強い国民性であるため、アンデッドが王として立つ国に住みたくないというものは、ひたすら南下して砂漠のオアシスを目指すか、バハルス帝国を越えて都市国家連合などに逃れるか、それぞれの選択を強いられた。が、それらの道はいずれも危険と隣り合わせの旅路。

馬車などを有しているものたちを筆頭に、民族移動は南へ東へ北へ離散。魔導国の勢力圏と見做された帝国や聖王国に頼ることはできないと考えたものが大半であった。竜王らが治める評議国も論外。ピーストマンの国に隣接する竜王国も、安全とは言い難いのが現状だ。近隣諸国で唯一、魔導国と戦争を仕掛けたリ・エステイーズ王国に向かうものが、最も魔導国への反感を持ちつつ、頼ることができる国と目されたのは、皮肉というほかない——それでも、王国の第三王女は快く難民たちに門戸を開き、荒れた王国領内の復興に尽力してもらう見返りとして、物資と土地を分け与えてくれるという噂が流れれば、自然と行列の長さは王国へと向けられた。まるで大量の蜜を見つけた蟻のごとく。

——その国が秘密裏に、とある姫君によって売国済みだとも知らずに、法国の民の幾分かは、人類最期の地を目指す。

「あちやあ、車輪がいかれちまった」

エ・ランテルへ向かう街道の端で、こんな時間にどうしようお父さんという我が子に対し、父親は心配ない。明日には直すからと微笑みかけるが、馬車に積載された家財道具の山を考えると、とても難しい。ここで放棄していくことも視野に入れなければと考えるが、乳飲み子を連れた女房の不安げな様子もみると、とてもそんな気にはなれなかった。

「今日はここで野営しよう。皆でうまいものでも食えば、いい考えも浮かぶはずだ！」

「うん、お父さん！」

すると、そんな一家を見かねたように、一人の女性が近づき、ボロボロに壊れた車輪に手を触れ、こう唱える。

「〈修復〉」

黒いローブに大きな三角帽子の女性が詠唱したものは、壊れたものを直す簡単な魔法のひとつであった。彼女は自分を呼ぶ金髪の青年のもとへ駆けていく。

「あ、ありがとうございます！　なんと御礼、を——？」

「あれ、お姉さん？　お姉さん、いなくなっちゃった？」

お礼に水筒を分けてあげようとしていた子供が残念そうに眉を落とす。

「きつと、俺らと同じ、移住先に迷ってる神官様か、何かだろう」

忽然と姿を消した女性と男性の姿を方々に探すほっほうが、まるで見当たらない。

白昼夢でも見せられたような気分の四人家族であったが、新品同然に直った馬車のありさまは、夢ではありえなかった。

「最高神官長様が、先ほど、身罷られた」

「——そうか」

「——どうか、光と闇の神の加護があらんことを」

100歳を超える大往生であった。

その報告を仲間らに伝えた青年は、「せめて老衰死であることを喜ぶべきか」迷った。

彼の袖を掴む同僚の女性・第十一席次が不安げな瞳で嘆願する。

「お願いだよ、クアちゃん——私たちと一緒に、魔導国に行こう？」

「いや、しかし……」

クアイエッセ・ハゼイア・クインティアは、夜半の街道上で〈永続光〉のランプを片手に、仲間らと協議を重ねていた。



スレイン法国が魔導国に併吞され、南都と西都が整備と称され更地となり、母国が“沈黙領域”と名を変えさせられ、余人の立ち入りを禁じられた上は、その魔導国に頼る道を選ぶというのは、力ある者として、元漆黒聖典として正しい振る舞いであろうか。

否。

断じて否。

「このうえは、リ・エステイーゼ王国を頼みの綱として、魔導国に抗する人類勢力圏の根拠地とするほかありません」

クアイエッセは本気で、王国を人類最期の地と定めるつもりでいた。無論、彼の仲間たる聖典メンバーの多くも。

しかし、例外は存在するもので、第七席次「占星千里」と第十一席次の二人は、魔導国に屈する道を<sup>えら</sup>択んでいた。

<sup>おくびようもの</sup>臆病者と<sup>そし</sup>誇る者はいない。

当然と言えば当然の選択でもある。

あの魔導国に、自分たちの生国を更地に還すほどの力を持つ王侯に盾突こうなど、正気の沙汰ではない。現に、多くの一般人・法国の民は難民として、魔導国の門をくぐり、配給の列に並び、難民申請——魔導国入国の列を築いていた。

クアイエッセには我慢ならなかった。

自分たちの行いは正しかったはずという正義の心が、埋め火のように心臓の底でくすぶるのを感じる。

しかし、そんなクアイエッセを、仲間たちの多くは残留させるつもりで語り掛ける。

「俺たちに遠慮する必要はないんだぞ、クインティアの英雄、我等が「一人師団」よ」

「我等は、今や人類最期の地——<sup>よ</sup>抛り所<sup>どころ</sup>となった、リ・エステイーゼ王国に希望の道を見出すのみ。その気概は理解できような？」

そう言ったのは、エルフ王都の戦いで命を落とし、蘇生された第十席次と第十二席次。

「我等は全員、<sup>ごしやく</sup>護国の士とは、なれはせなんだが」

「人類守護という大命は、<sup>たいめい</sup>まだ続いているはずです」

「ま。だからといって、漆黒の全員がり・エステイーズ王国に集うって  
いうのも、あれだろ？　王国が、陰で魔導国と繋がっているとも限ら  
ねえしな？」

同じく蘇生され生命力が減しながらも、常の様子で語る第三、第四、  
第二席次がという言葉の意味を、クアイエツセは悪意に満ちた思考で変  
換する。

「私では、役者不足と？」

「いやいや。第二の先輩は、そうは言っていないっすよ」

第六席次が、第五席次の後輩たる聖騎士が、白銀の大剣を背負って  
言う。

「ただ。俺らになんかあった時の逃げ場所が、魔導国にあった方がい  
いんじゃないかって話に、なりませんっすか？」

「それならば——」

と言いかけて、後ろの二人を見やる。

彼女たちだけで、魔導国に橋頭保きょうとうほを築くというのは至難の業だ。

一方は占星術を極めた未来予知、一方は第六位階まで開花した魔法  
詠唱者。

そして、複数人を護るうえで、「一人師団」たる第五席次の能力は、  
有用かつ有効とききている。

仲間たちからの説得を受け入れたクアイエツセは諦めたように頭  
を振った。

「わかりました」

かの王国には、ガゼフ戦士長を鍛えたヴェスチャー・クロフ・ディ・  
ローファン老や、戦士長と轡くつわを並べ戦ったブレイン・アングラウス氏  
などが残っている。

さらにアダマンタイト級冒険者『朱の雫』や『蒼の薔薇』も期待  
できる戦力であり、探せば他にも、人類守護の志を持つ同士に巡り合  
えるかもしれない。第三王女の専属騎士などは、いまだ噂の端にもそ  
こまでの強者とはみなされていなかった。

第一席次は死亡——もとい聖者殺しの槍の効果による存在抹消の  
ため蘇生不能。

残る漆黒聖典のうち、第二、第三、第四、第六、第十、第十二席次の六人が王国へ。第五席次、第七席次、第十一席次が魔導国への道を進む。

この決定が、六人と三人の運命を確定的に決定づけることになることを、彼らはまだ知らない——否、第七席次だけは、全員魔導国へ逃げるよう提言してくれたのだが、それでも、六人の漆黒聖典は、リ・エステイーズ王国を指すしか、他に処方がなかった。

「では」

「達者でな」

「はい、そちらこそ」

第十と第十二席次に手を振って、クアイエツセ第五席次たちは別れを告げる。

クアイエツセクアイエツセ・ハゼイア・クインティアは荷物を背負い、二人の女性なかまを連れて、魔導国入りを果たした。

「チツ。つまんねえの」

その様子を特殊なアイテムを使い木陰で覗き見ていたクレマンティーンは、寂しげに、だが確固たる足取りで二人の女性に囲まれて魔導国の仲間入りする兄の背中を見届けつつ、彼らの動向を伝えるべく、彼女の主人のもとへ駆け出し、闇の中へと消えた。

「うふふふ、法国の働きアリたちが、この国に集あつまっているわー」

すべては計画通り。

順調そのものである。

エ・ランテルを通過し、王国の領土を踏み荒らす法国の難民を、第三王女・ラナーは受け入れた——魔導国から受け賜った物資を援助されているとも知らず、法国の民はラナー王女の慈悲に心から感謝している。愚鈍愚昧の極みである。

「アルベド様の反逆という事態には、さすがに肝が冷えましたか」  
それでも、ラナーの役割は変わらない。

これで、人類守護などという大言壮語たいげんそうごに踊らされてきた法国国民の中で、強硬に狂騒に魔導国へ反抗的なものは、リ・エステイーゼ王国に参集する運びとなった。

あとは、魔導国に反抗する不穏分子が、蜂起ほうきするのを待つだけ。  
それでようやく、ラナーの最後の務めが完遂される。

「ああ、楽しみね、愉しみだわ、うふふ！」

思わず柔らかなソファの上で寝転がる姫君。  
これで、ラナーの願いはかなえられる。

リ・エステイーゼ王国を売り払い、魔導国に対して不穏不遜な輩を徹底的に集合させた後に、すべてを刈り取り収奪する。まるで秋の麦の穂のように。

ラナーは、渡されている小箱に口づけし自決じとくにふけりながら、自分の最後の役割をきっちりこなすべく、営々と準備を整え続ける。

国王の死について。

国宝の隠し場所について。

レイザーエツジの譲渡計画案について。

そして、自分ラナーと子犬クライムの悪魔化に必要な、生贄の皿は満ちていく。

「はあ、——もう少しよ、クライム」

あなたのすべてが、私のものになる日は、そう遠くはないと信じてやまない第三王女。

父と兄の代わりに政務と公務に勤しみながら、とある反逆者——男爵位にある大馬鹿者の死刑執行書類にサインするラナー。

彼女は、着々と準備を整えていた、はずだった。

まさか、あんなことになるなどは、ラナーでも、そしてアルベドでも予想だにしない事態であった。

## 我儘と約束／暗黒邪道師―エメト―

／Selfishness and Appointment,  
Dark evil way teacher | emeth |

ナザリツク地下大墳墓——アインズの執務室にて。

「——ンファイレア・バレアレの蘇生は？」

「ペストーニヤの手により、とどこお滞りなく完了しました」

「——パンドラズ・アクターの復活は？」

「少々記憶に欠落はございましたが、無事に」

「——ルプスレギナの容体は？」

「予想通り、回復に向かいつつあります」

打てば響くような質疑応答の最後に、アインズはたず訊ねた。

「——リグリットの、埋葬は？」

「ご指定の場所へ。ご指定の方法で。ていちよう鄭重に葬らせていただきます  
た」

主君の問いに報告を述べたデミウルゴスの言葉に、虚偽はなかった。

旧・スレイン法国——現・沈黙領域スレインとなった。南東部の端、かろうじて街道と接する場所に、彼女の墓碑は立てられた。銘は刻まれていない。そう彼女が望んだが故だ。「死者使い」として幾千幾万の「死」を利用してきたが故の、彼女なりのけじめだった。

広大な大地の下に埋められた死体は強壯無比な十三英雄の「死者使い」——「棺」コフィンと呼ばれる特異な道具を用いてアンデッドを使役する能力——できれば死体を保存し、研究対象としてしまいたい欲求も、魔導王にはあったが、

「これでよかったのだろう、ツアー？」

アインズが見る先で、ダイニングチェアの真ん中に腰をおろす白銀の竜鱗鎧スケイルメイルが、ひとつ頷く。

「感謝するよ、サトルくん……いや、アインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下」

アインズはナザリック地下大墳墓に戻った。  
戻ることを決めた。

ここまでやってきたことに対する義務や義理ではなく、ただ、アインズ・ウール・ゴウン魔導王として、プレイヤーのモモンガとして、鈴木悟として、彼には『やりたいこと』が残されていた。

「それでは、世界の盟約への加盟、確かに確認した」

「ああ」

アインズの稚拙な筆致の現地文字のほかに、プレイヤー・鈴木悟の署名がされた、一枚の書類。最高級品とわかる薄い虹色の魔法用紙には、評議国代表たるツアインドルクスⅡヴアイシオンの書名と印璽いんじの下に、新たに加盟するものとして、アインズ・ウール・ゴウン魔導王の印璽と、盟約に参じる各国首脳の印璽が並んでいる。そして、その魔法用紙から、滅亡を余儀なくされたスレイン法国の存在は見て取れなかった。魔法の用紙はまるで自己の意思でもあるかのごとくひとりでに巻かれ、ツアーの片手に握られる。

「今日のところは、このあたりでお暇いそまさせていただく。僕の昔語り  
は、また別の機会に」

「ああ、楽しみに待たせてもらおうよ」

魔導王への挨拶を済ませた鎧は、帰り支度したくに取り掛かる。

「大参謀——デミウルゴス」

いまだに頬や体中に戦傷の跡を残し、包帯の巻かれた悪魔を、新たな称号と共に呼ぶアインズ。

「ハッ」

「ツアーの見送りをナザリック表層まで頼む。くれぐれも、粗相そそうのないように」

「かしこまりました」

ワールドエネミー・饕餮の「墜とし仔」との戦いの痕も残る身でありながら、明晰かつ謹直な態度を面に表す炎獄の造物主。彼と魔将らに囲まれつつ、手を振って魔導王と対等な立場を証明するツアーが、執務室から去っていった。

これで彼は、彼の評議国は、完全に魔導国の友好国家の一群に加わった。

さらに、彼が治める極東地域群も、魔導国と完全な友好関係を樹立したことになる。これは見方によっては、大陸の西端と東端に、魔導国の友軍が出来たことを意味していた。

評議国と、ツアーの支配領地が信託統治領化するのは、魔導国が大陸中央六国を制覇したころの話となる。

「ふう」

必要もない息をつくアインズに、痛々しい戦傷が刻み込まれ、絆創膏や包帯が巻かれたままのアルベドが声をかけた。

「アイン——モモ——いえ、サトルさま」

「おまえの好きなように呼んでよいのだぞ、我が大宰相」アルベド「純白の女悪魔は頬を耳まで朱色に染めつつ、傷を残す我が身を眺める。」

アインズは嘆かわし気な瞳で彼女の意をはかった。

「仕方なきこととは言え、世界級アイテムによる広範囲攻撃を受けたのだ、いくらペストーニヤの完全回復魔法でも、今少し時間はかかる」しかし、彼の見立ては間違っていた。女悪魔は首を横に振る。

「いえ、それは十分、納得していることです——ただ」

アルベドはぽつりぽつりと涙を溢し始めた。

「私ごときが——あなたに反逆した私が、あなたのお傍にいられることが、あまりにも……その、そぐわないと、いいましようか……」

頬の分厚い絆創膏が、女悪魔の涙に濡れていく。

アルベドの「反逆」の印の赤色は、マスターソースで確認しても認められない。今の彼女は世界級アイテムの完全支配から逃れ、常の彼女に戻った——それが事実。

だが、アルベドには厳命が下された。



「アルベド、此度の一件については」  
「……………はい。わかっております」

『忘れてはならない』』

それがアルベドを刑死させない主因であり、アインズ・ウール・ゴウン魔導王の決定であり、プレイヤー・モモンガの願いであり——鈴木木悟の我儘わがままであった。

「アルベド、繰り返して言わせてもらおうが、私はおまえたちのすべてを愛している」

「は……………はい」

「おまえの濡羽色の髪も、女として完璧な肢体も、山羊のごとき二つの角も、悪魔の黒翼の羽毛一枚一枚……………すべてが愛いとしい」

「ッ、はい！」

「それと同じように、ナザリックに属するシモベ達——我が友らの遺したすべてのシモベもまた、」

「愛している——ええ、わかっております」

跪くアルベドはアインズが差し出す掌を、傷ついた頬に重ね触れさせた。

「お約束いたします」

純白の女悪魔は幸せそうな泣き笑いを浮かべ、宣告する。

「私も、愛しております……………私の罪を御赦おゆるし下さった、あなた様のすべてを——アインズ様——モモンガ様……………鈴木、悟、様」

アルベドの涙を骨の指で拭うアインズ。

幸せそうに微笑むアルベドの黄金の瞳が潤むのを見やりつつ、二人は瞳を交わしあったまま、しばしの時を過ごす。

そうあることが嬉しくて。

そうできることが幸せで。

そうすることが快こころよくて。

そして、歯痒はがゆくて。

二人は掌を重ね、見つめあう。

たったそれだけ。  
ただそれだけ。

——彼と彼女が結ばれるには、まだあと数年の時日を必要とした。  
——後に最王妃となる純白の女悪魔は、そのときを待ち焦がれながら、己の責務に邁進まいしんすることを、己の愛する彼ヒトに、誓約する。



大陸の何処か。

暗黒の底、その場所で燃える松明がひとつ浮遊する、異様な空間の中で、暗黒のヴェールを身に帯びる女性が目を開く。

「」

夢見るような白き眼——祈りを捧げる不動の姿勢が、かすかに動く。

彼女は大陸の異変を、まるで我がことのように理解した。  
そして、己が魂の状態を見つめ、すべてを悟る。

「そうですか、死んだのですね、リグリット……我が弟子のひとりよ」  
彼女は暗黒の底でそれを感じ取った。

リグリット・ベルスー・カウラウ——250年以上前に彼女へもたらした秘伝——弟子たる少女に分け与えた我が魂の一部の返還に、そ

の女性は寂しげに頷くのみ。

「272年、真に、誠に大儀でありました」

受け取った魂の一部「死者使い」の能力は、間違いなく彼女の能力の一端を示していた。

砂漠の洞窟とも、荒涼とした野とも違う暗黒の底で、その女性はリグリットよりも豊富な法衣を纏いながら、汗ひとつ零れない。それどころか、呼吸の気配すら感じられないまま、祈りの姿勢を保ち続ける。

「大陸の西側は、次の時代に向かいつつあります、我が主よ」

彼女の周囲一帯には人つ子一人いない。

しかし、その声を受信したのを確認したように、彼女は相好を崩す。

「あなた様がお創りになった大陸です。そして、その最低限の維持のために、我等は任務<sup>つとめ</sup>を遂行するのみ」

暗黒を同胞としたような謎の女性。

150年前にはとある都市を壊滅させるべく、魂喰<sup>ソウルイーター</sup>らい三体を斥候とするアンデッド軍——地下<sup>クリプト</sup>聖堂の王の部隊を送り込み、

250年前には法国の少女に「死者使い」の能力を与え英雄とし、

350年前は大国の戦にも参じてこれの終息に尽力。

450年前には究極のゴーレムを造るように遠き夢<sup>トオム</sup>という名のゴーレムをカラクリの都に造り遣し、

550年前には、スルシャーナ第一の従者・サラがアンデッド化する場面にも立ち会った。

650年前には、とある竜王の生誕を見届けもし、——

大陸の歴史の端々で暗躍し暗闘し続ける、暗黒の底で生きる邪道師。

——「暗黒邪道師」、名をエメト。

その単語をモモンガが聞けば、とある大錬金術師タブラ・スマラグディナから聞いた話を思い出したに違いない。

エメト「emeth」——日本語では「真実」「真理」と訳される。律法学者のラビが断食や祈祷などの神聖な儀式を行った後、土をこねて人形を作る。呪文を唱え、「emeth」という文字を書いた羊皮紙を人形の額に貼り付けることで完成する。ゴーレムを壊す時には、「emeth」の頭文字「e」かしらもじを消し、「meth」——「死んだ、死」などの意味に変えることで、ゴーレムは破壊される。

製造後は自然に巨大化するとされている。ある伝承では、男がゴーレムを作りはしたが、大きくなりすぎて額に手が届かなくなり、止められなくなった。そこで男はゴーレムに「自分の靴を脱がせ」と命じ、ゴーレムがしやがみこんだ時、額の文字を消した。その途端、ゴーレムは大量の土砂となって崩れ落ち、男はその下敷きになって圧死したという。

また、

ある一説によれば、人類創世の祖とされるアダムは、神によって泥土をこねて作られ、鼻から聖霊ルレアハを入られたことで目覚めた、世界初の自我を持つゴーレムではないか、などという伝説も存在する。人類自体が、神によって創られたゴーレムというわけだ。

／

そんな名を与えられた彼女もまたゴーレムであるが、限りなく人間に近い。

いや、この世界に存在する人間の「原型」と言っても、過言にはならないだろう。

彼女こそが人の真理であり、真実の姿であり、人そのものを体現するかのごとく振舞う。

たった一人の創造主を奉り——敬愛し——信愛し——聖愛し——忠節の限りをつくす。

彼女の主の名は、エメラルド・タブレット——主人の省略名を賜りしエメトは、暗黒の底で時を数える。

再び、彼女が大陸にとって必要となる日が来る日まで、彼女は数百年を待ち続けられる——肥大化する己の魂を切り分けながら、エメトは再び暗黒の底で眠りにつく。

そして100年後の未来。

彼女は同胞たちに、この大陸にひそむ可能性——脅威を、告げることを決する。

## 終章

そして、いま。

／And now.

「アインズがすべてを語り終えると、『術師』ことニニヤは、スベルキャスター興味しきつたように頷きを繰り返した。

「そんなことがあったんですね」

「ああ、私の中でも、俺の中においても、史上最悪の戦いだっただけ」

結局、番外席次……『絶死絶命』の存在は、「封印する」という手段以外の有効策が見出せなかった。

そんな自分を恥じるアインズに対し、ニニヤは頭を振って応える。

「アインズ様たちにだって、どうしようもない敵がいる、これってよい教訓だと思うんですが？」

「ああ、私もそう思うように努めているのだが——」

当時を思い出すと、いろいろと恥ずかしい思いに囚われかける。

一時的にでもナザリツクを捨て去ろうとしたことなどは、その最筆頭と言えた。

「あ、あのとき、何もかもから目を背けて、ツアー達の教導や協力がなければ、今日のアインズは存在せず、ニニヤの復活もかなわなかったかもしれない。」

「そう思うだけで、アインズの存在しない肝が冷える思いだ。」

「ニニヤ」

「はい？」

「アインズは言葉を選ぼうとしたが、あきらめた。」

「君は今、幸せか？」

そう問いかける魔導王にして命の恩人、そして、自らの旦那様に対して、魔王妃ニニヤは微笑みを返した。

「これ以上ないほど、幸せです」

骨の掌に指を絡ませるニニヤに、アインズがドキリと反応する。

その様をつぶさに観察していたニニヤに対抗しようと、アインズも骨の指先で彼女の温かな肌をくすぐった。

二人して笑いあい、微笑みあえる喜びにひたっていたが、ニニヤが唐突に、ひとつの疑問符をアインズに投げた。

「そういえば、番外席次『絶死絶命』さんの本名って？」

わかってませんよねと主張するニニヤ。

アインズはひとつの推論を述べることしかできなかったが、ニニヤにそれを語ろうとした、ちょうどその時。

「セリーシア」

「ねえさん！」

赤子を抱いた姉の姿を発見し、ニニヤは図書館の席を立った。

彼女の隣には、付き添うように最王妃アルベドの姿も見える。

家事一般に一言を持つ彼女の設定——その上、愛する殿方との未来の子のために、彼女は日々勉強を重ね、母親として未熟なメイド長の補佐を務めつつ、同輩たちにもよくよく教導を行っている。

「いい、シャルティア？ 首が据わってきた子に対する注意点として」

「ちよ、待ちなんしアルベド！ メモくらいとらせるであります！」

「シャルティアのいう通りだよ！ ねえ、マール？」

「うん、ベベ、勉強に、なります！」

いつの間にやら図書館に集っていたアインズの妃たち。

その列に自然と加わる魔王妃・ニニヤ——正式名セリーシア・ベイロンは、心底から屈託なく笑う。

「……」

その笑みの朗らかさと自然さに、しばし魅入るアインズ。

彼は図書館の司書アンデッドを呼び出し、ニニヤの勉強していた学術書の山を片付けさせるが、ふと、一冊の本に目が留まり、適当なペー





〈……わたしはここで終わらない、か〉

絶死絶命の吐いた怨嗟と呪詛の言の葉。

彼女は今も牙を研いでいるのかいなのか、それすらも判然としな  
い状況だ。ギルド拠点の封鎖に巻き込まれ、世界級アイテムの封印の  
上で、一人孤独にアインズ・ウール・ゴウンへの復讐の手練手管を1  
00年単位で営々と用意しているとしたら？

だからといって、こちらからわざわざ封印の蓋を開けるバカはでき  
ない。今は戦力が十分そろっているとは、言い難いのが現状だ。ナザ  
リックの新たな婚姻制度によって、ナザリック内にも将来有望な子供  
たちが生まれつつある。それらがL v. 100の領域へ、または、そ  
れを超える逸材に成長することを期待して、アインズ達は待つしかな  
い。

また。世界の揺り返しの件も考えなければ。

100年後、こちらの世界に転移してくるL v. 1000プレイ  
ヤー、あるいはギルド拠点保有者たち——世界級アイテム所持者と、  
アインズと魔導国が友好関係を結ぶことが出来れば、あるいは？

「アインズ様」

見やれば赤子を抱く姉の横で、手を大きく振って呼びかける魔王  
妃・ニニヤ……セリーシアと、慈母の微笑みを浮かべた最王妃・アル  
ベドと主王妃・シャルティアたちが、彼を待っている。

アインズは図書館の司書アンデッドに辞典を預け、愛すべき彼女ら  
のもとへ——自らが救うことができ、逆に救ってもくれた存在たちの  
もとへ、ゆつくりと歩を刻む。

もう二度と、この幸せを、この平和な世を失うまいと、心に誓いな  
がら。

⋮

かなえ  
鼎とは。

中国古代の器物の一種。土器、あるいは青銅器であり、龍山文化期に登場し、漢代まで用いられた記録がある。

殷代、周代の青銅器の鼎かなえには通常、饗とうてつ饗の紋など細かい裝飾が蓋ふたなかなえどに対し「魔除け」として刻印されており、しばしば銘文も刻まれる。

とうてつ かなえ  
饗饗を蓋とする 鼎。  
とうてつ かなえ  
饗饗の蓋となる 鼎。

故に、彼女の名前——番外席次“絶死絶命”の名は——

【終】